朝日天神山古墳群

2005年

日田市教育委員会

宮原台地遠景（南東から）

宮原台地空中写真（真上から）・丸印部分

１次調査空中写真

５次調査空中写真

２号墳５トレンチ遺物出土状況

２号墳出土遺物

伝１号墳出土遺物（須恵器・土師器）

伝１号墳出土遺物（鏡・鉄器・馬具類）

序　　文

朝日天神山古墳群は、市内に存在する４基の前方後円墳のうち、２基が所在し、昭和初期の天満社建設の際に鏡や馬具をはじめとして、数多くの副葬品が発見され、古くからその名を知られていました。

当委員会では平成９年度から県指定史跡に申請するための基礎資料を得る目的で確認調査を実施し、古墳の内容が徐々に明らかになってまいりました。特に平成14年度の５次調査では、古墳時代後期における県内最大級の前方後円墳であることが判明し、また、当時の九州と畿内との関係を考える上でも重要な古墳群であることもわかりました。

５次にわたる調査の成果をもとに関係者のご理解やご協力によって、大分県指定史跡として文化財の指定を受けることになり、永久的に保護されることになりました。

本書はこうした発掘調査の内容を整理し、報告するもので、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書作成にいたるまで、多大なるご指導を賜りました大分県教育委員会や指導の先生方、さらには調査へのご協力をいただきました土地所有者ならびに地元の皆様方に対し、心から厚くお礼を申し上げます。

平成17年３月31日

日田市教育委員会

教育長　**諫　山　康　雄**

例　　言

1．本書は日田市教育委員会が国庫・県費の補助を受けて実施した朝日天神山古墳群の発掘調査報告書である。
2．本古墳群は従来、天満古墳群として、周知遺跡分布図に収録され、周知されてきたが、本報告書を以って、正式に朝日天神山古墳群と改称する。
3．調査は日田市教育委員会が主体となり、別府大学の協力のもとに実施したが、平成11年度の３次調査のみ、日田市教育委員会が別府大学に業務委託を行い、調査を実施した。
4．各年次の調査にあたっての協力者はⅠ(5)調査組織に記した。
5．調査現場での実測・写真撮影は担当者のほか、別府大学大学院生・学生があたり、一部写真撮影については文化財写真家　長谷川正美氏（現雅企画有限会社）に委託した。
6．本書の写真図版に用いた航空写真は有限会社スカイサーベイ九州に撮影委託した写真を、遺物写真は別府大学が撮影したほか、長谷川正美氏（雅企画有限会社）に撮影委託した写真を使用した。
7．日田市は平成17年３月22日に旧日田郡（天瀬町・大山町・前津江村・中津江村・上津江村）と合併したが、本文中での地理的・歴史的環境は旧日田市の現状で記している。
8．出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターおよび別府大学付属博物館に保管している。
9．本書の執筆はⅠ(1)・Ⅱを土居、Ⅰ(2)～(5)・Ⅲを若杉、Ⅵを土居・下村、韓国語要旨を下村・朴 芝然があたり、Ⅳ・Ⅴについては担当を文末に記した。
10．本書の編集は、土居・若杉・下村・玉川で協議し、若杉が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ　調査にいたるまでの経緯 …… 1
(1)　これまでの経緯 …… 1
(2)　調査の経過 …… 3
(3)　県指定史跡指定までの経緯 …… 6
(4)　遺跡の公開と保護活動 …… 7
(5)　調査組織 …… 8

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 11
(1)　地理的・歴史的環境 …… 11
(2)　日田盆地の古墳と横穴墓 …… 16

Ⅲ　調査と整理の方針 …… 29
(1)　調査の方法 …… 29
(2)　整理の方法 …… 30
(3)　１次調査の実測図について …… 31

Ⅳ　調査の内容 …… 33
(1)　調査の概要 …… 33
(2)　１号墳の調査 …… 35
(3)　２号墳の調査 …… 63
(4)　その他の遺物 …… 107
(5)　関連遺物 …… 113

Ⅴ　考察 …… 127
(1)　墳丘について …… 127
(2)　遺物について …… 133
(3)　年代について …… 153

Ⅵ　総括 …… 155

挿　図　目　次

第１図　昭和３年の新聞記事
第２図　朝日天神山２号墳採集遺物（1/3）
第３図　県指定史跡範囲地籍図（1/2,000）
第４図　日田市の位置
第５図　朝日天神山古墳群の位置図（1/5,000）
第６図　日田盆地の古墳・横穴墓の分布図（1/25,000）
第７図　１号墳１トレンチ実測図（1/80）
第８図　１号墳２・３トレンチ実測図（1/80）
第９図　１号墳４トレンチ実測図（1/80）
第10図　１号墳５トレンチ実測図（1/80）
第11図　１号墳６トレンチ実測図（1/80）
第12図　１号墳７・８トレンチ実測図（1/40・1/80）
第13図　１号墳９・10トレンチ実測図（1/80）
第14図　１号墳11・12トレンチ実測図（1/80）
第15図　１号墳13・14トレンチ実測図（1/80）
第16図　１号墳15トレンチ実測図（1/80）
第17図　１号墳表採遺物実測図（1/1）
第18図　１号墳１・２・６～８・13トレンチ出土遺物実測図（1/4）
第19図　２号墳１・２トレンチ実測図（1/80）
第20図　２号墳１トレンチ出土遺物実測図（１）（1/4）
第21図　２号墳１トレンチ出土遺物実測図（２）（1/4）
第22図　２号墳３・４トレンチ実測図（1/80）
第23図　２号墳５・６トレンチ実測図（1/80）
第24図　２号墳２・３トレンチ出土遺物実測図（1/4）
第25図　２号墳５トレンチ出土遺物実測図（１）（1/4）
第26図　２号墳５トレンチ出土遺物実測図（２）（1/4）
第27図　２号墳６トレンチ出土遺物実測図（１）（1/4）
第28図　２号墳６トレンチ出土遺物実測図（２）（1/4）
第29図　２号墳６トレンチ出土遺物実測図（３）（1/8）
第30図　２号墳７・８トレンチ実測図（1/80）
第31図　２号墳９・10トレンチ実測図（1/80）
第32図　２号墳９・10トレンチ出土遺物実測図（1/4）
第33図　２号墳11トレンチ実測図（1/80）
第34図　２号墳12・13トレンチ実測図（1/80）
第35図　２号墳14～16トレンチ実測図（1/80）
第36図　２号墳12・14・17トレンチ出土遺物実測図（1/4）

第37図　２号墳17トレンチ実測図（1/80）
第38図　２号墳Ａ区実測図（1/80・1/200）
第39図　２号墳Ｂ区実測図（1/80）
第40図　２号墳Ａ・Ｂ区出土遺物実測図（1/4）
第41図　２号墳Ｃ区実測図（1/80・1/200）
第42図　２号墳Ｃ区出土遺物実測図（1/4）
第43図　２号墳Ｄ区実測図（1/80）
第44図　２号墳出土遺物実測図（1/4）
第45図　１号墳２・３・５～９トレンチ出土遺物実測図（1/4）
第46図　１号墳10～13・15トレンチ出土・表採遺物実測図（1/4）
第47図　２号墳１・６・10・12・15トレンチ出土遺物実測図（1/4）
第48図　１号墳２・４～６トレンチ出土遺物実測図（1/4）
第49図　１号墳７・８～10トレンチ出土遺物実測図（1/4）
第50図　１号墳15トレンチ及び２号墳出土遺物実測図（1/4）
第51図　伝１号墳出土遺物実測図（１）（1/8）
第52図　伝１号墳出土遺物実測図（２）（1/4）
第53図　伝１号墳出土遺物実測図（３）（2/3）
第54図　伝１号墳出土遺物実測図（４）（1/3）
第55図　伝１号墳出土遺物実測図（５）（1/3）
第56図　墳丘復元図及び２号墳縦断面図（1/400）
第57図　２号墳横断面図（1/400）
第58図　１号墳縦・横断面図（1/400）
第59図　大型平底壺分類図（1/8）
第60図　大型平底壺拓影（1/4）
第61図　関連遺跡分布図（1/200万）
第62図　三輪玉出土古墳・遺跡分布図
第63図　古墳時代における枕の分布概念図
第64図　古墳時代における各地の枕（１）（日田盆地及び大分県内）
第65図　古墳時代における各地の枕（２）
第66図　伝１号墳出土遺物と関連資料（1/3）
第67図　関連遺物と朝日天神山古墳群出土遺物実測図（1/8）
付図１　朝日天神山古墳群現況測量図（1/400）
付図２　朝日天神山古墳群トレンチ配置図（1/400）

写　真　図　版　目　次

巻頭図版１　（上）宮原台地遠景（南東から）
（下）宮原台地空中写真（真上から）
巻頭図版２　（上）１次調査空中写真
（下）５次調査空中写真
巻頭図版３　（上）２号墳５トレンチ遺物出土状況
（下）２号墳出土遺物
巻頭図版４　（上）伝１号墳出土遺物（須恵器・土師器）
（下）伝１号墳出土遺物（鏡・鉄器・馬具類）
写真図版１　（上）１次調査空中写真
（下）５次調査空中写真
写真図版２　（上）１号墳１トレンチ全景（西から）
（下）１号墳１トレンチ遺構検出状況（西から）
写真図版３　（上）１号墳１トレンチ列石および土層堆積状況（南から）
（下）１号墳１トレンチ第２石室石組検出状況（西から）
写真図版４　（上）１号墳２トレンチ全景（南西から）
（下）１号墳２トレンチ墳丘土層堆積状況（南から）
写真図版５　（上）１号墳２トレンチ周溝検出状況（南東から）
（下）１号墳２トレンチ列石検出状況（西から）
写真図版６　（上）１号墳３トレンチ近景（北から）
（下）１号墳３トレンチ墳丘土層堆積状況（北から）
写真図版７　（上）１号墳３トレンチ墳丘土層堆積状況（西から）
（下）１号墳３トレンチ周溝土層堆積状況（東から）
写真図版８　（上）１号墳４トレンチ全景（南から）
（下）１号墳４トレンチ溝発掘状況（東から）
写真図版９　（上）１号墳５トレンチ全景（南から）
（下）１号墳５トレンチ遺物出土状況（南から）
写真図版10　（上）１号墳６トレンチ全景（東から）
（下）１号墳６トレンチ遺物出土状況（北から）
写真図版11　（上）１号墳７トレンチ全景（南から）
（下）１号墳７トレンチ墳丘土層堆積状況（南から）
写真図版12　（上）１号墳７トレンチ墳丘基盤掘込状況（北から）
（下）１号墳７トレンチ墳丘土層堆積状況（東から）
写真図版13　（上）１号墳８トレンチ全景（南から）
（下）１号墳８トレンチ遺物出土状況（南から）
写真図版14　（上）１号墳９トレンチ全景（北西から）
（下）１号墳９トレンチ墳丘土層堆積状況（南西から）

写真図版15　（上）１号墳10トレンチ全景（北から）
（下）１号墳10トレンチ近景（北から）
写真図版16　（上）１号墳10トレンチ墳丘土層堆積状況（北から）
（下）１号墳10トレンチ周溝発掘状況（南東から）
写真図版17　（上）１号墳11トレンチ全景（南西から）
（下）１号墳11トレンチ周溝発掘状況（北東から）
写真図版18　（上）１号墳12トレンチ全景（北から）
（下）１号墳12トレンチ周溝発掘状況（北から）
写真図版19　（上）１号墳13トレンチ全景（東から）
（下）１号墳14トレンチ全景（西から）
写真図版20　（上）１号墳14トレンチＡ全景（北西から）
（下）１号墳14トレンチＡ周溝土層堆積状況（北東から）
写真図版21　（上）１号墳15トレンチ全景（北西から）
（下）１号墳15トレンチ土層堆積状況（北東から）
写真図版22　（上）２号墳１トレンチ全景（東から）
（下）２号墳１トレンチ内側周溝遺物出土状況（南から）
写真図版23　（上）２号墳１トレンチ内側周溝発掘状況（南から）
（下）２号墳１トレンチ外側周溝発掘状況（南から）
写真図版24　（上）２号墳２トレンチ全景（東から）
（下）２号墳２トレンチ外側周溝発掘状況（南から）
写真図版25　（上）２号墳２トレンチ内側周溝発掘状況（南東から）
（下）２号墳３トレンチ内側周溝発掘状況（南西から）
写真図版26　（上）２号墳３トレンチ内側周溝土層堆積状況（北西から）
（下）２号墳３トレンチ外側周溝土層堆積状況（北西から）
写真図版27　（上）２号墳４トレンチ全景（南東から）
（下）２号墳４トレンチ内側周溝発掘状況（西から）
写真図版28　（上）２号墳５トレンチ全景（南から）
（下）２号墳５トレンチ外側周溝土層堆積状況（西から）
写真図版29　（上）２号墳５トレンチ内側周溝発掘状況（北西から）
（下）２号墳５トレンチ内側周溝遺物出土状況（北から）
写真図版30　（上）２号墳５トレンチ内側周溝遺物出土状況（西から）
（下）２号墳５トレンチ内側周溝遺物出土状況（北から）
写真図版31　（上）２号墳６トレンチ全景（北から）
（下）２号墳６トレンチ外側周溝発掘状況（西から）
写真図版32　（上）２号墳６トレンチ内側周溝発掘状況（北東から）
（下）２号墳６トレンチ内側周溝遺物出土状況（西から）
写真図版33　（上）２号墳７トレンチＡ内側周溝発掘状況（南から）
（下）２号墳７トレンチＢ墳丘土層堆積状況（東から）

写真図版34　（上）２号墳７トレンチＢ墳丘土層堆積状況（北から）
（下）２号墳７トレンチＢ墳丘土層堆積状況（北から）
写真図版35　（上）２号墳８トレンチ全景（西から）
（下）２号墳８トレンチ外側周溝発掘状況（南から）
写真図版36　（上）２号墳８トレンチ内側周溝土層堆積状況（南から）
（下）２号墳９トレンチ内側周溝発掘状況（北から）
写真図版37　（上）２号墳９トレンチ内側周溝土層堆積状況（東から）
（下）２号墳９トレンチ遺物出土状況
写真図版38　（上）２号墳10トレンチ全景（北から）
（下）２号墳10トレンチ墳丘土層堆積状況（南から）
写真図版39　（上）２号墳10トレンチ墳丘土層堆積状況（東から）
（下）２号墳10トレンチ内側周溝遺物出土状況（南から）
写真図版40　（上）２号墳11トレンチ全景（南西から）
（下）２号墳12トレンチ全景及び土層堆積状況（北から）
写真図版41　（上）２号墳13トレンチ全景（南東から）
（下）２号墳13トレンチ周溝土層堆積状況（南西から）
写真図版42　（上）２号墳14トレンチ全景（北から）
（下）２号墳14トレンチ遺物出土状況（北東から）
写真図版43　（上）２号墳15トレンチ全景（北から）
（下）２号墳15トレンチ周溝土層堆積状況（西から）
写真図版44　（上）２号墳16トレンチ全景（北から）
（下）２号墳17トレンチ発掘状況（北から）
写真図版45　（上）２号墳17トレンチ土層堆積状況（東から）
（下）２号墳Ａ区全景（真上から）
写真図版46　（上）２号墳Ａ区周溝土層堆積状況（北から）
（下）２号墳Ａ区遺物出土状況（東から）
写真図版47　（上）２号墳Ｂ区全景（真上から）
（下）２号墳Ｂ区内側周溝土層堆積状況（北西から）
写真図版48　（上）２号墳Ｃ区全景（真上から）
（下）２号墳Ｃ区外側周溝検出状況（北から）
写真図版49　（上）２号墳Ｃ区内側周溝土層堆積状況及び遺物出土状況（北から）
（下）２号墳Ｃ区外側周溝土層堆積状況（北から）
写真図版50　（上）２号墳Ｄ区全景（北から）
（下）２号墳Ｄ区周溝土層堆積状況（西から）
写真図版51　１号墳出土遺物・表採遺物
写真図版52　１号墳出土遺物・２号墳５トレンチ出土遺物
写真図版53　２号墳１・５・６・10トレンチ出土遺物
写真図版54　２号墳１～３・５・６トレンチ出土遺物

写真図版55　２号墳６トレンチ出土遺物
写真図版56　２号墳６・９・10トレンチ出土遺物
写真図版57　２号墳12・14・17トレンチ出土遺物
写真図版58　２号墳Ａ～Ｃ区、伝１号墳出土遺物（須恵器）
写真図版59　伝１号墳出土遺物（須恵器・石枕）
写真図版60　伝１号墳出土遺物（鉄器）
写真図版61　伝１号墳出土遺物（鉄器）
写真図版62　伝１号墳出土遺物（鉄器）
写真図版63　１号墳出土遺物（弥生土器）
写真図版64　１号墳出土遺物（弥生土器）
写真図版65　１号墳出土遺物（土師質土器）
写真図版66　１号墳出土遺物（土師質土器）

挿 入 写 真 目 次

写真１　１次調査指導中の賀川先生 …… 3
写真２　１次調査指導風景 …… 3
写真３　２次調査作業風景 …… 3
写真４　３次調査作業風景 …… 3
写真５　３次調査作業風景 …… 4
写真６　４次調査作業風景 …… 4
写真７　５次調査作業風景 …… 4
写真８　５次調査現地説明会風景 …… 4
写真９　１次調査現地説明会風景 …… 7
写真10　５次調査現地説明会風景 …… 7
写真11　吹上遺跡６次調査４号甕棺墓 …… 13
写真12　小迫辻原遺跡の居館跡 …… 13
写真13　慈眼山瀬戸口遺跡 …… 13
写真14　岳林寺 …… 13
写真15　調査中の永山布政所跡 …… 13
写真16　豆田の町並み …… 13
写真17　朝日宮ノ原遺跡Ａ区４号中世墓 …… 14
写真18　朝日宮ノ原遺跡Ｄ区 …… 14
写真19　穴観音古墳と発掘された周溝 …… 17
写真20　穴観音古墳の石室内部奥壁 …… 17
写真21　ガランドヤ１号墳の近景 …… 17
写真22　ガランドヤ１号墳の奥壁 …… 17
写真23　ガランドヤ２号墳の近景 …… 17
写真24　ガランドヤ２号墳の奥壁 …… 17
写真25　日隈古墳出土の細線式獣帯鏡 …… 19
写真26　姫塚古墳の近景 …… 19
写真27　惣田塚古墳の近景 …… 19
写真28　ダンワラ古墳の近景 …… 19
写真29　法恩寺山３号墳の石室内部 …… 19
写真30　法恩寺山４号墳出土の雲珠 …… 19
写真31　鳥羽塚古墳の遠景 …… 19
写真32　調査中の後山古墳 …… 19
写真33　薬師堂山古墳の遠景 …… 21
写真34　丸山古墳の近景 …… 21
写真35　夕田横穴墓群出土の把手付碗 …… 21
写真36　尾漕２号墳の空撮 …… 21
写真37　塔ノ本２号墳の空撮 …… 21
写真38　平島古墳の近景 …… 21
写真39　羽野横穴墓群の近景 …… 23
写真40　城山古墳の近景 …… 23
写真41　平島横穴墓群の近景 …… 23
写真42　有田古墳出土の鏡 …… 23
写真43　北友田横穴墓群出土の子持高坏 …… 24
写真44　三郎丸古墳の近景 …… 24
写真45　小迫古墳の主体部 …… 24
写真46　朝日天神山２号墳の近景 …… 24
写真47　調査前空中写真 …… 31
写真48　１号墳調査前風景 …… 62
写真49　２号墳調査前風景 …… 62

表　目　次

第１表　新旧トレンチ対照表 …… 32
第２表　出土土器観察表（１） …… 120
第３表　出土土器観察表（２） …… 121
第４表　出土土器観察表（３） …… 122
第５表　出土土器観察表（４） …… 123
第６表　出土土器観察表（５） …… 124
第７表　出土土器観察表（６） …… 125
第８表　鏡観察表 …… 126
第９表　刀剣観察表 …… 126
第10表　耳環観察表 …… 126
第11表　馬具観察表 …… 126
第12表　三輪玉出土古墳一覧表 …… 142

Ⅰ　調査にいたるまでの経緯

(1) これまでの経緯

1．発見の経緯

この古墳が世に知られるようになったのは、昭和３年の天満社建設の際に、現在の１号墳後円部石室から多くの遺物が出土したことにはじまる。この時の様子を大分新聞（現在の大分合同新聞）は「…神社裏手にて古墳に堀當て鏡一面（直徑四寸八分）、槍先一本、轡三個、鐙一對、劍三本（長さ二尺七寸、二尺五寸、二尺三寸）、簇無数、咬数個、土器数個及馬の額かざりと思はれる精巧な装飾を施した銅板を發掘したが特に轡は精巧な金属製で貝を以て装飾を施しまた鐙は直徑一尺一寸三分で従来ありふれた形と相違し丸形のものである…」と報道しており、この記事によれば少なくとも鏡、鉄刀、鉄鏃、馬具類、土器（須恵器・土師器）などの遺物が出土したことになる。

こうした遺物のほかにも、同古墳から出土したと伝えられている勾玉や石枕などがあり、これらの遺物はその後土地所有者である蒲池家や別府大学、日田市立博物館と分散し、それぞれで保管されてきた。

なお、この古墳発見時は、１号墳が前方後円墳とは認識されておらず、地元の人は“経塚”と呼んでいたそうである。

千二百年前の珍らしい古墳

豪族の遺物らしい轡、鐙、劍

日田郡朝日村で發見

第１図　昭和３年の新聞記事

2．古墳の踏査・研究

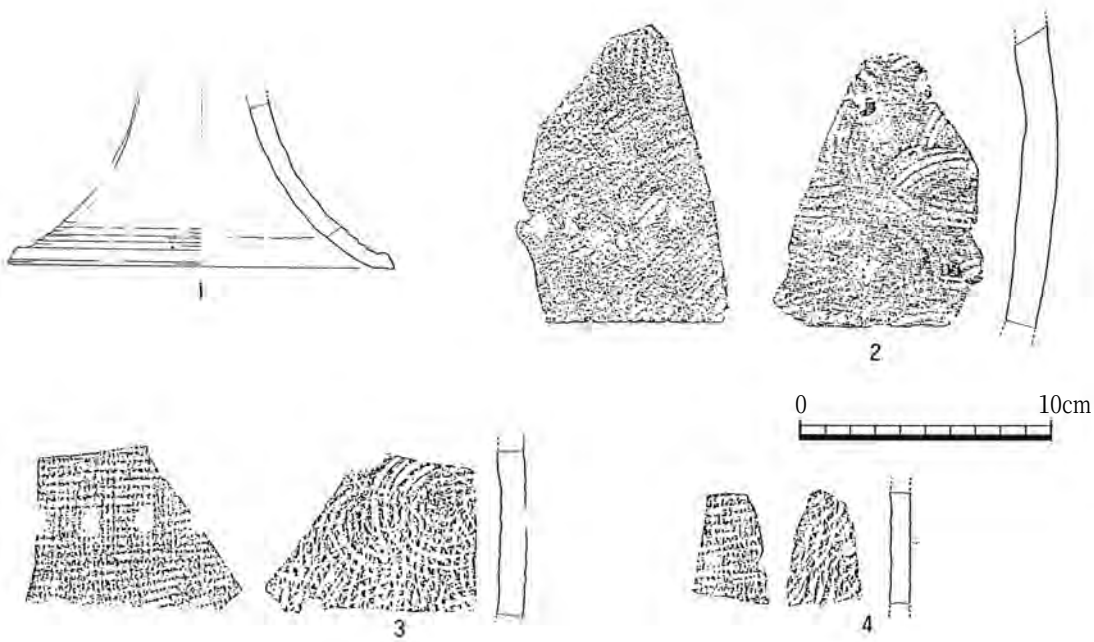
戦後になると地元の柿本辰雄氏が昭和３年に遺物の発見された古墳西側に、さらに前方後円墳１基が存在することを発見し、２基の前方後円墳を“天満宮古墳”西古墳（本報告２号墳）と東古墳（本報告１号墳）とに呼び分けた。氏は西古墳の全長を約38mと推定し、東古墳から出土した遺物のうち須恵器や土師器には坏・器台・坩・平瓶の器種が存在することなどを報告された。

その後、別府大学の賀川光夫氏はこの古墳を“天神山古墳”と呼び、２基をＡ墳（本報告２号墳）とＢ墳（本報告１号墳）と呼称し、これらは主軸を東西方向に向けた古墳時代後期の前方後円墳と位置付け、Ｂ墳からは鏡や馬具が出土したことを紹介している。

昭和51年には“天満古墳”と命名した真野和夫氏によって１号墳出土の遺物や墳形の検討が行われ、１号墳の年代を６世紀中頃前後、２号墳はそれに先立つ５世紀末～６世紀初め頃の築造と考え、両墳を日田地方の首長墓と位置付けて大和朝廷との関係を示唆している。

昭和60年代後半には大分県前方後円墳研究会による日田市内の前方後円墳の測量や踏査が行われ、その基礎資料化が図られるなか田中裕介氏は、古墳の略測結果や表面採集資料などをもとに１号墳を全長約30m、２号墳を全長約60mの二段築成と推察し、その築造時期を先の真野氏の提案とは逆の１号から２号と考え、１号を６世紀中頃、２号を６世紀後半から末とする年代観を示した。

なお、本格的な発掘調査が行なわれる以前のこうした現地調査や研究段階においては、古墳の呼び名は不統一であり、また２号墳の後円部はその残る墳形から西向きと考えられてきた。



第２図　朝日天神山２号墳採集遺物（註６より転載）

３．確認調査まで

この古墳は昭和３年の発見以来古くから知られていたにもかかわらず、これまで本格的な考古学的調査は実施されないまま現状保存されてきた。昭和30年代後半からは市内台地上では大規模な畑地を対象とした構造改善事業が開始され、古墳の位置する宮原台地でもこの事業が実施されたが、幸いにも古墳には神社が祀られ、また杉林であったがために工事の対象外となり破壊を免れてきた。昭和50年代以降は、文化財を所管する日田市立博物館において古墳の重要性を鑑み、文化財の指定化が議論されてはきたものの、土地所有者の承諾を得ることができずに長い間の懸案事項となってきた。

平成８年に入ると土地所有者が亡くなられ、古墳用地を管理する秋吉虎太氏から市教委へ古墳の指定保存に同意する旨の話が持ちかけられた。市教委では日田市内でも数少ない貴重な前方後円墳であることから、大分県史跡として文化財指定を行い保存する方向でまとまり、平成８年６月28日付けで大分県教育長宛に大分県指定文化財指定申請書を提出した。

ところが、この申請に対して大分県文化財保護審議会は、同古墳はこれまでに本格的な調査が実施されておらず、申請での史跡範囲が適当かどうかの判断ができないとの理由から、大分県文化課を通じて確認調査が必要という指摘がなされ、申請は継続審議扱いとなった。こうした要請を受けて市教委では、この指導に基づいて、翌平成９年度に確認調査を実施することを決めた。

註１）柿本辰雄　「才田の前方後円墳」『日田文化創刊号』日田文化財調査委員会　1956年
註２）賀川光夫　「古墳文化」『大分縣史料』考古資料　大分縣史料刊行会　1961年
註３）賀川光夫　「古墳文化」『大分県の考古学』吉川弘文館　1971年
註４）真野和夫　「古墳時代」『大分の歴史（1)』大分合同新聞社　1976年
註５）大分県前方後円墳研究会　「大分県の前方後円墳集成（Ⅰ)」『おおいた考古』Ⅰ　大分県考古学会　1988年
註６）田中裕介　「天満１、２号墳と採集遺物」『おおいた考古』Ⅰ　大分県考古学会　1988年

(2) 調査の経過

１次調査（平成９年６月19日～９月30日）

調査では２号墳丘の平板測量を行い、主軸上・クビレ部・前方部隅角など、古墳周囲に計12本のトレンチを設定した。その結果、古墳北側で２条の周溝、南側で１条の周溝が検出された。これらの周溝は墳丘に沿って前方後円形には巡らずに多角形（剣菱形）に巡ることが判明し、また周溝内からはクビレ部を中心に須恵器の大型平底壺が多数出土した。調査中には、福岡大学小田富士雄教授（現名誉教授）、別府大学後藤宗俊教授・下村智助教授（現教授）、大分県教育委員会などの指導も受ける中で、周溝形態や大型平底壺の存在など、埼玉県・埼玉古墳群内の中の山古墳の事例と類似しているなど、九州における初めての事例としての成果がみられた。また、北側クビレ部のトレンチからは、石人と考えられる凝灰岩製品も出土し、筑後地方との関係も窺える古墳であることが分かった。

写真１　１次調査指導中の賀川先生

写真２　１次調査指導風景

２次調査（平成11年２月22日～３月27日）

２次調査は１次調査で確認を行なった２号墳に引き続き、古墳群全体の基礎的な資料を得る目的で１号墳の測量調査を実施した。１号墳は昭和３年の天満社建設時に後円部が大きく破壊されており、現状では正確な規模を測ることができなったが、この調査により、復元長33m、後円部径22m、高さ２m、前方部長11m、前方部幅14mの規模の古墳であることが判明した。

写真３　２次調査作業風景

３次調査（平成11年９月16日～27日）

３次調査は別府大学に調査委託をして行なった。調査では２次調査で作成した測量図を元に、トレンチを設定し調査を行なった。前方部主軸上、前方部隅角、後円部南側、後円部北側に各１本ずつのトレンチを設定して、確認した。その結果、前方部主軸上を除く３本のトレンチで溝状の落ち込みが確認され、少なくとも古墳の南側には周溝状の溝が１条巡ることが確認された。また、前方部主軸上のトレン

写真４　３次調査作業風景

チからは安山岩製の石材を利用した石積みが確認され、前方部にも石室が存在する１古墳２石室である可能性が想定された。

４次調査（平成12年９月19日～29日）

４次調査は３次調査に引き続き、１号墳の範囲・規模・構造等を確認するため、古墳の東側から南側にかけて４本のトレンチを設定した。その結果、東側のトレンチでは墳丘の立ち上がりが確認でき、３次調査の結果を加味して墳長33mの規模であることが確認できた。また、南側のトレンチでは墳丘盛土の下層より、掘り込みが確認された。これにより３次調査の前方部南西側ならびに南側のトレンチで確認された溝は周溝ではなく、前方部石室構築時、もしくは墳丘築造時の割付線・設計線的性格の可能性が考えられた。さらに同じく南側で古墳時代より古い溝が確認されたことにより、３次調査で確認された前方部北側の溝は周溝でなく、古墳の南側には周溝が巡らないとの判断ができた。この他、南側のトレンチでは須恵器がまとまって出土し、古墳の築造時期の資料をえることができた。

５次調査（平成14年７月15日～９月30日）

４次調査までの結果をもとに、平成14年度に古墳群全体の内容についての最終的な把握を行なうことなった。事前に福岡大学小田富士雄教授（現名誉教授）、別府大学下村智助教授（現教授）と協議を行い、指導を仰いだ。その結果、１号墳についてはテラス・周溝の確認、２号墳については１次調査では明確に把握できなかった古墳南側の墳端・周溝確認、さらに北側と西側は周溝の再確認を行なうこととなった。また、２号墳の北側と西側については、機械の搬入が可能なことから広くグリッド設定して調査を行なうこととなった。

調査は別府大学の協力のもと開始した。重機による２号墳西・北・東側の掘り下げ・遺構検出を行なうとともに１号墳と２号墳南側のトレンチの掘り下げを行なった。その結果、１号墳では墳丘北側から東側にかけて１条の周溝が検出され、１次調査で否定された北側の落ち込みは周溝であることが確認された。また、

写真５　３次調査作業風景

写真６　４次調査作業風景

写真７　５次調査作業風景

写真８　５次調査現地説明会風景

２号墳側の西側から北側にかけては周溝が途切れることが判明した。

２号墳では前方部と考えられていた東側で検出された周溝が円形になることが確認され、北側のグリッドでも多角形（剣菱形）に巡るとは考えにくい、カーブした周溝を検出した。さらに後円部と考えられていた西側では、前方部の隅角が検出された。こうした結果をもとに、大学の先生方や大分県教育委員会の指導を受け、現存している墳丘は削平されており、従来考えられていた向きが逆転し前方部が西側にある古墳と判断した。また、南側に設定したトレンチでいずれも周溝が確認され、推定復元の結果、内側周溝であることが判明した。

さらに１号墳の周溝と２号墳の周溝を確認するため、両古墳間の南寄りにグリッドを設定した。その結果１号墳の周溝と２号墳の外側周溝の一部が確認された。１号墳の周溝は３次調査の結果から主軸上のトレンチでは確認されていないことから、このグリッドとの間で途切れることが想定された。これにより、１号墳は２号墳の周溝を避けるように築造されたことが判明し、近接した古墳の築造順序を考える上では重要な知見を得ることができた。

このように５次およんだ確認調査では２号墳は古墳時代後期における県内最大級のものであることが判明するとともに、当初の調査結果が覆されるということも起きたが、こうした成果はトレンチ調査による墳丘形態や規模を確認することの難しさを痛感させられることとなった。

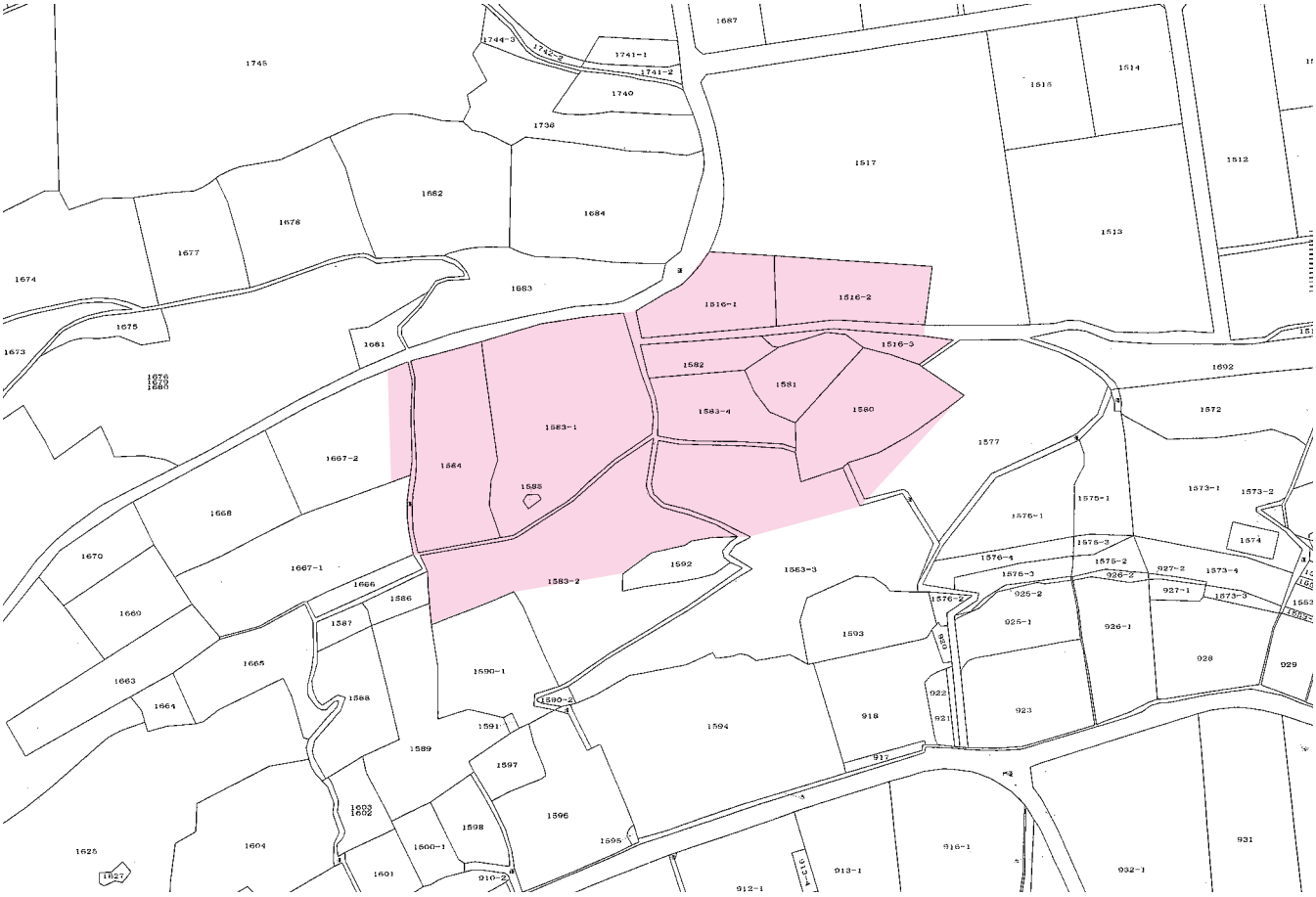
以上が朝日天神山古墳群の発掘調査の概要を簡単にまとめたものである。詳細は「Ⅳ　調査の内容」を参照されたい。なお、各年次と調査概報等については下表のとおりである。

調査年次	調査年度	調 査 概 報 等 文 献 名
１次調査	平成９年度	吉田博嗣／「６　天満古墳群（TNM）」『平成９年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／1999年
２次調査	平成10年度	下村智／「16　天満古墳群２次（TNM-2）」『平成10年度（1998年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／2000年
３次調査	平成11年度	土居和幸／「９　天満古墳群３次（TNM-３）」『平成11年度（1999年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／2001年 土居和幸・下村智編／『吹上遺跡・天満古墳群－範囲確認調査に伴う概要報告－』／日田市教育委員会／2000年
４次調査	平成12年度	吉田和彦・下村智／「天満古墳群４次（TNM－４）」『平成12年度（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／2001年
５次調査	平成14年度	若杉竜太／「３　朝日天神山（天満）古墳群」『平成14年度（2002年度）日田市埋蔵文化財年報』／日田市教育委員会／2003年

(3) 県指定史跡指定までの経緯

５次にわたって行なった調査結果をもとに、市教育委員会では再度、県指定史跡指定を行なうべく、指定範囲の検討作業を開始した。古墳群南側については、現在急斜面になっている上、調査においても外側周溝の存在が確認されてなかったことから、どの部分までを指定範囲とするのかが問題となった。また、周溝の存在が確認された古墳群の西側・北側・東側についても、全筆指定をするか、分筆指定をするかで、意見が分かれた。こうした経過を経て、福岡大学小田富士雄、別府大学後藤宗俊両先生や大分県教育委員会文化課職員による現地確認・指導を受けた。その結果、１号墳北側については周溝がかかる部分を全筆、２号墳西側については、前方部隅角がかかると見られる部分のみ分筆、古墳群南側については、現在墓地となっている部分（1592番地）の北側を通る線で分筆することとし、指定範囲の決定をおこなった。こうした経過を経て、平成15年４月22、25日に個々の所有者への説明、また同23日に天満社氏子総代への説明会を行い、同年４月28日付けで大分県指定文化財指定申請書を提出し、翌平成16年３月30日付で大分県指定史跡の告示がなされた。

なお、史跡の指定範囲は第３図に示す日田市大字小迫字宮原1516－1、1516－２、字天神山1579－3、1580、1581、1582、1583－1、1583－４、1584、1585および1583－２、1583－3、字杉本原1667－2の一部、ならびにこれに含まれる里道の計9539.84m²である。



第３図　県指定史跡範囲地籍図（1/2,000）

（4）遺跡の公開と保護活動

朝日天神山古墳群での５年次にわたる調査中には、古墳の保護や市民への調査成果の公表、教育学習機会の提供などを目的に、現地説明会や展示会などの普及啓発活動を実施してきた。

以下、簡単にその活動内容についてまとめ、活動写真等を付す。

平成９年９月24日　１次調査成果のマスコミ発表
１次調査成果を公表した。

平成９年９月27日　１次調査現地説明会の開催（～28日）
１次調査成果を公表し、２日間で約200名の参加があった。

平成12年９月29日　４次調査成果のマスコミ発表
４次調査成果を公表した。

平成14年９月６日　５次調査成果のマスコミ発表
５次調査成果を公表した。

平成14年９月８日　５次調査現地説明会の開催
５次調査成果を市内外に公開した。午前・午後の２回行い、約160名の参加があった。

平成15年10月５日　市埋蔵文化財センター展示室において、企画展「埴輪で飾られた前方後円墳～磐井の乱前後の北部九州」を開催（～11月28日）
前年度までおこなった５次にわたる調査成果の公表とともに、埴輪の代用品と考えられる須恵器大型平底壺と北部九州の前方後円墳出土埴輪との比較展示をおこなった。
また、展示初日には別府大学後藤宗俊教授を招いて「前方後円墳時代の日田～朝日天神山古墳が語るもの」と題した講演をいただいた。

写真９　１次調査現地説明会風景

写真10　５次調査現地説明会風景

(5) 調査組織

各年度（年次）の発掘調査の関係者は、以下のとおりである。なお、職名は当時のままとしている。

平成９年度（1997）／１次調査

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）
調査指導員　小田富士雄（福岡大学教授）後藤宗俊（別府大学教授）、下村智（同助教授）、
渋谷忠章（大分県教育委員会文化課主幹）、高橋徹（同係長）、田中裕介（同主査）
調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同文化課課長補佐兼文化財
係長）、森山一宏（同文化課主任）、竹原里香（同文化課臨時職員）
調 査 担 当　吉田博嗣（日田市教育委員会文化課主事）
調　査　員　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）、行時志郎（同文化課主任）
松下桂子（同文化課主事）、永田裕久（同文化課主事補）
作　業　員　秋吉タミエ、秋吉ミユキ、伊藤フジエ、猪熊忠孝、加納健作、蒲池妙子、
黒田ノブ子、佐藤節子、高村笑美子、手嶋トシエ、中尾タマエ、行村シズエ、
行村ツマコ、行村豊（以上発掘作業員）宇野富子、黒木千鶴子、酒井貴代美、
坂本和代、平川優子、和田ケイ子（以上整理作業員）
協　力　者　蒲池雄二

平成10年度（1998）／２次調査

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）
調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長）
佐々木豊文（同主査）
調 査 担 当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）、下村智（別府大学助教授）
調　査　員　行時志郎（日田市教育委員会文化課主任）吉田博嗣（同主任）、
森山敬一郎（同嘱託）若杉竜太（同嘱託）
作　業　員　天野玄普、安藤将司、上野淳也、梅田昭宏、神山淳、下田智隆、下東嘉也、
田中聖二、服部真和、藤野美音、松竹智之

平成11年度（1999）／３次調査

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）
調査指導員　賀川光夫（別府大学名誉教授）、小田富士雄（福岡大学教授）、
下村智（別府大学助教授）
調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、
佐々木豊文（同主査）、美野寿美香（同臨時職員）
調 査 担 当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主任）、下村　智（別府大学助教授）
吉田和彦（別府大学附属博物館学芸員）
調　査　員　行時志郎（日田市教育委員会文化課主任）、吉田博嗣（同主任）、

若杉竜太（同主事）、五十川雄也（同嘱託）、森山敬一郎（同嘱託）

作　業　員　安東将司、井上索裕、小野雄大、京極徳子、神山淳、後藤晃一、坂下千帆、佐藤真人、下田智隆、下東嘉也、田中聖二、寺田庸平、内藤祐介、西村直人、藤野美音、米村大、松浦憲治、松竹智之（以上、別府大学大学院生、学生）、綾部豊

協　力　者　石井久雄・蒲池雄二

平成12年度（2000）／４次調査

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）～平成12年11月14日
後藤元晴（日田市教育委員会教育長）平成12年11月15日～

調査指導員　小田富士雄（福岡大学教授）、下村智（別府大学助教授）
渋谷忠章（大分県教育委員会文化課参事）

調 査 事 務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同主査）、江田香織（同臨時職員）

調 査 担 当　行時志郎（日田市教育委員会文化課主任）、
吉田和彦（別府大学付属博物館学芸員）

調　査　員　吉田博嗣（日田市教育委員会文化課主任）、若杉竜太（同主事）、
渡邉隆行（同主事）

作　業　員　神山淳、下森弘之、玉川剛司、森島晋太郎（以上別府大学学生）、秋吉ミユキ、猪熊ヨネ、高村笑美子、手嶋トシエ、中尾タマエ、行村シズエ、

協　力　者　竹島勝幸・蒲池雄二

平成14年度（2002）／５次調査

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）下村智（同助教授）
渋谷忠章（大分県教育委員会文化課参事）、小林昭彦（同主幹）、
吉永浩二（同主幹）江田豊（同副主幹）

調 査 統 括　後藤清（日田市教育委員会文化課長）

調 査 事 務　田中伸幸（日田市教育委員会文化課文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）、
園田恭一郎（同文主任）、酒井恵（同主事補）

調 査 担 当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主査）若杉竜太（同主事）

調　査　員　行時桂子（日田市教育委員会文化課主任）、渡邉隆行（同主事）

作　業　員　井上誠二、岩満聡、宇都宮大地、江上正高、織田教雅、北川貴洋、黒木俊治、下森弘之、玉川剛司、手柴智晴、松浦憲治、松尾秀昭、森島晋太郎、吉田朋史（以上別府大学大学院生、学生）、秋吉貞夫、秋吉利彦、秋吉みゆき、
安心院照雄、猪熊ヨネ、後藤孝市、財津由太、高倉美利、高村笑美子、田中昇、筒井英治、手嶋トシエ、中尾タマエ、平原知義

協　力　者　蒲池光男、蒲池雄二、竹島勝幸
来　訪　者　清水宗昭（大分県教育委員会文化課参事）、田中裕介（同副主幹）、
吉田和彦（臼杵市教育委員会文化財室）

平成15年度（2003）／報告書作成
調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）～平成15年７月
諫山康雄（日田市教育委員会教育長）平成15年８月～
調査指導員　小田富士雄（福岡大学教授）、下村智（別府大学助教授）
調 査 統 括　後藤清（日田市教育委員会文化課長）
調 査 事 務　佐藤晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同文化課主査）、
酒井恵（同文化課主事補）
報告書担当　若杉竜太（日田市教育委員会文化課主事）
調　査　員　土居和幸（日田市教育委員会文化課主査）行時桂子（同主任）、
渡邉隆行（同主事）

平成16年度（2004）／報告書作成・印刷
調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査指導員　下村智（別府大学教授）、玉川剛司（別府大学非常勤講師）、
吉田和彦（直川村教育委員会）
調 査 統 括　後藤清（日田市教育委員会文化課長）
調 査 事 務　高倉隆人（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、伊藤京子（同文化課副主幹）、
中村邦宏（同文化課主事補）
報告書担当　土居和幸（日田市教育委員会文化課主査）若杉竜太（同文化課主任）
調　査　員　行時桂子（日田市教育委員会文化課主任）、渡邉隆行（同主事）
協　力　者　吉田博嗣（同文化課主任）

なお、報告書に掲載した挿図・図版作成に携わった関係者は次のとおりである。（職名は現職）
遺 物 実 測　吉田和彦（直川村教育委員会）、玉川剛司（別府大学非常勤講師）、
下森弘之、伊藤友美子、越知睦和、河本翔伍、末國琢也、田中健一郎、
手柴智晴、鶴田貴大（別府大学文化財学専攻大学院生）、
豊田沙和美（同文化財学科学生）、浦井直幸（中津市教育委員会）、
岩満聡（那珂川町教育委員会）、江上正高（長崎県教育委員会）
製　　図　藤野美音（日田市教育委員会文化課調査補助員）、
伊藤友美子、末國琢也、越知睦和（別府大学文化財学専攻大学院生）
遺 物 写 真　長谷川正美（有限会社雅企画）、
玉川剛司（別府大学非常勤講師）、
手柴智晴、越知睦和（別府大学文化財学専攻大学院生）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

(1) 地理的・歴史的環境

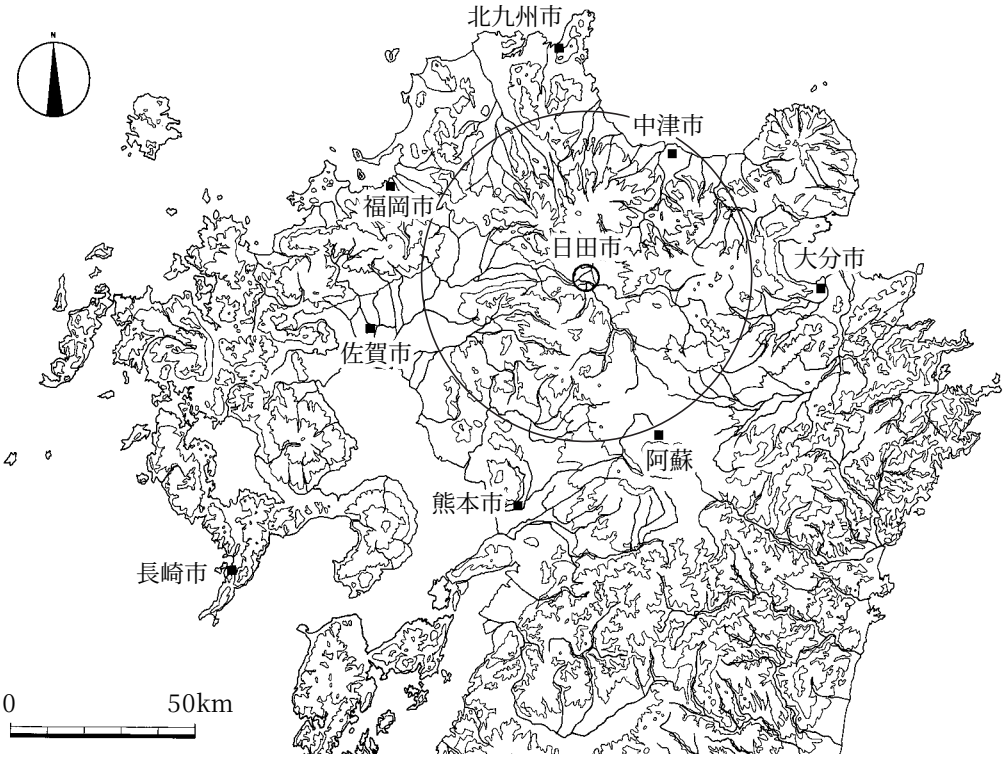
朝日天神山古墳の所在する大分県日田市は、九州島にあっては北部九州のほぼ中心にあたる大分県の西北部に位置し、西は福岡県との境界をなす。平成17年３月22日には、旧日田郡である天瀬町・大山町・上津江村・中津江村・前津江村といった２町３村との市町村合併が成立し、人口約77,000人の新たな日田市が誕生したばかりである。

日田市の地形を概観すると、現在の市街地にあたる標高75～90mの沖積面が盆地底を形成し、現在その中央部分が市街地化している。この周囲には阿蘇４火砕流により形成された市内では原（はる）と呼ばれる山田原、吹上原、長者原などの標高約150m前後の溶岩台地が周辺を巡っている。

さらに、この外側には龍体山（345m）、西の山（308m）、片峰（約500m）、大石峠（約400m）などの標高約200～600mを測る耶馬溪火砕流で形成された溶岩台地が占め、その外輪にあたる市の境界域には一尺八寸山（707m）、月出山（709m）、釈迦岳（844m）、五条殿（834m）、大将陣山（909m）、岳滅鬼山（1,036m）といった標高400～1,000m級の山々が連なり、遠方には彦山（1,199m）系、久住山（1,786m）系、阿蘇外輪山（900～1,000m）が広がりをみせている。

こうした久住山系を源とする玖珠川は天瀬中央部を西流し、阿蘇外輪山を源とする大山川は中津江や大山を北流して、両河川が日田盆地東部で合流すると、これに盆地縁辺の台地の合間を縫うようにして幾つもの小河川が盆地内で合わさり、九州最大河川である筑後川（日田市では三隈川と呼ぶ）となり、筑紫平野を経て有明海へと注いでいる。

このような自然環境は日田盆地を形づくり、その構造は、夏は暑く、冬は寒いという典型的な内陸型の気候を生み出している。



第４図　日田市の位置

古代の日田は、とりわけ弥生時代には遺跡から出土する大陸系磨製石器や土器形式、大型成人用甕棺墓などにみられるように、筑後川を媒体とした筑後地方からの強い影響を受けて弥生文化が流入する。この時代の中心的な集落には吹上遺跡があり、ここでは前期後半から古墳時代にかけての大規模な集落跡の存在が判明している。なかでも、６次調査における銅戈や鉄剣、貝製腕輪、勾玉、管玉といった青銅器・鉄器・装身具などを副葬する中期後半頃に営まれた甕棺墓や木棺墓の存在は、当時日田地域を治めていた盟主の存在を明らかにした。弥生時代の終わりから古墳時代の初めには、吹上遺跡北隣の辻原台地上に複数の環濠集落や居館が営まれるようになり、集落の中心が辻原台地上にある小迫辻原遺跡へと移る。また、古墳時代後期には筑後地方の影響によって、法恩寺山・ガランドヤ・穴観音古墳などの彩色壁画古墳が登場し、筑後川下流域との密接な関係にあった支配層の姿が浮き上がる。なかでも律令下の日田郡鞍編郷に属する法恩寺山古墳は、『豊後国風土記』にみる古代日田を支配した日下部氏が本拠とした場所に位置しており、同古墳はその一族の奥津城に比定されている。この日下部氏については、天平９年（737）の『豊後国正税帳』に大領・少領・主帳といった主要な郡司職を独占したという記録から、古代には日田郡域の支配体制を確立し、日田の地を治める豪族としてその地位を確保していたとされ、このことを証明するかのように、小迫辻原遺跡からは整然と配置された建物群に伴って「大領」と読める墨書土器が発見されている。

中世期になると日下部氏の勢力は衰え、代わって台頭してきた大蔵氏が日田郡司職となり、約530年にもおよび日田の地を掌握することになる。その出自については定説がなく、明らかではない部分もあるが、少なくとも確実に歴史舞台に登場するのは大蔵永季からと言われ、古代末（11世紀終わり）頃とされる。この大蔵氏は盆地北部の花月川左岸の慈眼山丘陵一帯を中心に山城を築き、ここを活動の拠点として花月川流域の開発を推し進め、平安時代終わりには大蔵氏が所有する日田郡の大半にあたる日田荘を金剛心院に寄進する。建久５年（1194）には大蔵永秀が源平合戦の功により、地頭職が安堵され、後家人となり日田氏と称するようになる。このように長期間にわたって日田の地を支配した大蔵氏は、氏寺として慈眼山永興寺や岳林寺を建立し、その力を誇示した。永興寺は前期大蔵氏、岳林寺は後期大蔵氏の象徴ともいわれ、そこには京や奈良の仏師作による仏像などが安置されるなど、中世日田の仏教美術文化を開花させた。こうした大蔵姓日田氏の支配も文安元年（1444）には断絶を迎え、大友姓日田氏が登場するが、16世紀前半には断絶し、その後は大友義鑑により指名された日田郡司職を相伝してきた大蔵氏の中から選ばれた別名八奉行と呼ばれる郡老支配を経て、文禄２年（1593）には豊臣秀吉の太閤蔵入地へとなっていく。

近世江戸時代に幕府直轄の西国筋郡代（代官所）が置かれると、文字通り日田は九州島の政治・経済・文化の中心的な役割を担うようになる。筑前福岡、筑後久留米、豊前小倉・中津、豊後府内、肥後熊本といった旧国の主要な地域と陸路で結ばれ、内陸山間部にあっては交通の要衝地として、またこうした内陸交通網に加え、筑後川を媒体とした通船や筏流しといった河川交通も栄え、年貢米や材木といった物資を西へ運ぶと同時に、西からの文化を強く受け入れてきた。また、この時期に成立した豆田・隈両町では御用商人が掛屋や大名御用達として活躍し金融業を発展させると、こうした商人家からは広瀬淡窓に代表される多くの文人墨客を輩出した。さらに杉の植林は日田杉の名称で一大産地として知られるようになり、その後日田下駄や家具による林業の町へと発展し、豊富な水源は遊船や鵜飼、鮎簗といった伝統文化を生むなど、大分県のなかにあっては独自の地方文化を育んできた。

写真11　吹上遺跡６次調査４号甕棺墓

写真12　小迫辻原遺跡の居館跡

写真13　慈眼山瀬戸口遺跡

写真14　岳林寺

写真15　調査中の永山布政所跡

写真16　豆田の町並み

こうした自然・歴史環境下にある日田盆地の北部に形成された、市内では最も面積の広い発達した通称「山田原」と呼ばれる台地西側の一角を占める、通称「宮原」台地上に朝日天神山古墳は立地している。この「宮原」台地は千田昇氏の地形分類によれば「中位段丘１面」と呼ばれ、阿蘇４火砕流堆積面の下位に比高10～30mの崖をつくって分布する地形面で、市内の大半の台地がこれにあたる。標高120mを測る「宮原」台地は西の「山田原」台地へと地続きとなっているが、南北は急な崖面をなしており、北側台地下には東から西へと二串川が流れている。台地上は古くは畑地として主に桑の栽培が行なわれてきたが、現在では「山田原」台地と同様に日田市の特産物の一つに数えられる夏はスイカ、冬は白菜を作物とする一大農産地として広く利用されている。

宮原台地はその全域が主に弥生時代の遺跡として周知されており、古くは昭和28年に鏡山猛・松尾禎禎作氏が畑地耕作中に発見された大型成人用甕棺墓の調査を行なっている。その後は、市教委による数次の調査が実施され（第５図参照）、１次調査（A区）では弥生時代前期から後期の竪穴住居や土坑などの集落跡や中世期の墳墓や掘立柱建物、２・３次調査（D・E区）では弥生時代から古墳時代の大型成人用甕棺墓や石蓋土壙墓などの墳墓群などが調査されていて、市内を代表する遺跡の１つに数えられている。こうした一連の調査のなかでも、１次調査で発見された12世紀代に比定される４号中世木棺墓から一括出土した青磁碗、合子、湖洲鏡、和鋏、数珠玉、竹籠などの遺物は、現在大分県有形文化財の指定を受けている。

（参考文献）
土居和幸他　「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土壙墓」『おおいた考古』２　大分県考古学会　1989
土居和幸編　「朝日宮ノ原遺跡（Ⅱ）」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』　日田市教育委員会　1989
千田昇　「日田・玖珠地域の地形－とくに台地地形について－」『日田・玖珠地域－自然・社会教育－』　大分大学教育学部　1992
原田良伸他編　『日田市の歴史と文化財』　日田市教育委員会　1996
田中裕介他編　『小迫辻原遺跡Ⅰ　A・B・C・D区編』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告10　大分県教育委員会　1999
若杉竜太編　「朝日宮ノ原遺跡E区」『平成13年度（2001年度）日田市埋蔵文化財年報』　日田市教育委員会　2002

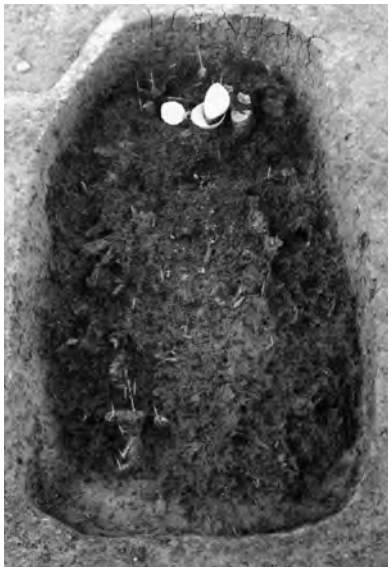
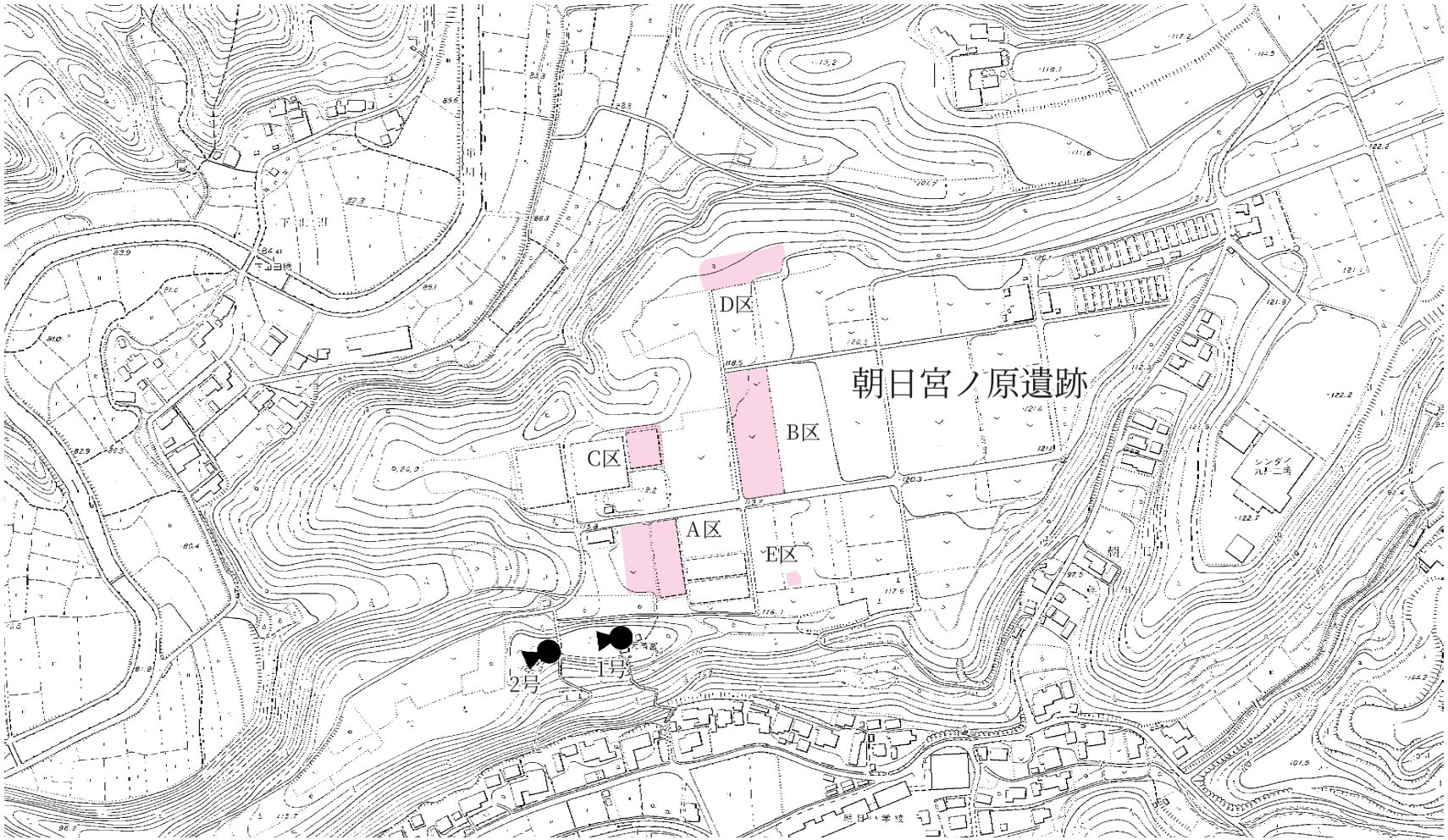


写真17　朝日宮ノ原遺跡A区４号中世墓

写真18　朝日宮ノ原遺跡D区



第５図　朝日天神山古墳群の位置図（1/5,000）

(2) 日田盆地の古墳と横穴墓（第６図）

現在、日田盆地には古墳約70基と横穴墓群11が確認されている。なかでも古墳は、盆地を取り巻く周辺の丘陵上や台地上に築かれており、盆地内の沖積地に造営されている古墳は数える程度しかない。市内では初現期の古墳の存在が確認されるにいたっておらず、古いものでも４世紀の終わり頃に造営される古墳が散見される程度で、これまで判明している古墳の大半は６世紀以後の造墓と推定される。また、横穴墓については盆地の北部に集中してみられ、筑後川の南側では極端に少ない傾向にあり、盆地北部の横穴墓にはその数が100基を越えるものも少なくない。

以下、各古墳や横穴墓を概観する。

１．穴観音古墳 (註1)

“日下部長者”の伝説地として知られる通称「長者原（原）」と呼ばれる標高約120mの台地上に位置する墳丘径約19mの円墳で、古くから装飾壁画古墳としても有名な古墳である。主体部は複式の横穴式石室で、玄室奥壁には同心円文・三角文、前室右側壁には同心円文・人物・船など、前室左側壁には大小二艘の船・同心円文などが赤や緑を使って描かれている。これまでに内部の本格的な調査は行われていないが、数次にわたる周辺の確認調査では、周溝が円形に巡ることが確認されており、６世紀末から７世紀初めに位置付けられる須恵器や土師器などの遺物が出土している。昭和８年に国史跡の指定を受けている。

２．倉園古墳 (註2)

穴観音古墳のすぐ南に存在したとされる古墳である。現在は消滅していて、石室は横穴式石室とみられている。出土遺物など、詳細は不明。

３．ガランドヤ古墳１～３号墳 (註3)

標高約78mの河岸段丘上にある古墳３基で構成され、東から３・１・２号墳の順に近接して並んでいる。６世紀末の築造とされる１号は、横穴式石室の玄室奥壁に赤と緑による円文・同心円文・舟・人物・鳥などの多彩な装飾が施され、須恵器・馬具・鉄鏃・玉類などが出土している。６世紀後半頃の築造と考えられている２号墳は、石室の玄室奥壁に赤を下地に緑を使って同心円文、騎射像、連続山形文などの彩色が施されており、発掘調査では須恵器、珠文鏡、直刀、馬具などの遺物が出土している。３号も横穴式石室であるが、未調査のため詳細は不明。いずれの古墳もマウンドは失われ、石室が露出しており、墳形ははっきりしない。１・２号墳は昭和59・60年に確認調査が行われ、平成５年に国史跡の指定を受けており、その出土品は大分県有形文化財に指定されている。

４．隈山古墳１・２号墳 (註4)

ガランドヤ古墳群のすぐ北側にある標高約100mの独立丘陵上にある古墳で、１号墳は内部主体が割石積みの小型の横穴式石室で、２号墳ははっきりしない。いずれも、詳細は不明。

５．津辻古墳１・２号墳 (註5)

ガランドヤ古墳群の西約0.7kmの標高約73mを測る河岸段丘上にある古墳２基からなる。１号墳は墳丘が流れ落ちて主体部である横穴式石室が露出し、２号墳はすでに消滅している。勾玉・管玉・切子玉・金環・鉄斧・鉄刀・刀子が出土したと伝えられるが、詳細は不明。

６．護願寺古墳１～３号墳 (註6)

筑後川左岸の河岸段丘上に営まれた前方後円墳１基と円墳２基で構成される。前方後円墳である１号墳は、標高140mの尾根頂部に築かれており、全長約30mと推定されている。詳細は不明。１

写真19　穴観音古墳と発掘された周溝

写真20　穴観音古墳の石室内部奥壁

写真21　ガランドヤ１号墳の近景

写真22　ガランドヤ１号墳の奥壁

写真23　ガランドヤ２号墳の近景

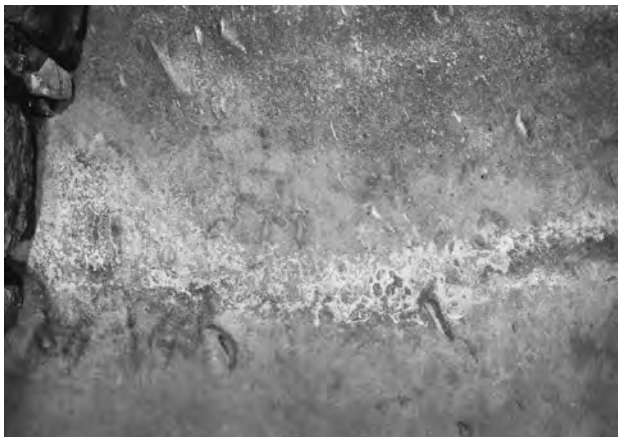


写真24　ガランドヤ２号墳の奥壁

号墳の北側の標高約120mを測る平坦な場所に近接して築かれている２・３号墳は、主体部は横穴式石室とみられているが、いずれも未調査のため詳細は不明。

７．上野姥塚・上野カグネ塚古墳

標高約135mの上野台地西側に位置する古墳とされるが、いずれもすでに消滅しており、主体部は横穴式石室であったという。

８．上野横穴墓群

上野台地の北側斜面に築かれた横穴墓で、数基が残っているが、未調査のため詳細は不明。

９．日隈古墳[註8]

「日隈」と呼ばれる標高約112mの残丘頂部に築かれたとされる古墳である。中世末期に築かれた日隈城築城の際にその大部分は破壊されたという。この古墳の副葬品とされる細線式獣帯鏡と仿製鏡が、江戸時代に頂部の大木の下から発見されている。

10．姫塚古墳[註9]

筑後川を望む標高98mの河岸段丘上に築かれた、古墳時代中期の円墳である。戦後、別府大学の賀川光夫先生が調査を行い、単室の竪穴式石室を複数有する古墳として知られている。また、この古墳からは蛇行剣が発見されたと伝えられ、このほかにも鉄剣２口、鉄鏃、土師器が出土したという。古墳は現在わずかにマウンドを残すのみとなっている。

11．惣田塚古墳[註10]

標高98mの高瀬川河岸段丘上に築かれた古墳である。内部主体は西に開口する複式の横穴式石室で、玄室には一枚の鏡石を用いており、その上には平積みの石を突出させている。石室の構造から６世紀後半以降の築造と考えられているが、発掘調査が行なわれておらず、詳細は不明。

12．千人塚古墳１～３号墳

大山川と玖珠川が合流する標高約140mの丘陵斜面に築かれた３基で構成される古墳であるが、すでに破壊されたものもある。詳細は不明。

13．二ツ塚古墳

標高約112mの丘陵上に残る古墳で、円墳と云われている。未調査のため詳細は不明。

14．東寺横穴墓群[註11]

東寺原と呼ばれる標高約130mの台地南側崖面に数10基の横穴墓が残る。須恵器などが出土したものの、詳細は不明。

15．ダンワラ古墳[註12]

東寺横穴墓群附近にあったとされる古墳。昭和９年のＪＲ久大線建設の際に、金銀錯嵌珠龍文鉄鏡や金錯鉄帯鉤などが出土したと云われる。

16．法恩寺山古墳１～７号墳[註13]

標高約127mの独立丘陵上に展開する７基の円墳で構成される。これまでに３・４号墳が発掘調査されていて、６世紀後半に比定される３号墳は、径約20mの横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、袖石やまぐさ石に赤を使って円文・同心円文・馬と人物などの装飾が施されており、石室内からは須恵器や馬具が出土している。また、６世紀前半に比定される４号墳は径約13mの円墳で、主体部の横穴式石室から変形五獣鏡や馬具、直刀などの遺物が出土している。この古墳群は『豊後国風土記』にみる日下部氏の奥津城とされる。他の古墳は未調査のため詳細は不明であるが、５・７号墳の主体部は横穴式石室であることが判明している。

17．鳥羽塚古墳[註14]

会所宮丘陵の西側中腹にあたる標高約130mに築かれた古墳で、水道タンクの建設中に一部破壊を受けている。古墳出土と言われる須恵器瓩から６世紀後半頃の築造と見られている。『国造本記』や『豊後国志』に伝える日田国造止波足尼（鳥羽宿禰）の墓とも云われている。

写真25　日隈古墳出土の細線式獣帯鏡

写真26　姫塚古墳の近景

写真27　惣田塚古墳の近景

写真28　ダンワラ古墳の近景

写真29　法恩寺山３号墳の石室内部

写真30　法恩寺山４号墳出土の曇珠

写真31　鳥羽塚古墳の遠景

写真32　調査中の後山古墳

18．北向古墳

鳥羽塚古墳の位置する丘陵東側の標高約160mに位置する円墳である。主体部である横穴式石室の入口が開口しており、古墳時代後期の築造であろう。未調査のため、詳細は不明。

19．後山古墳[註15]

会所宮丘陵の北側にあたる標高約120mに築かれた古墳。昭和58年に発掘調査が行なわれ、主体部は横穴式石室とみられ、鉄製菱形辻金具などが出土している。

20．田島古墳[註16]

通称「元宮原」台地端部の標高約130mに築かれた円墳。詳細は不明。

21．薬師堂山古墳[註17]

大原丘陵部の中腹にあたる標高約118mに築かれた径約35mの円墳で、主体部は箱式石棺とみられている。墳丘の裾部からは、５世紀前半代の円筒埴輪が採集されている。本格的な調査が行なわれておらず、詳細は不明であるが、中期の古墳と考えられている。

22．丸尾神社古墳[註18]

薬師堂山古墳の北、標高約120mに位置する古墳である。未調査のため詳細は不明。

23．丸山古墳[註19]

慈眼山丘陵中腹の標高約127mに位置する径約20mの古墳で、主体部とされる竪穴式石室が露出している。前方後円墳とも目されているが、未調査のため詳細は不明。

24．夕田横穴墓群[註20]

通称「佐寺原」台地北西斜面に築かれた横穴墓で、これまでの調査では15支群43基が発掘されている。これらの横穴墓は５世紀後半～８世紀前半までの間造営されていて、とくに５世紀後半の横穴墓は、市内でも初現期に属すものである。

25．夕田古墳[註21]

「佐寺原」台地端部の標高約140mに築かれた古墳１基と墳墓３基で構成される。５世紀中頃の古墳の主体部は箱式石棺２基で、鉄剣などの副葬品が出土している。

26．佐寺横穴墓群[註23]

夕田横穴墓群の東側斜面に位置し、これまでに６世紀後半頃の横穴墓６基が調査されている。これらの横穴墓からは、須恵器や鉄鏃、貝輪、玉類などが出土している。

27．中尾古墳１～３号墳

通称「中尾原」台地端部の標高約140mの丘陵上に築かれた古墳群で、円墳３基からなる。未調査のため詳細は不明である。古墳のすぐ南側には５世紀後半の箱式石棺墓、石蓋土壙墓、土壙墓からなる墳墓群が調査された大迫遺跡が存在する。

28．ガニタ古墳１～３号墳

求来里川中流の右岸、標高約140mの丘陵上に築かれた円墳３基からなる。詳細は不明。

29．亀ノ甲古墳

通称「松野原」台地端部の標高約177mに築かれた円墳であるが、未調査のため詳細は不明。

30．有田塚ケ原古墳１・２号墳[註24]

標高約170mの丘陵上にある古墳で、古くは周辺に数基の古墳が存在したとされるが、確認できているのは２基である。発掘調査が行われた１号墳は直径約10m、高さ1.5mの規模で、主体部は筑後

写真33　薬師堂山古墳の遠景

写真34　丸山古墳の近景

写真35　夕田横穴墓群出土の把手付碗

写真36　尾濵２号墳の空撮

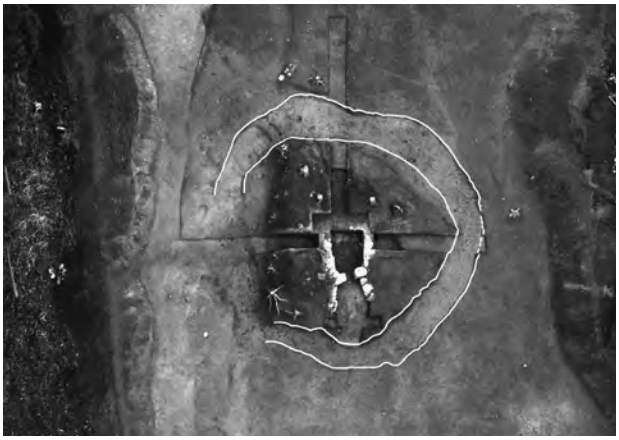


写真37　塔ノ本２号墳の空撮

写真38　平島古墳の近景

地方に特徴的な胴張三味線型の横穴式石室をもつ円墳である。この古墳からは須恵器、鉄鏃、馬具、刀子、玉類などが出土していて、６世紀後半の築造と考えられている。１号より南へ50m離れた場所の２号墳は円墳であるが、未調査のため詳細は不明。

31．尾濵古墳１・２号墳[註25]

有田塚ケ原古墳群の西側の標高約130mを測る丘陵上に築かれた古墳。１号墳の規模は不明であるが、主体部である単室の横穴式石室からは須恵器や玉類が出土しており、５世紀末に築造された円

墳と考えられている。１号墳の北に位置する２号墳は径約25mの円墳で、主体部は２基の箱式石棺からなる。そのうち第１主体部の箱式石棺には人骨３体と素環頭大刀、刀子、縦櫛などが納められていた。５世紀前半の築造とみられている。

32．塔ノ本古墳１～３号墳[註26]

尾漕古墳群の北、標高約120mの丘陵中腹に築かれた３基の古墳で構成される円墳である。発掘調査によると、１号墳は墳丘や石室が削平を受け、径約14mの周溝が残る６世紀中頃に作られたと考えられている。１号墳のすぐ南に近接する２号墳は周溝が直径約12mで、主体部は「只」状の単室の横穴式石室である。赤色顔料が塗布された石室内からは鉄刀、刀子、鉄鏃、耳環、須恵器、土師器などが出土し、６世紀前半頃の築造とみられている。１号の西に隣接する３号墳は横穴式石室の一部が確認されている程度で、規模等の詳細ははっきりしていない。

33．平島古墳

塔ノ本古墳群の東、標高約113mの丘陵裾部に位置する、現状での規模が直径約10m、高さ約４mの円墳である。未調査のため、詳細は不明。

34．平島横穴墓群[註27]

平島古墳から南に向かった小谷の最深部崖面に築かれた横穴墓で、６世紀中頃から７世紀前半にかけての86基が調査された。この一群の横穴墓からは、須恵器、土師器、直刀、鉄鏃、馬具、玉類などの副葬品が多数出土している。

35．クエト古墳１・２号墳

平島横穴墓群の東、標高約130mの丘陵上にある古墳で、いずれも円墳とされる。詳細は不明。

36．城山古墳[註28]

標高約160mの通称「須ノ原」台地の端部に築かれた、前方部を西に向けた墳長約31m、前方部長さ約12m、前方部高さ１m、後円部径約９m、後円部高さ約４mの前方後円墳である。本格的な調査が行なわれていないため詳細は不明であるが、主体部は箱式石棺か竪穴式石室とみられている。

37．有田古墳[註29]

有田川右岸の標高約140mの丘陵上に築造された古墳で、昭和30年代に畑地開墾の際に主体部と目される横穴式石室から蓋付蓋の須恵器や仿製六獣鏡、仿製珠文鏡、玉類などが発見されている。５世紀前半の築造とされるが、古墳はすでに消滅している。

38．大行事・石松・蒜横穴墓群[註30]

有田古墳の位置する丘陵端部周辺の斜面に残る一連の横穴墓。いずれも、これまでに本格的な調査は行なわれていないが、須恵器などの遺物が発見されており、古墳時代後期から８世紀頃まで続くものとされる。

39．寺坂古墳[註31]

標高約170mの通称「葛原」台地上に築かれた円墳である。未調査のため、詳細は不明。

40．葛原古墳

葛原台地の南側端部にある円墳である。未調査のため、詳細は不明。

41．縫ケ迫古墳１・２号墳[註32]

葛原台地から派生する標高約125mの丘陵上に築かれた古墳。詳細は不明。

写真39　羽野横穴墓群の近景

写真40　城山古墳の近景

写真41　平島横穴墓群の近景

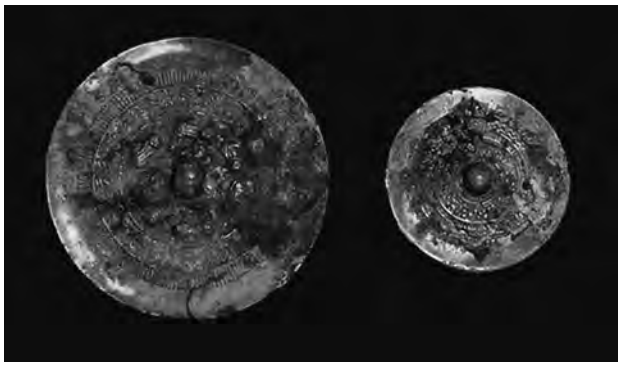


写真42　有田古墳出土の鏡

42．貞清・壁野古墳

山田原台地端部に築かれた古墳。壁野古墳はすでに消滅しており、いずれも詳細は不明。

43．用松中村古墳 (註33)

通称「山田原」台地端部の標高約120mに築かれた古墳。詳細は不明。

44．羽野横穴墓群 (註34)

通称「山田原」台地の東側崖面に築かれた一群。これまでの発掘調査では、５世紀後半から８世紀まで継続する横穴墓が調査されている。

45．月隈横穴墓群 (註35)

「月隈」と呼ばれる標高115mの残丘斜面に築かれた横穴墓の一群。50基以上の横穴墓が残るが、現在開口しているものの大半は戦時中には防空壕として利用されていた。本格的な発掘調査が行なわれていないため、詳細は不明。

46．草場古墳

通称「辻原」台地東側の標高約120mの丘陵に築かれた古墳。円墳とみられるが、詳細は不明。

47．吹上・北友田横穴墓群 (註36)

通称「吹上原」台地の南側斜面に築かれた横穴墓の一群で、市内では最大規模。一群の東側を吹上、西側を北友田と呼び分けており、これまでに数回の調査が実施され、須恵器などの遺物や人骨が発見されている。こうした調査以外にも、過去には多数の遺物が出土している。

写真43　北友田横穴墓群出土の子持高坏

写真44　三郎丸古墳の近景

写真45　小迫古墳の主体部

写真46　朝日天神山２号墳の近景

48．鳥越古墳

標高約135mの朝日ケ丘と呼ばれる台地の南端部にある古墳である。詳細は不明。

49．三郎丸古墳[註37]

花月川右岸の標高約77mの段丘上に築かれた古墳で、墳丘の大半は民家によって削平されている。内部主体は横穴式石室で、６Ｃ後半頃の須恵器が採集されており、古墳時代後期の所産とされる。

50．星隈横穴墓群[註38]

「星隈」と呼ばれる標高101mの残丘斜面に造られた横穴墓の一群で、少なくとも44基が確認されている。本格的な調査は行なわれていないが、これまでに多くの遺物が出土している。

51．小迫古墳[註39]

朝日ケ丘台地北部の標高約120mの丘陵先端に築かれた古墳で、墳形は円墳とされている。主体部には粘土槨を採用し、木棺（割竹形木棺？）を安置しており、珠文鏡や玉類が副葬されていた。４世紀後半から５世紀前半の築造と考えられており、市内では古式の古墳の一つである。

52．小迫横穴墓群[註40]

小迫古墳周辺の丘陵斜面に造られた横穴墓の一群で、発掘調査では61基の横穴墓が調査されている。これらの築造時期は５世紀末から７世紀中頃まで続いており、一部は中世期に墓として再利用されている。須恵器や土師器のほか直刀、馬具、鉄鏃、玉類、耳環などの遺物が出土している。

53．城ノ越古墳

朝日ケ丘台地の北端部、朝日天神山古墳に対峙する標高約100mの丘陵部に築かれた古墳で、すでに消滅しており、詳細は不明。

54．朝日古墳

「宮原」と「辻原」台地間の標高約110mの丘陵中腹にある古墳。円墳と考えられるが、詳細不明。

55．朝日天神山古墳１・２号墳

通称「宮原」台地の端に築かれた前方後円墳２基で構成される。墳長約33mの１号墳は後円部の一部が破壊を受け、主体部である横穴式石室からは須恵器、土師器、変形五獣鏡、馬具、鉄器などが発見されている。墳長約63mの２号墳は周溝が二重に巡り、その中から埴輪に利用されたと考えられる須恵器の大型平底壺が出土している。１号墳は６世紀中頃から後半、２号墳は６世紀前半の築造とされ、２号墳は日田・玖珠地域では最大規模の古墳である。

註１）渋谷忠章・村上久和・小柳和宏編　『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92輯　大分県教育委員会　1995年
若杉竜太編　『穴観音古墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第41集　日田市教育委員会　2002年
土居和幸編　『穴観音古墳Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第55集　日田市教育委員会　2004年
註２）ａ後藤宗俊・渋谷忠章編　『日田市・玖珠町　埋蔵文化財分布図一覧』大分県教育委員会　1973年
註３）小柳和宏編　『ガランドヤ古墳群』日田市教育委員会　1986年
註４）１号墳は、平成16年度に日田市教育委員会が確認調査を実施した。
註５）真野和夫　「古墳時代」『大分の歴史（1)』大分合同新聞社　1976年
註２ａと同じ。
註６）後藤宗俊　「第３章古墳時代」『日田市史』日田市　1991年
註７）註２ａと同じ。
註８）小田富士雄　「古代の日田－日田盆地の考古学－」『九州文化史研究所紀要』第15号　1970年
賀川光夫　『大分県の考古学』吉川弘文館　1971年
註９）賀川光夫　「大分県における３つの竪穴式石槨を有する古墳」『西日本史学』第15号　1953年
土居和幸編　「姫塚古墳」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』日田市教育委員会　1988年
註10）土居和幸　「惣田塚古墳」『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第８集　日田市教育委員会　1994年
註11）註６と同じ
註12）註９と同じ
註13）賀川光夫編　『法恩寺山古墳』日田市教育委員会　1959年
註14）土居和幸　「鳥羽塚古墳について」『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集　日田市教育委員会　1996年
註15）昭和58年度に日田市教育委員会が発掘調査を実施した。
註16）註５と同じ
註17）註６と同じ
註18）註５と同じ
註19）註６と同じ
註20）友岡信彦編　『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（14）大分県教育委員会　1999年
註21）註20と同じ。
註22）ａ小田富士雄他　『岡為造氏収集　考古資料集成』　吉富町教育委員会　1983年
村上久和・友岡信彦・染谷和徳編　『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（６）大分県教育委員会　1997年

註23）註６と同じ

註24）村上久和・友岡信彦・染谷和徳編　『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（９）大分県教育委員会　1998年

註25）註24と同じ。
行時志郎　「尾漕古墳」『平成８・９年度（1996・1997年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998・1999年

註26）若杉竜太編　『平島遺跡Ｄ地点・塔ノ本古墳、祇園原遺跡２次、長迫遺跡Ｃ地点、長迫遺跡Ｄ地点、尾漕遺跡６次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集　日田市教育委員会　2001年

註27）行時志郎　「平島横穴墓群」『平成７年（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註28）土居和幸　「城山古墳」『おおいた考古』２　大分県考古学会　1989年

註29）註９と同じ。

註30）註22ａと同じ

註31）註５と同じ

註32）註５と同じ

註33）註５と同じ

註34）渋谷忠章・吉竹学編　『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会　1985年

註35）註６と同じ

註36）註６・９・22ａと同じ
玉永光洋編　『北友田横穴』大分県教育委員会　1993年

註37）註６と同じ
渡邉隆行編　「三郎丸古墳の保存」『平成12年（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001年

註38）註６と同じ

註39）小柳和宏編　『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（３）大分県教育委員会　1995年

註40）註39と同じ。

1 穴観音古墳
2 倉園古墳
3 ガランドヤ古墳１～３号墳
4 隈山古墳１・２号墳
5 津辻古墳１・２号墳
6 護願寺古墳１～３号墳
7 上野姥塚・上野カグネ塚古墳
8 上野横穴墓群
9 日隈古墳
10 姫塚古墳
11 惣田塚古墳
12 千人塚古墳１～３号墳
13 二ツ塚古墳
14 東寺横穴墓群
15 ダンワラ古墳
16 法恩寺山古墳１～７号墳
17 烏羽塚古墳
18 北向古墳
19 後山古墳
20 田島古墳
21 薬師堂山古墳
22 丸尾神社古墳
23 丸山古墳
24 夕田横穴墓群
25 夕田古墳
26 佐寺横穴墓群
27 中尾古墳１～３号墳
28 ガニタ古墳１～３号墳
29 亀ノ甲古墳
30 有田塚ケ原古墳１・２号墳
31 尾漕古墳１・２号墳
32 塔ノ本古墳１～３号墳
33 平島古墳
34 平島横穴墓群
35 クエト古墳１・２号墳
36 城山古墳
37 有田古墳
38 大行事・石松・蕪横穴墓群
39 寺坂古墳
40 葛原古墳
41 縫ケ迫古墳１・２号墳
42 貞清・壁野古墳
43 用松中村古墳
44 羽野横穴墓群
45 月隈横穴墓群
46 草場古墳
47 吹上・北友田横穴墓群
48 鳥越古墳
49 三郎丸古墳
50 星隈横穴墓群
51 小迫古墳
52 小迫横穴墓群
53 城ノ越古墳
54 朝日古墳
55 朝日天神山古墳１・２号墳

第６図　日田盆地の古墳・横穴墓の分布図（1/25,000）

Ⅲ　調査と整理の方針

朝日天神山古墳群の発掘調査は史跡の指定を目的とした範囲確認調査を５次にわたって行なってきた。こうした調査の経費については、日田市教育委員会が国庫および県費の補助を受けて、日田地区遺跡群発掘調査事業の一環として実施してきた。このうち、平成11年度の３次調査については、別府大学文化財研究所に業務委託して行なった(1)。

今回の調査報告書は１～５次調査をまとめて報告を行なう。詳細はⅡ－（1）にゆずるが、それぞれの年次における調査は、１次調査（２号墳)、２～４次調査（１号墳)、５次調査（１、２号墳）を行なっている。通常ならば年次ごとの報告を行なうべきであるが、そうすると１号墳、２号墳の記述が煩雑になることから、本報告書では１号墳、２号墳の順に記述をする。なお、１次調査の調査時におけるトレンチ番号と本報告でのトレンチ番号は変更になっている。これについては後述する。

また、本古墳群はⅠ－（1）－２でも述べたように、これまでいくつかの呼称で呼ばれてきた。大分県教育委員会発行の周知遺跡分布図(2)には“天満”古墳群として登録されていたことから１～４次調査においては、この名称で概要報告を行ってきた。そのような中、地元住民や日田市文化財調査委員から、古墳群の所在地の字名“天神山”を名称とすることが望ましいとの声が上がってきた。そこで、市教委内部で検討し、現在の町名である朝日町を字名の上に冠して、“朝日天神山”古墳群と名称変更を行うこととした。変更後は従来の“天満”古墳群と併記して一部年報などで、“朝日天神山（天満）”古墳群としていたが、本報告を以って正式に“朝日天神山”古墳群と名称変更する。

(1) 調査の方法

１次調査では２号墳の墳丘測量を行った。測量を行う前に国土座標の基準点（X＝37633.809m・Y＝－7600.034m・H＝121.917m、X＝37652.411m・Y＝－7574.302m・H＝121.238m）を墳頂部に、周辺に補助杭を設定し、墳頂部の２点を主軸として、東西約100m、南北約60mの範囲を縮尺１/100、50cmコンタによる墳丘測量図ならびに周辺地形図の作成を行った。また、２次調査では１次調査時に１号墳上に設定した基準点（X＝37661.050m・Y＝－7520.779m・H＝119.196m）を使用した。周囲にはトラバース測量によって副基準点を設定し、墳丘を中心に周辺地形を含む東西約100m、南北約75mの範囲を対象として行った。測量では平板を使用し、縮尺１/100、25cmコンタを基本として実施した。さらに５次調査ではトータルステーションと電子平板を利用して、25cmコンタを基本とし、１号墳と古墳群周辺より広範囲に、詳細な測量図の作成を行なった。

作成した墳丘測量図・周辺地形図をもとに墳丘主軸を決定し、これに基づきトレンチの設定、掘り下げを行った。その結果、検出された周溝についてはその方向軸、出土した遺物についてはその広がりを確認するために必要に応じてトレンチの拡張を行なった。また、検出した遺構については、サブトレンチによる掘り下げ、もしくは全掘を行ない、その深さや埋没状況の確認を行なった。

５次調査では、これまでと同様のトレンチ調査に加え、トレンチ調査では確認し難い前方部とその隅角、後円部の形状を確認する目的で２号墳周囲と１号墳と２号墳の間に広範囲な調査区を設定した。１号墳と２号墳の間を北からＡ区・Ｄ区、２号墳の北側をＢ区、西側をＣ区とした。また、Ａ・Ｃ・Ｄ区については４次調査までのトレンチと重複する部分もあったことから、埋め戻してい

た真砂土を再度掘り下げ、土層・周溝の再確認を行なった。

また、トレンチの実測図は１/20を基本とし、遺物の出土状況など詳細部分については一部１/10で実測を行なった。写真撮影については、35mmのリバーサル・モノクロならびに４×５・６×６・６×７の中判カメラでリバーサル・モノクロ撮影を行なった。

(2) 整理の方法

出土遺物ならびに図面整理作業は１次調査分を市教委、２～５次調査分を別府大学で行なった。遺物実測については、１次調査出土遺物ならびに伝１号墳出土遺物の一部を市教委担当者が行なったほか、２～５次調査分に関しては大学で行い、さらに１次調査分を大学に業務委託して行なった。製図については、大部分を市教委、一部を大学で行なった。写真撮影は、１次調査出土遺物ならびに伝１号墳出土遺物は市教委で業務委託し、その他の遺物については大学でおこなった。

以下、報告書作成段階で問題となった点について、述べる。

１．トレンチ番号の変更とその対応関係について

本古墳群は５次にわたる調査の中で、１号墳に15本、２号墳に17本のトレンチと２号墳に３箇所、１号墳と２号墳の間に１箇所の広範囲な調査区を設定した。

まず、１次調査では２号墳に12本のトレンチを設定した。この時点でのトレンチ番号は０～８トレンチ、ならびA、B、中央トレンチと呼称していた。その後、５次調査で再び２号墳の調査を行う際に、１次調査のトレンチ番号を旧１トレンチから時計回りに11トレンチまで付し、５次調査のトレンチを12～16トレンチと設定した。しかし、報告書作成段階で平成９年度の年報報告の中で、８トレンチが記載されていなかったことがわかった。通常なら１次調査のトレンチであるので、12トレンチとするべきであるが、５次調査の整理作業がほぼ完了していることもあって、遺物注記番号や実測図との整合性が取れず、混乱を招く恐れがあることから17トレンチとして報告することになった。

１号墳のトレンチ番号については、３～５次調査で15本のトレンチを設定しており、これは本報告でもそのまま記述する。また前述したとおり、５次調査で設定した４箇所の広範囲な調査区は１～４次調査で設定したトレンチと重複する部分もあることから、A～D区とした。

２．遺物の注記について

調査で出土した遺物は、１次調査については市教委で行い、別府大学協力のもとに行なった２～５次調査においては、別府大学で行なった。そのため、事前に注記方法の統一を行なっておらず、注記方法が異なっている。

注記は天満のローマ字表記から3文字を使用しているが、市教委の注記は、

ＴＮＭ［**Ｔ**ＥＮ**Ｍ**ＡＮ］（古墳番号）－（トレンチ番号、出土位置・層など）

としているのに対して、別府大学の注記については

① ＴＭＮ［**Ｔ**ＥＮ**Ｍ**Ａ**Ｎ**］（年次）－（トレンチ番号、出土位置・層など）

② ＴＭＮ［**Ｔ**ＥＮ**Ｍ**Ａ**Ｎ**］（年次）－（古墳番号）－（トレンチ番号、出土位置・層など）

としている。①については３、４次調査、②については５次調査分である。３次調査は１号墳の

最初の調査であったことから、注記をＴＮＭ－１と表記し、また4次調査は同じく１号墳の２次調査であることからＴＮＭ－2と表記している。５次調査については、１号墳・２号墳ともに調査を行なっていることから、年次の後に古墳番号をつけている。

また、市教委が行なった１次調査分については、調査時のトレンチ番号を注記しているため、本報告との整合性が取れていない。

上記の内容については次ページの対照表に記しておく。

(3) １次調査の実測図について

平成９年度に行なった１次調査では２号墳に12本のトレンチを設定した。各トレンチについては、平面図・土層図を実測しているが、報告書作成中に平面図と土層断面図の不整合や土層注記の漏れなどが多数あることがわかった。こうした状況を内部で検討した結果、現段階で可能な部分のみ図上復元を行い、それが不可能なものについては原図をそのまま使用することになった。

よって本報告中の２号墳１次調査の１～11トレンチ、17トレンチについては、土層注記（土層番号、土色・土質等の記述）を省き、表土下層に見られる黒色土・周溝埋土・基盤と解釈可能な土層をトーンで表現するようにし、基本的には別府大学調査分の記述とは統一を行なっていない。

註１）土居和幸・下村智編　『吹上遺跡・天満古墳－範囲確認調査に伴う概要報告－』日田市教育委員会　2002年
註２）『大分県遺跡地図』大分県教育委員会　1993年

写真47　調査前空中写真

第１表　新旧トレンチ対照表ならびに遺物の注記方法

	１　号　墳		２　号　墳			備　　考
	トレンチ番号	注記方法	新トレンチ番号	旧トレンチ番号	注記方法	
１次調査	—	—	１トレンチ	１トレンチ	TNM2−1トレ	５次２号墳Ｃ区と重複
	—	—	２トレンチ	Ａトレンチ	TNM2−Ａトレ	５次２号墳Ｃ区と重複
	—	—	３トレンチ	２トレンチ	TNM2−2トレ	５次２号墳Ｃ区と重複
	—	—	４トレンチ	Ｂトレンチ	TNM2−Ｂトレ	
	—	—	５トレンチ	３トレンチ	TNM2−3トレ	
	—	—	６トレンチ	４トレンチ	TNM2−4トレ	
	—	—	７トレンチ	５トレンチ	TNM2−5トレ	３次１号墳１トレンチ、５次Ａ区と重複
	—	—	８トレンチ	中央トレンチ	TNM2−中央トレ	３次１号墳１トレンチ、５次Ａ区と重複
	—	—	９トレンチ	６トレンチ	TNM2−6トレ	
	—	—	11トレンチ	７トレンチ	TNM2−7トレ	
	—	—	12トレンチ	０トレンチ	TNM2−0トレ	
	—	—	17トレンチ	８トレンチ	TNM2−8トレ	
３次調査	１トレンチ	TMN-1第1トレンチ	—	—	—	
	２トレンチ	TMN-1第2トレンチ	—	—	—	５次２号墳Ｄ区と重複
	３トレンチ	TMN-1第3トレンチ	—	—	—	
	４トレンチ	TMN-1第4トレンチ	—	—	—	
４次調査	５トレンチ	TMN−2 5トレ	—	—	—	
	６トレンチ	TMN−2 6トレ	—	—	—	
	７トレンチ	TMN−2 7トレ	—	—	—	
	８トレンチ	TMN−2 8トレ	—	—		
５次調査	９トレンチ	TMN−5 1号9Tr	12トレンチ	—	TMN-5 2号12Tr	
	10トレンチ	TMN−5 1号10Tr	13トレンチ	—	TMN-5 2号13Tr	
	11トレンチ	TMN−5 1号11Tr	14トレンチ	—	TMN-5 2号14Tr	
	12トレンチ	TMN−5 1号12Tr	15トレンチ	—	TMN-5 2号15Tr	
	13トレンチ	TMN−5 1号13Tr	16トレンチ	—	TMN-5 2号16Tr	
	14トレンチ	TMN−5 1号14Tr	Ａ区	—	TMN-5 2号Ａ区	１次２号墳７・８トレンチと重複
	15トレンチ	TMN−5 1号15Tr	Ｂ区	—	TMN-5 2号Ｂ区	
			Ｃ区	—	TMN-5 2号Ｃ区	１次２号墳１～３トレンチと重複
			Ｄ区	—	TMN-5 2号Ｄ区	３次１号墳２トレンチと重複

Ⅳ　調査の内容

(1) 調査の概要

Ⅰ－(2) でも述べたとおり、本古墳群は５次にわたって行った確認調査の結果、１～４次調査当時の所見と最終の５次調査の所見とは大きく異なる結果となった。しかし、本節では調査概要を述べるにあたり、調査当時の所見に従い、記述する。

１次調査

調査では、２号墳の周溝の有無、墳丘規模の確認を行う目的で、墳丘周囲に12本のトレンチを設定し、掘り下げを行った。その結果、墳丘の西・北・東側で２重の周溝が確認された。南側では急斜面の崖になっていることから長いトレンチは設定できなかったが、３本のトレンチで内側周溝が確認された。これらトレンチで確認された周溝から全体の形状を復元するにあたり、前方後円形に巡らずに、多角形（剣菱形）になることが想定された。

遺物は各トレンチから出土したが、特に後円部側とクビレ部の内側周溝から多数出土した。古墳に伴う遺物はほとんどが須恵器で大型平底壺や器台が中心に出土した。さらに埴輪が１点も出土していないことから、形状・法量が類似する大型平底壺がその代用品として考えられた。また、器台は北側クビレ部から、そのほとんどが出土した。こうした出土状況から本来墳丘に樹立されていたものが周溝へ流れ込んだと考えられた。

また同じく北側クビレ部の内側周溝内からは、加工された凝灰岩製品が出土した。その加工部位や残存状況から石製表飾品（石人）ではないか、との指摘もあり、岩戸山古墳との関係も考えられた。さらに多角形の周溝、須恵器大型平底壺の存在は埼玉県・埼玉古墳群の中の山古墳との類似性が指摘され、古墳時代後期の汎列島的な情勢を考える上でも重要な知見が得られた。　　（若杉）

２次調査

1999（平成11）年2月26日から3月10日にかけて１号墳の墳丘測量調査を、市教育委員会と別府大学との合同で行った。測量には、東西約100m、南北約75mの範囲を対象として行われた。測量には市教育委員会が設定した国土座標による基準点を使用し、縮尺１/100で25cmコンタを基本とした平板測量が実施された。

測量の結果、復元全長33m、後円部径22m、高さ２m、前方部長11m、前方部幅14m、クビレ部幅は10m程度になるものと考えられた。墳形形態は後円部が大きく短い前方部がつき、後円部はやや方形気味の楕円形を呈する。前方部との境には微妙なクビレ部を有するが、南側は直線的で不明瞭になっている。前方部頂は比較的平坦である。墳丘北側には幅４m前後の平坦面が広がり、さらに北側は1.5m程の段差になっている。現況では墳丘の段築や周溝・周堤、及び埴輪や葺石などの外表施設は確認できなかった。現在、社がたつ後円部の石室側壁体を構成していたと考えられる扁平な石材は、境内東端部の石垣に再利用されている。また、測量調査によって、墳丘北側にテラス状の段の存在が意識され、墳丘施設の一部なのか削平によるものなのかという疑問点が得られたこと等が報告されている。

３次調査

２次調査における墳丘測量によって確認された、１号墳の規模の確定や墳丘の構造を明らかにす

るため、墳丘の周囲に計４本のトレンチ（１～４トレンチ）を設定し、３次調査が行われた。調査は、別府大学への依託で行われた。結果は次の通りである。

１トレンチで、積石状の遺構が検出され、横穴式石室の第２主体部の存在が想定された。２・４トレンチで溝が検出され、周溝であると考えられた。３トレンチで検出した溝については、古墳に伴わない溝状遺構であると報告されている。調査で出土した築造時期を窺える遺物については、須恵器は破片３点（すべて破片）で、埴輪・葺石等は確認できなかった。全形を窺い知る資料は出土しなかったが一応６世紀後半に比定できる。

４次調査

３次調査にひきつづき１号墳を対象として、墳丘周囲に4本のトレンチ（５～８トレンチ）を設定して４次調査が行われた。調査は、２・３次調査同様、市教育委員会と別府大学との合同で行われた。４次調査での成果は次の通りである。

６トレンチで墳丘のたちあがりが確認でき、３次調査１トレンチの成果を加味し、墳長が２次調査での指摘と同様33mと確認された。また、７・８トレンチで墳丘盛土下より掘込みが確認された。この掘り込みに関して、３次調査２トレンチで古墳の周溝と判断したものと対応すると考えられ、前方部石室構築に伴うものか、もしくは墳丘築造時の割付線・設計線的性格の可能性が考えられた。３次調査４トレンチで検出した溝は、古墳の周溝であると考えられたが、５・７トレンチの溝と連続するもので、古墳には周溝が巡らないことが指摘された。８トレンチでは須恵器がある程度まとまって出土し、時期が概ねTK10～TK43が主体であることなどが報告されている。

５次調査の前年度末に、日田市教育委員会から協力を得て２号墳を対象に、別府大学で進めている電子平板による変化点測量にて座標による墳丘の測量を試みた。

５次調査

１～４次調査に引き続き、日田市教育委員会と別府大学との合同で、１・２号墳を対象として行われた。１号墳では第９～15、３Ｂトレンチの計７本のトレンチ、２号墳では、第12～16トレンチ及びＡ～Ｄ区の計５箇所のトレンチ及び４箇所の調査区を設けた。調査の結果、１号墳について以下のことが明らかになった。

４次調査まで１号墳には周溝が存在しないと考えられてきたが、今までの調査で希薄であった北側を重点的に調査した結果、後円部側の15トレンチ～14トレンチＣまでの間で周溝が確認された。また、14トレンチＣで周溝が止まる。周溝の形状は鍵形で、前方部の方がやや広がる。しかし、今回検出された周溝の大部分が、後世による改変を受けている。また、特に墳丘北側では、中世の製地層が確認されており、大規模な改変がなされた可能性が高い。４次調査で検出した溝状遺構（設計ライン）は、９～11トレンチでも検出した。

２号墳では、従来の見解で、周溝形態が剣菱状に巡るものと考えられていたが、本調査で鍵形になることが判明した。それに伴い、従来前方部だと考えられていた箇所が後円部になることがわかった。また、南側崖面の周溝に関しては、10・14・15トレンチで確認したように、崖面でも周溝が造られていることが判明した。

調査終了後引き続き、図面と記録の電子化を図るため、電子平板による変化点測量を１号墳及び１・２号墳周辺を対象に行った。（玉川）

(2) １号墳の調査

１トレンチ（第７・18図、図版２・３・51）

前方部の端部、盛土の状況、周溝・周堤の確認を行うため、主軸にそって南北９m、幅２mのトレンチを設定した。このトレンチは２号墳調査時のトレンチ延長上にあたり、１号墳、２号墳間の連続した土層堆積や遺構の繋がりを検証するため、２号墳調査時のトレンチと接続させた。

調査の結果、前方部の墳丘盛土と礫群、墳端近くのピット群、前方部の上部からは石室と見られる石組みが検出された。墳丘の盛土調査については、石室が確認されたので石室保護のため石室上面で掘り下げを止め、墳丘端部を中心にサブトレンチを入れて確認を行った。

遺物は表土から須恵器片が１点、表土下の包含層から須恵器片が２点出土している。現位置を留める遺物の出土は確認できなかった。

土層堆積状況は、１黒褐色表土層、２黄褐色土、３褐色土、４黄褐色土、５暗黄褐色土、６暗褐色土となり、これらの層群は全体的に締りがなく、墳丘盛土の流出した再堆積層と考えられる。７層から21層及び24層から33層までは墳丘の盛土と見られる。22・23層は柱穴の堆積土である。墳丘盛土は黄褐色土・明黄褐色土と黒色に近い暗黒褐色土との互層が基本的な層序になっている。特にピットから東側は整地した基盤層の上にこれらの層群が水平に堆積し、列石からさらに東側は５～10cmの層群が版築状に積み上げられている。これらの層群は締りがあり、ピットから東側が墳丘盛土と判断される。また、石室近くの土層堆積を見ると、天井石までは水平に盛られ、天井石から上は層理が斜めに走るブロック状の堆積になっている。天井石を境に墳丘盛土の方法に変化が見られる。

ここで、注目しておきたいのはピット群と礫群である。ピット群はほぼ南北に３基並んで検出された。径0.4～0.5m、深さ0.2mで中央のピットのみ深さ0.5mを測る。埋土上部は灰味を帯びた褐色土や黄褐色土で、下部は５層と同じ堆積土になっている。検出面は５層下部である。このピット群を境に西側と東側では土層堆積状況が異なっている。ピット群から東側が墳丘盛土と推定され、これらのピット群は墳丘築成と何らかの関わり合いがあったものと考えられる。したがって、前方部の墳端はピット群付近としておきたい。ただ、ピット群からの出土遺物は無い。ピット群すぐ西側には高さ0.1m程の基盤層の高まりが見られ、南北方向にトレンチ幅いっぱいに確認できた。このことも墳端を考える一つの材料になるであろう。ピット群から西側は幅2.5mにわたって浅い溝状を呈し、その部分に５層が堆積する。これが周溝となるか地山整形となるかは今後の検討が必要である。

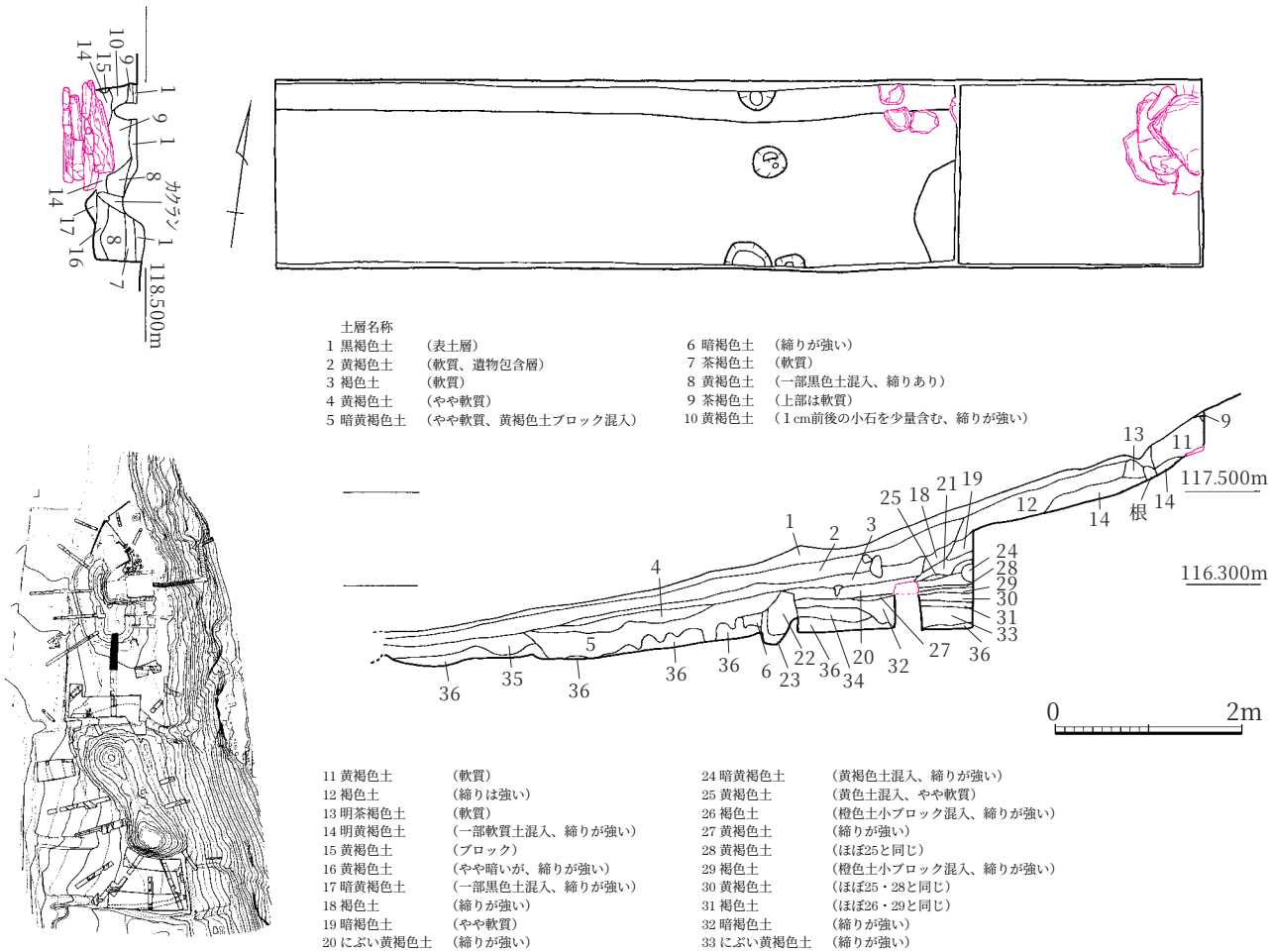
墳丘盛土中に検出された礫群は、安山岩の亜角礫で４石が半円形に並んでいる。長さ30cm前後、厚さ10cm強である。この礫群を境に墳丘盛土が変化し、礫群より東側は土層堆積が密になる。墳丘築成とこの礫群は関係が深いと考えられ、外護列石としての役割を持つものではなかろうか。ただし、トレンチ内では南北に並んでいない。

また、前方部の墳頂に近い部分から安山岩の石組が検出された。頂部には幅１m程度、厚さ20cmの板石を載せ、その下には長さ60～80cm、厚さ10cmの板石を配する構造をもつ。内部に空洞が確認されることから横穴式石室の玄室天井部と考えられる。今回初めて１号墳に第２主体部が存在していることが明らかになった。天井石と考えられる頂部の石はボーリングステッキで確認したところ長さ１m50cmを超えるものであった。天井石下の石積みは３段まで検出し、それ以下は掘り下げなかった。調査前から、前方部頂に長さ２mを超える安山岩の大石が存在していたが、この石は新

たに発見された第２主体部の天井石のひとつであると思われる。石積みは10cm前後の平石であることから割石小口積みの壁体を持つ横穴式石室の可能性がある。

第17図１～３は１トレンチから出土した遺物である。

１は２層から出土した須恵器大型平底壺の頸部である。幅9.2cm、残存高4.7cmの小破片ではあるが、大型平底壺の特徴をよく示している。外面肩部は平行タタキの後、横方向のカキ目が施される。頸部との境は沈線状を呈するが、工具による調整痕が残ったものであろう。頸部には波状文の一部とみられる平行線が一部残るが横ナデによって下端部が消されている。内面には丸石状の当具痕、粘土接合痕、上部にはヨコナデが観察される。胎土は精良で僅かに赤色粒子を含む。外面は淡灰褐色を呈し、内面はやや茶味が強い。厚さ２cmの厚手の作りで、器高の割には肩が大きく張るタイプになるものとみられる。焼成はあまく、硬く焼き締まっていない。２は同じく２層出土の須恵器大甕の肩部とみられる破片である。外面には細やかな平行タタキを密に施す。内面には大きくて細い同心円の当て具痕が明瞭に残る。色調は外面が淡黄灰色、内面は淡い青灰色を呈する。胎土には１～２mm大の砂粒を若干含むが精良である。焼成は比較的良好で焼き締まっている。部分的な破片で全体像は分からないが、大甕の存在を示すものであろう。３は表土層からの出土である。小型の



土層名称

1 黒褐色土　（表土層）
2 黄褐色土　（軟質、遺物包含層）
3 褐色土　（軟質）
4 黄褐色土　（やや軟質）
5 暗黄褐色土　（やや軟質、黄褐色土ブロック混入）
6 暗褐色土　（締りが強い）
7 茶褐色土　（軟質）
8 黄褐色土　（一部黒色土混入、締りあり）
9 茶褐色土　（上部は軟質）
10 黄褐色土　（１cm前後の小石を少量含む、締りが強い）
11 黄褐色土　（軟質）
12 褐色土　（締りは強い）
13 明茶褐色土　（軟質）
14 明黄褐色土　（一部軟質土混入、締りが強い）
15 黄褐色土　（ブロック）
16 黄褐色土　（やや暗いが、締りが強い）
17 暗黄褐色土　（一部黒色土混入、締りが強い）
18 褐色土　（締りが強い）
19 暗褐色土　（やや軟質）
20 にぶい黄褐色土　（締りが強い）
21 暗黄褐色土　（橙色土ブロック混入、締りが強い）
22 灰褐色土　（締りが強い、黄褐色土混入）
23 灰黄褐色土　（締りが強い、黄褐色土混入）
24 暗黄褐色土　（黄褐色土混入、締りが強い）
25 黄褐色土　（黄色土混入、やや軟質）
26 褐色土　（橙色土小ブロック混入、締りが強い）
27 黄褐色土　（締りが強い）
28 黄褐色土　（ほぼ25と同じ）
29 褐色土　（橙色土小ブロック混入、締りが強い）
30 黄褐色土　（ほぼ25・28と同じ）
31 褐色土　（ほぼ26・29と同じ）
32 暗褐色土　（締りが強い）
33 にぶい黄褐色土　（締りが強い）
34 明黄褐色土　（締りが強い）
35 黄褐色土　（締りが強い）
36 明黄褐色土　（基盤層、締りが強い）

第７図　１号墳１トレンチ実測図（1/80）

壺の肩部と見られるが、部分的な破片なので全体像を知り得ない。外面は横方向の強い平行タタキで、下半は特に強くタタキが加えられている。内面には規則正しい小さな窪みが観察されるが、タタキ調整の際、当具のかわりに指でおさえたものであろう。その後、縦方向に指で強くナデ上げている。薄手の作りで外面には自然釉が掛かり光沢がある。色調は、外面が褐味を帯びた灰黒色、内面は灰黒色である。胎土は極めて精良で、硬く焼き締まっている。須恵器の壺とみられるが陶質土器様の質感がある。（下東・安東・下村）

２トレンチ（第８・18図、図版４・５）

前方部隅角部分に幅２m、長さ15mのトレンチを南西方向に設定し調査を行った。その結果、墳端裾近くに大きな掘り込みが確認され、さらに、土坑、石組遺構、南西端には溝状遺構が検出された。また、大きな掘り込みの状況を確認するため北東方向に長さ1.5m、幅１mのトレンチを拡張した。

土層堆積状況は、１黒褐色表土層、３淡黄褐色土がトレンチ全面にみられ、それ以下の層は各遺構の堆積土となる。

トレンチ東北端で確認された大きな掘り込みは、５層まで掘り下げた時点で検出され45層の基盤層に掘り込まれている。北西方向から南東方向にかけて、前方部の隅角に添うようにカーブを描きながら延びている。拡張したトレンチで墳丘側の状況を確認しようと試みたが。溝状の立ち上がりは確認できず、底面で墳丘側に基盤層の立ち上がりが僅かに確認されたのみである。したがって、溝状になるのかどうかは判断できなかった。確認面から底面までの深さは１mで、墳丘側のトレンチ端部では地表から深さ２mを測る。

この掘り込みの土層堆積状況は、８・10層に厚い黒褐色土が堆積し、それ以下は黒褐色系の土層とロームブロックを含む黄褐色系の土層が互層になってややレンズ状に堆積している。底面には33層の淡黒褐色土が広がっている。土層の観察では、黒褐色系の土層と黄褐色系の土層が互層になっていることから、全体的に締りがないが墳丘盛土と考えて差し支えなかろう。概報では、この掘り込みを周溝として報告したが、墳丘下に位置することと、第５次調査の調査結果から判断すれば周溝にはなりえないので、本報告で訂正しておいたい。したがってこの掘り込みは古墳築造に伴なう何らかの遺構と考えることができる。１トレンチの調査では墳丘下に明黄褐色の基盤土が確認されたので、この掘り込みは１トレンチまでは伸びていないことになる。掘り込みからの遺物の出土は極端に少なかったが、掘り込み斜面中位の33層から基盤層に貼り付くような状態で須恵器短頸壺の胴部が出土している。

墳丘端部には土坑状の落ち込みが検出された。墳丘土に掘り込まれているので古墳時代より新しい時期のものであろう。長さ1.25m、深さ0.5mを測り、幅は確認していない。落ち込みの中位から上位には、10cm大から20cm前後の丸みを持つ礫が詰まっている。礫はトレンチ南側でもまとまって出土している。出土遺物はなく詳しい時期や性格は明確にはできなかった。

また、土坑状落ち込みの西側には石組遺構が検出された。遺構のつながりを確認するためトレンチの一部を拡張した。石組は基盤層上面に築かれており、一部は既に露出していた。長さ30cm、厚さ10cm、前後の安山岩角礫を略東西方向に延長２m、小口面を南に揃えて並べている。東側には幅20cm、長さ50cmの礫をやや直交するように立てる。この礫の深さは0.4m以上あったが、下まで掘

り下げていない。石組は３層の上にも築かれた部分があり、中央部は２段積みになっている。これら石組の性格は明らかにできなかったが、層位的にも浅い位置に作られており、古墳に関係ある施設かどうか判断できなかった。直交する礫は大きくて深く埋置されているが南側には石組は伸びないため小石室とも考え難い。石組に伴なう出土遺物は全くみられなかった。

トレンチ南西端では溝状遺構が検出されている。この部分は２号墳の外側の周溝を確認するため掘り下げたが、推定した２号墳の周溝は確認できなかった。検出された溝は２号墳の周溝とは別な溝と判断した。幅1.6m、深さ0.45mを測り、ほぼ南北に伸びている。土層堆積を見ると39層から42層までの層群の形成後に、36～38層が堆積している。堆積土は粘質を持った褐色土や暗褐色土となっている。溝の埋没後に再度掘り窪められ、さらに埋没した形跡が確認できる。トレンチ内では幅１m分しか掘り下げていないので、明確な時期を決定する出土遺物は見られなかった。

この溝は南北に伸びて１号墳の主軸線に直交している。土層からやや新しい時期の溝と考えていたが、５次調査の成果から１号墳の周溝であることが判明した。

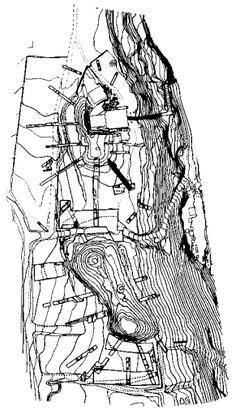
第18図４は須恵器短頸壺の胴部から底部にかけての破片である。扁球形の胴部に丸平底を有する。胴部上位の外面には横方向に１cmあたり６条のカキ目調整、胴部下半から底部にかけては手持ちヘラ削りを施す。内面は回転ナデで下部には明瞭な稜線が認められる。残存高7.2cm、復元胴径13.4cm、復元底径6.7cmを測る。外面は淡青灰色を呈し、内面は茶褐色となる。焼成はあまく、胎土には１mm前後の赤色粒子を多く含む。外面の黒色粒子は内面にみられる赤色粒子が熱変してできたものであろう。作りは丁寧だが焼成が充分でなく調整が磨滅している。　（下東・安東・下村）

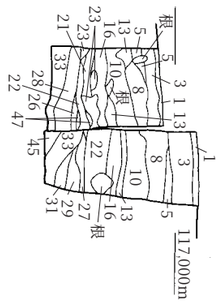
３トレンチA・B（第８図、図版６・７）

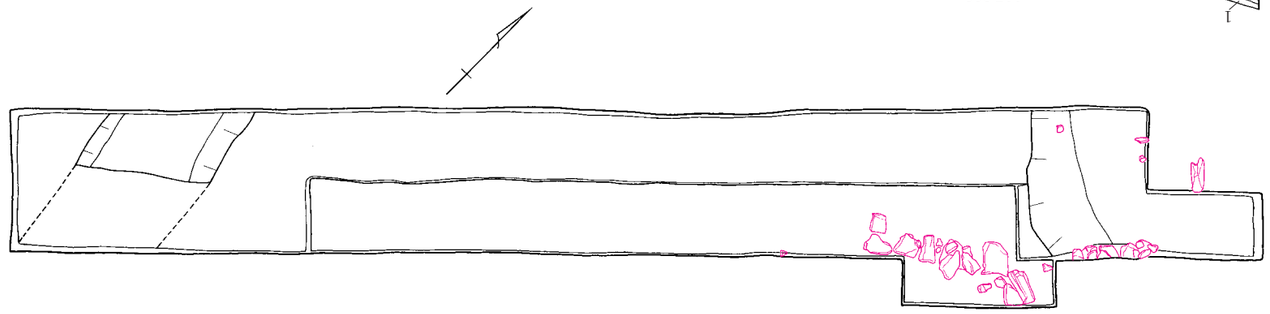
後円部の墳端と周溝、そして墳丘測量時に問題となった墳丘北側のテラス状の段の構造を確認するため、後円部中位から北側に南北14m、幅２mのトレンチを設定した。実際に掘り下げたのは、墳丘側から8.5mまでは幅１m、それより北側は幅1.3mである。遺構のつながりを確定するため、さらに北側に長さ3.5m、幅0.5mの拡張トレンチを設けた。これが３トレンチAである。

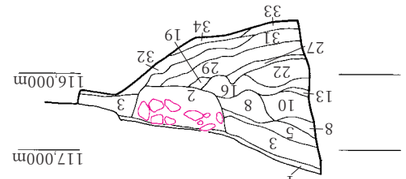
調査の結果、後円部の墳丘盛土とテラス状の段、ピット群、段落ちの北側には幅広い溝状遺構が検出された。墳丘北側の段状を呈する部分の土層堆積状況は、１黒褐色土、２暗黄褐色土、３暗黄褐色土、４灰褐色土であり、これらの層群は全体的に締まりがなく、１層は表土層、２～４層は墳丘盛土の流出した再堆積層と考えられる。これ以下は、５黒褐色土、６灰褐色土、７灰褐色土、８にぶい黄褐色土、９黒褐色土、10黄褐色土、11灰褐色土となり、黒褐色系と黄褐色系の土層が交互に積み重なっている。これらの層群は硬く締まっており版築状に盛り上げられた墳丘盛土と判断される。墳丘盛土はトレンチの墳丘側から1.6mまで確認できるが、もともとの墳端部はもう少し北側に広がっていた可能性がある。墳丘側から2.6mのところに地山を削り出した基盤層の盛上がりが見られ、ピットが存在することからこの付近が本来の墳端部ではなかろうか。その他の遺構としては、ピットが数基検出されている。径0.3m～0.5m、深さ0.2mを測り、トレンチ幅が狭かったこともあって、並びや時期、古墳との関係などははっきりしない。

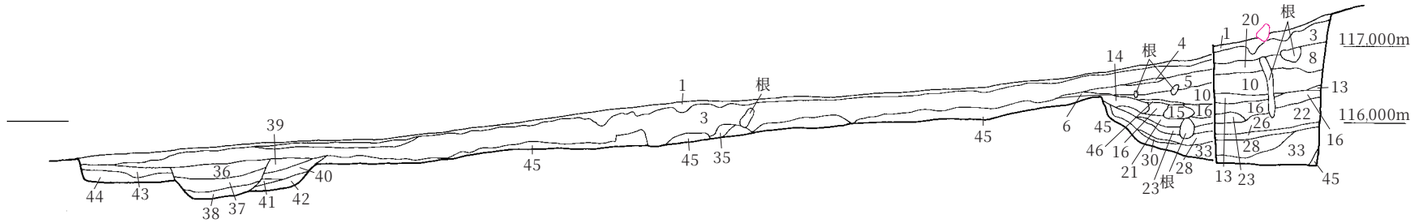
墳丘北側のテラス状の段は厚い堆積土に覆われているが、削り出しの基盤層の標高は墳丘側が116.13mで、北側に緩やかな傾斜をなし、約１mの段落ち部を形成している。この段は古墳築造当初から形成されていたものと考えられ、北端部は後世の削平によるものなのかどうか今回の調査で





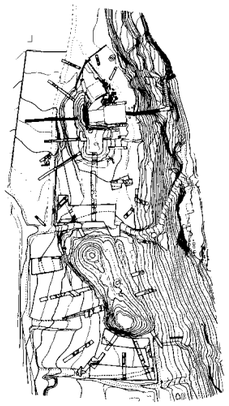


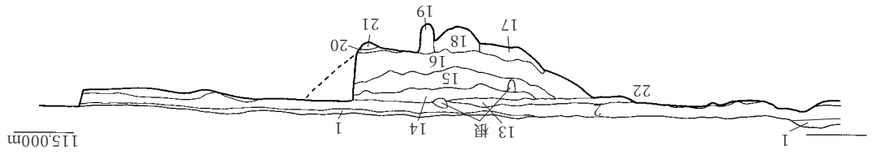


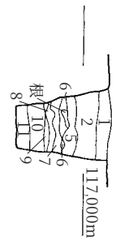


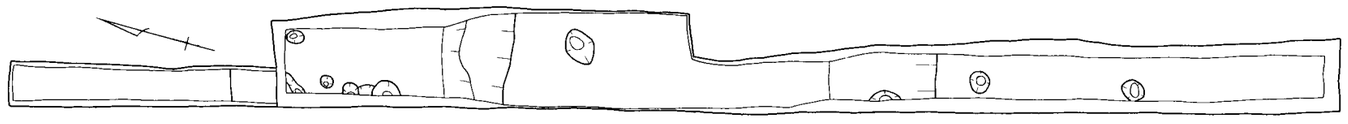
土層名称
1 黒褐色土 （表土）
2 淡褐色土 （軟質）
3 淡黄褐色土 （軟質）
4 黒褐色土
5 淡褐色土
6 暗褐色土 （黒褐色土ブロック少量含む）
7 淡黒褐色土
8 黒褐色土
9 淡黒褐色土
10 黒褐色土 （黄褐色土ブロック少量含む）
11 黒褐色土
12 淡褐色土 （黒褐色土ブロック少量含む）
13 黒褐色土
14 黄褐色土 （ロームブロック）
15 黄褐色土 （ロームブロック）
16 淡褐色土
17 黄褐色土 （ロームブロック）
18 淡褐色土 （ロームブロック）
19 淡褐色土
20 黄褐色土 （ロームブロック）
21 淡黒褐色土
22 黄褐色土
23 暗黄褐色土 （締りが強い）
24 黄褐色土 （ロームブロック）
25 黄褐色土
26 暗褐色土
27 暗褐色土
28 黄褐色土 （締りが強い）
29 黒褐色土 （黄褐色土ブロック少量含む）
30 暗褐色土
31 黄褐色土 （締りが強い）
32 暗黄褐色土
33 淡黄褐色土
34 暗黄褐色土
35 暗黄褐色土
36 褐色土 （粘質）
37 暗褐色土 （粘質）
38 褐色土 （粘質）
39 暗黄褐色土 （やや暗褐色土混じる、粘質）
40 暗褐色土 （粘質）
41 黒褐色土 （粘質）
42 黒褐色土 （粘質）
43 暗黄褐色土 （粘質）
44 暗黄褐色土 （粘質、基盤層上部）
45 黄褐色土 （粘質、基盤層）
46 黒褐色土 （軟質）
47 暗赤褐色土 （黒褐色ブロック少量含む）

2トレンチ

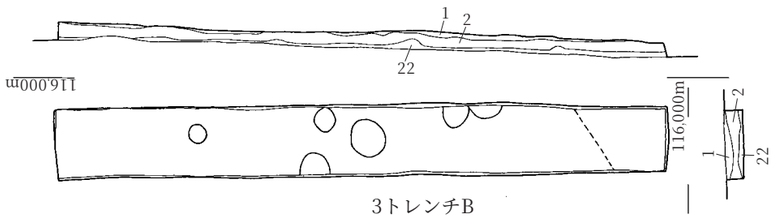




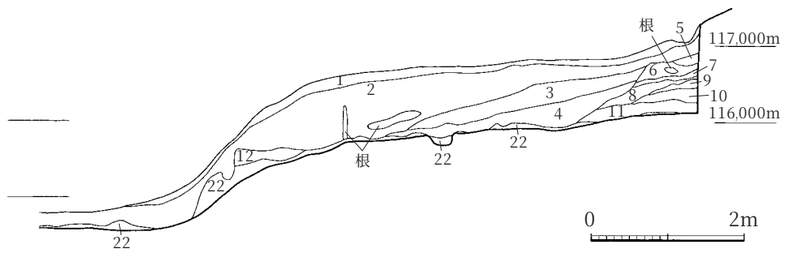




3トレンチA



3トレンチB



土層名称
1 黒褐色土 （表土）
2 暗黄褐色土 （軟質、遺物包含層）
3 暗黄褐色土 （締りなく、粘質）
4 灰褐色土 （やや締りなく、粘質）
5 黒褐色土 （やや締りがない）
6 灰褐色土 （やや締りがあり、粘質）
7 灰褐色土 （締りがあり、粘質）
8 にぶい黄褐色土 （締りが強く、粘質）
9 黒褐色土 （やや締りがあり、粘質）
10 黄褐色土 （締りが強く、粘質）
11 灰褐色土 （締りが強く、粘質）
12 にぶい黄褐色土 （やや締りがあり、粘質）
13 暗褐色土 （やや締りがある）
14 黒褐色土 （やや締りがあり、粘質）
15 褐色土 （締りが強く、粘質）
16 暗褐色土 （締りが強く、粘質）
17 褐色土 （やや締りがあり、粘質、灰褐色ブロック混入）
18 灰褐色土 （やや締りがあり、粘質、灰褐色ブロック混入）
19 灰褐色土 （締りが強く、粘質）
20 灰褐色土 （18と同じ）
21 灰褐色土 （19と同じ）
22 明黄褐色土 （粘質、基盤層）

第８図　１号墳２・３トレンチ実測図（1/80）

は判断がつかなかった。出土遺物は直接古墳に伴うものはみられなかったが、２層から弥生中期の甕、後期の甕、古式土師器の甕などが検出されている。

トレンチ北側で検出された溝状遺構は、幅3.5m、底幅約２m、深さ0.7m～0.8mを測る。溝の北側の肩は拡張トレンチで確認した。逆台形状を呈し、底面には凹凸が多く見られる。土層は13層が水平堆積で、14～17層はレンズ状に堆積している。18～21層は底面の凹凸に堆積した土層である。各層は比較的厚い単位で埋没していることから短期間に埋まったものであろうか。堆積土からは、弥生中期から後期にかけて丹塗りの高坏、甕等が出土しているが、明確に時期を決定する遺物は出土していない。方位は略東西方向をとっている。墳丘からはかなり離れているので当初古墳との位置関係から周溝とは考えていなかったが、５次調査の成果から１号墳の周溝であることが判明した。

（下東・安東・下村）

１号墳側にも２号墳と同様に周溝が２重に巡っているかどうかを確認するために、３トレンチＡの延長上に３トレンチＢを設定した。トレンチは長さ7.95m、幅0.9mである。

調査の結果、３トレンチで確認された周溝の北側端部が検出された。また、ピットが６個検出されたが、今回は掘り下げずに確認のみにとどめた。周辺には弥生時代から古墳時代、中世にわたる遺構群が広がっているので、それらに伴うピット群であろう。トレンチ北側では表土を剥ぐとすぐ明るい黄褐色の基盤層が検出されるが、周溝状の落ち込みは検出されなかった。さらに北側にトレンチを伸ばして確認してもこれまで確認されている周溝からは離れすぎるので、結果的に２重の周溝は巡らないことが判明した。（玉川）

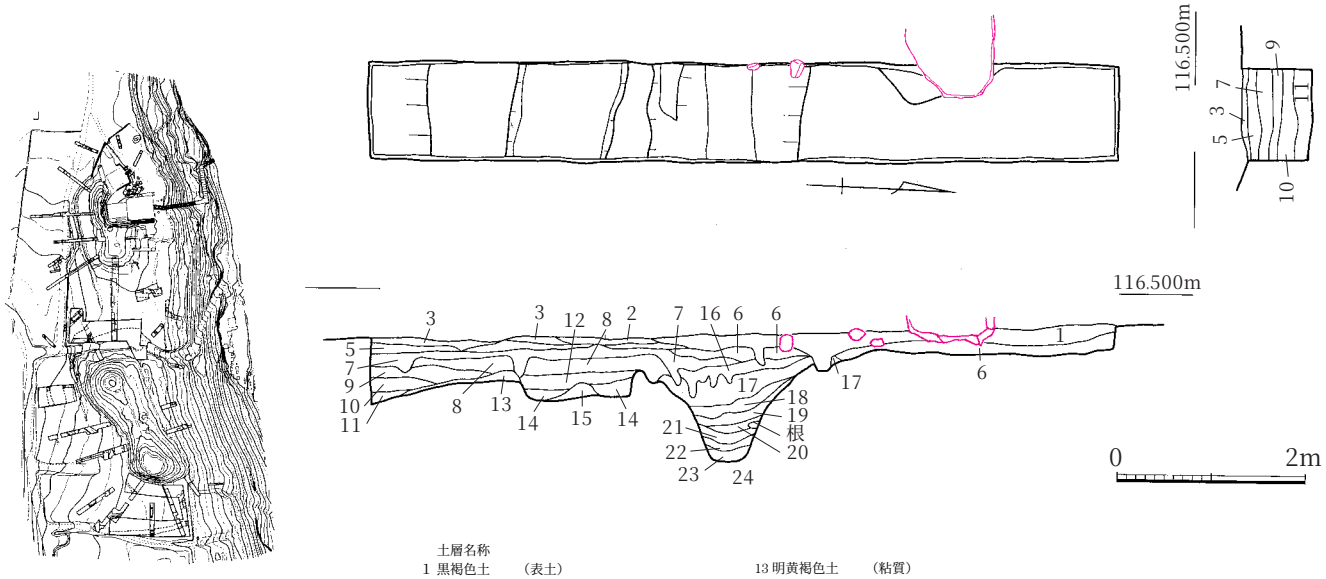
４トレンチ（第９図、図版８）

天満社拝殿すぐ西側に長さ８m、幅１mのトレンチを南北方向に設定した。この部分は社殿建築によって墳丘が完全に削平されていたので、後円部の周溝が残っているかどうかを確認するため掘り下げを行なった。調査の結果、断面形が逆台形の溝状遺構と、この溝に併行して南側にもう１条の逆台形を呈する浅い溝状遺構が検出された。

トレンチ上部の土層堆積状況をみると、１黒褐色表土層、２暗灰褐色土、３黒褐色土、４黒褐色腐植土となり、各層には炭を多く含みこれらは天満社建設以後の堆積層と考えられる。５層以下は中世から古墳時代にかけての堆積層であろう。トレンチ北側は0.2m掘り下げると砂礫を多く含む硬い黄褐色の基盤層に達し、かなり削平を受けていることが理解できる。

トレンチ中央部で検出された溝状遺構は砂質の基盤層に掘り込まれ、確認面での上端幅は1.6m、底幅40cm、深さ１mを測る。土層断面観察での上端幅は1.8mになる。やや深いＶ字状の逆台形を呈し、ほぼ東西方向に直線的に伸びる。

２トレンチで検出された掘り込みとは規模や形状が異なるが、底面のレベルはほぼ一致している。埋土は灰味を帯びた黄褐色系の砂質土が北側から流れ込んだ状態でレンズ状に堆積している。17層、19層、20層はやや粘性を持った堆積土になっている。溝内からは時期を決定する出土遺物は見られなかった。この溝は位置的には後円部に属するが後円部を正円に復元した場合、復元線上からはややずれている。また、直線的に伸びるという疑問点も残っていたが、５次調査の成果からこの溝は周溝にならないことが判明した。すぐ南側に隣接する溝は、幅1.2m、深さ0.25mを測り、トレンチ中央部の溝とほぼ併行して東西方向に伸びている。逆台形の浅い溝で、12～15層が埋土になってい



土層名称

1	黒褐色土 （表土）	13	明黄褐色土 （粘質）
2	暗灰褐色土	14	暗灰黄褐色土 （粘質）
3	黒褐色土 （表土）	15	淡黄橙褐色土
4	黒褐色土 （腐植土）	16	灰黄褐色土
5	暗灰褐色土 （粘質）	17	暗灰黄褐色土 （粘質）
6	暗灰褐色土 （粘質）	18	淡黄褐色土
7	淡黄褐色土	19	淡黄橙褐色土
8	暗灰褐色土 （粘質）	20	明黄褐色土 （粘質）
9	灰黄褐色土	21	暗黄橙褐色土 （砂粒含む）
10	暗灰黄褐色土	22	灰黄褐色土 （砂粒含む）
11	淡黄褐色土	23	明黄褐色土 （砂粒含む）
12	灰黄褐色土	24	明黄褐色土 （粘質、基盤層）

第９図　１号墳４トレンチ実測図（1/80）

る。底面はほぼ平坦で15層の淡黄橙褐色土がやや盛り上がった状態で堆積している。土層の質はトレンチ南端部の底部糸切りの土師質土器を出す層と類似しており、明確な出土遺物はないが中世に属するものではなかろうか。

トレンチ南端部では基盤層が南側に深くなって、その部分に堆積した10層、11層からは底部糸切りの土師質土器坏・皿がまとまって出土している。トレンチ内では明らかな遺構としては捉えられなかったが、土坑状の遺構が存在する可能性がある。土師質土器の坏は後で報告しているが形態的特徴から15世紀半ばから16世紀前半代に属するものであろう。他のトレンチからも中世の土師質土器坏・皿が多数出土しており、中世の祭祀に関係するものなのか、あるいは近くに所在する中世の朝日宮ノ原遺跡などと何らかの関係を有するものであろう。　（下東・安東・下村）

５トレンチ（第10図、図版９）

４トレンチ同様墳丘盛土が天満社建築により削平されているため、墳丘端部や周溝確認を目的に後円部南側の天満社拝殿東に長さ8.0m、幅1.0mのトレンチを南北方向に設定した。

調査の結果、墳丘端部は削平とごく新しい整地層によって確認することはできなかったが、トレンチ中央よりやや北側では溝状遺構の切り合い、中央からやや南側では柱穴や焼土、南端部では落ち込み遺構などが検出された。遺物はトレンチ北半部上層で弥生中期の丹塗高坏・甕、後期の高坏・タタキのある甕、古式土師器の甕、南端部の13層中位では大量の土師質土器が集中して出土している。

土層堆積状況は、１灰黒色表土層、２は淡褐色土で黄灰色粘土ブロックを含む基盤土の整地層、３灰褐色土、４灰黒色土、５は淡褐色土で２層と同様黄灰色粘土ブロックを含む基盤土の整地層、

６灰黒色土、７暗褐色土、８褐色土、９・10は灰褐色土で現表土を含む整地前の旧表土、11淡黄褐色土となる。11層以下は遺構及び包含層に伴う堆積土である。

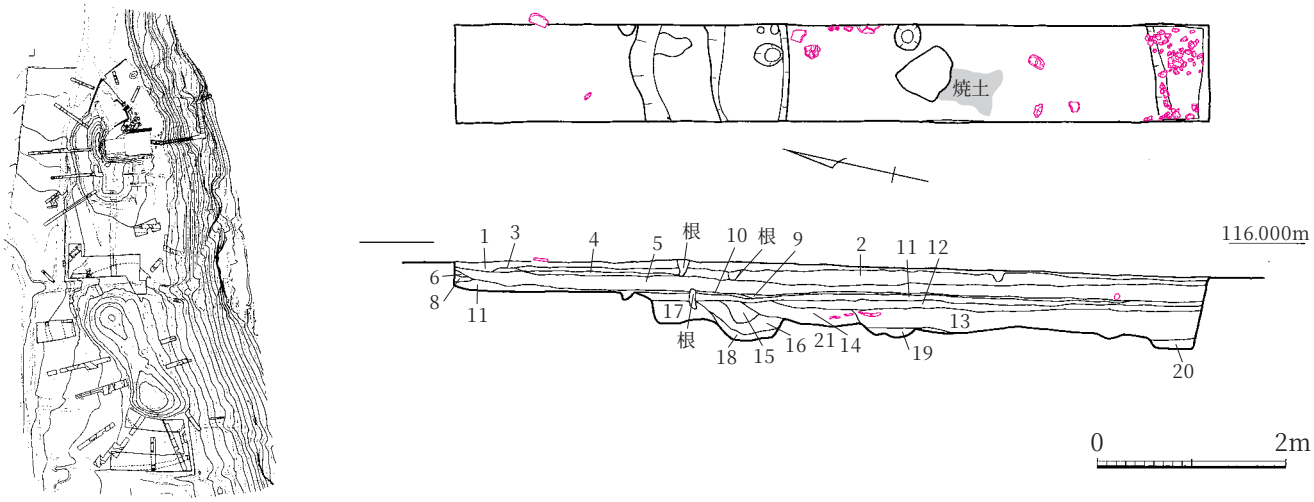
中央部やや北側で検出された溝状遺構は17層の淡灰褐色土を切って、21層の明黄褐色基盤土に掘り込まれている。検出面上端の幅は約0.9m、底幅約0.6m前後、深さ0.43mを測り、箱形に近い逆台形状を呈する。溝状遺構の堆積土は３層に分層でき、レンズ状に堆積している。15は黒褐色土、16は暗褐色土、18は褐色土となり各層ともに砂質である。15・16層からは弥生後期の甕片が出土している。出土遺物からこの溝は弥生後期後半に属すると考えられ、４トレンチで検出した溝及び後で報告する７トレンチで検出した溝と位置及び形態、主軸方向が同様であるため、一連の溝と判断しても差し支えなかろう。古墳築造以前の弥生後期の集落に関連する溝であろう。この溝の北側にはさらに切られた遺構が検出され、17の淡灰褐色土が堆積する。断面形は逆台形を呈するとみられ、前記した溝状遺構と同一の東西方向をとることから、これも溝状遺構になる可能性がある。

トレンチ中央部の14層は暗茶褐色土で、上部には中世の土師質土器を含むが、下層からは弥生後期から終末にかけての甕がまとまって出土している。胴部の破片が中心で、破片そのものは割と大きいがあまり接合しない。14層は溝状遺構を切った土層で、弥生土器が水平にまとまって出土したことから、当初竪穴住居址の一部ではないかと考えて掘り下げを進めたが、14層は整地層とみられる土層堆積状況を示していた。調査面積が部分的であるため確定はできないが、竪穴住居址の覆土ではなく、整地層とみた方がよさそうである。トレンチ全体の基盤層はほぼ水平に削りならされており、弥生土器を含む14層は不整合にその上にのっている。近くの弥生土器を含む層が整地され、弥生土器はその中に混入したものであろう。

11～13層からは中世の土師質土器が多く出土している。特に13層の茶褐色土からは遺物の出土量が多く、流れ込みと考えられる弥生土器とともに土師質土器が多量に出土している。また、13層には焼土を含み、トレンチ中央部南側では長さ0.6m、幅0.4mの範囲に焼土の塊りが検出された。さらに南端部近くにも焼土の塊りがある。土師質土器は13層の中でも南側にいくに従って出土量が多くなり、トレンチ南端部では特に集中して出土している。出土状況は完形に近い個体が重なったり平面的に分布したりするような状態ではなく、中には完形に復元できる個体もあるが、多くは破片の集積である。したがって、これらの土師質土器は土坑などに廃棄された状態のままではなく、廃棄後整地された土層に包含されていたものとみることができる。器種は坏が主体で、数は少ないが皿も含まれる。トレンチは境内の端部までは入れていないので、さらに南側の様子は明らかでないが、旧地形が下がっていることから、南側はさらに出土量が多くなるものと考えられる。

トレンチ南端の特に土師質土器が集中して出土している下部には20層の褐色土が堆積している落ち込みが確認された。土師質土器の出土位置からすると、土師質土器廃棄の土坑とは考えられない。トレンチ幅が狭いのでどの様な形状になるのか判断できないが、基盤層が南側に下がっているのでそれに伴う落ち込みであろうか。落ち込みの堆積土からは、時期を決定する遺物は確認できなかった。

４トレンチ、５トレンチは社殿を挟んで西側と東側に設定したが、現社殿ぎりぎりまで中世段階で整地されていることが分かり、特に南側は土師質土器を多く含む整地層となっている。この整地層が現社殿の下にどの様に伸びるのか今後の検討課題になる。現社殿は昭和３年に横穴式石室を壊して建築されたと伝えられており、社殿のどこまで石室があったかが問題となろう。墳丘については、社殿のある後円部南端側が部分的にせよ中世に削平を受け整地されていたことが窺える。



土層名称			
1	灰黒色層	（表土）	
2	淡褐色土	（黄灰色砂質粘性ブロック含む、基盤層の整地土）	
3	灰褐色土		
4	灰黒色層		
5	淡褐色土	（黄灰色砂質粘性ブロック含む、基盤層の整地土）	
6	灰黒色土		
7	暗褐色土		
8	褐色土	（砂質）	
9	灰褐色土	（整地前の旧表土）	
10	灰褐色土	（整地前の旧表土）	
11	淡黄褐色土	（砂質でサラサラ）	
12	褐色土		
13	茶褐色土	（中世15世紀代の土師坏多量に含む、一部赤みを帯びた土を含む）	
14	暗茶褐色土	（13よりやや黒い、弥生後期土器を含む、上部には土師坏を含む）	
15	黒褐色土	（溝の埋土、弥生後期土器含む、砂質）	
16	暗褐色土	（溝の埋土、弥生後期土器含む、砂質）	
17	淡灰褐色土	（砂質土、溝の埋土か、別な遺構）	
18	褐色土	（砂質、16よりやや明るい、溝の埋土の最下層）	
19	暗褐色土		
20	褐色土	（砂質土）	
21	明黄褐色土	（砂礫・白色粒子を含む、基盤層）	

第10図　１号墳５トレンチ実測図（1/80）

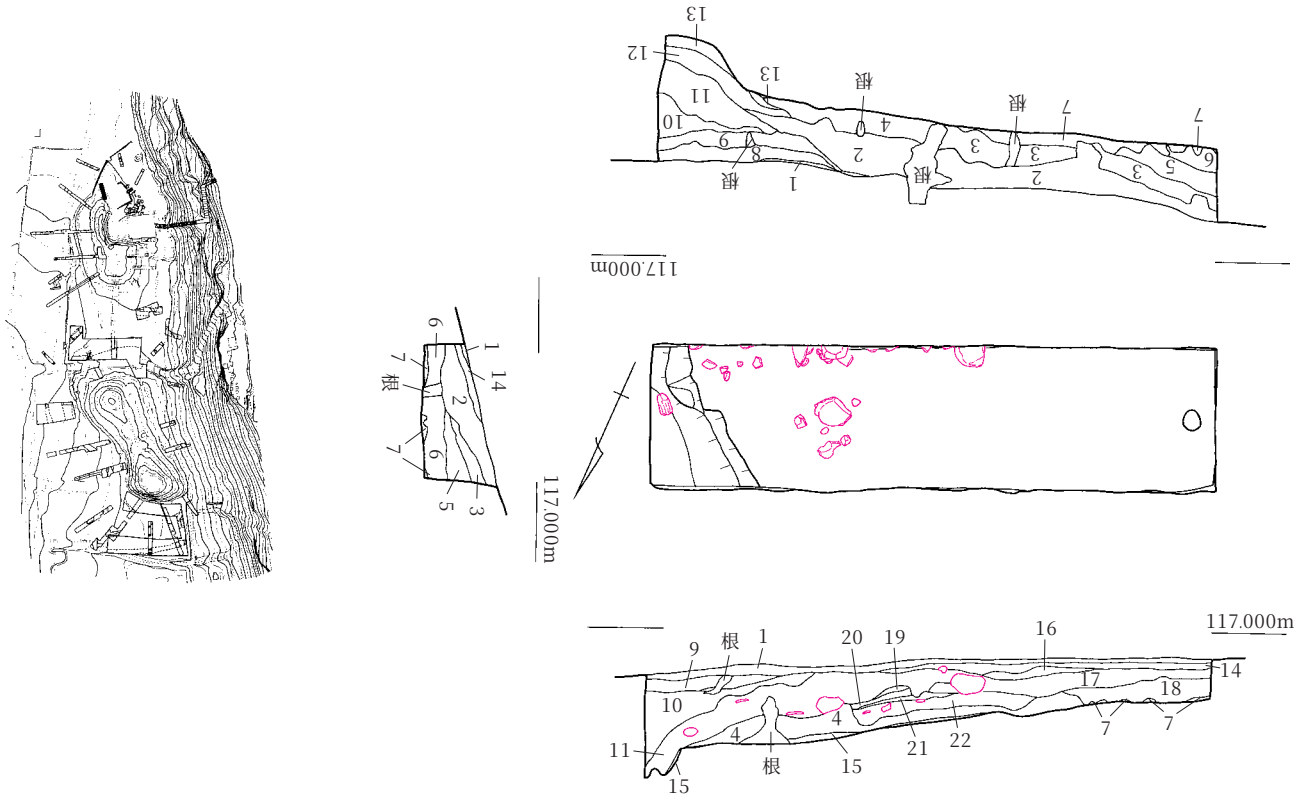
なお、２トレンチで確認された墳丘盛土下部の掘り込みは、後円部側に設定した３～５トレンチでは確認することができず、後円部側には掘り込みがないということが確認できた。（下森・下村）

６トレンチ（第11・18図、図版10）

墳丘のほぼ主軸線上の後円端部付近に、墳丘盛土の端部、テラス状遺構の状況、周溝などの確認のため長さ6.0m、幅1.5mのトレンチを設定した。

調査の結果、トレンチ東端部で大きな落ち込みと、西端部で墳丘盛土とみられる土層堆積、柱穴などを検出した。遺物は墳丘盛土を中心とする西端部では弥生中期後半の甕、丹塗りの甕、後期の甕などが出土し、東端部の落ち込み部分からは弥生中期及び後期の甕、瓦質土器、土師質土器の坏などが出土している。2層を中心とする上層では弥生中期の甕、丹塗りを施した甕、鋤先状口縁を持つ高坏などが含まれていた。トレンチ中央部の攪乱土層や整地層からは古墳に伴う須恵器の大型平底壺、中世の土師質土器坏・皿、青磁などが出土した。須恵器大型平底壺は混入した状況で検出され、原位置を保っていない。

土層の堆積状況は、北壁と南壁ではやや異なっている。北壁では、１黒灰色表土、２灰黒色土と堆積し、２層は８～11層の堆積以前における旧表土である。３層は暗茶褐色土で、墳丘盛土の再堆積土と考えられる。４層は褐色土となり、砂質で拳大の礫を含む。３層と同じく墳丘盛土の再堆積土とみられるが、３層との分層はちょうど大きな木の根によって明確にできなかった。５層と６層は黒色を呈する粘質土で、固く締まっている。６層には基盤土のロームブロックを含む。５・６層は土層の堆積状況や土質などから、墳丘盛土であると判断された。墳端部は盛土の流失を考慮するともう少し東側に伸びるとみられるが、概ねこの付近に想定してもよさそうである。



土層名称

1	黒灰色土 （表土）	12	淡褐色土 （砂質、江戸か）
2	灰黒色土 （粘性なし）	13	黒灰色土 （旧表土か）
3	暗茶褐色土 （粘性なし）	14	明褐色土 （地山を削平した土を整地土として利用）
4	褐色土 （砂質、拳大の礫含む）	15	黄灰褐色土 （やや砂質、礫まじりの地山）
5	黒色土 （粘質、締りあり、墳丘土）	16	暗茶褐色土 （砂質）
6	黒色土 （粘質、締りあり、ロームブロック少量含む、墳丘土）	17	灰黒色土 （やや粘質、やや締りあり）
7	明褐色土 （粘質、基盤層）	18	暗黒褐色土 （粘質あり、締りあり、地山ブロック含む）
8	暗茶褐色土 （１と対応）	19	暗褐色土 （やや粘質、２より締りがあり17より締りはない）
9	淡褐色土 （２cm前後の地山ブロック、小礫混入、やや粘質）	20	褐色土 （砂質）
10	淡灰褐色土 （２cm前後の地山ブロック、小礫混入、やや粘質、９より暗）	21	黄褐色土 （砂質、主に15を削平して整地）
11	暗灰褐色土 （５cm以下の地山ブロック混入、砂質）	22	暗褐色土 （砂質、近世含む）

第11図　１号墳６トレンチ実測図（1/80）

８～11層はやや粘質を持った褐色系の土層で、２cm前後の基盤土のブロックを含み、小礫が混入している。東側落ち込みを埋めた整地層であろう。境内を東側に広げた際に整地されたと考えられ、時期的には新しいものと推察される。12層は砂質の淡褐色土で、土師質土器の坏などを含んでいることから、中世の層とみられる。13層は黒灰色を呈する落ち込み部の堆積土である。

南壁の土層堆積状況は、トレンチが堆積の境目となって部分的に異なっている。すぐ横に薬師堂が建っていることもあり、整地層が多くみられる。14層は明褐色土で基盤土を削平して均した整地層である。15層は北壁で部分的にみられる砂質で礫まじりの基盤層である。17層はやや粘質で締まった灰黒色土で、北壁の２層に相当するものである。トレンチ中央部の大きな礫で止まり、上位に11層がのる。18層は暗黒褐色を呈する締まった粘質の土層である。基盤土のブロックを含み、北壁の６層に相当するものとみられる。19層は粘質の暗褐色土、20層は砂質の褐色土、21は地山と同じ砂質の黄褐色土、22は同じく砂質の暗褐色土となっている。これらは全て整地層で22層には近世の遺物を含んでいた。したがって、６トレンチは近世、近現代に何度も整地が行われたことを示している。

東端部の落ち込みは、削り出しによる基盤の平坦面から45 °の角度で落ち込み、平坦面からの深さは約0.6mである。下端は確認することができたが、東側は石垣という地形的制約からトレンチの拡張が行えず、東部の形状は明らかにすることができなかった。この落ち込みには中世の土師質土器を包含する12層がのっていることから、少なくとも中世以後の削平はないものと判断される。３トレンチで検出された基盤層削り出しの段落ちと同一形状であり、墳丘に合わせて巡っていることを考慮すると基段状のテラスになると考えられる。墳丘盛土から落ち込みまでの幅は現状で約４mを測り、他のトレンチで検出されたテラス面とほぼ大差がないことからも、このことが裏付けられよう。

もう一つの調査成果としては、西端部で墳丘盛土が確認できたことである。６トレンチはほぼ主軸上に位置し、同じ主軸線上に設定した１トレンチの成果から、墳丘は33mになることが判明した。

その他の遺構としては、墳丘盛土の下部から検出した柱穴がある。古墳築造以前の遺構と考え、掘り下げを行わず現状保存を図った。

出土遺物としては、原位置を留めていないものの須恵器の大型平底壺があり注目される。

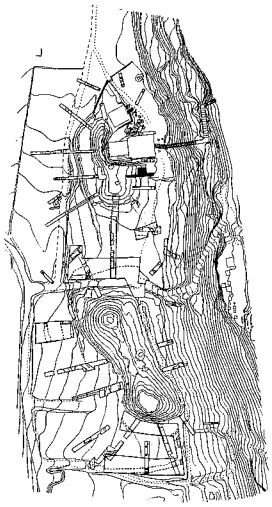
第18図13は肩部から頸部にかけての破片で、復元頸部径は15.4cm、残存高10.8cmを測る。頸が締りナデ肩を呈する。外面には頸部下位に１条の沈線が巡り、沈線より上は一部横方向のカキ目の後櫛描波状文を施す。沈線の下には横方向のカキ目を施し、屈曲部近くはヨコナデされている。肩部はタテ方向の平行タタキで丁寧に調整されている。内面は上位がヨコナデ、屈曲部にはヘラナデ調整が施され、肩部内面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。外面は浅黄色、内面は明オリーブ灰色を呈し、胎土には１～２mm大の長石を少量含む。焼成は良好で堅緻である。14は残存高13.2cmを測る肩部の破片である。外面にはタテ方向の平行タタキの後一部カキ目調整を施している。内面には同心円の当具痕が残る。15は復元底径27.4cm、残存高9.5cmを測る底部である。外面はカキ調整の後タテ方向の平行タタキを施す。その後端部は回転ヘラケズリされ、再度一部にはタタキ調整が加えられている。内面は下から斜め上方に強い指ナデが施され、一部残っている粘土帯接合痕を消すために上から下へ指ナデが施されている。指ナデ調整の上にはタタキ調整時の当具痕が残る。内底面は不定方向の指ナデで調整されている。底面には、焼成時に熔着したと思われる粘土塊が付着しており、また、この熔着物を剥がした痕跡が確認できる。熔着物には小礫の他、軽石や凝灰岩片などが含まれていることから、在地で生産されている可能性が高い。外面は青灰色、内面は淡黄灰色を呈し、胎土には石英を多く含む。焼成は良好で堅緻である。　（下森・末國）

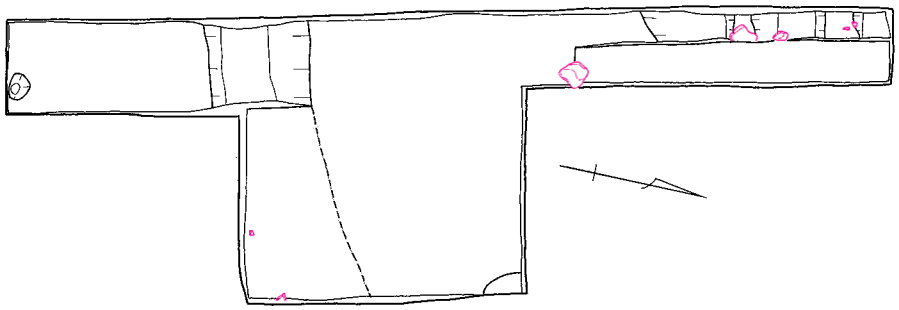
７トレンチ（第12・18図、図版11・12・51）

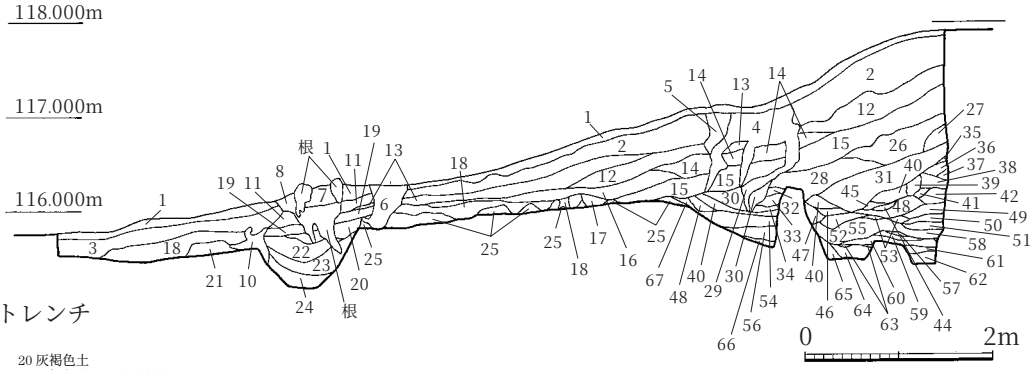
天満社西側、前年度調査の４トレンチ西側で、クビレ部が想定される付近に設定した。

当初南北に設定したトレンチの北端で墳丘が不明瞭だったことと、南端で溝の一部が確認されたことにより、両端をそれぞれ拡張した。また南端で確認された溝は、前年度調査の４トレンチのほぼ中央、および５トレンチの中央やや北寄りで検出された溝と関連する可能性があるため、トレンチの中央部を東に向かって平面的に拡張した。よって最終的なトレンチの形状は、カタカナの「ト」のようである。寸法は、南北の長軸が9.4mで、北側で長さ3.9m・幅0.8m、中央で長さ3.0m・幅3.0m、南側で長さ2.5m・幅1.0mである。

本トレンチでは、北側で、墳丘盛土および墳丘盛土下より古墳にともなう掘り込みが確認された。



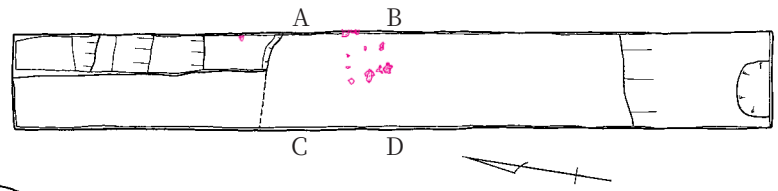


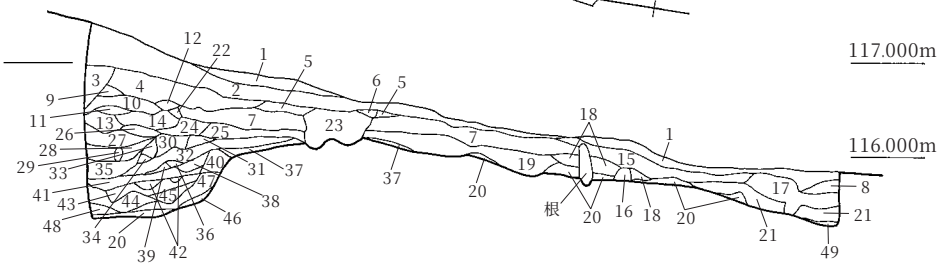


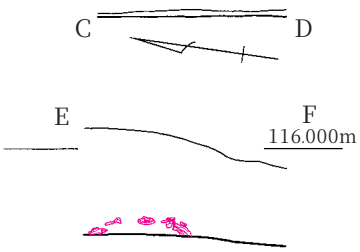
7トレンチ

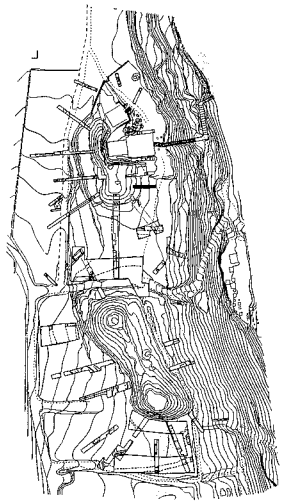
土層名称

1 黒色土 (表土)
2 暗灰褐色土 (中世の遺物含む。締りなし。)
3 暗灰褐色土 (砂質、締りなし。)
4 灰褐色土 (黒味が強い。)(木根の撹乱)
5 灰褐色土 (木根の撹乱)
6 灰褐色土 (木根の撹乱)
7 灰褐色土 (木根の撹乱)
8 暗褐色土 (木根の撹乱)
9 灰褐色土 (ブロック、粒子で残る。)(木根の撹乱)
10 暗褐色土 (木根の撹乱)
11 灰黒色土
12 灰黄褐色～褐色土 (明るい部分あり。締りなし。)(中世の包含土)
13 灰褐色土 (11層よりやや明るい。)
14 褐色土 (中世)
15 灰黒色土 (土師質土器の坏を多量に含む。)(中世)
16 灰黒色土 (中世)
17 暗褐色土
18 褐色土
19 黒褐色土
20 灰褐色土
21 明褐色土 (砂質。)
22 茶褐色土
23 明茶褐色土
24 明黄褐色土 (基盤土の再堆積。砂質。)
25 明黄褐色土 (基盤)
26 淡褐色土 (砂礫、黄色のロームブロック含む。締りあり。)
27 灰茶褐色土
28 淡褐色土 (砂礫、黄色のロームブロック含む。締りなし。)
29 暗灰褐色土
30 淡灰褐色土 (礫を若干含む。砂質。)
31 淡灰褐色土 (砂質。)
32 褐色土
33 暗灰褐色土 (締りあり。)
34 暗灰褐色土 (締りあり。)
35 黄褐色土 (基盤土)
36 灰褐色土
37 茶褐色土 (粘質、締りあり。)
38 灰黒褐色土 (黒色土と褐色のブロックを含む。)
39 茶褐色土 (ロームブロック。粘質、締りあり。)
40 灰褐色土
41 褐色土 (粘質。)
42 黄褐色土 (ロームブロック含む。粘質。)
43 暗褐色土 (粘質、締りあり。)
44 茶褐色土 (ロームブロック。砂質。)
45 淡灰褐色土 (粘質、締りあり。)
46 暗灰褐色土
47 淡灰褐色土
48 淡灰褐色土
49 暗灰褐色土
50 黄褐色土 (やや暗い。粘質。)
51 明黄褐色土 (ロームの粘土ブロックで構成。)
52 褐色土
53 黄褐色土 (ロームブロック。)
54 淡褐色土
55 暗黄褐色土 (粘質。)
56 褐色土 (ロームブロック含む。)
57 灰黄褐色土
58 黒色土 (粘質。)
59 黄褐色土 (粘土ブロック。)
60 灰黒色土 (粘質、締りあり。)
61 黄褐色土 (粘質。)
62 暗褐色土 (粘質。)
63 黄褐色土 (ブロック。)
64 暗褐色土
65 灰褐色土
66 明黄褐色土 (粘質。)
67 淡灰褐色土





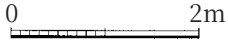


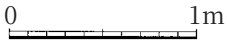


8トレンチ

土層名称

1 黒色土 (表土)
2 淡褐色土 (褐色のロームブロック含む。)
3 暗褐色土 (やや粘質。)
4 褐色土 (ロームブロックを多く含む。)
5 褐色土
6 暗褐色土 (ロームブロックを含む。)
7 暗褐色土 (締りなし。)(中世)
8 淡褐色土 (締りなし。2層より明るい。)
9 暗褐色土 (やや粘質、やや締りあり。)
10 暗褐色土 (小石を含む。締りあり。)
11 暗褐色土 (10層より暗い。締りあり。)
12 暗褐色土 (ロームブロックを含む。締りあり。)(根痕)
13 淡褐色土 (砂質であるが、10層同様に締りあり。)
14 暗褐色土 (粘質、締りあり。)
15 暗褐色土 (やや粘質、締りあり。)
16 暗褐色土 (ローム含む。15層より上位番号の同一色調の層より明るい。締りなし。)
17 褐色土 (基盤掘り起こし。締りなし。)
18 褐色土 (基盤掘り起こし。17層よりは締りあり。)
19 褐色土 (基盤掘り起こし。17・18層より暗い。締りなし。)
20 明褐色土 (基盤)
21 暗褐色土 (やや締りあり。)
22 灰黒色土 (締りあり。)
23 褐色土 (ロームを多く含む。やや暗い。やや粘質。)
24 淡褐色土 (ロームブロックをまばらに含む。粘質、締りあり。)
25 暗褐色土 (粘質、締りあり。)
26 暗褐色土 (礫を含む。粘質、締りあり。)
27 暗褐色土 (26層よりやや締りなし。)
28 灰黒色土 (粘質、22層より締りなし。)
29 褐色土 (ロームを含む。やや粘質。)
30 暗褐色土 (小礫を多く含む。やや粘質、締りあり。31層より締りなし。)
31 暗褐色土 (小礫を含む。締りあり。)
32 暗褐色土 (小礫をまばらに含む。30・31層より暗い。30・31層より締りなし。)
33 暗褐色土 (小礫を僅かに含む。31層と同様な色調。締りあり。)
34 暗褐色土 (ロームブロックを僅かに含む。やや明るい。)
35 暗褐色土 (基盤土含む。やや明るい。やや粘質。)
36 淡褐色土 (ロームブロックを含む。やや暗い。)
37 明褐色土 (やや暗い。やや締りあり。)
38 暗褐色土 (ロームブロックを僅かに含む。40層より明るい。締りあり。)
39 暗褐色土 (ロームブロックを僅かに含む。他のしまった層より僅かに締りなし。)
40 暗褐色土 (ロームブロックを僅かに含む。他のしまった層より僅かに締りなし。)
41 淡褐色土 (やや黄色を帯びる。黄褐色の基盤土と明褐色の基盤土を含む。)
42 暗褐色土 (やや締りなし。)
43 暗褐色土 (やや締りなし。)
44 暗褐色土 (ローム含む。小礫を僅かに含む。)
45 暗褐色土 (ローム含む。締りあり。)
46 暗褐色土 (ローム含む。をまばらに含む。締りあり。)
47 暗褐色土 (粘質、締りあり。)
48 暗褐色土 (粘質、やや締りあり。)
49 黄褐色土 (基盤、砂混じり。)





第12図　1号墳7・8トレンチ実測図（1/40・1/80）

この掘り込み内からは須恵器片（高坏もしくは器台の脚部）が出土している。また中央やや南側寄りで東西に伸びる溝が確認され、この溝の時期を想定できる可能性のある古式土師器片が出土している。そのほか中世の包含層より多量の土師質土器（坏）が出土した。以下、詳述する。

表土を除去し、掘り進めて行くと、南半分は0.4～0.5m程で基盤層が検出された。しかし、墳丘が残存すると思われる北半分では、まず中世の遺物が多量に出土した。とくに土師質土器の坏が多く出土した。２層・12層・14～16層が、主に土師質土器の坏を出土した層で、古墳の墳丘付近で主に出土していることが想定された。なお、15層がこれらの遺物をとくに多く含む層である。トレンチ北端部付近である15層で地表面より１m程、中央部北寄りの16層で地表面より0.5m程掘り下げた。これらの中世の層は主に締まりのない土であった。

さらに掘り進めると、これらの層の下層で、細かく分層できる土が確認された。よって、トレンチ内、北側に長さ3.9m・幅0.４mのサブトレンチを設定し、さらに掘り進めた。すると深さ0.6m程の掘り込みが墳丘に向かってもぐり込むのが確認された。その掘り込みから上位にむかって、概ね粘質で締まった土を細かく盛っている状況が確認できた。これらの土は概ね、ロームブロックを含む茶褐色・黄褐色・褐色という比較的色調が明るい土と、黒色・灰黒色といった比較的色調が暗い土を、交互に盛っているという状況であった。なお、この掘り込みの下端から0.2m程の高さで須恵器片（高坏もしくは器台の脚部）が出土した。

一方トレンチ南側では、東西に伸びる溝が検出された。トレンチ幅の1.0m分だけ完掘し、残りのトレンチ中央東側の拡張部で確認された溝の続きは、遺構ラインの検出のみに止め、掘り下げは行わなかった。溝の幅は、両上端を確認できる西端で、11m程である。東端では片方の上端のみしか確認できなかった。その上端から南のトレンチ中央東側拡張部の南壁面までの距離は12mである。したがって溝の幅は場所によって違う可能性が指摘できる。遺物は中央東側拡張部の遺構検出面より須恵器の瑕の胴部片、完掘した溝内より図示するには耐えない破片であるが、古式土師器の破片が出土した。

以上から、トレンチ北側の掘り込みは、前年度調査の２トレンチ同様、古墳築造時の掘削であると考えられる。その上面より細かく分層できる土は、細かい単位で土を盛って墳丘土としたものと言えよう。この墳丘盛土の現状での上面は、中世段階の削平が著しいものの、32～40・45・46・48・67層であると考えられる。盛土の状況は、概ね比較的色調が明るい土と、比較的色調が暗い土を、交互に盛るという状況である。なお、掘り込み内より出土した須恵器の脚部は、この古墳の築造時に伴うものと考えられ、この古墳の時期を考える上で重要な遺物である。

墳丘は、中世段階に著しく削平を受けているものの、掘り込みの上端付近から、墳丘の中心に向かって、上方にゆるやかに傾斜している。よって。67層よりやや南側（外側）あたりが墳丘の立ち上がりで、墳丘の裾部（基段を含まない）であると考えられる。トレンチ中央付近は、削平による凹凸があるものの、概ね平坦であると考えられる。よって、古墳に伴うテラスを形成していた可能性もある。

トレンチ南側は、東西に伸びる溝が検出されたが、これは前年度調査の４トレンチのほぼ中央、および５トレンチの中央やや北寄りで検出された溝と連結する可能性がある。この溝が古墳に伴うものか、それより先行するものなのかが問題である。この溝の検出面で須恵器瑕、溝内から古式土師器片が出土している。瑕はＴＫ43頃のものと考えられ、古墳築造時よりも新しい可能性がある。

よって、この遺物を溝埋没時の遺物、もしくは追葬時の遺物と考え、古式土師器の年代をもって溝の時期とする考えも可能である。しかし、古墳に伴うテラスの問題を含め、他のトレンチとの状況を鑑みて判断することが妥当であると考える。

出土遺物（第18図）７は、甕の胴部片で、トレンチ中央東側拡張部の溝の遺構検出面より出土した。頸部より上位、および底部を欠損する。器形は胴部が小ぶりで、頸部がしまる。よって口縁部径が胴部径を大きく上回り、頸部が大きく伸びるタイプと思われる。胴部の中位に２条の沈線を巡らし、その間に概ね縦方向の線刻列が見られる。その後まばらなヨコナデにより線刻をやや消している。調整は、外面が２条の沈線より上位では回転ヨコナデで、下位では回転ヘラケズリである。内面がナデである。また内面胴部上位に接合痕が見られる。８は、高坏もしくは器台の脚部片とも考えられるものである。トレンチ北側墳丘盛土下掘り込みより出土した。裾部復元径は16.8cmである。脚部裾は段を有し、端部は丸くおさまる。上方にむかって内側にすぼまっていくが、残存する上端部の径が従来の高坏に比べ広い。よって後述する２号墳の出土遺物を鑑みて器台の脚部の可能性もある。脚部外面には波状文が施されている。透孔は現状では２ヶ所であるが、残存状況から３ヶ所と考えられる。調整は、外面が回転ヨコナデで、内面が回転ヨコナデおよびナデである。その他、図示していないが、トレンチ南側の溝内より、古式土師器の胴部と思われる破片が出土している。外面はタタキ、内面はヘラケズリである。器壁は２mm程度と薄い。（吉田和）

８トレンチ（第12・18図、図版13・51・52）

７トレンチの西側、前方部側面付近に南北の長さ８m・幅１mの細長いトレンチを設定した。７トレンチ北側で確認された墳丘盛土下掘り込みの範囲の確認、およびその上位から行われている盛土の状況の比較、７トレンチ南側で確認された溝の範囲の確認、前方部側面の墳丘立ち上がりの確認が主な目的である。

本トレンチでは、北側で７トレンチ同様に掘り込み、およびその上位からの盛土が確認され、南端部で段落ちが確認された。盛土に関しては７トレンチより残存状況が良好で、墳丘の立ち上がりが明瞭に確認され、その墳丘裾部からは須恵器蓋坏類がまとまって出土した。そのほか中世土師質土器、白磁片、陶器等が出土した。以下、詳述する。

表土を除去し、掘り進めて行くと、南半分は0.4～0.5m程で基盤層（20層）が検出され、南端部では浅い落ち込みの後、砂が混じる基盤層（49層）が確認された。中央部やや北寄りでは、基盤層直上で須恵器の蓋坏がまとまって出土した。これらの須恵器は一部トレンチの東壁に埋まっているものも見られたため、東側にやや出土範囲が広がる可能性もある。北側では、７トレンチほど中世の層は堆積しておらず、また土師質土器などの遺物の出土も見ず、北側端部で0.5m強ほど掘り下げると、盛土と思われる細かく分層でき、なおかつ、概ね粘質で締まりのある土に達した。その後、７トレンチ同様、墳丘下に掘り込みがあるか確認するため、北側に長さ2.8m・幅0.4mのサブトレンチを設定し、さらに掘り進めていくと、７トレンチ同様、掘り込みが確認された。その掘り込みの上面より、概ね粘質で締まった土を細かく盛っている状況が確認できた。ここまでは７トレンチと同じ状況であったが、これらの土は概ね、ロームブロックを含む褐色系統が多く、７トレンチのような比較的色調が明るい土と、比較的色調が暗い土を、交互に盛っているという状況ではなかった。

以上から、トレンチ北側の掘り込みは、７トレンチ同様、古墳築造時の掘削であると考えられる。

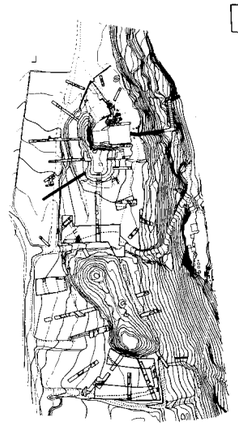
その上面より細かく分層できる土、つまり細かい単位で土を盛って墳丘土としたものと言えよう。この墳丘土の現状での上面は、９・10・14・24・25・37層であると考えられる。掘り込みの上端よりやや南側（外側）から、墳丘の中心に向かって、上方に傾斜していることと、37層よりやや南側（外側）で、須恵器蓋坏がまとまって出土し、ここが墳丘外であると考えられることから、削平・撹乱が悔やまれるが23・37層あたりが墳丘の立ち上がりで、墳丘の裾部（基段を含まない）であると考えられる。この須恵器の一群の性格についてであるが、現時点では古墳築造時の祭祀行為、または前方部にも主体部が存在する可能性があることから、追葬時の祭祀行為と考えられる可能性もあるが、現時点では判然としない。トレンチ中央付近は、南に向かってゆるやかに傾斜するものの、古墳に伴うテラスを形成していた可能性も棄てきれない。トレンチ南側では、ゆるやかな落ちが確認されたが、７トレンチ南側の溝と連結する可能性がある。

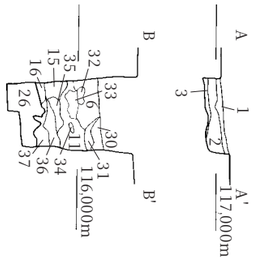
出土遺物（第18図）９～12は、トレンチ中央やや北寄り墳丘裾部と思われる場所より出土したものであるが、完形品はない。これらは概ね１／３～２／３程度残存するものである。９は坏蓋で、口縁部復元径は13.6cmである。口縁端部に段を有し、天井部と口縁部との境に明瞭な沈線を１条、さらにこの沈線下に全周しない沈線を施す。調整は、天井部外面では回転ヘラケズリで、下位および内面では回転ヨコナデである。焼成に関しては、当古墳出土の須恵器の中でも良品である。10は坏身で、口縁部復元径は13.0cmである。２／３程度の残存する。たちあがりの角度がまだ強く、そして長い。11・12に比べ立ち上がりが長い。口縁端部には段を有さず丸い。調整は、外面が上位では回転ヨコナデで、下位では回転ヘラケズリである。内面が回転ヨコナデである。11は坏身で、口縁部復元径は13.4cmである。１／３程度の残存する。たちあがりの角度がまだ強く、そして長いが、10に比べ立ち上がりが短い。口縁端部には不明瞭ながら段を有す。また口縁部付近が、やや内湾する。調整は、外面が上位では回転ヨコナデで、下位では回転ヘラケズリである。内面が回転ヨコナデである。12は坏身で、口縁部復元径は15.0cmである。１／２弱残存する。たちあがりの角度がまだ強く、そして長いが、10に比べ立ち上がりが短い。口縁端部には不明瞭ながら段を有す。調整は、外面が上位では回転ヨコナデで、下位では回転ヘラケズリである。内面が回転ヨコナデである。外面底部付近にヘラ記号の一部と思われるものがある。この遺物は、同一個体と思われる２つからなるが、実測図では、下位の図面をみて分かるように、向かって右の遺物の底面付近に「一」に似たヘラ記号がある。同様に、向かって左の遺物の底面付近欠損部分に「一」に似たヘラ記号がある。これらの「一」は、それぞれ交差する線刻を持たない。残存する破片の状況からもこの2つが直交する線の一部とは考えられない。よって、図面では同一の直線のそれぞれ一部と判断した。（吉田和）

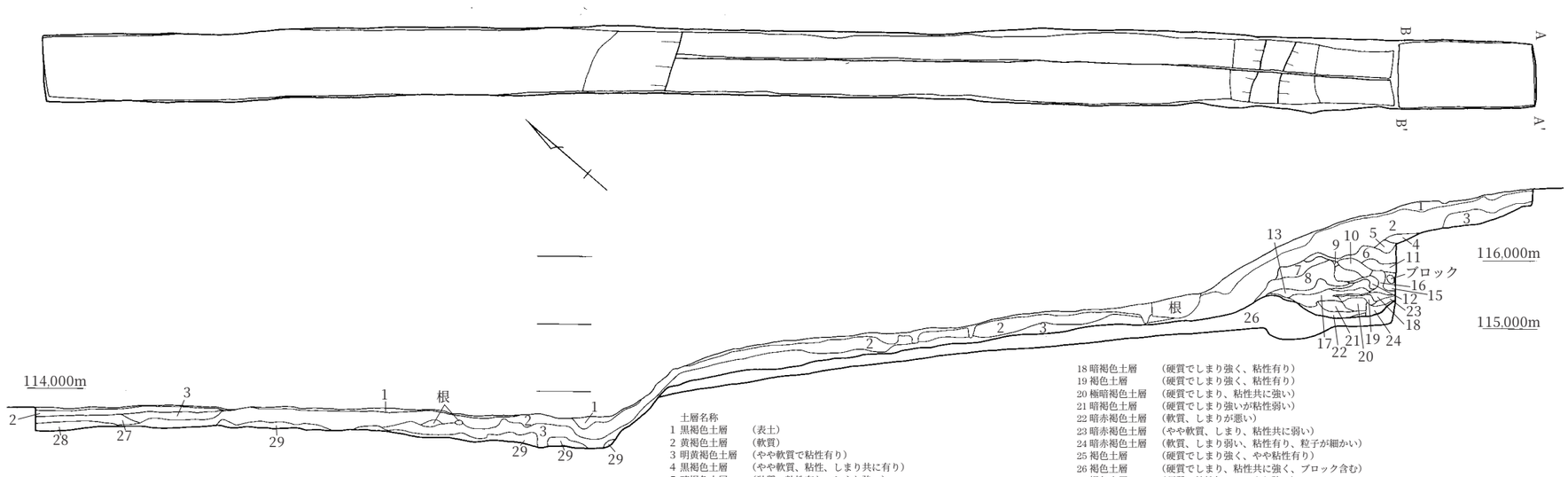
９トレンチ（第13・45図、図版14）

前方部隅角（墳端）、テラス、周溝の確認を行うため、現テラス面の前方部隅角から里道及び栗林にかけて、北西方向に長さ22.2m、幅1.0mのトレンチを設定した。

調査の結果、前方部側から3.65mの所に掘り込みを検出したが、北側の段落ち部では周溝は確認できなかった。さらに、墳丘側の周溝が地山を削り込んでいるかどうかを確認するため、長さ22m、幅0.5mのサブトレンチを設定して掘り下げた。掘り込みは検出面から深さ約1.15mで基盤層を検出し、その上面は墳丘盛土の版築が検出された。遺物は、掘り込み基盤層直上で弥生土器が１点、あとは各層から、弥生土器片が出土している。

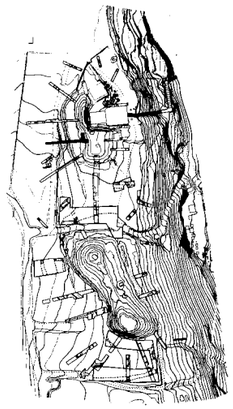


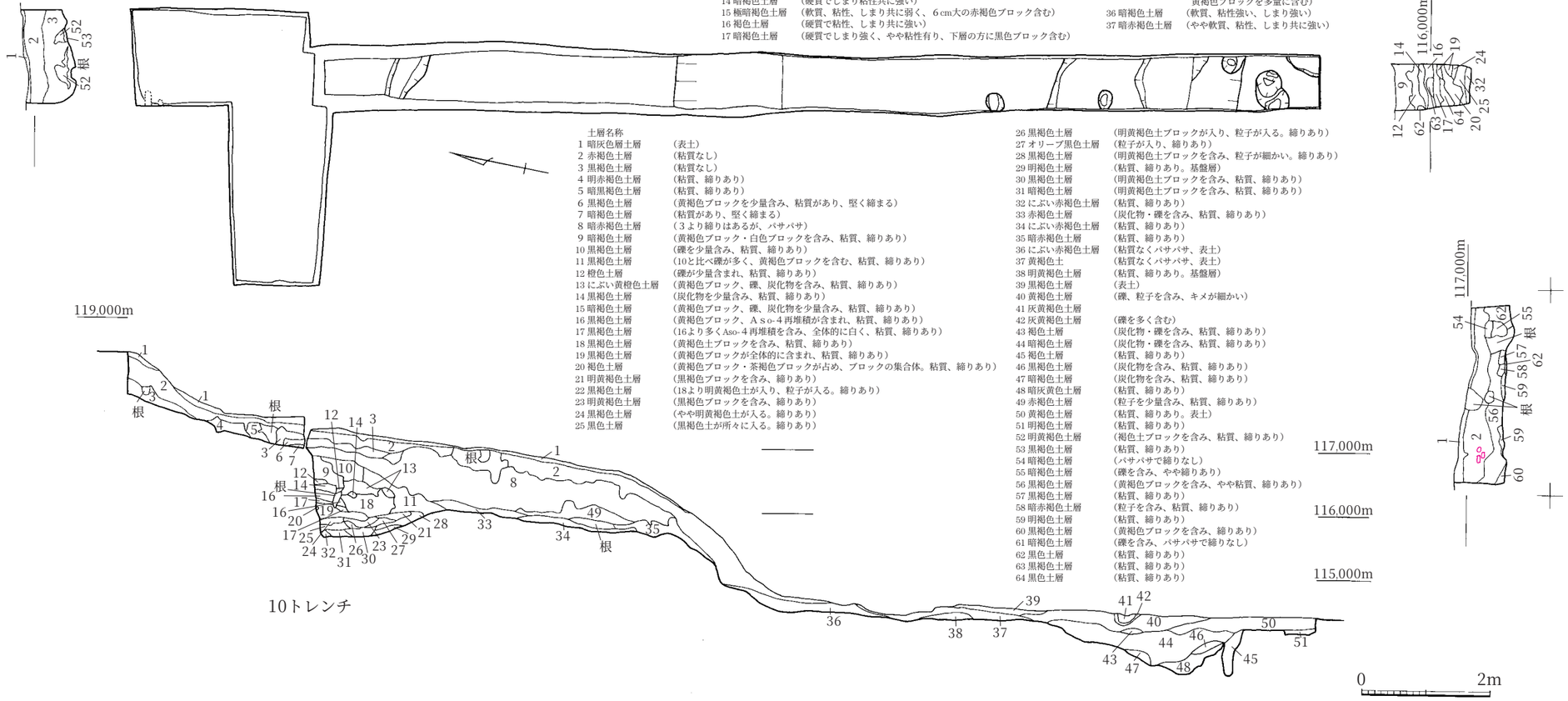




9トレンチ

土層名称		
1	黒褐色土層	（表土）
2	黄褐色土層	（軟質）
3	明黄褐色土層	（やや軟質で粘性有り）
4	黒褐色土層	（やや軟質、粘性、しまり共に有り）
5	暗褐色土層	（砂質、粘性有り、しまり強い）
6	暗褐色土層	（５層より軟質、しまり強く、粒子が細かい）
7	褐色土層	（硬質でしまり強く、粒子が細かい）
8	暗褐色土層	（６層より粘質有り、硬質でしまり強く、粒子が細かい）
9	暗褐色土層	（やや硬質、粘性有り、しまりがわるい、粒子が細かい）
10	褐色土層	（硬質でしまり強く、粘性有り、粒子が細かい）
11	黒褐色土層	（硬質でしまり強く、粘性有り、黄褐色ブロック含む）
12	暗褐色土層	（硬質でしまり、粘性共に強い）
13	褐色土層	（硬質でしまり強く、粘性有り、１cm大の黒色ブロック含む）
14	暗褐色土層	（硬質でしまり粘性共に強い）
15	極暗褐色土層	（軟質、粘性、しまり共に弱く、６cm大の赤褐色ブロック含む）
16	褐色土層	（硬質で粘性、しまり共に強い）
17	暗褐色土層	（硬質でしまり強く、やや粘性有り、下層の方に黒色ブロック含む）
18	暗褐色土層	（硬質でしまり強く、粘性有り）
19	褐色土層	（硬質でしまり強く、粘性有り）
20	極暗褐色土層	（硬質でしまり、粘性共に強い）
21	暗褐色土層	（硬質でしまり強いが粘性弱い）
22	暗赤褐色土層	（軟質、しまりが悪い）
23	暗赤褐色土層	（やや軟質、しまり、粘性共に弱い）
24	暗赤褐色土層	（軟質、しまり弱い、粘性有り、粒子が細かい）
25	褐色土層	（硬質でしまり強く、やや粘性有り）
26	褐色土層	（硬質でしまり、粘性共に強く、ブロック含む）
27	褐色土層	（硬質、粘性無し、しまり強い）
28	暗褐色土層	（硬質でしまり強く、砂質を多く含む）
29	褐色土層	（基盤層、小礫を多く含む）
30	暗褐色土層	（硬質、粘性無し、黄褐色ブロック含む）
31	褐色土層	（硬質、やや粘性有り、微量の炭化物含む）
32	明赤褐色土層	（硬質でしまり有り、やや粘性有り）
33	極暗褐色土層	（軟質、しまり弱く、粘性有り）
34	極暗褐色土層	（11層より硬質、しまり、粘性共に強い）
35	暗褐色土層	（やや軟質でやや粘性有り、しまり強く、黄褐色ブロックを多量に含む）
36	暗褐色土層	（軟質、粘性強い、しまり強い）
37	暗赤褐色土層	（やや軟質、粘性、しまり共に強い）





10トレンチ

土層名称		
1	暗灰色層土層	（表土）
2	赤褐色土層	（粘質なし）
3	黒褐色土層	（粘質なし）
4	明赤褐色土層	（粘質、締りあり）
5	暗黒褐色土層	（粘質、締りあり）
6	黒褐色土層	（黄褐色ブロックを少量含み、粘質があり、堅く締まる）
7	暗褐色土層	（粘質があり、堅く締まる）
8	暗赤褐色土層	（３より締りはあるが、パサパサ）
9	暗褐色土層	（黄褐色ブロック・白色ブロックを含み、粘質、締りあり）
10	黒褐色土層	（礫を少量含み、粘質、締りあり）
11	黒褐色土層	（10と比べ礫が多く、黄褐色ブロックを含む、粘質、締りあり）
12	橙色土層	（礫が少量含まれ、粘質、締りあり）
13	にぶい黄橙色土層	（黄褐色ブロック、礫、炭化物を含み、粘質、締りあり）
14	黒褐色土層	（炭化物を少量含み、粘質、締りあり）
15	暗褐色土層	（黄褐色ブロック、礫、炭化物を少量含み、粘質、締りあり）
16	黒褐色土層	（黄褐色ブロック、Ａso-４再堆積が含まれ、粘質、締りあり）
17	黒褐色土層	（16より多くAso-４再堆積を含み、全体的に白く、粘質、締りあり）
18	黒褐色土層	（黄褐色土ブロックを含み、粘質、締りあり）
19	黒褐色土層	（黄褐色ブロックが全体的に含まれ、粘質、締りあり）
20	褐色土層	（黄褐色ブロック・茶褐色ブロックが占め、ブロックの集合体。粘質、締りあり）
21	明黄褐色土層	（黒褐色ブロックを含み、締りあり）
22	黒褐色土層	（18より明黄褐色土が入り、粒子が入る。締りあり）
23	明黄褐色土層	（黒褐色ブロックを含み、締りあり）
24	黒褐色土層	（やや明黄褐色土が入る。締りあり）
25	黒色土層	（黒褐色土が所々に入る。締りあり）
26	黒褐色土層	（明黄褐色土ブロックが入り、粒子が入る。締りあり）
27	オリーブ黒色土層	（粒子が入り、締りあり）
28	黒褐色土層	（明黄褐色土ブロックを含み、粒子が細かい。締りあり）
29	明褐色土層	（粘質、締りあり。基盤層）
30	黒褐色土層	（明黄褐色土ブロックを含み、粘質、締りあり）
31	暗褐色土層	（明黄褐色土ブロックを含み、粘質、締りあり）
32	にぶい赤褐色土層	（粘質、締りあり）
33	赤褐色土層	（炭化物・礫を含み、粘質、締りあり）
34	にぶい赤褐色土層	（粘質、締りあり）
35	暗赤褐色土層	（粘質、締りあり）
36	にぶい赤褐色土層	（粘質なくパサパサ、表土）
37	黄褐色土	（粘質なくパサパサ、表土）
38	明黄褐色土層	（粘質、締りあり。基盤層）
39	黒褐色土層	（表土）
40	黄褐色土層	（礫、粒子を含み、キメが細かい）
41	灰黄褐色土層	
42	灰黄褐色土層	（礫を多く含む）
43	褐色土層	（炭化物・礫を含み、粘質、締りあり）
44	暗褐色土層	（炭化物・礫を含み、粘質、締りあり）
45	褐色土層	（粘質、締りあり）
46	黒褐色土層	（炭化物を含み、粘質、締りあり）
47	暗褐色土層	（炭化物を含み、粘質、締りあり）
48	暗灰黄色土層	（粘質、締りあり）
49	赤褐色土層	（粒子を少量含み、粘質、締りあり）
50	黄褐色土層	（粘質、締りあり。表土）
51	明褐色土層	（粘質、締りあり）
52	明黄褐色土層	（褐色土ブロックを含み、粘質、締りあり）
53	黒褐色土層	（粘質、締りあり）
54	暗褐色土層	（パサパサで締りなし）
55	暗褐色土層	（礫を含み、やや締りあり）
56	黒褐色土層	（黄褐色ブロックを含み、やや粘質、締りあり）
57	黒褐色土層	（粘質、締りあり）
58	暗赤褐色土層	（粒子を含み、粘質、締りあり）
59	明褐色土層	（粘質、締りあり）
60	黒褐色土層	（黄褐色ブロックを含み、締りあり）
61	暗褐色土層	（礫を含み、パサパサで締りなし）
62	黒色土層	（粘質、締りあり）
63	黒褐色土層	（粘質、締りあり）
64	黒色土層	（粘質、締りあり）

0　2m

第13図　１号墳９・10トレンチ実測図（1/80）

土層の堆積状況をみると、１は黒褐色土・２黄褐色土・３明黄褐色土は墳丘盛土が風化した再堆積であると考えられる。３層以下の４黒褐色土、５暗褐色土、６暗褐色土、７褐色土、８暗褐色土、９暗褐色土、10褐色土、11黒褐色土、12暗褐色土、13褐色土、14暗褐色土、15極暗褐色土、16褐色土、17暗褐色土、18暗褐色土、19褐色土、20極暗褐色土、21暗褐色土、22暗赤褐色土、23暗赤褐色土、24暗赤褐色土、25褐色土、26褐色土、30暗褐色土と全体的に褐色系土層と黒褐色系土層の割合が多く、粘質が強い。また、これらの層群は小単位で交互に堆積し、締りがあるため、墳丘盛土の版築であると判断できる。版築状の盛土の端部はトレンチ墳丘側から3.8mの所まで確認でき、掘り込みの立ち上がりと接することから、少なくとも墳丘端部はこの箇所から北側になる可能性が高い。この遺構に関しては、２・７・８・10トレンチで確認している溝と同様の性格をもつものであろう。

２・３層についてはテラス斜面下端から北側にも堆積しているが、里道のため硬く締まっていた。それ以下の29褐色土は基盤層であり、３・10～15トレンチから続く周溝は９トレンチでは確認できかった。ちょうど周溝が途切れている部分にあたっていたためである。トレンチ北側の27・28層については後世の整地層であると考えられる。

墳丘側のテラス面の落ち込みは、底面の標高が115.26m、テラスの肩（上端）が114.76mで、墳丘からテラスの肩（上端）までの基盤層の削り出しは北側に向けて緩やかに傾斜している。また、このテラス斜面は削平を受けている可能性があるが、他のトレンチの成果を見ると、古墳築造当初に近いものではなかったかと推測される。

出土遺物としては、第45図の21～23があげられる。特に23については墳丘側掘り込みの立ち上がり上面からチャート製の石鏃が供伴して出土した。今回石鏃については図示していないが、地山である29層直上で出土している点、テラス下端より北側に弥生時代の遺物の包含が無かった点などから、弥生時代まではさらに段丘が北側に広がっていた可能性高く、古墳築造時に整形し基段として利用したものであろう。（玉川）

10トレンチ（第13・46・49図、図版15・16）

クビレ部の墳丘端部、テラス、周溝の確認のため、墳丘北側の現状でクビレ部と考えられる所に、トレンチの設定を行った。トレンチの墳丘側の部分を、広く設定してクビレ部墳丘端部を確認しようと試みたため歪な形になっているが、南北に長さ16.75m、幅1.0mのトレンチに、長さ4.4m、幅1.0mと長さ1.6m、幅1.4mのＬ字型部分拡張部を設定した。さらに、トレンチの南側から３mの所に、墳丘端部を確認するためにサブトレを設定し、1.4m程掘り下げた。

調査の結果、トレンチ南側から3.7mほどの所（サブトレンチ内）で、９トレンチでも検出された掘り込み、墳丘盛土とテラス状の段、テラスの落ちと幅2.9m、深さ0.7mの逆台形状を呈する周溝、ピット群がテラス下端より北側で検出された。

土層の堆積状況は、１暗灰色土、２赤褐色土、３黒褐色土、８暗赤褐色土は全体的に締りがなく、１層は表土層、２・３・８層は墳丘盛土が流土した再堆積土及び墳丘の風化土であると考えられる。これより下位の９暗褐色土、10黒褐色土、11黒褐色土、12橙色土、13にぶい黄橙色土、14黒褐色土、15暗褐色土、16黒褐色土、17黒褐色土、18黒褐色土、19黒褐色土、20褐色土、21明黄褐色土、22黒褐色土、23明黄褐色土、24黒褐色土、25黒色土、26黒褐色土、27オリーブ黒色土、28黒褐色

土、29明褐色土、30黒褐色土、31暗褐色土、32にぶい赤褐色土と、全体的に黒褐色系土層の割合が高いが、４・12・13・20・21・23・29・32は褐色系の明るい土色の堆積層で交互に堆積していることが見て取れる。これらの層群は締りがあり版築状に堆積していることから、墳丘盛土と判断できる。墳丘盛土の端部はトレンチ南側から5.0m程の所まで確認でき、掘り込み（基盤層）の立ち上がりと合致するため、ここを墳丘端部として間違いはないが、実際の墳丘端部はもう少し北側に広がっていたものと考えられる。

墳丘北側のテラス状の段は、厚い再堆積土に覆われているが、掘り込み（基盤層）の立ち上がりの標高が116.0mで、テラスの肩（上端）の標高が115.67mと北側に向けて緩やかに傾斜し、0.77mの段落ち部を形成している。この段は古墳築造当初に形成されたものと考えられ、後世による削平もあろうが墳丘のラインと連動して形成されているのでテラスと考えてよかろう。

トレンチ北側で検出された周溝は、幅2.9m、底幅約0.7m、深さ0.3～0.7mを測る。逆台形を呈し、底面は凹凸が多く見られる。土層は、48～46層が堆積した後、再度掘り込みが成され44・43層が堆積している。この44・43層は炭化物や礫を含んでいる。44・43層が堆積した後、整地され40～42、50層が堆積したことがわかる。また、堆積土からは、弥生土器片が出土しているが、明確に溝の時期を示す遺物は出土していない。この周溝の軸は、トレンチ西側では北西に、東側では東の方向に延びており、３次調査３トレンチで検出された、溝と連続するものと思われる。

遺物としては、第46図１～10、第49図33～35が出土した。出土状況は、主に弥生土器については周溝埋土に含まれ、土師質土器については墳丘～テラス上面の表土に包含されていた。　（玉川）

11トレンチ（第14図、図版17）

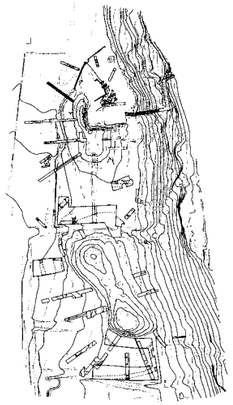
９・10トレンチと同様、墳丘端部、テラス、周溝の確認のため、３トレンチより東側の後円部にトレンチの設定を行った。トレンチは、長さ14.20m、幅1.0mで設定した。

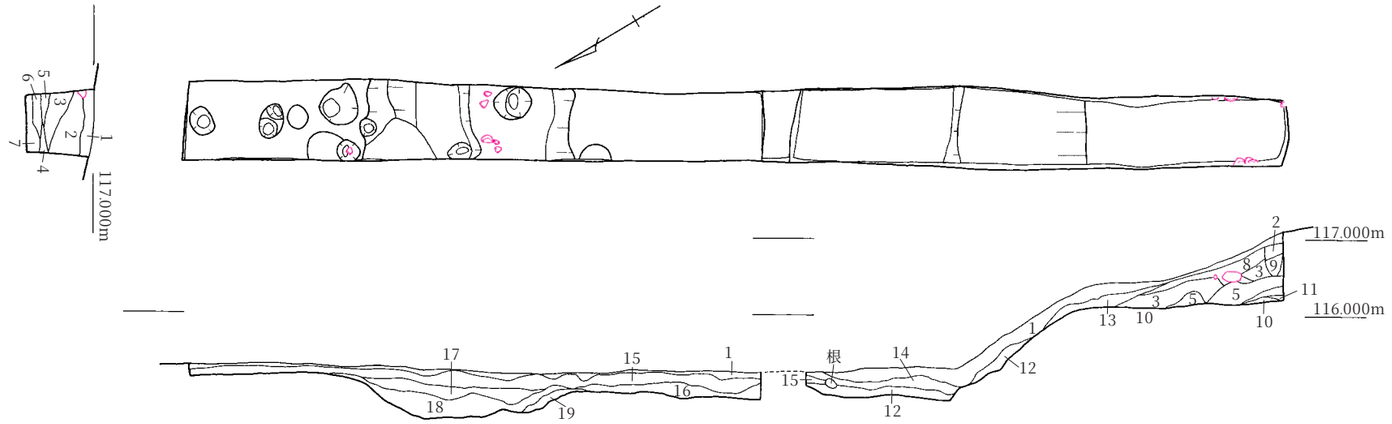
調査の結果、墳丘盛土、テラス状の段、テラスの端部から4.9m程北側に、幅2.64m～2.80m、深さ0.3m～0.5m程の周溝を検出した。この周溝の南側肩より北側では、ピット群を検出した。

土層の堆積状況は、１褐灰色土、10赤褐色土。１層の褐灰色土は表土層で、13層の暗褐色土は墳丘盛土の流土の再堆積土であると考えられる。これ以下の、２褐色土、３黒褐色土、６暗褐色土、７褐色土、８黒褐色土、９黒色土は、２層以外締まっており、交互に堆積しているため墳丘盛土の版築であると思われる。２層に関しては、草木の根がかなり入っているため締りがないが、墳丘盛土であると考えられる。遺物は、堆積土から中世の土師質土器片が出土している。

３・９･10トレンチでも検出した墳丘北側のテラス状段の平坦面が、本トレンチでは他のトレンチに比べ極端に短い。また、墳丘北側に設定された他のトレンチと同様削平を受けている。この削平がいつ行われたのか、今回の調査では判断がつかなかった。

トレントチ北側で検出した周溝は、幅2.64m～2.80m、底幅0.58m、深さ0.3m～0.5mを測る。10トレンチと同様に逆台形を呈し、底面には凹凸が見られる。土層は、18灰黄褐色土、17にぶい黄褐色土、16褐色土の順に堆積。16層が水平堆積、17・18層はレンズ状堆積で、各層も比較的厚い単位で埋没していることから、短期間で埋まったものであろう。また、堆積土からは弥生土器片、須恵器片が出土しているが、明確に溝の時期を示す遺物は出土していない。この周溝の軸は北西から南東方向に弧を描くように延びており、３トレンチの周溝と連続し、10トレンチの溝とも連続するも

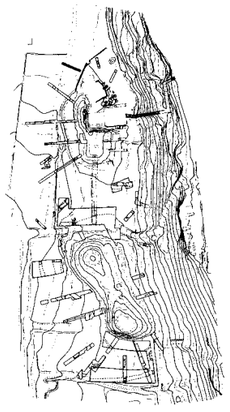


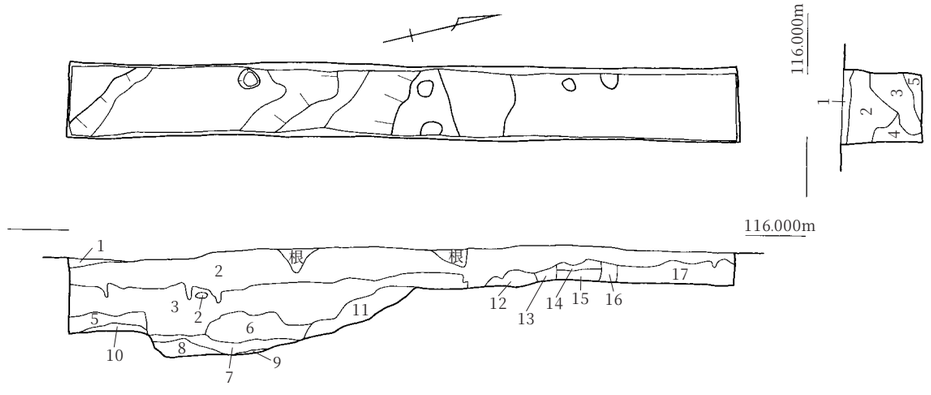


土層名称

1 褐灰色土層　（表土）
2 褐色土層　（粘質、締りなし）
3 黒褐色土層　（粘質、締りなし）
4 黒褐色土層　（３より暗く、粘質、締りなし）
5 黒褐色土層　（３より暗く、粘質、締りあり）
6 暗褐色土層　（粘質、強く締まる）
7 褐色土層　（粘質、強く締まる）
8 黒褐色土層　（粘質、締りなくパサパサ）
9 黒色土層　（根痕、締りなくパサパサ）
10 赤褐色土層　（粘質、強く締まる。基盤層）
11 明赤褐色土層　（強く締まる。基盤層）
12 明褐色土層　（締りなくパサパサ）
13 暗褐色土層　（６より粘質ないが、締りはある）
14 褐色土層　（締りなくパサパサ）
15 褐色土層　（14より締りあり）
16 にぶい黄褐色土層　（締りなくパサパサ）
17 にぶい黄褐色土層　（粘質あり）
18 灰黄褐色土層　（粘質あり）
19 褐色土層　（締りあり）

11トレンチ





土層名称

1 灰黄色土層　（表土、腐食土）
2 黒褐色土層　（しまりあり、５㎜大の礫を含む）
3 にぶい赤褐色土層　（やや粘質、所々黒色土・黄褐色土ブロックが入る。２～５㎜大の礫を含む）
4 にぶい赤褐色土層　（３層より明るく、やや粘質で黄褐色土ブロックが入る。２～５㎜大の礫を含む）
5 にぶい赤褐色土層　（３層より濃く、粘質、２㎜大の礫をやや含む）
6 黒褐色土層　（粘質で粒子・黄褐色土ブロックを含む）
7 にぶい赤褐色土層　（粘質で礫を多く含む）
8 にぶい赤褐色土層　（７層よりやや薄く、粘質）
9 にぶい橙色土層　（粘質、基盤層）
10 灰褐色土層　（粘質）
11 黒褐色土層　（しまり有り、所々に黄褐色土ブロックが入る）
12 橙色土層　（黒褐色土・浅黄色土ブロックを含む）
13 灰褐色土層　（２㎜大の礫を含む）
14 にぶい褐色土層　（黄褐色土ブロック・２～３㎜大の礫を含む）
15 橙色土層　（しまり有り、２～３㎜大の礫を含む）
16 黒褐色土層　（１㎜大の礫を含む）
17 橙色土層　（0.2～１㎝大の礫を含む）

12トレンチ

0　2m

第14図　１号墳11・12トレンチ実測図（1/80）

のと思われる。（玉川）

12トレンチ（第14図、図版18）

周溝の方向とテラスの立ち上がりを確認するため、11トレンチの東側の墳丘よりやや離れた位置にトレンチを設定した。トレンチは、南北方向に長さ8.7m、幅0.9mで設定し、掘り下げを行った。

掘り下げの結果、トレンチ南半で周溝、北半の平坦面と周溝底で数基のピットを検出した。周溝は、検出面の幅3.5m、検出面からの深さは1.3m、底幅約1.5m、底面標高約114.45mを測る。底面は北側から南側に向けて緩やかに傾斜しており、周溝の上面は削平を受けている。

土層の堆積状況は、図面上（第14図）では３層以下の５・６層の間にラインは入っていないが、現場中での土層観察でラインが入ることが確認された。また、３にぶい赤褐色土層に土師質土器片が含まれている点、９にぶい橙色土・10灰褐色土は基盤層である点から、中世段階の整地土であると考えられる。それ以下の６黒褐色土層、７・８にぶい赤褐色土層は、墳丘側からの再堆積であると判断できる。

遺物については、周溝埋土から、弥生土器（第46図18～20、22）・土師質土器片が出土した。また、底面付近検出中の廃土から、須恵器片（坏蓋？）が出土しているが、実測に堪えず、この周溝の時期を特定する根拠とはなり得なかった。

11トレンチで確認したテラス面の立ち上がりは、12トレンチでは検出できなかった。しかし、６トレンチで落ち込みを検出しており、落ち込みの底標高は115.25mで、11トレンチのテラス面下端では標高115.0mを測ることから、若干東側に傾斜しながらも６トレンチにつながるものと考えられる。つまり、６トレンチ東半の落ち込みから11トレンチ落ち上端の間に、11トレンチ同様テラス面が存在する可能性が高い。（玉川）

13トレンチ（第15図、図版19）

周溝の確認のため。12トレンチで検出された周溝が、後円部側に周るのかを確認するために、13トレンチを設定した。トレンチは１号墳主軸の延長上から、少しずれた方向に向け、長さ4.8m、幅1.6mの広さで、ほぼ東西方向に設定した。

調査の結果、トレンチ東側から1.5m程の所で、周溝が確認された。東側では肩（上端）を検出したが、西側の対岸の肩は検出できなかった。しかし、底面は西側に向けて立ち上がっている。周溝の軸は、ほぼ南北方向である。周溝の底面４隅の標高は北東方向114.140m、北西方向114.045m、南東方向114.095m、南西方向114.095mと全体的に、北側（12トレンチ）方向に下がっている。

土層の堆積を見ると、10灰褐色土、９灰褐色土、８灰黄褐色土、６明褐色土が堆積した後、掘り込みが行われ、７黒褐色土が堆積した。その後、６・７層上面で整地が行われ、５暗赤褐色土が堆積したと考えられる。８・６層はレンズ状堆積が厚いため、短期間で堆積したものと考えられる。

遺物は５層から近世陶磁器片、滑石製石鍋片、中世土師質土器片などに紛れて、大型平底壷の底部が出土した。底部は平らで倒立させて焼くための軽石が混ざった粘土塊が付着している。この遺物は、４次調査の６トレンチで出土した底部と接合した。１号墳での大型平底壷の出土が１・６トレンチの小片しかなく、２号墳のように並べていた可能性は低い。つまり、大型平底壷を破砕して、まいていた可能性があるが、これに関しては後世に行われた可能性も十分に考えられる。

トレンチ西側で検出された周溝は、逆台形を呈している。溝の肩が残っている側と下端との差は0.75mである。またこの周溝は、11・12トレンチを廻り、13トレンチに連続すると考えられる。（玉川）

14トレンチA・B・C（第15図、図版19・20）

10トレンチで検出した周溝が、９トレンチでは検出されなかった。よって周溝についての確認のために、９トレンチと10トレンチの間に、14トレンチＡを設定した。Ａトレンチは長さ6.0m、幅1.0mの広さで、９トレンチと平行して設定した。更にＡトレンチで確認された周溝が、９トレンチに向かって延びていたために、Ｂ・Ｃトレンチをトレンチわきに設定した。まず、Ａトレンチから続く周溝を確認するために、Ｂトレンチを設定したが、Ｂトレンチでは検出できなかったので、ＡとＢの間にＣトレンチを設定したものである。よって、Ａトレンチから９トレンチ側がＢトレンチ、その間がＣトレンチという配置になっている。Ｃトレンチでは、13～10トレンチで検出した周溝の末端部が確認され、また後世のピットが、周溝を切る形で検出された。なお土層図は、Ａトレンチのみを掲載している。

周溝の標高は、Ａトレンチ南側の肩（上端）で113.6m、底面（下端・５層の最下面）で113.1mを測る。周溝はやや緩やかに掘り込まれている。なお、Ａトレンチで確認された周溝も、東側（10トレンチ方向）に向かって緩やかに下がっていた。

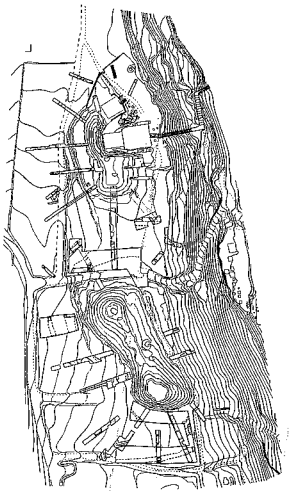
土層の堆積状況を概観すると、まず古墳に伴う溝が掘り込まれる（トレンチ南側から５層と地山の接点まで)。その後５層が堆積し、４層下面のレベルで一度整地される。さらに２・４層が堆積したのち、６層下面まで再度掘り込みが行われる。また１層下面は同レベルの堆積であることから、２回目の整地が行われたものと判断される。土層の観察から、墳丘に伴う周溝の南側の立ち上がりは、一度目の整地時、もしくは２度目の掘り込みによって削平を受け、本来の掘り方を確認することできなかった。（玉川）

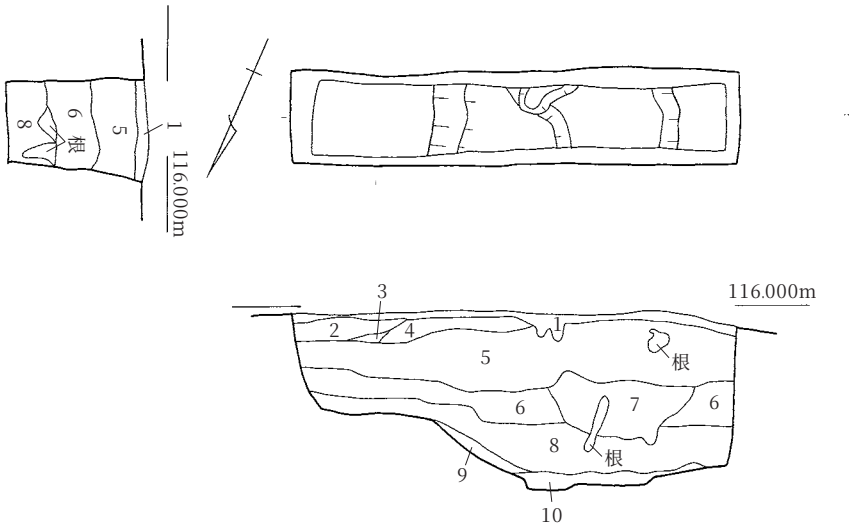
15トレンチ（第16図、図版21）

12トレンチで確認された周溝が、１号墳に伴う周溝であるかを判断するために長さ6.6m、0.9mのトレンチを設定した。なお、13・15トレンチは同時に調査に入った。トレンチは、後円部南東方向に設定した。

調査の結果、トレンチ西側から4.8mの所で溝の落ちはじめと考えられる肩（上端）が検出された。その標高は116.32mで、底面（トレンチ南端）は116.22mを測り、その比高差は最大でも0.24mとやや浅い溝となっている。さらに溝の底面はそのまま南東方向に緩やかな傾斜をみせ、もう一方の肩は調査区外へ伸び、確認できなかった。

土層の堆積状況をみると、版築状になって堆積しており、数回にわたって整地を行っていることが確認された。14黄褐色土には中世土師質土器が数点含まれ（第50図５・16・17)、また、９褐色土、11暗褐色土、13褐色土では、中世土師質土器片が大量に包含されていた。第50図の１～４、６～15、18～20、22～40がそれである。特に11・13層には多量の中世土師質土器が包含し、11層では数群にまとまる形で出土した。13層に関しても掘り込みを行った後、土師質土器を重ねて遺棄、もしくは破砕した土師質土器を投げ入れたような様相を示している。４次調査でも同様のものが検出されており、またこれらの行為が整地層ごとに確認されていることから、天満社との関係で、中

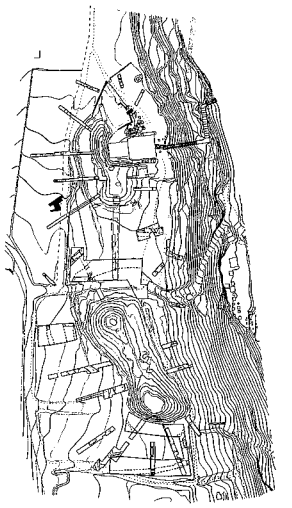


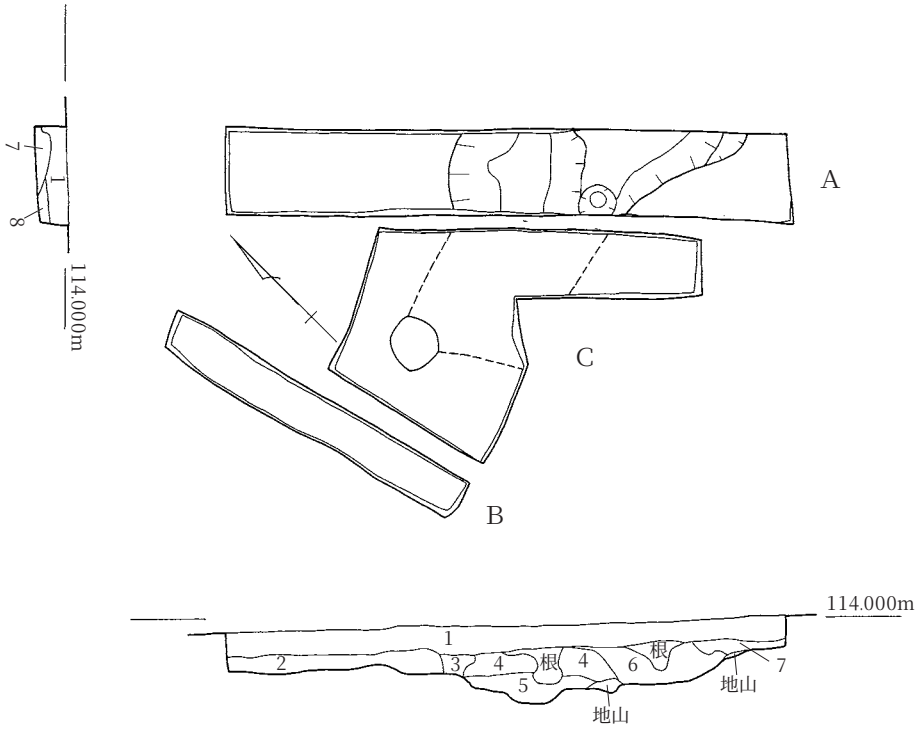


土層名称

1 暗赤灰色土層	（表土）	6 明褐色土層	（やや粘質で硬くしまる）
2 にぶい赤褐色土層	（明黄色砂質ブロック含む）	7 黒褐色土層	（やや軟質、根によるカクラン）
3 赤褐色土層	（やや軟質、カクラン？）	8 灰黄褐色土層	（やや粘質で硬質）
4 明赤褐色土層	（粘質で硬質）	9 灰褐色土層	（やや軟質でやや砂質）
5 暗赤褐色土層	（やや軟質でパサパサ、根が多い）	10 灰褐色土層	（やや砂質で９層よりしまり有り）

13トレンチ





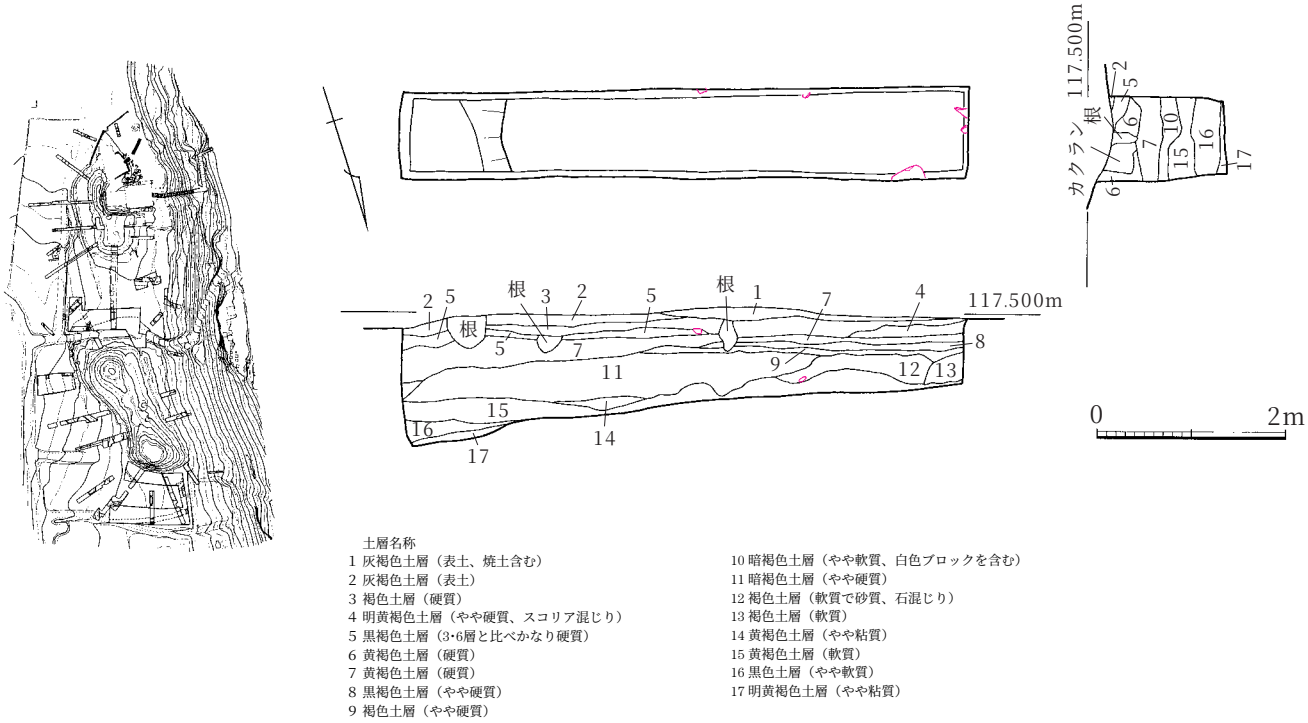
土層名称

1 褐色土層	（硬質でしまり有り、小礫を含む）
2 明褐色土層	（粘質でややしまり有り）
3 黄褐色土層	（しまり有り、地山ブロック）
4 褐色土層	（粘質でやや軟質だがややしまり有り）
5 黄褐色土層	（粘質、硬質でしまり有り、地山ブロック混入土）
6 暗褐色土層	（やや軟質、ややしまり有り、炭化物含む）
7 褐色土層	（やわらかくパサパサ）
8 褐色土層	（やわらかくパサパサ）

14トレンチ

0 2m

第15図　１号墳13・14トレンチ実測図（1/80）

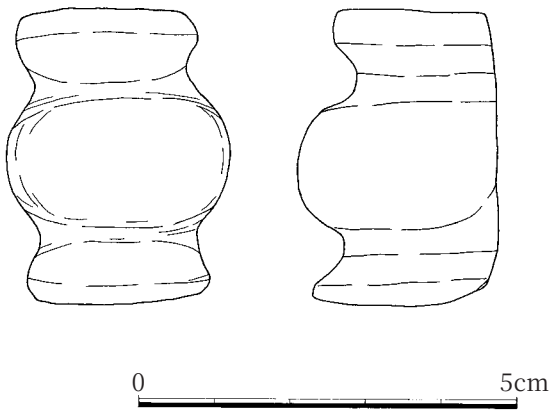


土層名称
1 灰褐色土層（表土、焼土含む）
2 灰褐色土層（表土）
3 褐色土層（硬質）
4 明黄褐色土層（やや硬質、スコリア混じり）
5 黒褐色土層（3･6層と比べかなり硬質）
6 黄褐色土層（硬質）
7 黄褐色土層（硬質）
8 黒褐色土層（やや硬質）
9 褐色土層（やや硬質）
10 暗褐色土層（やや軟質、白色ブロックを含む）
11 暗褐色土層（やや硬質）
12 褐色土層（軟質で砂質、石混じり）
13 褐色土層（軟質）
14 黄褐色土層（やや粘質）
15 黄褐色土層（軟質）
16 黒色土層（やや軟質）
17 明黄褐色土層（やや粘質）

第16図　１号墳15トレンチ実測図（1/80）

世の時代に、数回にわたって何らかの祭祀的行為が行われていた可能性が指摘できる。

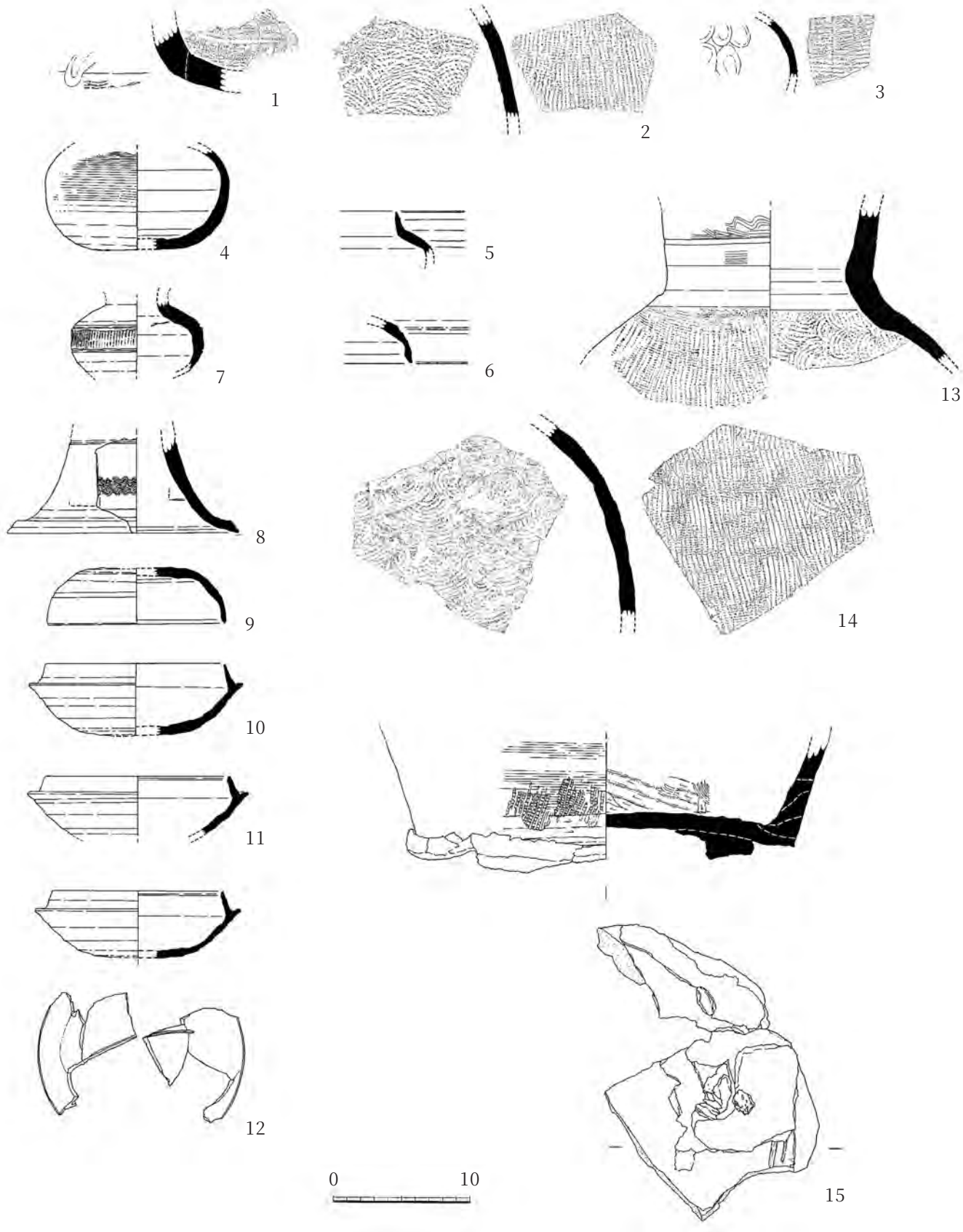
15トレンチでは、周溝の構築時期を判定するような、古墳時代の良好な資料を検出することはできなかった。しかしトレンチ南東側で周溝の肩が検出されたことによって、12・13・15トレンチで検出された周溝が、後円部と同様に弧を描くように巡ることが判明した。つまり14・10・３・11・12・13・15トレンチで検出された周溝が、いずれも１号墳の周溝である可能性が非常に高いことを確認できた。（玉川）



第17図　１号墳表採遺物実測図（1/1）

１号墳表採遺物（第17図、図版51）

１次調査中に１号墳で表採された、水晶製の三輪玉である。表面の一部が剥離しているものの、完形である。裏面は平滑に仕上げられている。長さ3.9cm、最大幅2.9cm、最大厚2.6cm、重さ42.5ｇである。（若杉）



第18図　１号墳１・２・６～８・13トレンチ出土遺物実測図（1/4）

写真48　１号墳調査前風景

写真49　２号墳調査前風景

(3) ２号墳の調査

１トレンチ（第19～21図、図版22・23・53・54）

現存している墳丘の主軸上の前方部側に周溝確認を行なうため、長さ18.2m、幅1.5mのトレンチを設定し、墳丘側に長さ1.9m、幅0.3mのサブトレンチを設定している。調査の結果、墳丘側から5.8mと12.8mの地点で２条の溝が確認された。溝の検出面における幅は内側溝が約2.9～3.2m、外溝が1.9mである。溝底面のレベルは内側が115.5m、外側が116.3mである。

土層の堆積状況は大きく、上から表土、黒色土の順で、その下層は溝埋土である。溝の埋没状況を見ると、内側溝では外側の肩の崩れが大きいことが窺える。ただ、埋没の過程としては外側・内側両方からの流れ込みがみられる。外側溝も内側溝と同様に外側の肩が崩れていることがわかる。また、土層を観察する限りでは内側の肩の崩れはほとんどないようである。

遺物は内側溝の埋土中から須恵器の大型平底壺などが出土した。これらの遺物が出土したのは溝底面から約30～40cm上層で、周溝の埋没が進む中で一定期間、墳丘側に残っていたと考えられる。こういった状況から２本の溝は周溝と考えていいだろう。

第20図１～４は須恵器大型平底壺である。１は口縁部から胴部が残存する。頸部から緩やかに口縁が大きく開き、肩部はほとんど張りがない。外面には口縁部から頸部にかけて、カキ目の後、波状文を施す。胴部は縦方向の平行タタキの後、横方向のカキ目を施し、一部にナデが見られる。内面全体には粘土輪積みの痕跡が見られ、口縁部・胴部内面は工具によるナデが見られる。２は胴部から下部が残存する。外面は１と同様の調整が見られる。内面には輪積みの痕跡をナデ消した痕が多数見られる。外底面には窯で焼成された際の熔着物が付着する。また、外底面には全体にわたって不整方向の工具ナデが施される。３は１・２の実測を行なった時点で出土位置や焼成・色調・調整などから同一個体の可能性が高いことが判明したことから、図上復元を行なったものである。４は、１に比べて頸部から傾斜をもって外反し、口縁端部はやや内湾気味になる。肩部に関しては１に比べ張りをもつ。外面の口縁端部には刺突状文、その下部には沈線の後に同様に刺突状文が施される。口縁部全体には３段にわたり、幅の広い波状文がみられ、頸部付近はナデを施す。胴部は全体にわたり、平行タタキを施した後、一部横方向のナデ、カキ目が見られるが、全体としてタタキが明瞭に残る。内面は口縁部に波状文が施され、頸部にかけてはナデの痕が見られる。胴部は同心円タタキの後ナデ消しているが痕跡が明瞭に見られるのは底面近くのみである。底面は一部が残存するのみである。

第21図１～３は大型平底壺である。２・３は内側周溝から出土した。１は口縁部のみの残存であり、口縁端部はやや内湾する。外面口縁端部近くに沈線を施し、その下部には２段にわたって波状文が見られる。内面は回転ナデを施す。２は口縁部から頸部が残存する。口縁部は頸部から直線的に大きく開く。頸部から下部はわずかしか残存していないが、推定しうる限りでは肩部の張りはほとんどなさそうである。外面口縁部は口縁端部近くに沈線を施した後、頸部との間に２条の沈線を施し、その間には波状文が見られる。頸部付近は波状文の下部に横方向のナデが施される。内面は全体にわたり横方向のナデが施される。３は胴部から底部にかけて残存する。底端部は外反し、外底面はやや上げ底気味になる。外面は胴部中位付近に縦方向のナデを施した後、一部横方向の工具ナデが見られる。底部近くは縦方向のナデ後、横方向のナデが施される。内面は全体にわたりナデが施される。４は壺の外底面である。一部に横方向のナデが見られる。

２トレンチ（旧Ａトレンチ）（第19・24図、図版24・25）

前方部主軸上と北西側隅角の間に長さ10.4m、幅1.6mのトレンチを設定した。調査の結果、墳丘側から約1.6mと約9.6mの地点で周溝とみられる２条の溝が確認された。外側溝は掘り下げを行い、内側溝については幅１mのサブトレンチを設定して、掘り下げた。検出面における幅は内側溝が約3.2m、外側溝が約1.6～２mで、溝底面のレベルは内側溝が116.0m、外側溝が116.4mである。両溝の上端と下端は軸のずれがみられることから、上端が崩落していると考えられる。

土層は表土、褐色土（外側溝）、黒色土の順に堆積し、その下層は溝埋土である。内側周溝は墳丘側からのレンズ状堆積がはっきり見られるが、外側には後世の掘り込みと思われる落ち込みが見られる。外側溝は主に外側からの流れ込みが見られ、黒褐色土との間に地山ブッロクを含む黄茶褐色層の堆積が見られる。遺物はいずれも内側溝から１トレンチと同様に溝底面より50cmほど上層での出土している。この２本の溝は１トレンチのとの位置関係から周溝と考えていいだろう。

第24図１は大型平底壺の口縁部である。外面口縁端部に断面三角形の突帯を貼り付けた後、連点文を施す。その下部は沈線を挟んで上下に波状文を施す。内面は口縁端部から３段の波状文が見られる。２は長頸壺で、頚部付近のみの残存である。外面には３段にわたり波状文を施し、頚部と胴部の境にはタタキの痕跡が見られる。内面はナデが施されるが、接合痕が明瞭に残る。４は大型平底壺の口縁部と思われる。外面に沈線、その下部に波状文を施文する。内面はナデを施す。

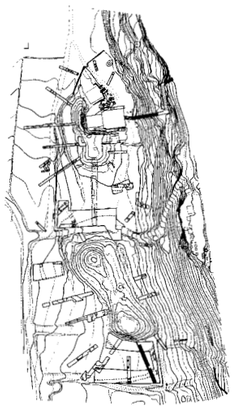
３トレンチ（旧２トレンチ）（第22・24図、図版25・26・54）

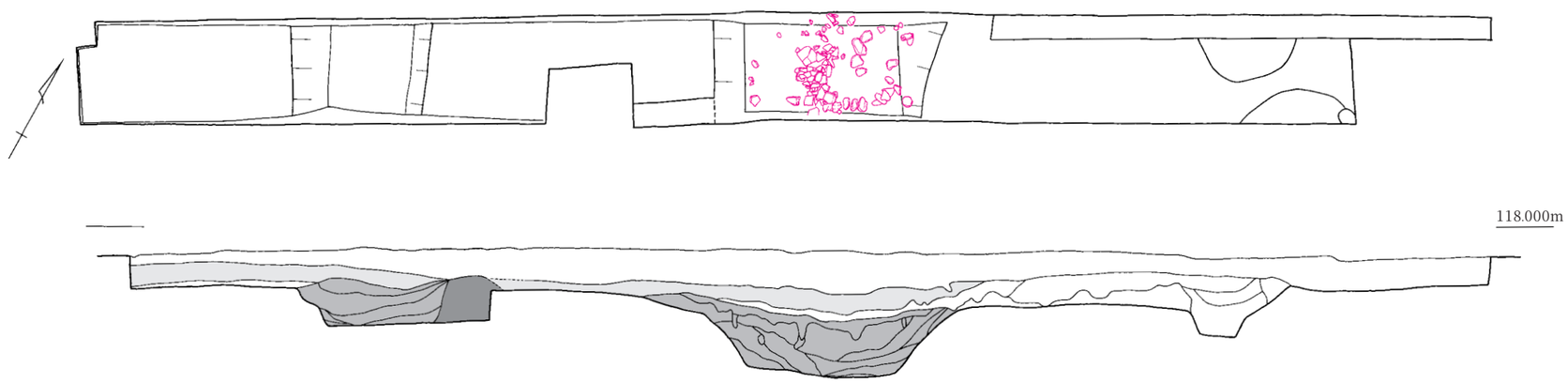
前方部北西隅角に設定した、長さ22.8m、幅1.4～3.8mのトレンチである。掘り下げの結果、墳丘から約14.4mと約20.1mの地点で周溝のコーナー部とみられる２条の溝が検出された。検出面における幅は内側溝が1.7～２m、外側溝が1.4～1.8mである。溝底面のレベルは内側溝がコーナー部115.2m、外側溝が114.9～115.4mと前方部側へ向かって傾斜している。また墳丘側では溝側へ向かう落ち込みが見られた。１号墳の２トレンチでも見られた、墳丘構築時の設計線の可能性も考えられる。土層は表土、黒色土の順に堆積し、その下層は溝埋土である。内側溝と墳丘の間の落ち込みは地山の上に褐色土が堆積し、さらに墳丘盛土の流れ込みと思われる黒色土がみられる。内側溝は墳丘側、外側の双方からの流れ込みの後、ブロックの混入が見られる。外側溝は墳丘側からの細かい流れ込みが見られる。以上の状況から、検出された２条の溝は前方部のコーナー部分あたるものと考えられる。

遺物は須恵器有蓋壺、弥生土器片が数点出土した。第24図３は有蓋壺である。外面は受け部下部に２段にわたり波状文が施され、内面頚部付近には指押さえの痕跡が見られる。

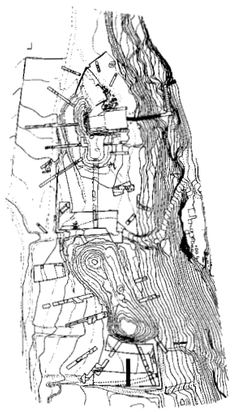
４トレンチ（旧Ｂトレンチ）（第23図、図版27）

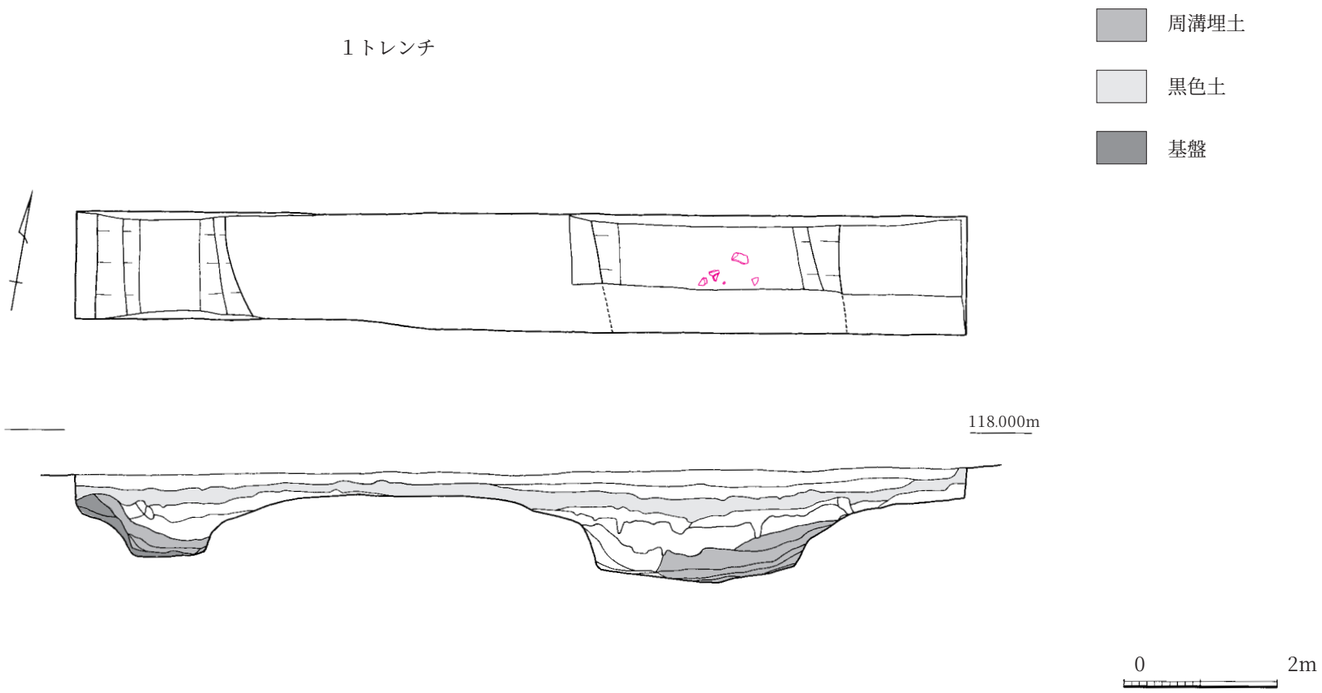
前方部北西側隅角の北側に長さ15.4m、幅1.5mのトレンチを設定した。調査の結果、墳丘側から1.6m、7.6mの地点で周溝と思われる２条の溝が確認された。検出面における幅は内側溝が約1.8m、外側溝が約2.7～３mであった。ともにサブトレンチを設定して、溝の掘り下げを行なった。底面は内側溝が底面はほぼ平坦になっていたのに対して、外側溝は舟底状を呈している。底面のレベルはそれぞれ、115.4m、114.7mである。土層の堆積状況をみると地山までは表土の下層に黒色土層がみられ、その下層は周溝埋土である。内側溝はややしまりのある褐色土が堆積し、その下層は墳丘





1トレンチ



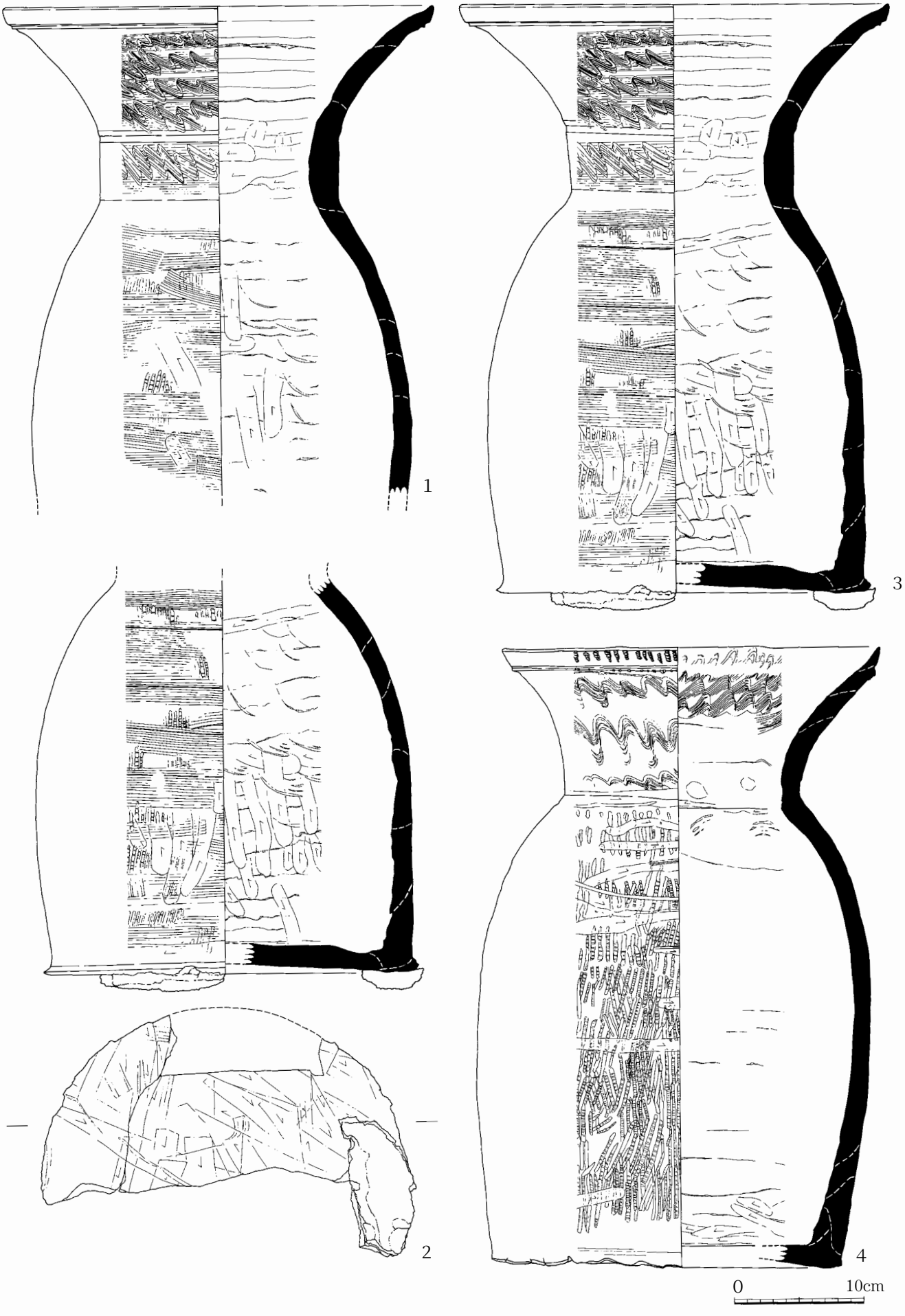


周溝埋土
黒色土
基盤

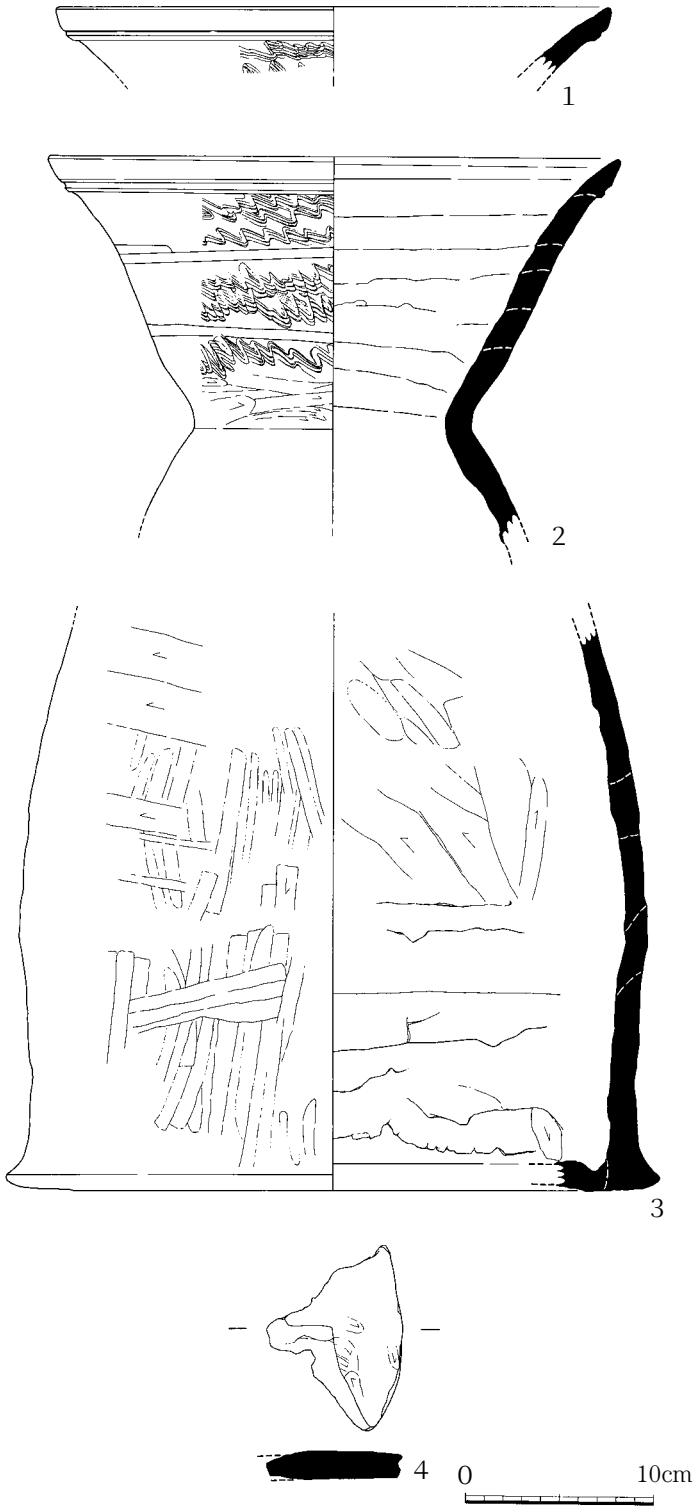
0 2m

2トレンチ

第19図　2号墳1・2トレンチ実測図（1/80）



第20図　２号墳１トレンチ出土遺物実測図（１）(1/4)



第21図　２号墳１トレンチ出土遺物実測図（２）(1/4)

側からの流れ込みとみられる堆積がみられ、ロームと砂質の土が互層をなして堆積している。地山の立ち上がりから墳丘側の肩が崩落しているとみられる。外側周溝は黒褐色土が堆積し、その下層はロームがブロック上に見られる。周溝底面は墳丘側と外側から、ロームと砂質土が互層をなしている。

これらの溝は３トレンチで確認された周溝との位置関係から周溝と考えられる。

遺物は弥生土器片数点が出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

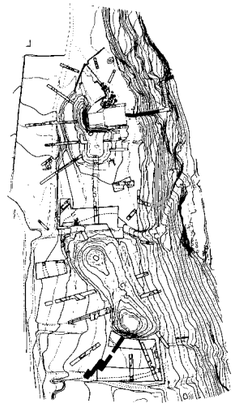
５トレンチ（旧３トレンチ）

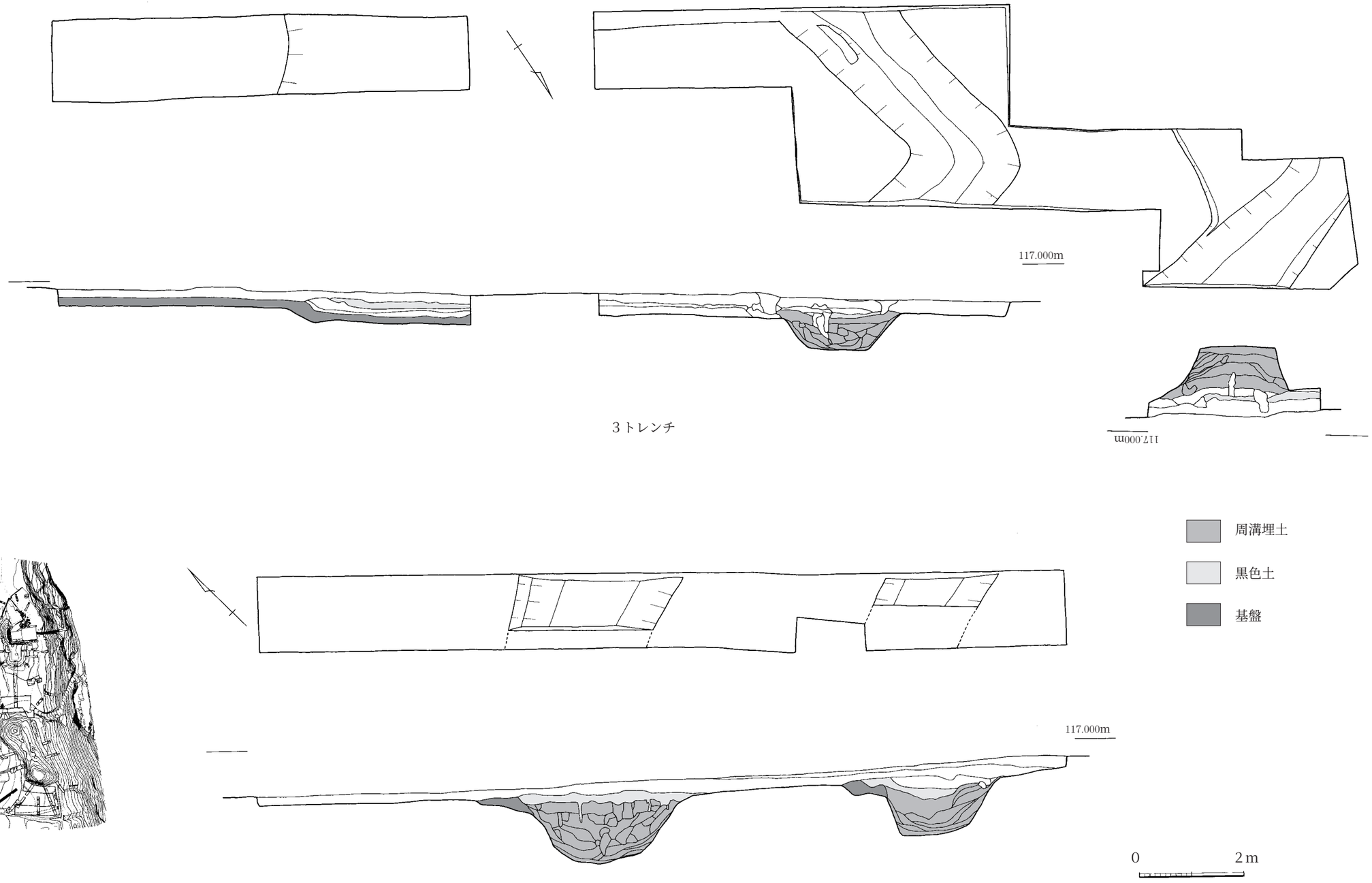
（第23・25・26図、
図版28～30・52～54）

前方部北側に、長さ15.4m、墳丘側から６mまでは幅2.5m、それより北側は長さ3.6mにわたって、幅3.1mに拡張したトレンチである。調査の結果、墳丘側から約4.2m、6.4m、13.1mの地点に周溝とみられる溝が２条とその他１条の溝が確認された。その後、ともにサブとレンチを設定して、掘り下げ、溝底面の確認を行なった。それぞれの溝の幅は、内側溝が約2.2m、外側溝が約3.4mである。溝底面のレベルは内側溝が114.2m、外側溝が114.0mである。また内側溝の墳丘側には中世以降の溝が掘り込まれ、その上端は削平を受けている。さらに墳丘側では墳丘構築時の設計線と見られる落ちが確認され、その内側溝側にはピットが約１m強の間隔で２基見つかった。

土層の堆積状況をみると、墳丘側から外側に向かって、緩やかに傾斜しているのがわかる。表土の下層には黒色土が見られ、その下層に周溝埋土がある。内側溝の埋没状況をみると外側の肩が崩落しており、内側の肩は後世の溝により切られ、明確でない。この溝は墳丘側で確認された溝の続きとみていだろう。外側溝は内側溝に比べ、幅広くなっており、レンズ状堆積を基本としている。

遺物は須恵器大型平底壺など多数出土したが、これらのほとんどは内側溝の検出面から埋土中か

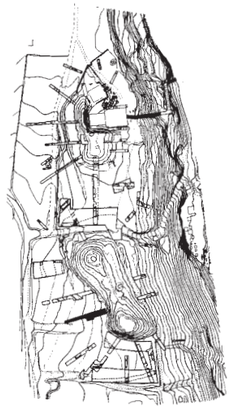


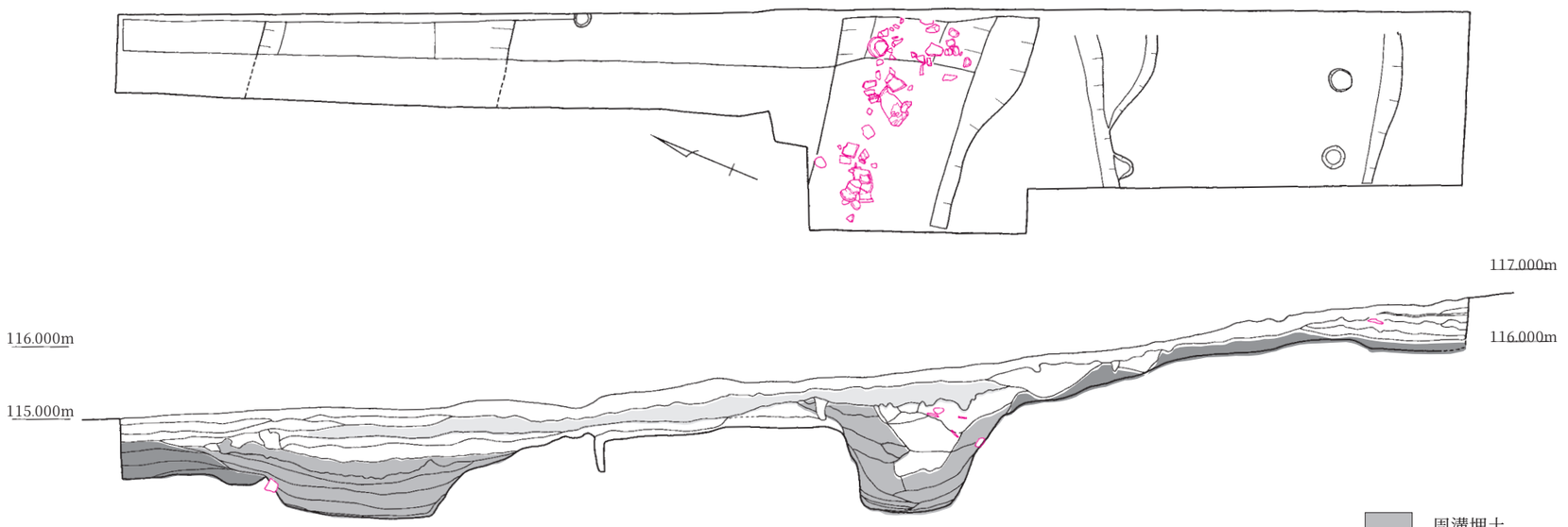


3トレンチ

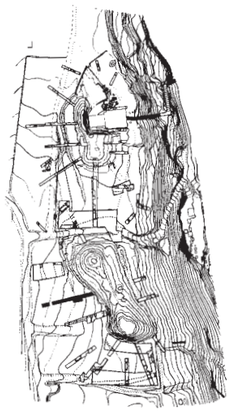
4トレンチ

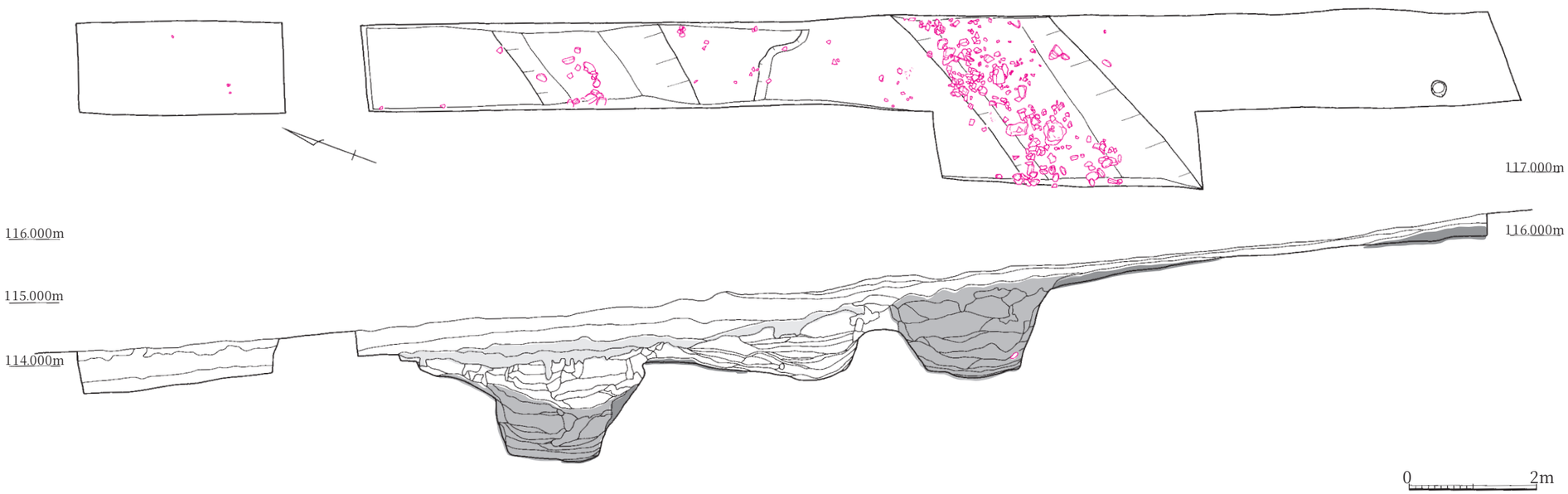
第22図　２号墳３・４トレンチ実測図（1/80）





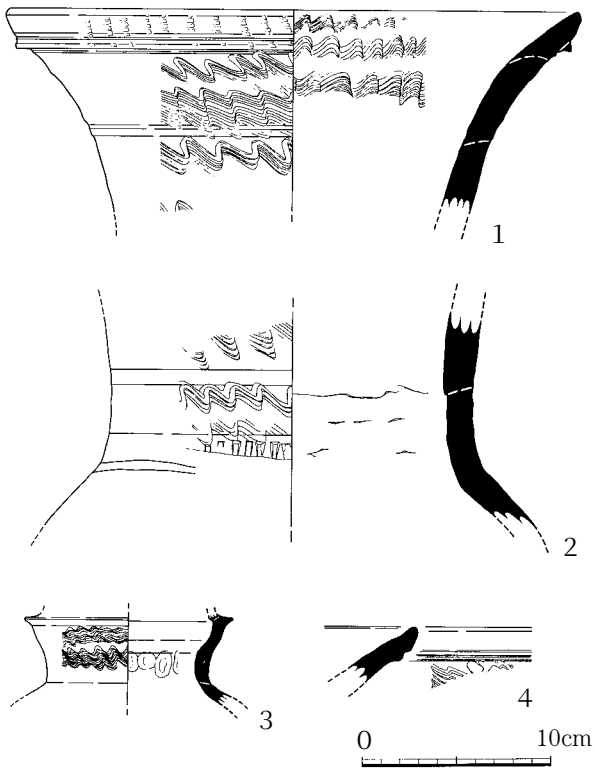
5 トレンチ





6 トレンチ

第23図　２号墳５・６トレンチ実測図（1/80）

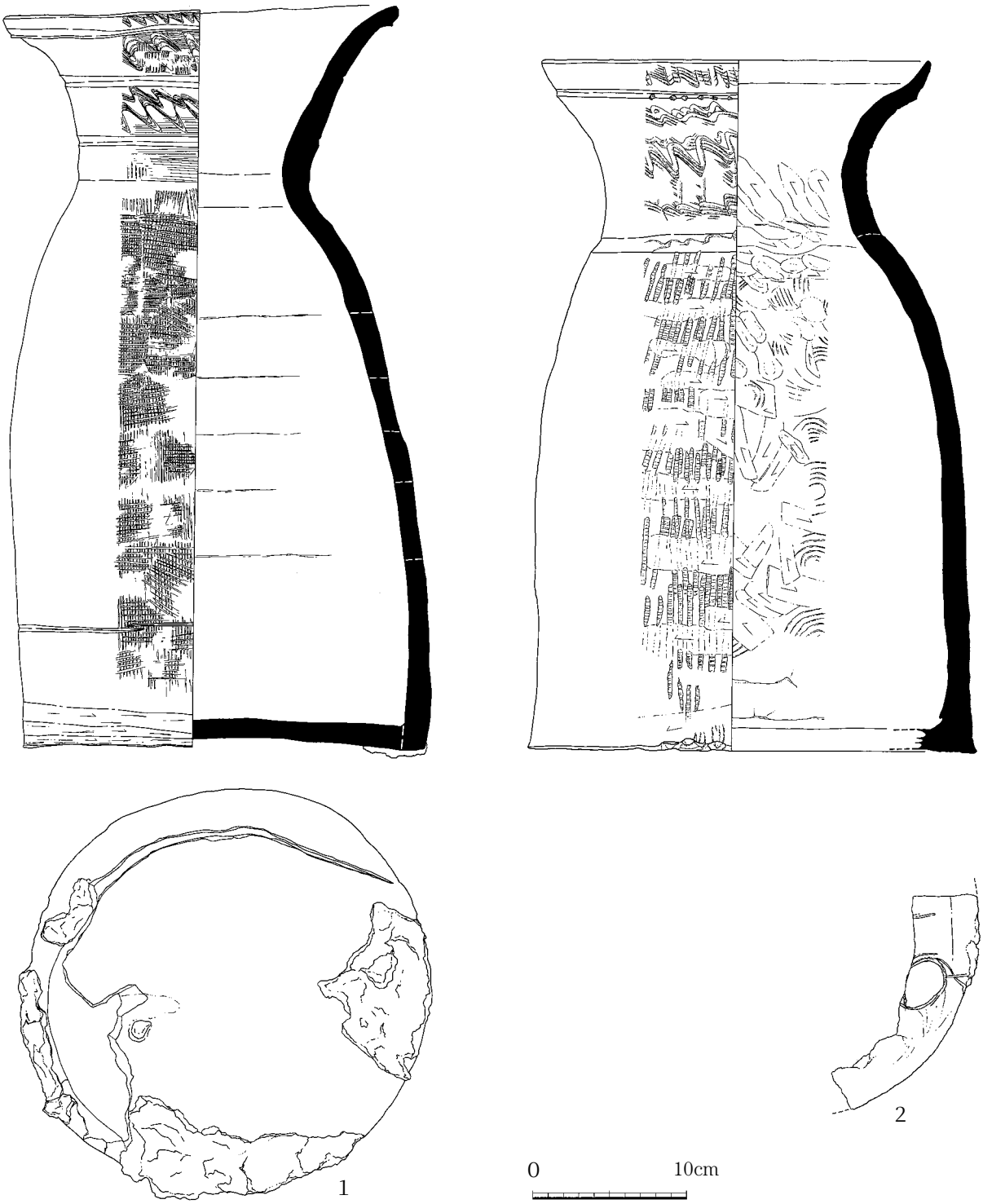


第24図　２号墳２・３トレンチ出土遺物実測図（1/4）

らの出土である。完形に近い大型平底壺の出土状況をみると口縁部が外側溝に向いていることから墳丘側に樹立されていたと考えられる。さらに墳丘側で確認されたピットが径約30cmと大型平底壺の底径とほぼ一致することから、このピットが大型平底壺の抜き取り痕である可能性も考えられる。こうした遺物の出土状況や墳丘クビレ部にあたることから外側２本の溝は周溝と考えて差し支えないだろう。

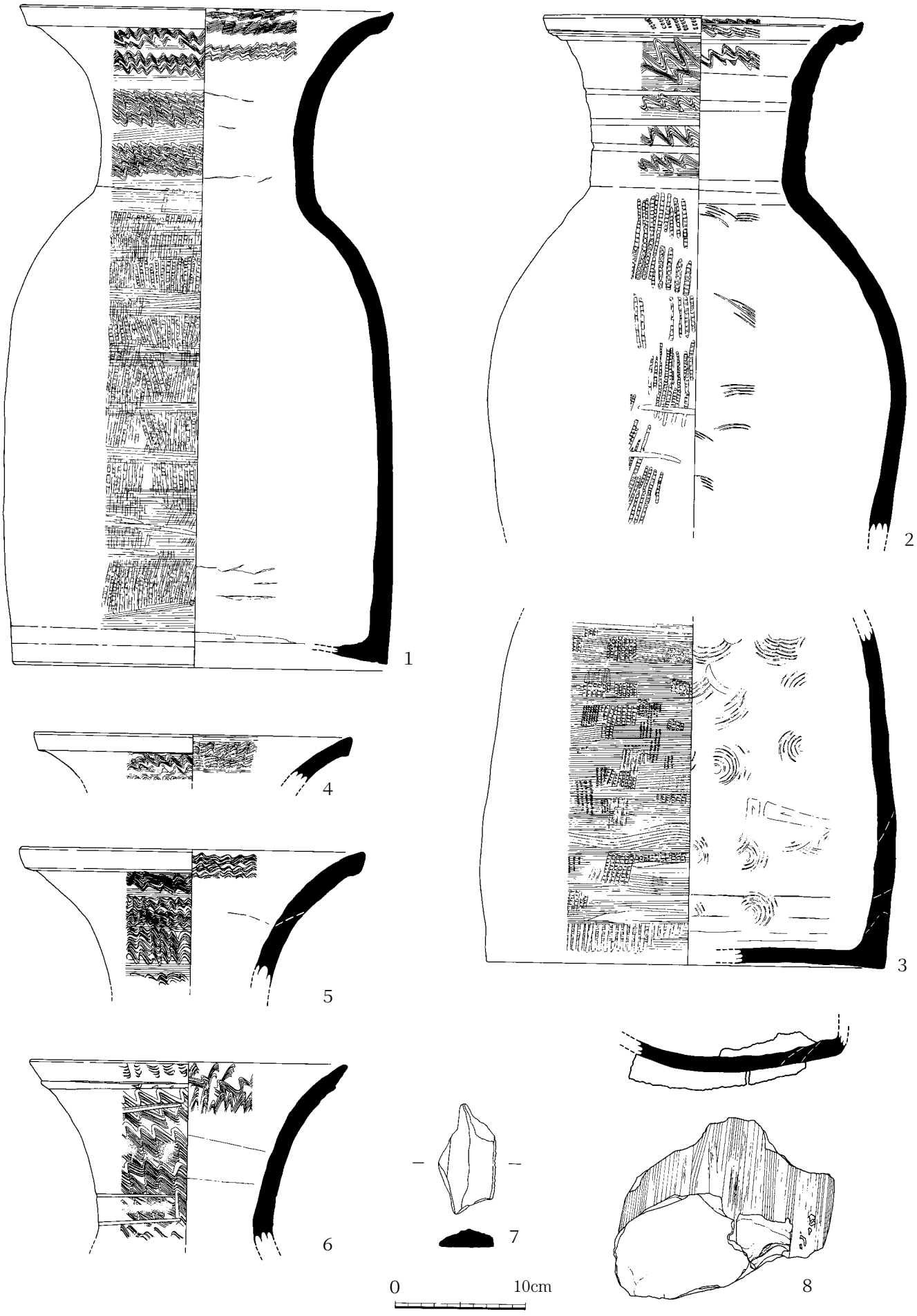
第25図１・２は大型平底壺である。１は完形である。口縁部は窄まった頸部から緩やかに開き、端部付近でやや外反する。肩部の張りはほとんどなく、胴部の最大径は底部近くになる、安定した形状である。外底面も完全に残存しており、窯の融着物が付着する。外面の口縁部は端部付近を突帯状につまみ出し、その下部にカキ目を施している。その後、２条の沈線を施し、端部と沈線の間に波状文が見られる。さらに２段目は波状文施文の後、タタキが見られる。頸部付近はカキ目の後、一部タタキを施す。胴部は全体に縦方向の平行タタキの後、横方向タタキを施し、全体に細かい仕上げとなっている。他の大型平底壺に見られるようなナデ、工具ナデによる調整は見られない。また下部には全周はしないが沈線が１条施され、底部近くにはヘラケズリが見られる。内面は全体にユビナデが施され、丁寧に仕上げられている。２は１に比べ器高が低い。頸部から口縁部にかけては緩やかに角度をもって開き、端部付近でやや内湾する。肩部は１と同様に張りはなく、胴部中位付近で最大径となる。また、胴部最下部でやや外反する。調整は１で見られる口縁部中位の沈線はなく、口縁端部付近に１条見られるのみである。頸部にかけて５段の波状文が施され、端部の沈線上には刺突文が見られる。胴部は全体にわたり、タタキ成形された後にナデが施される。底部付近では横方向のケズリが施されている。底面は外面側がケズリ、内面側がナデにより調整される。

第26図１～６は大型平底壺でいずれも内側周溝から出土している。１は口縁がほぼ完全に残り、胴部は半分ほど残存している。口縁部は頸部から直線的に立ち上がった後、大きく外反し、端部付近はほぼ水平になりながらやや内湾する。肩部は張りを持ち、胴部はほとんど張りをもたない。底面はやや上げ底気味である。外面の口縁部から頸部にかけてはカキ目の後、波状文が４段にわたって施文されるが、端部はナデ調整のみである。頸部から胴部は平行タタキの後、部分的にカキ目を施すより壺の形態に近いタイプといえる。内面は口縁部上半に３段の波状文を施し、端部近くに「×」形のヘラ記号が見られる。それより下部は全体に亙りナデを施す。２は胴部が大きく張り、より壺の形態に近いタイプといえる。口縁部は頸部から緩やかに外反しながら立ち上がり、端部付近でほぼ水平になり、先端がやや内湾する。頸部から胴部にかけては緩やかに広がり、胴部中位で最大径を測り、底部に向かって内傾する。外面調整は口縁端部下部、口縁部に３条の比較的太い沈線



第25図　２号墳５トレンチ出土遺物実測図（１）(1/4)

を施す。その間にカキ目の後、波状文を４段に渡って施文し、端部はナデ後、刺突状文を施す。頸部から胴部にかけては、平行タタキの後、一部横方向のナデが施される。内面調整は口縁端部に２条の沈線を施し、これを挟んで３段に互り波状文を施文する。胴部については同心円タタキの後、ナデが見られる。３は胴部から下半が残存する。底部かけて広がっていく安定した形態である。底部は若干上げ底気味である。外面調整は平行タタキの後、カキ目を施す。内面調整は同心円タタキ



第26図　２号墳５トレンチ出土遺物実測図（２）（1/4）

の後、横方向のナデを施すが、部分的に縦方向、斜め方向のものも確認できる。４は口縁部上部のみの残存である。調整は外面・内面ともにカキ目の後、波状文を施文する。５は口縁部中位まで残存する。口縁端部の傾き、残存している最下部の径から推測すると、口縁部が大きく開くタイプと考えられる。外面調整は口縁端部はナデ、その下部はカキ目の後、波状文を５段にわたって施す。内面調整は口縁端部付近に波状文を施文する。６は頚部から口縁部にかけ緩やかに外反する。口縁端部は肥厚にせず、わずかに内湾する。端部付近は沈線を施すことで、突帯状に成形される。外面調整は全面にわたって波状文が施され、突帯状部分には刻み目が見られる。内面調整は口縁端部付近に粗い波状文が施文され、その下部は接合痕をナデ消している。

７は壺底部である。粘土紐の痕跡がみてとれる。８は横瓶の底部である。内外面とも窯床の融着物が付着する。外面調整はカキ目、内面調整はナデ・タタキが施される。

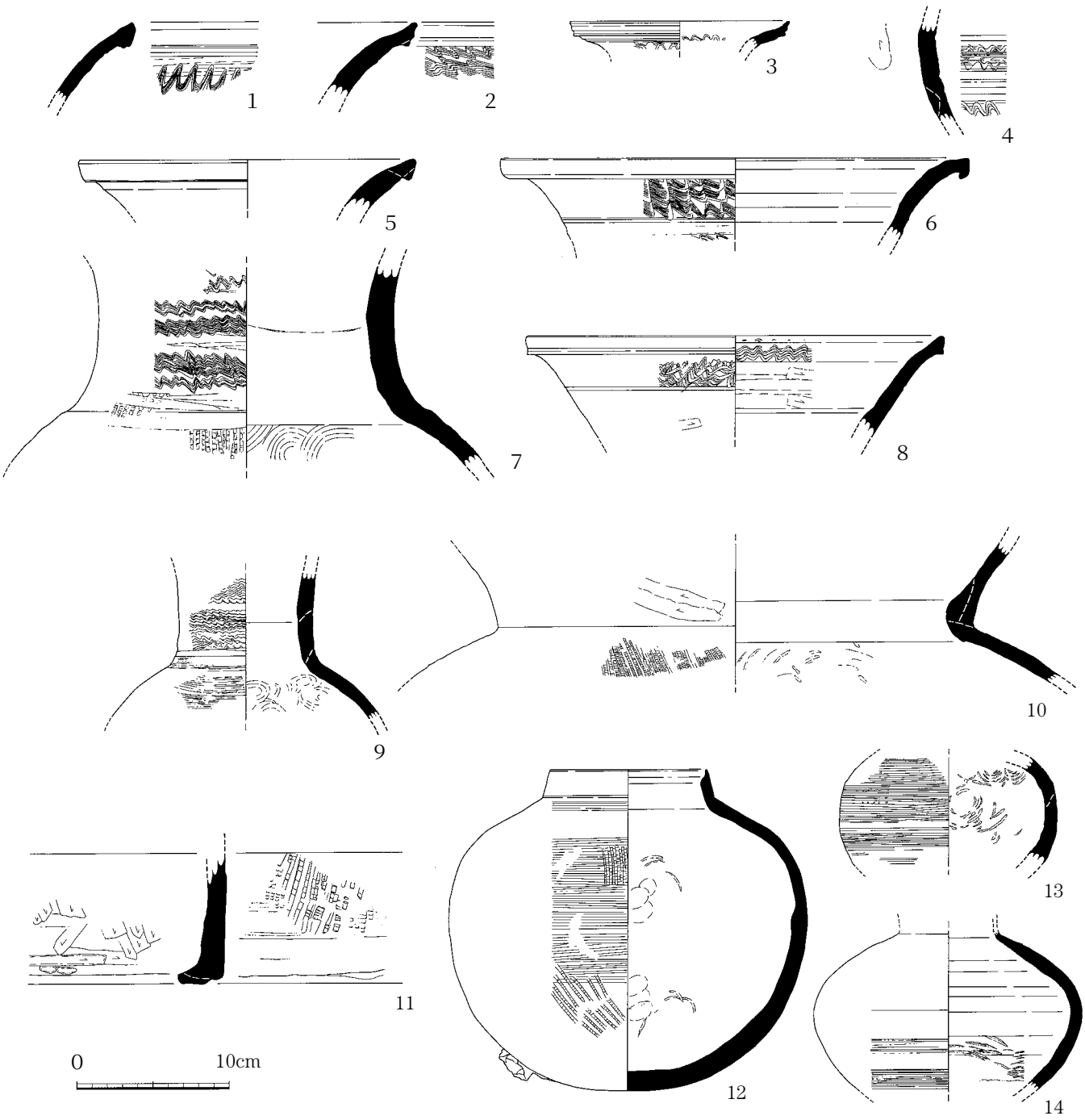
６トレンチ（旧４トレンチ）（第23・27～29図、図版31・32・54～56）

クビレ部北側に長さ22m、幅1.4mのトレンチを設定し、墳丘側から4.6～8.6mの間は幅2.6～2.8mに拡張している。また、墳丘側から17.5m～18.6mの間は樹木があったため、掘り下げを行なっていない。調査の結果、墳丘側から約6.5m、10.6m、12.8mの地点に周溝とみられる溝２条とその他１条の溝が検出された。その後、これらの溝を掘り下げ、底面の確認を行なった結果、墳丘側から１条目と３本目の溝が古墳の周溝であることが確認された。周溝の幅は内側周溝が約1.9m、外側周溝が約2.2mであることが確認された。周溝底面のレベルは内側周溝が113.8m、外側周溝が112.4mである。周溝は５トレンチで確認されたものと方向が異なっていることから、５トレンチと６トレンチの間にクビレがあることがわかる。また、墳丘側にはピットが検出されたが、５トレンチで確認されたものと同じ性格であると考えられる。さらに両溝の間には別の溝が掘り込まれ、５トレンチで確認された溝と続くものと思われ、そうなると両トレンチ間でこの溝によって周溝が切られているとみていいだろう。

土層の堆積状況をみると、地山が墳丘側から北側の谷に向かって緩やかに傾斜しているのがわかる。墳丘側は大きく削平を受けたと考えられ、表土直下に地山が検出された。周溝の埋没状況をみてみると内側周溝は表土・地山の堆積状況から肩の部分が削平を受けていると考えられるが、残存している部分は大きな崩れは見られない。埋土中にブロックの混入がみられることから、若干、肩の崩落があったと思われるが、全体的にレンズ状堆積を基本とする。外側周溝は黒色土層の直下から掘り込まれているが、内側の地山の立ち上がりから、後世に掘り直しがあったと考えられる。

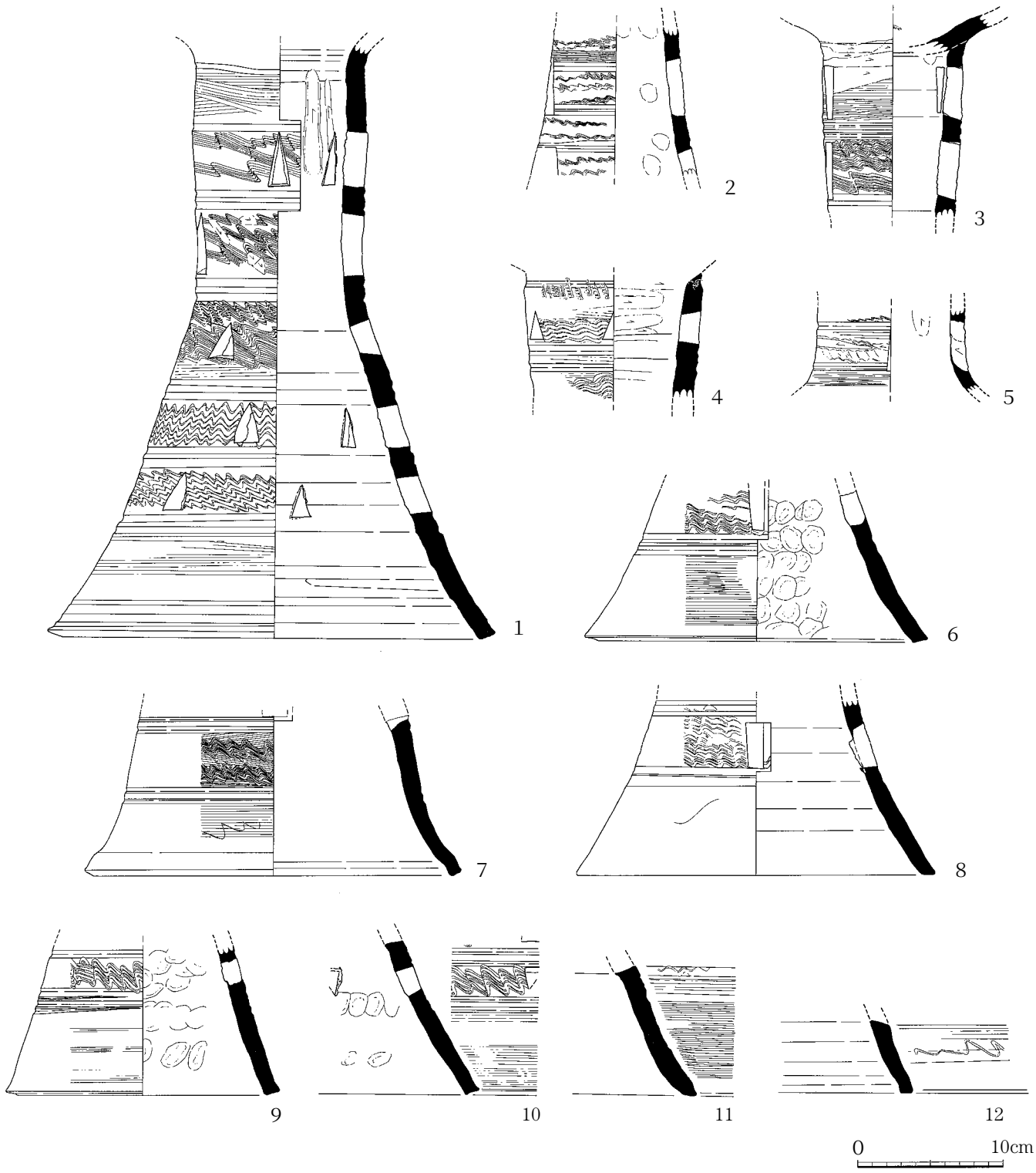
遺物は内側周溝を中心に須恵器器台や凝灰岩製の石製品が周溝埋土中より出土している。

第27図１・２は大型平底壺の口縁部である。１は口縁部端部を肥厚させ、内湾しないタイプ、２はやや内湾するタイプである。１は端部下側に沈線を施し、その下部はナデ後、波状文を施文する。２は端部下側に断面三角形の突帯を貼り付け、その上部に沈線を施す。下部は波状文を施文する。３は甕の口縁部である。端部はやや内湾気味で外面に沈線が見られる。外面調整は上半がナデ、下半がカキ目後、波状文を施す。内面調整はナデ、波状文が見られる。４は器台である。傾きから部位は中位あたりと思われる。この部分で４条の沈線を施し、カキ目の後、波状文を施文する。５は大型平底壺の口縁部である。端部を肥厚させ、その下側に沈線を施す。内外面とも調整はナデである。６も大型平底壺の口縁部か。端部にむかって大きく外反し、端部を肥厚させた後、その下部を



第27図　２号墳６トレンチ出土遺物実測図（１）(1/4)

沈線状に調整している。外面調整は沈線を施し、その上下はカキ目の後波状文を施文している。内面調整は全面にわたりナデを施す。７は大型平底壺である。頚部から口縁部に向かって緩やかに外反している。外面調整は頚部より上部はナデ後、波状文を施すが、残存部最上部はナデの代わりにカキ目を施す。また、胴部にかけては平行タタキの後、ナデを施す。内面調整は頚部より上部はナデ、下部は同心円タタキを施す。８は大型平底壺と思われる。口縁部はほぼ直線的に伸び、端部を肥厚させる。外面調整は沈線を施した上部に波状文を施文し、沈線下部はナデを施す。内面調整は上部に波状文を施し、端部付近はその後、ナデ消している。下部は横方向のナデを施す。９は長頚



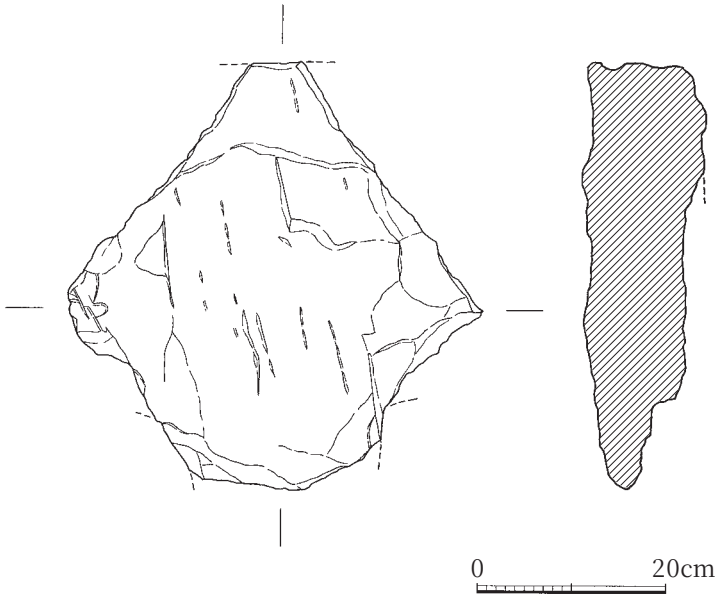
第28図　２号墳６トレンチ出土遺物実測図（２）(1/4)

壺である。口縁端部は欠損しているが、頸部からほぼ直線的に立ち上がる。胴部は球形に近い形状になると思われる。外面調整は口縁部に波状文、頸部はナデ、胴部はカキ目が施される。内面調整は口縁部から頸部にかけてはナデ、胴部は同心円タタキの後、ナデ消している。10は甕である。頸部から口縁部にかけて大きく屈曲している。頸部径で31.2cmとかなり大型のものになると考えられる。外面調整は口縁部から頸部が回転ナデ、胴部が平行タタキである。内面調整は口縁部から頸部

がナデ、胴部は同心円タタキをナデ消している。11は大型平底壺の底部である。底部から胴部にかけてはほぼ直立する形で立ち上がる。また、底面は剥落している。外面調整は上半がカキ目の後、平行タタキ、下半がケズリ後ナデを施す。内面調整はヨコナデ後、ケズリが施され、端部には一部指押えが見られる。12は短頸壺である。やや胴部が横に張り出した楕円形に近い形状である。口縁部は若干内傾しながら立ち上がり、内面端部は段を有する。外面調整は口縁部にナデ、胴部は全体にカキ目を見られ、下半にはその後、タタキを施す。内面は口縁部から頸部はナデ、胴部は同心円タタキ後、ナデ消している。13は壺である。胴部はほぼ球形をなす。外面調整はタタキの後カキ目、内面調整は同心円タタキを施す。14は短頸壺の胴部である。頸部から口縁部への立ち上がりがわずかに残存する。また、胴部中位が大きく張り出し、楕円形を呈する。外面調整は上半がナデ、下半がカキ目とナデを交互に施す。内面調整は上半がナデ、下半は同心円タタキを施す。

第28図はすべて器台である。１は２条の沈線により７段に分かれる。３段目の下部まではほぼ直線的に立ち上がるが、４段目から緩やかに外反し、脚端部に至る。端部の形状は内面から外面に向かって斜め方向に上げて仕上げられている。外面調整は１段目がカキ目、２～６段目が波状文を施文した後、三角形のスカシが施される。また、７段目はカキ目調整である。内面調整は基本的には回転ナデ後、スカシが穿孔されるが、１・２段目に関してはスカシ穿孔後に縦方向のナデがみれらる。また、スカシの数については、６段目以外は復元であるが、２段目が４ないし５方向、３段目が３方向、４～６段目が５方向となっている。

２は脚部上部の４段が残存する。やや外反気味の傾きである。外面調整は沈線で分かれた中をカキ目・波状文を施し、四角形のスカシが２段、３方向に穿孔されると思われる。３は１・２段目が残存し、脚端部に向かってやや内傾する。外面調整は１段目にカキ目、２段目に波状文が施され、その後おそらく３方向に四角形のスカシが穿孔される。内面はナデにより調整されている。４も１・２段目が残存する。３と同様に脚端部に向かって内傾する。外面調整はナデ、カキ目の後、１段目は上部に刺突文、下部に波状文、２段目は波状文を施文する。残存部では１段目に三角形のスカシが３ないし４方向に穿孔される。５は脚端部に向かって外反していく部位が３段分が残存している。外面調整は１段目がナデ・波状文、２段目がカキ目、波状文の後、三角形スカシを穿孔する。３段目はカキ目が施される。内面調整はナデ・回転ナデが見られる。また、スカシは４方向と思われる。６～12は脚端部である。６は２段分が残存し、やや外反しながら端部に至る。端部は内面から外面に向かってわずかに斜めに上がる。外面調整はカキ目、回転ナデの後、２条の沈線が施され、上段には波状文、下段にはカキ目が施される。その後、上段には４方向の長方形スカシが穿孔される。内面は指押えの後、回転ナデが施される。７は３段分が残存し、２段目上部から脚端部に向かっってやや内傾するが、最下段の沈線部分から外反し、端部で再び内湾する。端部は内面から外面へ斜めにあがる。１段目はわずかに残存する程度であるが、４方向に方形スカシが穿孔されていたと考えられる。外面調整はカキ目の後、波状文を施文するが、最下段の波状文は１条のみである。内面調整はナデを施す。８は２段分が残存しし、端部にむかって緩やかに外反する。端部は他の器台と異なり、平坦に仕上げられている。外面調整はカキ目の後、波状文が施されるが、最下段の波状文はごく一部しか見受けられない。端部付近はナデにより仕上げられる。その後、５ないし６方向に方形スカシが穿孔される。内面調整は全面にわたりナデが施される。９は３段分が残存するが、最上段の残りはわずかである。端部に向かってほぼ直線的に広がり、端部は内面から外面に向かっ



第29図　２号墳６トレンチ出土遺物実測図（３）（1/8）

て斜め方向に仕上げられる。外面調整は２段目に波状文、最下段はカキ目の後ナデが施され、４方向のスカシが穿孔されるが、形状は不明である。内面調整は指押えの後、ナデを施す。10は２段分が残存し、端部に向かって直線的に広がる。端部は９と同様に内面から外面へ向かってやや斜めに仕上げられる。外面調整はカキ目後、１段目に波状文、２段目にナデが施され、スカシが穿孔されるが、形状は不明である。内面調整は指押え後、ナデが施される。11は最下段のみが残存し、端部に向かってやや外反する。端部は比較的丸く仕上げられる。残存部上面にはスカシが残る。外面調整はカキ目の後、残存部の上端あたりに波状文が施文される。内面調整は回転ナデが施される。12は最下段のみが残存し、端部に向かって外反するが、端部付近やや内傾する。端部は平坦に仕上げられる。外面調整はカキ目の後、波状文・ナデが施される。内面調整はナデである。

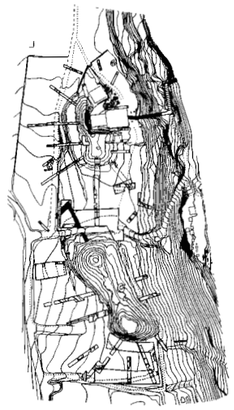
第29図は凝灰岩製の石製品である。長さ44.7cm、最大幅43.5cm、最大厚12.7cmである。上面と下面には平滑に仕上げた加工痕が残り、表面全体にノミ痕が見られる。石人である可能性も考えられるが、ここでは明言を避けておきたい。

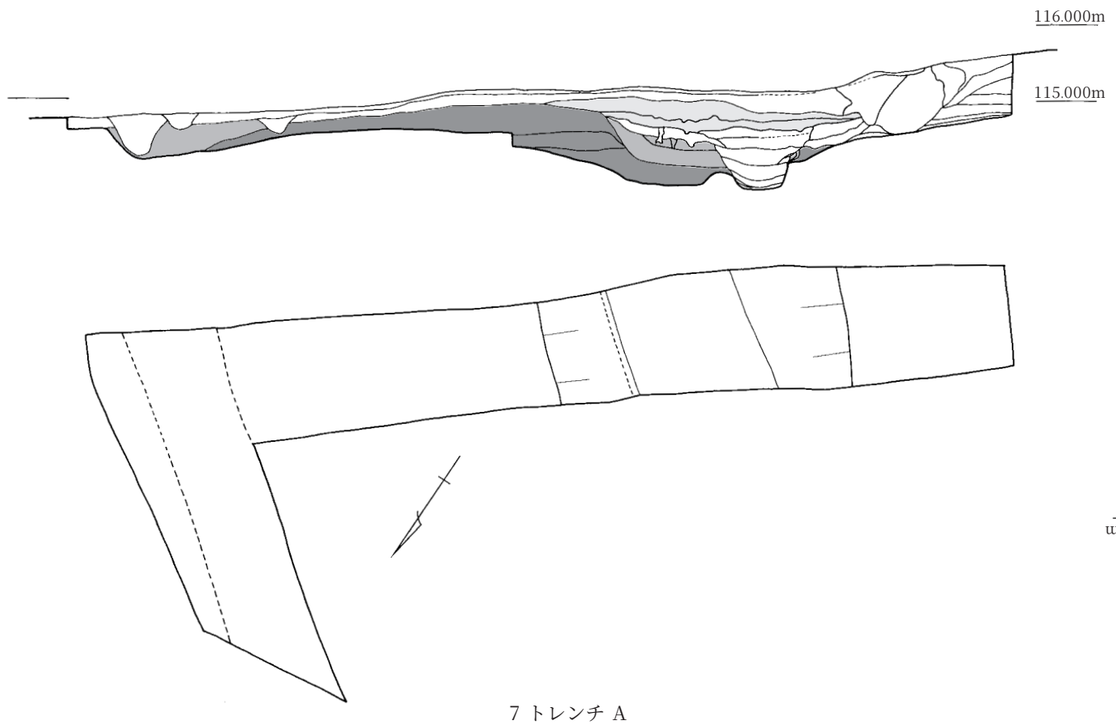
７トレンチA・B（旧５トレンチ）（第30図、図版33・34）

後円部北東側に設定したトレンチで里道を挟んで東側を７トレンチA、西側を７トレンチBとした。７トレンチAは北東方向に長さ12m、幅1.6m、北西方向に長さ4.5～5.2m、幅1.6mのトレンチである。調査の結果、墳丘側から約2.2m、10.2mの地点に周溝と思われる溝が２条検出された。溝の幅は、内周溝が2.5m以上、外側周溝が1.1mである。内側の溝は平面では確認できなかったが、土層断面から底面のレベルは113.7mである。

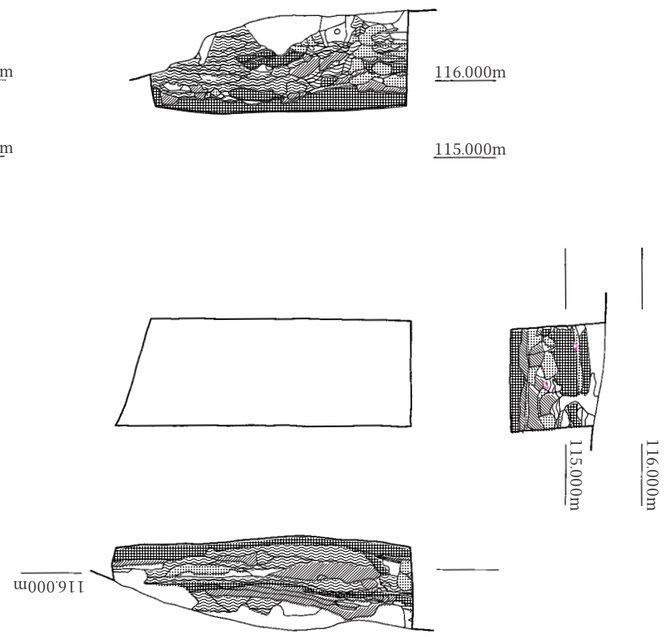
溝の埋没状況を見てみると、ブロックの混入はあまり見られず、両側からの流れ込みがみてとれる。埋没後、後世に溝が掘り込まれている。

７トレンチBはAの西側に里道を挟んで、墳丘盛土を確認する目的で長さ3.6m、幅1.6mで設定した。調査の結果、墳丘の版築状況を確認することができた。墳丘は、一旦地山を平坦に整地した後、茶褐色ロームのブロックと旧表土を交互に盛り、その上に黄褐色ロームと小礫・旧表土などの混入土を盛っている。この盛土が終了した時点で上面を平坦に整形しており、これを第１段階の盛土とみることができる。第２段階はこの上層は黄褐色ロームに茶褐色ローム、旧表土の混入土を盛っている。これより上層は削平うけているが、そのレベルから７トレンチA確認された地山の立ち上がりに対応するものと考えられる。こうした版築、地山の状況が墳丘土と考えれば、７トレンチAで確認された溝は周溝と考えていいだろう。

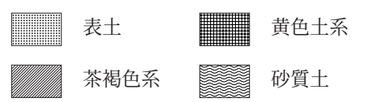


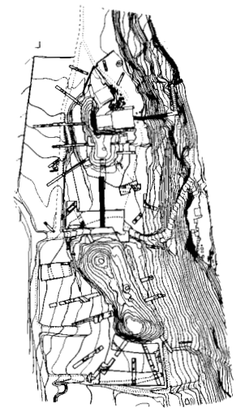


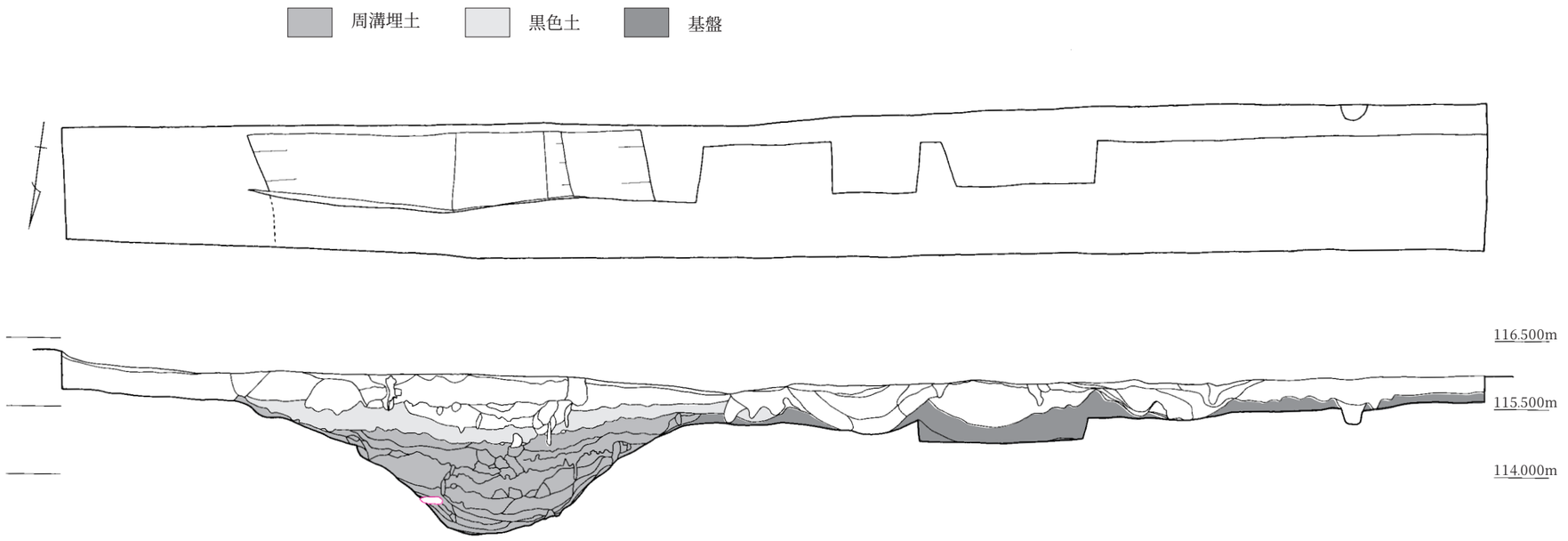
7 トレンチ A



7 トレンチ B







8 トレンチ

0 2m

第30図　２号墳７・８トレンチ実測図（1/80）

また、７トレンチＢで確認された内側溝は、墳丘側の肩が削平をうけているため、その幅は明確でないが、土層から断面は逆台形状を呈し、平坦に整地されていることがわかる。さらに底面からの立ち上がりが確認でき、幅を想定すれば３m以上になると思われる。他のトレンチで確認された周溝より幅広くなるが、これはちょうど古墳の主軸上にあり、また尾根筋のもっとも高い部分に掘り込まれていることによるのではないかと考えられる。

図化可能な遺物は出土しなかった。

８トレンチ（旧中央トレンチ）（第30図、図版35・36）

後円部のほぼ主軸に沿って長さ20.8m、幅1.7～2.1mのトレンチを設定した。なお、後述する２号墳１トレンチはこの８トレンチを延長する形で設定しており、２つのトレンチを合わせた長さは29.8mとなる。調査の結果、墳丘側から約2.7mの地点に周溝とみられる溝が検出された。内側溝は幅１～1.2mのサブトレンチを設定し、掘り下げを行なって、埋没状況の確認を行った。溝の幅は6.6mで、周溝底面のレベルは113.6mである。

土層の堆積状況は表土の下に木の根による攪乱層が見られる。溝以外の部分は、その下層は黄褐色粘質土の地山となり、これを掘り込んで周溝が作られている。溝埋土の上層には他のトレンチと同様に黒色土が堆積している。溝の埋没状況は墳丘側からの細かい流れ込みが見られ、その後、外側からの堆積が見られ、溝がある程度埋没した段階でブロックの流れ込みがあったと考えられる。

こうした土層の堆積状況や７トレンチで確認された周溝とのつながりから、この溝は後円部側の内側周溝と判断できる。外側周溝については、検出をしたものの、実測の不備から詳細を述べることができない。遺物は弥生土器片が数点出土したのみである。

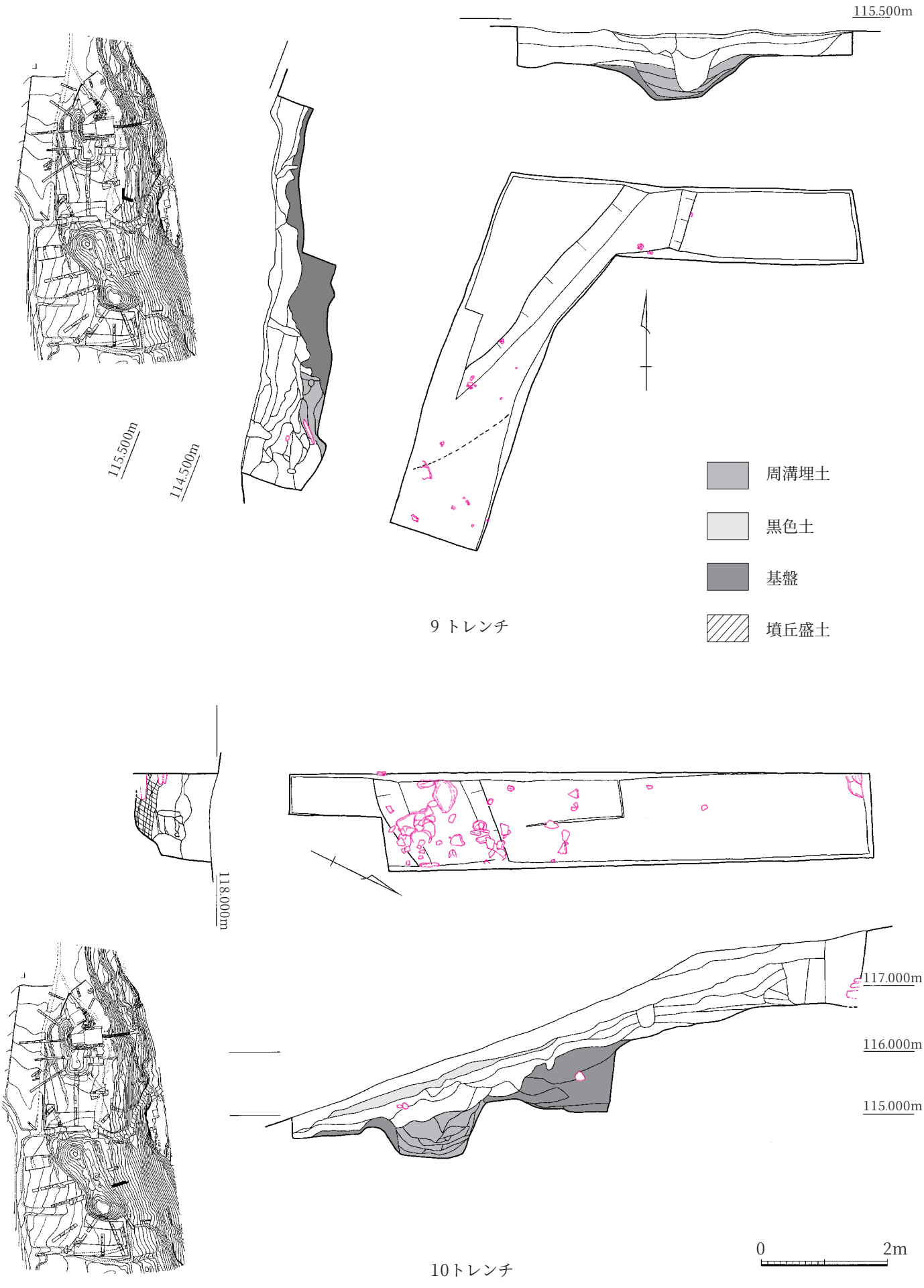
９トレンチ（旧６トレンチ）（第31・32図、図版36・37・56）

後円部南東側に東方向へ長さ5.3m、幅1.2m、南方向へ長さ5.9m、幅1.5mで設定した「Ｌ」字形のトレンチである。調査の結果、墳丘側から北東に約1.8m、南西側に3.2mの地点に後円部側からクビレ部側へ伸びる周溝と思われる溝を検出した。南側では溝内側の肩を確認できたものの、外側は削平により確認できなかった。この溝については全掘を行なったが、北壁側での幅は1.2mで底面のレベルは114.2mである。８トレンチで確認された周溝との関係からこの溝も周溝と考えていいだろう。

土層の堆積状況をみると、北側は表土の下に砂質層が堆積し、その下に溝埋土が見られる。一方、西側でも他のトレンチで確認された黒色土は見られず、褐色系の粘質土が堆積し、その下層は地山である。西側は南へ向かって傾斜しているため、墳丘盛土やブロックの流れ込みが激しかったことが窺える。その下層には溝埋土が見られる。

溝の埋没状況をみると北側では外側の肩の崩れが大きいと推定できるがレンズ状堆積を基本とする。また西側ではブロックの混入が多い。西側は大きく削平を受けたと見られ、下端も確認できない状況である。後世の削平もしくは傾斜の影響による地盤の崩落などがあったと考えられる。

第32図１～３の須恵器、５・６の土師器が９トレンチ出土である。１はほぼ完形の坏蓋である。つまみをもち、口縁端部には段を有する。外面全体に焼成時の融着物が付着し、調整は判別できない。内面は天井部を中心にタタキの痕跡があり、その後ナデ消している。２は高坏口縁部である。



第31図　２号墳９・10トレンチ実測図（1/80）

端部へほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。調整は、外面の受部との境に沈線が施され、内外面とともに回転ナデが施される。３は口縁部片であるが器種は不明である。端部下部は突帯状につまみ出し、その上部は回転ナデ、下部には波状文が施文される。内面はナデ調整である。５・６は高坏坏部である。５は口縁端部に向かって直線的に立ち上がり、端部付近はやや外反する。端部は丸く仕上げられる。外面は工具によるナデと一部タテハケの後、回転ナデ、内面は工具ナデと回転ナデが施される。６は脚部との接合部まで残存、口縁端部向かって内湾しながら立ち上がり、端部でやや外反する。端部は丸く仕上げられる。外面調整は中位付近にタタキが見られ、全体には回転ナデが施される。内面は縦・横の工具ナデの後、回転ナデが施される。

10トレンチ（旧７トレンチ）（第31・32図、図版38・39・56）

墳丘クビレ部の南側に長さ7.8m、幅1.4mのトレンチを設定した。調査の結果、墳丘側から約６ｍのトレンチ南端で周溝と思われる溝を確認し、さらに南側へ長さ1.4m、幅0.5m分の拡張を行った。掘り下げの結果、幅1.4m、底面のレベルは114.3mであることが確認された。墳丘側には落ち込みが見られ、板石数枚が検出されたことや溝埋土中の遺物、墳丘との位置関係から内側周溝と考えていいただろう。

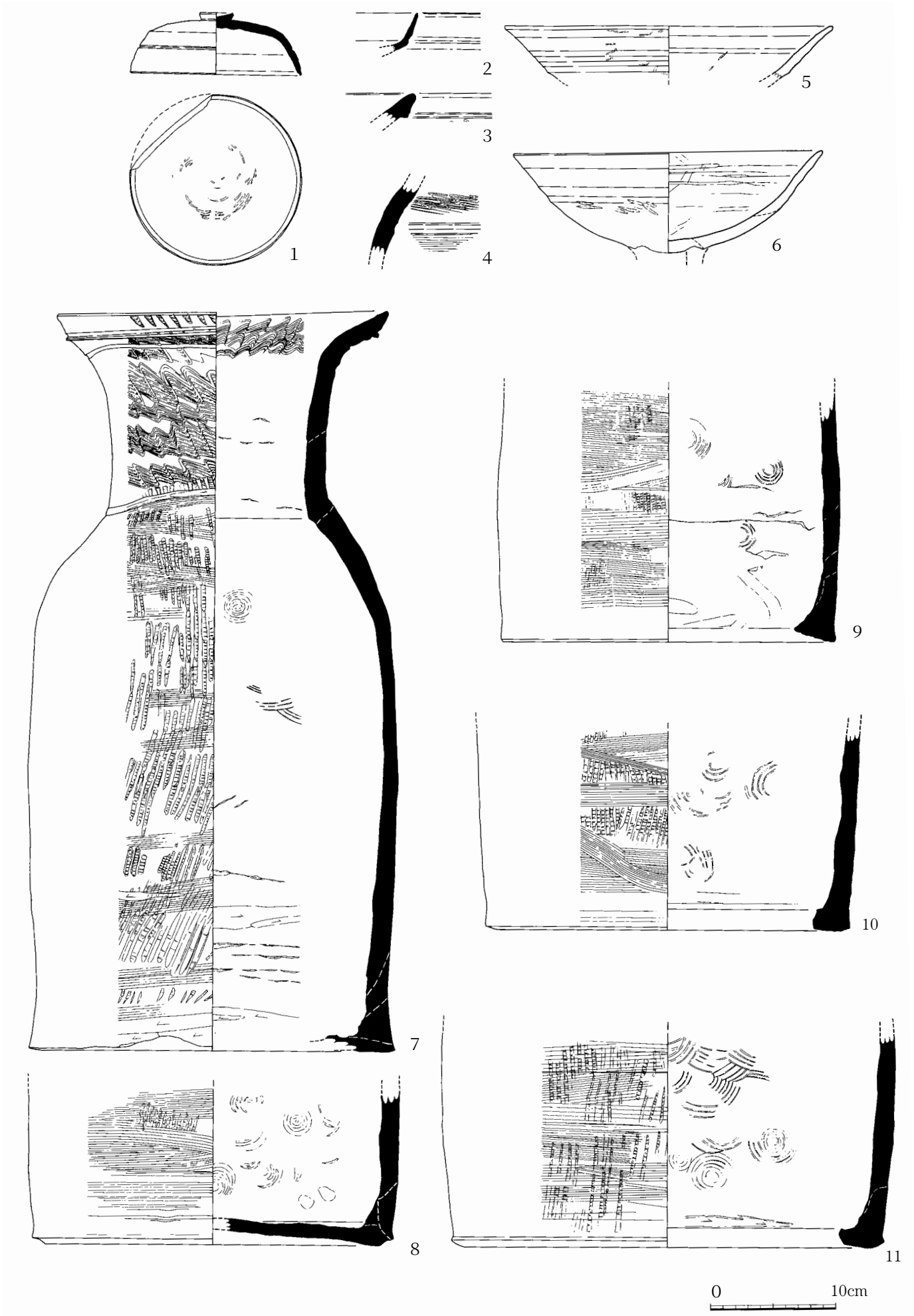
土層の堆積状況をみてみる。このトレンチを入れた部分は南側へ向かって、急斜面になっており、土層もその地形に沿って傾斜して堆積している。表土の下は周溝の上層に黒色土が堆積しており、墳丘側には版築層が見られ、その上層に墳丘からの流土とみられる土が堆積しているが、地形が急傾斜になっているため、頻繁に墳丘土などの流出があったためであろう。

周溝の埋没状況をみると、墳丘側からの細かい堆積がみられ、その後、外側からの堆積がみられる。墳丘側からの堆積が多く見られるのも、急傾斜地であることに起因するものであろう。

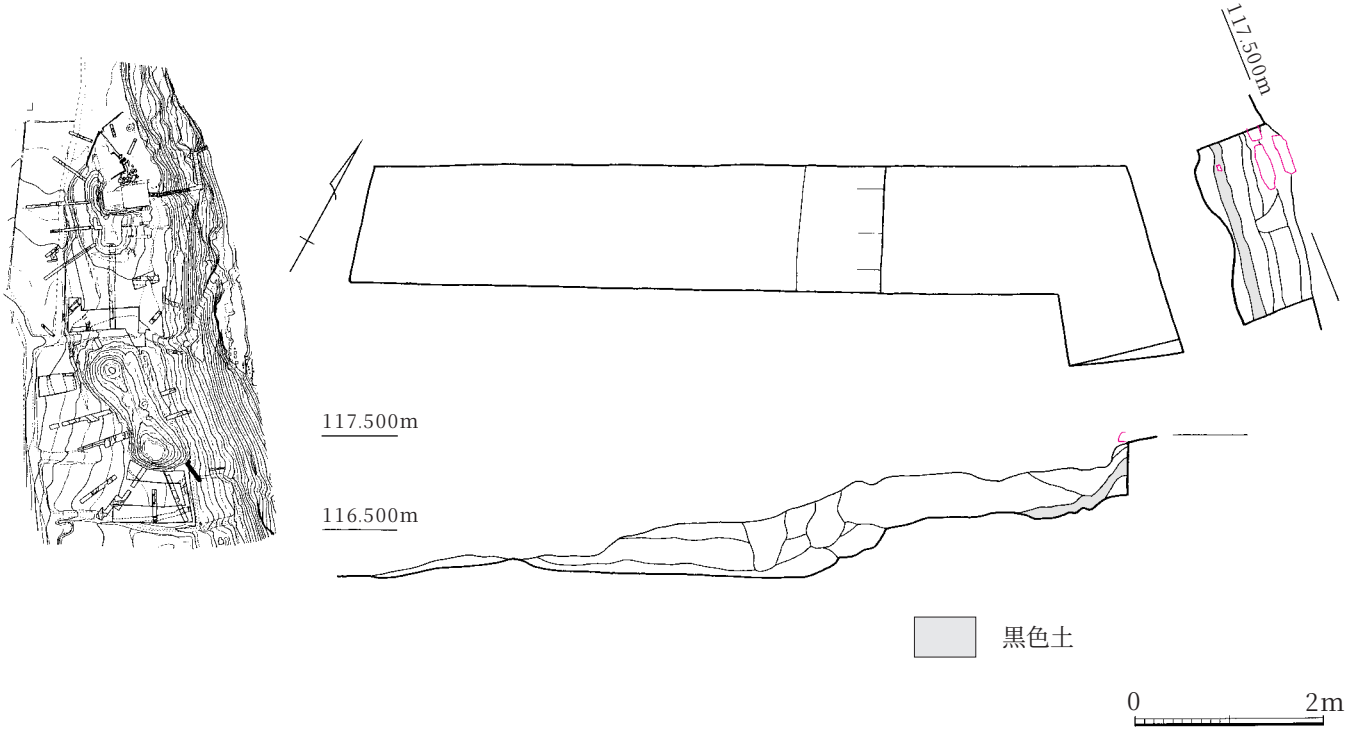
また、墳丘側の落ち込みは板石の存在から墓道の可能性が指摘できる。この落ち込みは版築層を切っていることから追葬に伴う可能性がある。

埋土中から完形に近い須恵器・大型平底壺が出土している。これはクビレ部に樹立されていたと考えられ、北側の５トレンチ同様の状況が窺える。

10トレンチ出土遺物は第32図４、７～11ですべて須恵器である。４は大型平底壺の頚部と思われる。口縁部に向かってやや外反しながら立ち上がる。外面にはカキ目の後、沈線が施され、その上部は波状文が施文される。内面調整は回転ナデである。７は大型平底壺である。口縁部は頚部から直線的に立ち上がり、端部に向かって外反するが、つまみ出しの突帯からわずかに内湾する。端部は丸く仕上げられる。また肩部・胴部ともに張りは少ないが、底部付近で若干内湾し、端部で再び外反気味になる。底面はわずかに上げ底気味になると思われる。外面調整は口縁端部、突帯部分に刺突状文、その下部にヨコナデ後、波状文を施文するが、突帯下部はその後、沈線が施されている。頚部から胴部はカキ目の後、平行タタキによって仕上げられ、底部付近では横方向のケズリが施される。内面は口縁部端部近くにナデ後波状文が施文され、頚部にかけては縦方向のナデの後、横方向のナデが施される。胴部上半では同心円タタキの後ナデ、下半では縦、横の順にナデが施される。８～11は大型平底壺の底部で、８は底部穿孔がされていないタイプ、９～11は底部穿孔がされているタイプである。８は胴部がほぼ直線的に立ち上がり、底部は上げ底である。外面にはタタキの後、カキ目、外底面にはナデが施される。内面は同心円タタキの後、内底面にはナデが施される。９は



第32図　２号墳９・10トレンチ出土遺物実測図（1/4）



第33図　２号墳11トレンチ実測図（1/80）

胴部がわずかに膨らみを持ちながら立ち上がり、端部は外面から内面へ向かって斜めに仕上げられる。外面調整はカキ目の後、タタキ・ナデが見られる。内面調整は同心円タタキの後、ナデが施され、底部近くではナデの痕跡が明瞭にみられる。10・11はともに胴部が外傾しながら直線的に立ち上がる。10は底面端部を平坦に仕上げる。外面はタタキの後、カキ目を施すが、一部ナデが見られる。内面は同心円タタキの後、ナデを施す。11は底面端部をやや丸く仕上げる。外面調整はタタキの後、カキ目が施される。内面は同心円タタキ、底部付近はナデが施される。

11トレンチ（旧８トレンチ）（第33図、図版40）

前方部南西側に長さ８m、幅1.4m、墳丘側を幅２mに拡張したトレンチを設定した。調査の結果、墳丘側から約2.6mの地点に溝状の落ち込みを１条検出した。掘り下げの結果、深さは約50cmであることが判明した。１次調査段階ではこの溝は内側周溝で、剣菱形周溝の一部と考えられたが、結果的に５次調査は周溝にはならないことが判明した。しかし、墳丘構築時の設計線と考えられる３トレンチ墳丘側の落ち込みと同様のものと考えることができる。また、トレンチ北東側の断面に数枚の板石が確認され、後円部に構築された横穴式石室の石積みの可能性がある。

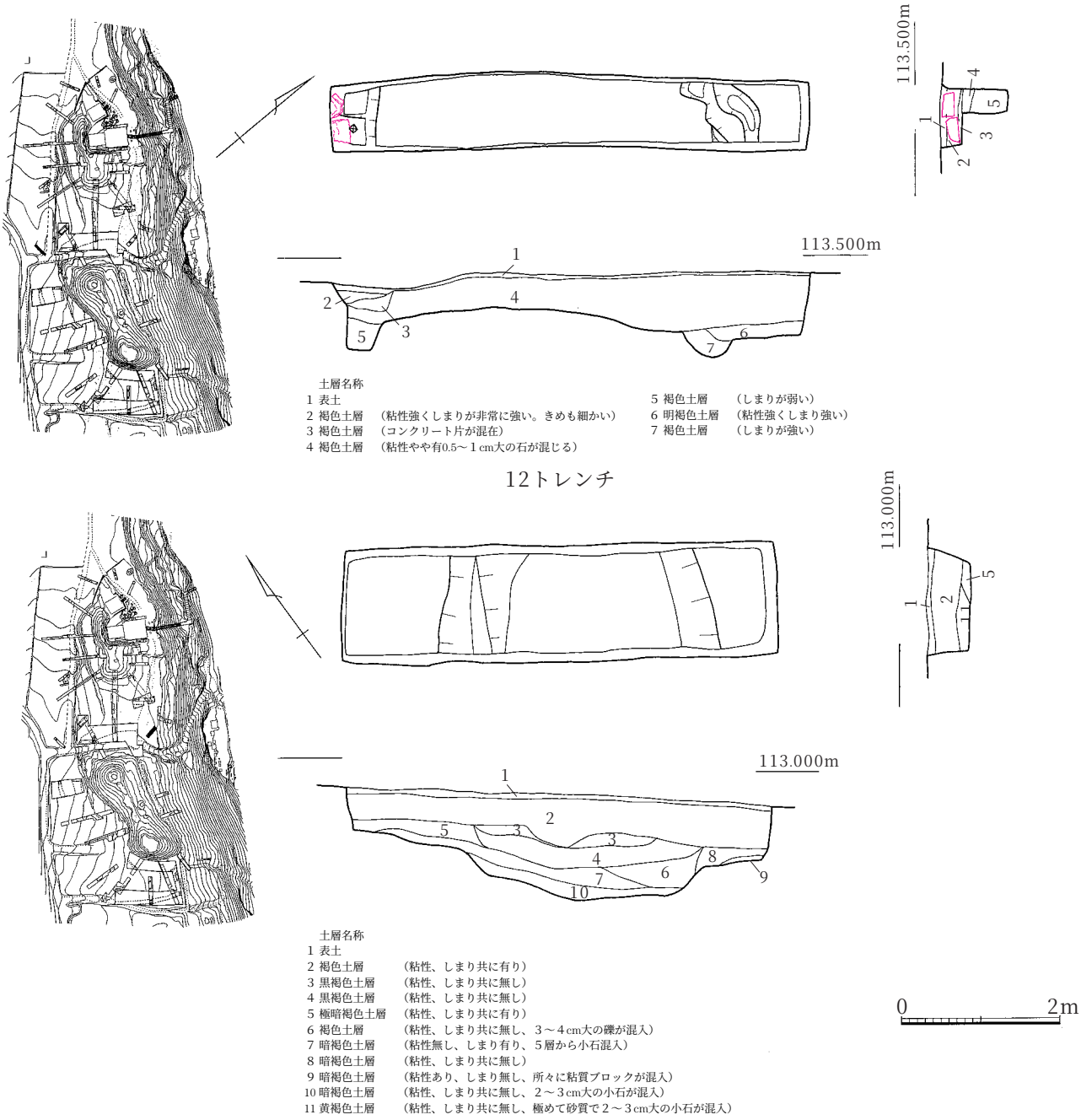
土層の堆積状況をみると、厚い表土層の直下が地山になっている部分も見られるが、墳丘側の石積みが確認された部分は黄褐色粘質土が細かく堆積している状況も確認できる。こうしたことから、版築である可能性も指摘できよう。（若杉）

12トレンチ（第34図、図版40）

外側周溝の確認のため、墳丘から北東方向に長さ6.0m、幅0.85mのトレンチを設定した。

調査の結果、トレンチの南側で地表面から0.9m掘り下げたところ、外側周溝の北側の周溝底を検出した。周溝底の標高は112.3mである。遺物等は検出されなかった。

土層の堆積状況は、締りが良くないものの５層の褐色土が周溝埋土である。周溝肩については上面が削平を受け４層が厚く堆積する。トレンチ北側でも落ちが見られるが、木の根の攪乱によるものである。また、２層はコンクリートの境界杭を検出し、ブロック片などが底付近まで包含されていることから、杭を埋めるための掘り方であると考えられる。（玉川）



土層名称
1 表土
2 褐色土層　（粘性強くしまりが非常に強い。きめも細かい）
3 褐色土層　（コンクリート片が混在）
4 褐色土層　（粘性やや有0.5～１cm大の石が混じる）
5 褐色土層　（しまりが弱い）
6 明褐色土層　（粘性強くしまり強い）
7 褐色土層　（しまりが強い）

12トレンチ

土層名称
1 表土
2 褐色土層　（粘性、しまり共に有り）
3 黒褐色土層　（粘性、しまり共に無し）
4 黒褐色土層　（粘性、しまり共に無し）
5 極暗褐色土層　（粘性、しまり共に有り）
6 褐色土層　（粘性、しまり共に無し、３～４cm大の礫が混入）
7 暗褐色土層　（粘性無し、しまり有り、５層から小石混入）
8 暗褐色土層　（粘性、しまり共に無し）
9 暗褐色土層　（粘性あり、しまり無し、所々に粘質ブロックが混入）
10 暗褐色土層　（粘性、しまり共に無し、２～３cm大の小石が混入）
11 黄褐色土層　（粘性、しまり共に無し、極めて砂質で２～３cm大の小石が混入）

13トレンチ

第34図　２号墳12・13トレンチ実測図（1/80）

13トレンチ（第34図、図版41）

２号墳南側崖面に内側周溝が巡っているかを確認するため、墳丘南東方向に長さ5.4m、幅1.4mのトレンチを設定した。調査の結果、地表面から0.4m掘り下げたところに内側周溝と考えられる溝が検出された。

トレンチ上部の堆積状況は１表土層、２褐色層となっている。内側周溝と考えられる溝は地山に掘り込まれ、検出面での上端幅約1.4m、底幅約1.05m、深さ0.3mを測る。底面が攪乱による掘り込みが確認できるものの、逆台形状を呈する。溝は北東から南西に伸びる。溝の埋土は３層確認することができる。最下層に10暗褐色土が凹レンズ状に堆積する。10の直上層である７暗褐色層の堆積によって溝は完全に埋没する。土層の堆積状況から墳丘からの流れ込みによる堆積と考えられる。７と同様に10の直上に堆積する６褐色土は７が堆積した後の掘り込みによる堆積の可能性が高い。そのため、８暗褐色土は７と同一と考えられる。また、７が堆積後に５極暗褐色土が堆積するが掘り込まれ４黒褐色土層が堆積する。４の直上には３黒褐色土が堆積するが、３を掘り込んだ痕跡が確認できる。

溝の時期を決定する遺物は出土していないものの、北側のＡ区北側で検出された溝と底の標高がほぼ同じであるため、同一の溝であると考えられる。Ａ区北側では検出面から溝底面まで約2.0mを測るのに対し、13トレンチでは検出面から溝底面まで約0.3mを測る。このため13トレンチでは大きく削平されたものと考えられる。なおＡ区北側で検出された溝とは主軸方向が異なるため、13トレンチで検出された溝は後円部の内側周溝の一部と考えられる。（手柴）

14トレンチ（第35図、図版42）

墳丘南側の端部及び、内側の周溝を確認するため、10トレンチ東側に設定したトレンチである。トレンチは長さ5.6m、幅1.5mで、墳丘軸に対し垂直方向に設定した。

調査の結果、遺構検出時点で、トレンチ北側から3.3mのところで東西にはしる周溝を検出した。トレンチ東側で、周溝がどのように延びているのかを確認するために、東側壁面から0.7m幅でサブトレンチを設定し掘り下げを行った。周溝は北側の肩から底面、対岸の立ち上がりまで検出し、逆台形を呈している。周溝底面の標高は113.65mで、遺構検出面から1.3m、地表面から2.0mのレベル差がある。また、15トレンチから10トレンチに延びる周溝軸と本トレンチの周溝の軸を比較すると、南側にハの字に広がっているため、10トレンチとの間に周溝のクビレ部が存在するものと思われる。

土層の堆積状況を見ると、全体的に墳丘盛土の流土の堆積土である。周溝埋土は16褐色土・15暗褐色土・14暗褐色土層がレンズ状堆積を呈している。16層は周溝の南側肩が崩落して堆積したもので、15・14層が墳丘築造当時の地表面のレンズ状堆積であると思われる。これより上位の13層は厚く堆積しているため、短期間のうちに盛土が流出したものと見られる。流土のうち５褐色土、13褐色土は遺物包含層で、５層から横瓶、13層から坏身（高坏）が出土した。また４・８層からは第47図12～17の弥生土器が出土していることから、墳丘築造時に弥生前期末から中期前半の遺構を破壊し、墳丘盛土として盛ったことが窺える。つまり、墳丘築造時の地表面が崩落した後、墳丘内側の盛土が流出したものであると考えられる。

第36図１～７は出土須恵器である。

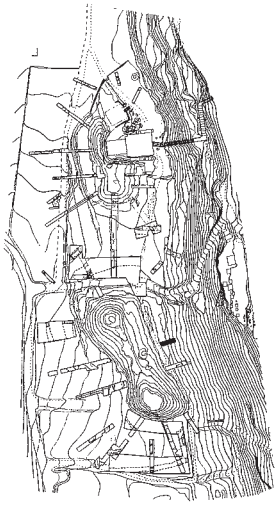
１は坏身である。復元口径14.2cm、残存高4.4cmを測る。外面は回転ナデ、回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによって調整されている。時期はＴＫ10からＭＴ18段階に比定される。２・３は器台である。２は残存高24.0cmを測る。９条の沈線が回り、円形スカシ、方形スカシが縦に３段確認でき、円形スカシは１列に８個、方形スカシは４個あったと推定される。円形スカシ、方形スカシとも外面から作られている事がわかる。外面はカキメ後波状文を施している。内面は円形スカシより上はタタキによる調整、下はナデによる調整で粘土帯の痕跡も見られる。３は復元底径25.4cm、残存高7.0cmを測り、２条の沈線が回っている。内外面とも回転ナデによって調整されており、スカシも確認できる。底部端部には１部窯の融着物が付着する。４・５・６は大型平底壺である。４は大型平底壺の口縁部と思われる。端部にかけて外反し端部は内湾し、復元口径31.8cm、残存高7.1cmを測る。外面の口縁端部に三角状の突帯を貼り付け肥厚させ、下位では1条の沈線が回っている。沈線より上の波状文は上段を施した後、下段を施している。内面はヨコナデで調整されている。５は口縁部で端部にかけて外反し、端部は若干内湾し、復元口径28.25cm、残存高7.2cmを測る。口縁部に２条の沈線を回らし、この間に櫛歯連点文が施されている。外面は全体的にカキメで調整しており、口縁部はカキメ後連続櫛歯連点文、下位に波状文を３条施している。また回転させながら螺旋状に施文してあるためか、１部波状文が重なっている。内面はヨコナデ後に２条の波状文を施してある。６は胴部から底部である。復元底径25.4cm、22.9cmを測る。外面は全体的にタタキによる調整があったと思われるが、後にヨコナデが施されているため、わかり難い部分もある。底部付近には１部工具ナデとヘラ削りで調整を施されている。内面は全体的にタタキによる同心円文がみられるが、１部ヨコナデによる調整が見られる。また底部は粘土接合痕から外れていることから、底部があったものと思われる。７は横瓶である。口径7.8cm、頸部径8.3cm、胴部径長軸26.9cm、短軸20.7cmを測る。口縁部は短く肥厚し、口唇部は平坦である。外面は平行たたきを施した後カキメで調整しており、底部には粘土塊が厚さ１cm前後融着している。また頸部には蓋をつけて焼いたと思われる痕跡が残っている。内面はヨコナデによって調整してあるが、胴部は不明である。この横瓶は指とヘラで形整してある環状把手がついているのが特徴である。　　（玉川・末國）

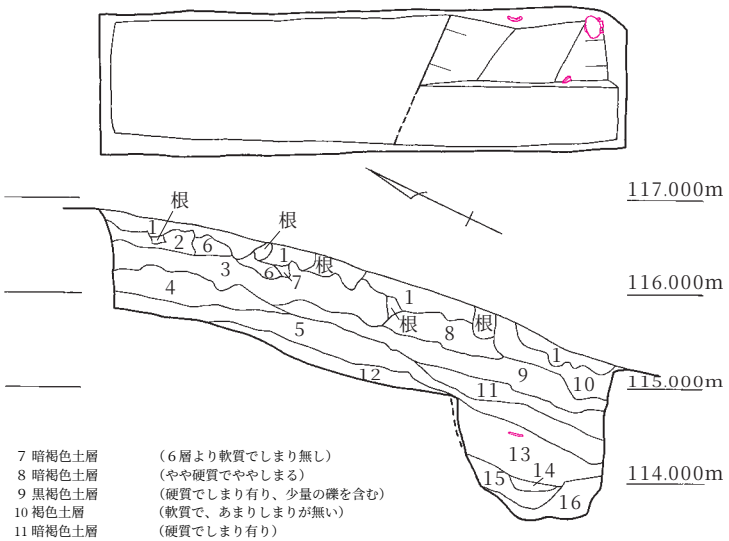
15トレンチ（第35図、図版43）

２号墳南側崖面に内側周溝が巡っているかを確認するため、墳丘南西方向に長さ5.6m、幅0.5mのトレンチを設定した。調査の結果、地表面から約0.15m掘り下げたところに内側周溝と考えられる溝が検出された。

土層の堆積状況をみると、溝の埋土は5層確認することができる。最下層に５にぶい黄褐色土が堆積し、７灰黄褐色土、６褐色土が凹レンズ状の堆積を呈する。４暗褐色土は南北方向の傾斜のために生じた、流れ込みの堆積である。同様に３黄褐色土も流れ込みによる堆積で、溝が完全に埋没している。また、上面では１暗褐色表土層、２黄褐色土、8にぶい黄褐色土となっている。内側周溝と考えられる溝は地山に掘り込まれ、検出面での上端幅約0.7m、底幅約0.3m、深さ約0.5mを測る。やや歪んだ逆台形状を呈し、東西方向に延びる。周溝底の標高は113.25mである。

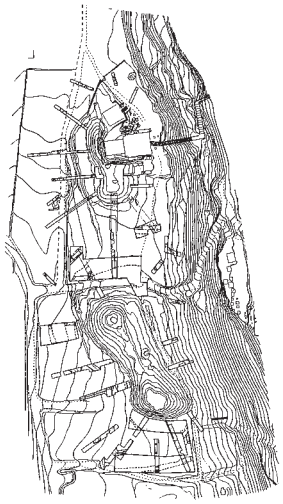
溝の時期を決定する遺物は出土していないものの、東側に設定した第10トレンチで確認された溝と主軸を共有することから、古墳に伴う内側周溝と考えられる。隣接する西側のＣ区で検出された内側周溝と考えられる溝は主軸を南北方向とする。主軸方向が第15トレンチから検出された溝とは

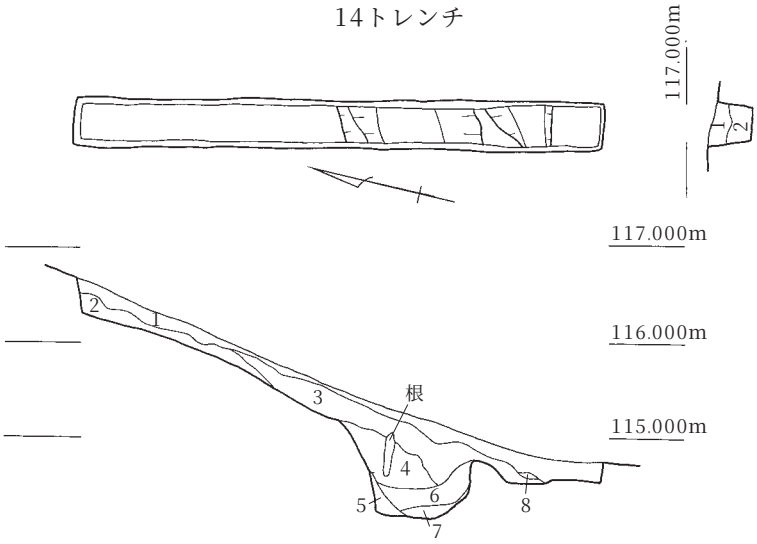




土層名称
1 暗褐色土層　（しまり無く、ばさばさ）
2 褐色土層　（軟質でややしまる。少量の礫を含む）
3 暗褐色土層　（やや軟質でしまり有り、少量の礫、炭を含む）
4 褐色土層　（軟質でややしまる）
5 褐色土層　（砂質でしまり有り、礫を多く含む）
6 暗褐色土層　（軟質で、あまりしまりが無い）
7 暗褐色土層　（6層より軟質でしまり無し）
8 暗褐色土層　（やや硬質でややしまる）
9 黒褐色土層　（硬質でしまり有り、少量の礫を含む）
10 褐色土層　（軟質で、あまりしまりが無い）
11 暗褐色土層　（硬質でしまり有り）
12 にぶい黄褐色土層　（砂質で5層よりしまりが無い）
13 褐色土層　（やや硬質でしまり有り）
14 暗褐色土層　（硬質でしまり有り）
15 暗褐色土層　（砂質でしまり有り、にぶい黄褐色ブロックを含む）
16 褐色土層　（やや砂質であり、あまりしまりが無い）

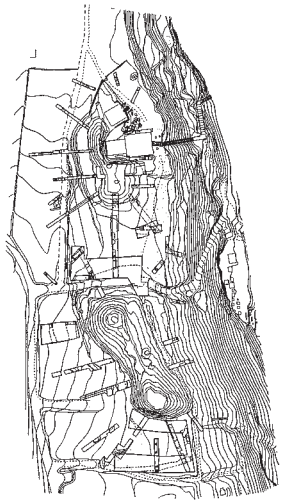
14トレンチ

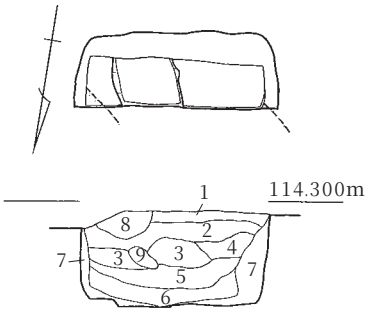




土層名称
1 暗褐色土層　（砂質でしまりが有る）
2 黄褐色土層　（砂質でしまりが有る。3～7㎜程度の礫を多く含む）
3 褐色土層　（砂質でしまりが有る。1～3㎜の礫を多く含む）
4 暗褐色土層　（やや硬質でしまっている。1～5㎜の礫を含む）
5 にぶい黄褐色土層　（6層よりしまりが有り、やや硬質）
6 褐色土層　（やや軟質で、ばさばさである）
7 灰黄褐色土層　（やや硬質でしまりが有る）
8 にぶい黄褐色土層　（硬質でしまり有り、粘土質である）

15トレンチ





土層名称
1 黒褐色土層　（表土、砂質でしまりが無い）
2 明褐色土層　（やや粘質で軟質である。小礫を含む）
3 褐色土層　（粘質でしまり有り）
4 褐色土層　（粘質でしまり有り）
5 黄褐色土層　（粘質でしまり有り、細かな小礫を含む）
6 黄褐色土層　（粘質でしまり有り）
7 黄橙色土層　（基盤層、粘質高く、しまり有り）
8 黒褐色土層　（木の根によるカクラン）
9 褐色土層　（木の根によるカクラン）

16トレンチ

0　2m

第35図　２号墳14～16トレンチ実測図（1/80）

異なるが、北側の第３トレンチで周溝の隅部が確認されており、墳丘主軸で反転すると南側では15トレンチのやや西側に隅部を想定することができる。また、南側斜面の内側周溝底は、Ｃ区内側周溝底との標高差が1.75m、10トレンチでは1.05mもあることから、斜面上の周溝は平面的には規格性のある築造であることが窺える。（手柴）

16トレンチ（第35図、図版44）

Ａ区で再検出した７トレンチの外側周溝がＡ区北側壁面で、南側に立ち上がっていたため、周溝の方向軸を確認するのが困難であった。そのため周溝の方向軸を確認するために、現況で削平を受けている北側斜面に長さ1.8m、幅0.8mで設定したトレンチである。

調査の結果、現地表面から1.0mのところで内側周溝の底を検出した。周溝底の標高は113.3mである。周溝は北西方向に延びており、12トレンチで検出した溝につながるものと考えられる。Ｂ区外側周溝底の標高が112.6mであるため、Ｂ区に向けて0.7m周溝底が下降している。

土層の堆積状況を見ると、全体がレンズ状堆積を呈しており、墳丘盛土が流れ込んだものと思われる。（玉川）

17トレンチ（旧８トレンチ）（第36・37図、図44・57）

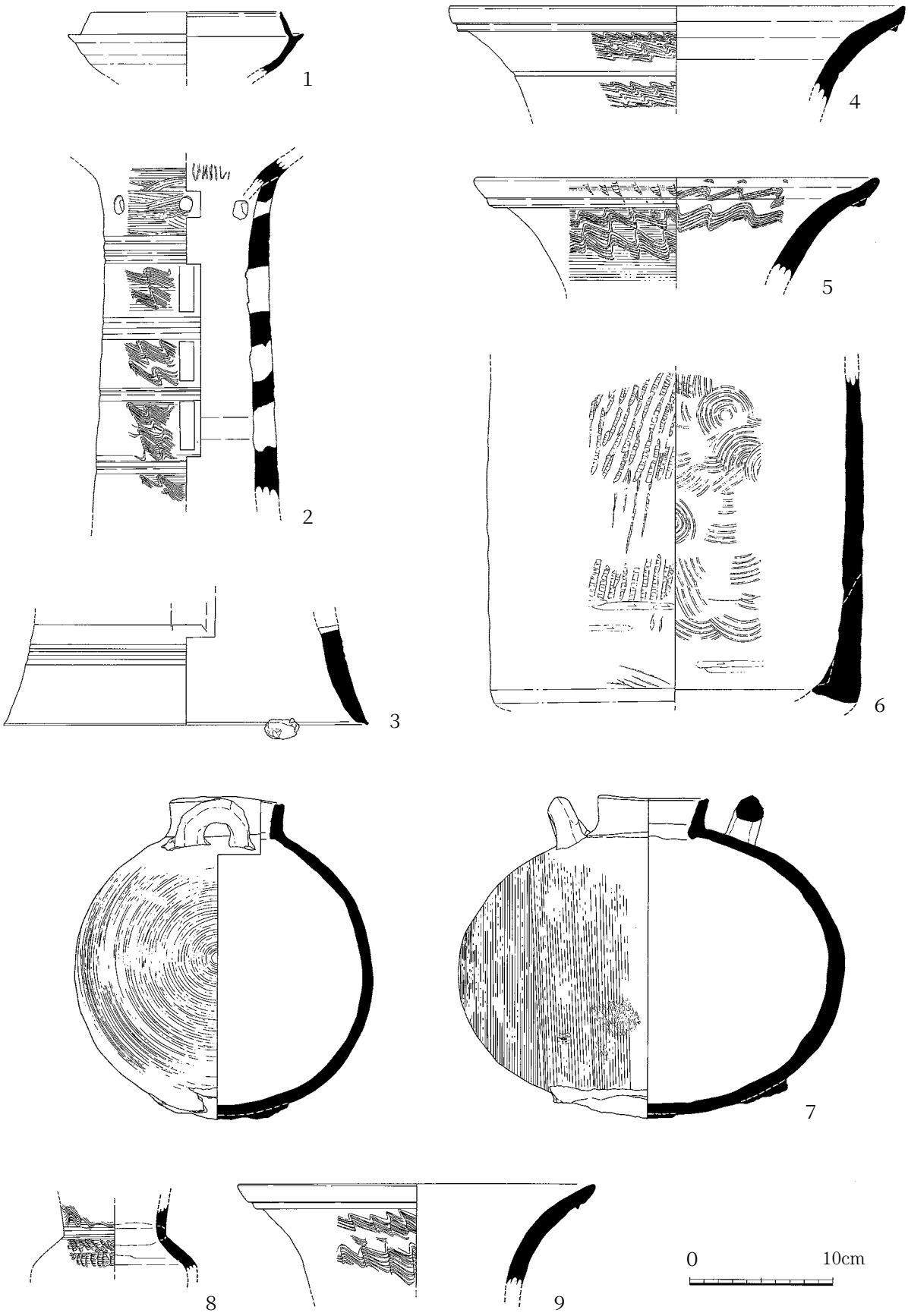
後円部南側に設定した、長さ5.8m、幅0.9～1.2mのトレンチである。掘り下げの結果、墳丘側から約2.5mの地点に周溝と思われる溝１条を確認した。幅は0.5～0.8mで、内側の肩から底面までの深さは約1.3mで、底面のレベルは112.1mである。周溝底面での幅は約45cmで、他のトレンチで比べ、狭くなっている。

土層の堆積状況をみると、墳丘側は表土の下に墳丘盛土の流土が見られる。周溝の外側には地山を掘り込んで平坦に整地している面が見られる。これは２号墳３トレンチや11トレンチで確認されたものと同様に墳丘構築時の設計線である可能性があるが、内側周溝の外側にあることに疑問が残る。周溝は内側の肩がはっきりと確認できるものの、外側の肩はブロックの混入や根の攪乱などで明確ではないが、凡その位置は推定できる。

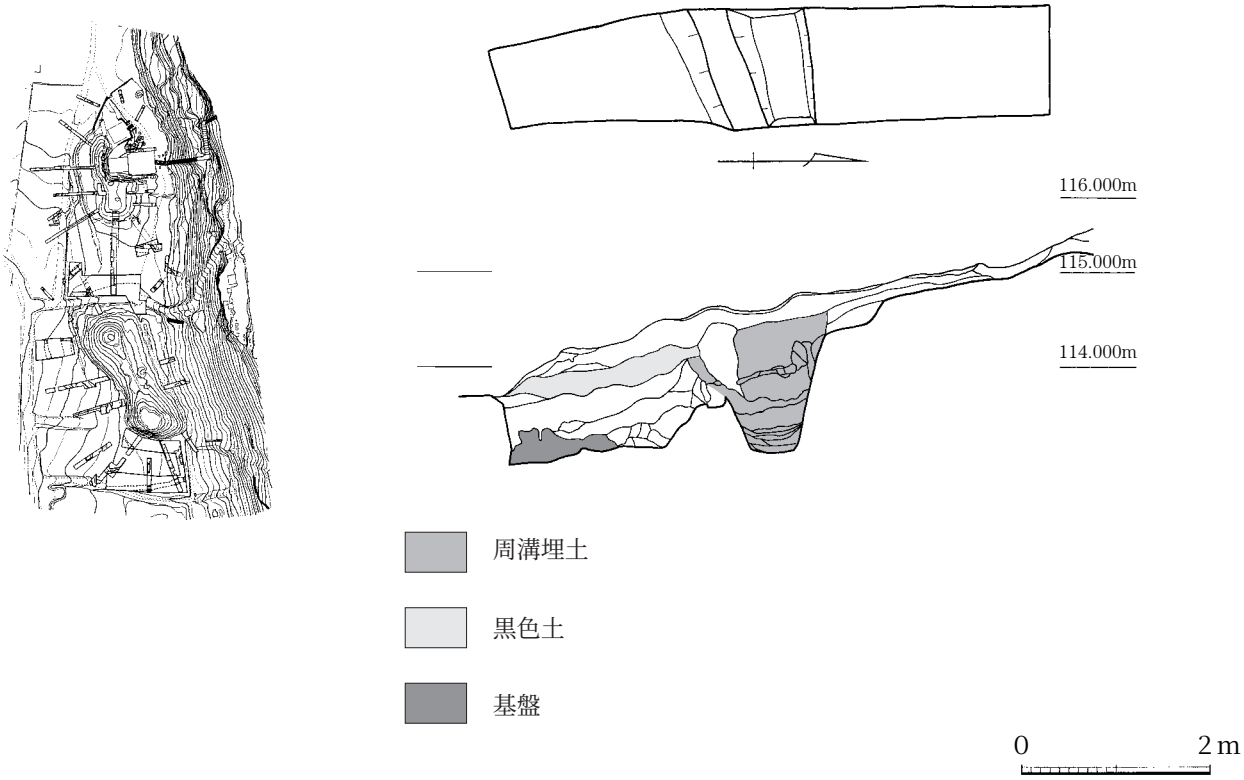
周溝の埋没状況をみると基本的にはレンズ状堆積をなすが、外側は削平を受けた影響からか、まとまった流れ込みが見られる。

トレンチ内から須恵器大型平底壺・壺などが出土している。

第36図８は壺と思われる。口縁部はやや外傾して立ち上がり、胴部は張りを持つ。外面調整は口縁部に波状文、頸部にナデ、胴部にタタキが施される。内面は全体にナデが施される。９は大型平底壺の口縁部と思われる。口縁端部に向かって大きく外反し、端部下部は工具により突帯状に張り出させている。外面調整は端部がナデ、その下部はナデ後、波状文が施文される。内面はナデが施される。（若杉）



第36図　２号墳12・14・17トレンチ出土遺物実測図（1/4）



第37図　２号墳17トレンチ実測図（1/80）

A区（第38・40図、図版45・46・58）

墳丘東側の７・８トレンチで内側と外側の周溝が確認されたが、周溝形態を平面的に把握するため、２号墳と１号墳の間の平坦面に長さ25.3m、幅7.4mの調査区を設定し、東側壁面の北側に長さ4.6m、幅4.58mの拡張部及び、西側壁面南側には西方向に6.65mで不定形の拡張部を設けた。

調査の結果、遺構保存のため検出面で留めたが、内側周溝が丸みを帯びて南北方向に巡っているのが確認された。また、調査区南側の拡張部で、薄く堆積した溝状遺構が周溝軸と平行して検出された。

内側の周溝が北側にどのように延びているのかを確認するため、西側壁面に沿って周溝の一部を掘り下げ周溝の方向軸を確認するためのサブトレンチを設定した。このサブトレンチは調査区壁面に沿って設定しているため、結果的に周溝の軸に対して斜めに切っている。地表面から1.4m程堀下げたところで、内側周溝底を検出した。周溝底の標高は113.6mを測り、底は平坦でＢ区内側周溝に向けて延びている。出土遺物としては、地表面から0.8m掘り下げたところで礫や須恵器片がまとまって出土した。出土した礫は川原石であるため、墳丘表面に葺いた葺石であろう。また、出土した須恵器片の器種については、大型平底壷、大甕、器台等であった。

内側周溝サブトレンチの土層堆積状況は、２～19層は周溝埋土でレンズ状堆積を呈しており、全体的に墳丘側から東側に向けて下降しながら堆積している。また、３暗褐色土層が、礫や須恵器片の包含層で、周溝底から0.5mほど上層である。つまり、周溝の埋没が進むなか、一定期間墳丘に残っていたことが窺える。

Ａ区で検出した内側周溝の方向軸は、丸みを帯びながら南側では13トレンチ、北側ではＢ区内側

周溝につながると考えられる。以上のことにより、１次調査時において多角形に巡ると想定されていた周溝が、鍵形に巡ることが確認された。それに伴い、今まで墳丘西側の高まりが後円部であると考えられてきたのが、東側の高まりが後円部となる結果となった。また、サブトレンチで検出した内側周溝底が、７トレンチに向かって立ち上がっており、16トレンチで検出した外側周溝も南側に向けて立ち上がっていることから、７トレンチ付近では内外の周溝が浅くなっている。さらに、１号墳９トレンチで１号墳側の周溝が切れている空間が存在することから、この箇所が古墳に至る陸橋部であった可能性が考えられる。

第40図は１～９・16は、Ａ区出土須恵器である。１・３～５は大型平底壺の口縁部である。１は内外面ともにヨコナデ後波状文を施している。口縁部上方には櫛歯による連続刺突文が見られる。３は復元口径30.0cm、残存高約14.3cmを測る。内外面ともに波状文が確認できるが、摩滅している為不明瞭で、外面には２条の沈線が回っている。４は復元口径33.0cm、残存高7.7cmを測る。口縁端部は若干内湾している。外面には２条の波状文があり、内面にもみられる。外面下段と内面の２条の波状文の原体が同一のものであると考えられる。５は端部にかけて若干外反しながら立ち上がり、口縁部近くでさらに外反し、端部はやや内湾する。口唇部に沈線を挟んで２条の櫛歯による連続刺突文が見られる。外面はカキメ後に上から下方向に７条の波状文が見られる。内面は横方向の回転ナデ後３条の波状文が施されている。また、粘土帯接合時のラインが一部見られ、上から下方向にナデが施された後、下から斜め方向にナデ上げている。２は大甕の頸部で、口縁部の重みで器形が歪んでいる。外面には４条の沈線が確認でき、下段の沈線より上には６条の波状文が見られ、下段の沈線より下はナデ調整によって波状文がナデ消されている。また頸部付近はタタキ調整が残っている。６・７は大型平底壺の肩部である。６は外面上方に１条の沈線が確認でき、タタキ後横方向のナデ、が施され、内面は横方向のナデが施されている。７は復元頸部径23.35cm、残存高6.5cmを測る。外面は平行タタキが見られるが、焼成が生焼けに近い為、摩滅が激しく内外面とも調整が不明瞭である。８・９は大型平底壺の底部である。８は復元底径25.70cm、残存高4.5cmを測る。内外面ともに焼成が生焼けに近い為、外面は平行タタキが一部確認できるが摩滅が激しく調整が不明瞭である。内面は回転ナデの稜が見られる。また摩滅の為、底部を貼り付けていたかは不明である。９は残存高8.15cmを測る。外面にはタタキ、縦方向へのナデによって調整され、内面は横方向のナデによって調整されているが雑である。底部は薄く剥がれている事から底部をはりつけていたと思われる。16は器台である。残存高5.0cmを測る。外面には３条の沈線が回り、沈線の上下に波状文が施されているが雑である。内外面とも摩滅が激しく調整は不明瞭だが、内面は縦方向後横方向のナデが施されている。（玉川・末國）

Ｂ区（第39・40図、図版47・58）

墳丘北側の周溝形態を面的に確認するため、６・12トレンチの間の平坦面に長さ13.4m、幅6.8mの調査区を設定した。

調査の結果、調査区南側から0.3mと8.5m地点で、２条の周溝が東西方向に若干丸みを帯びて平行に巡るのが確認された。さらに、これらの周溝が12トレンチ外側周溝、Ａ区の内側と外側の周溝にどの様につながるのかを確認するため、調査区東側壁面に沿って周溝にサブトレンチを設定した。

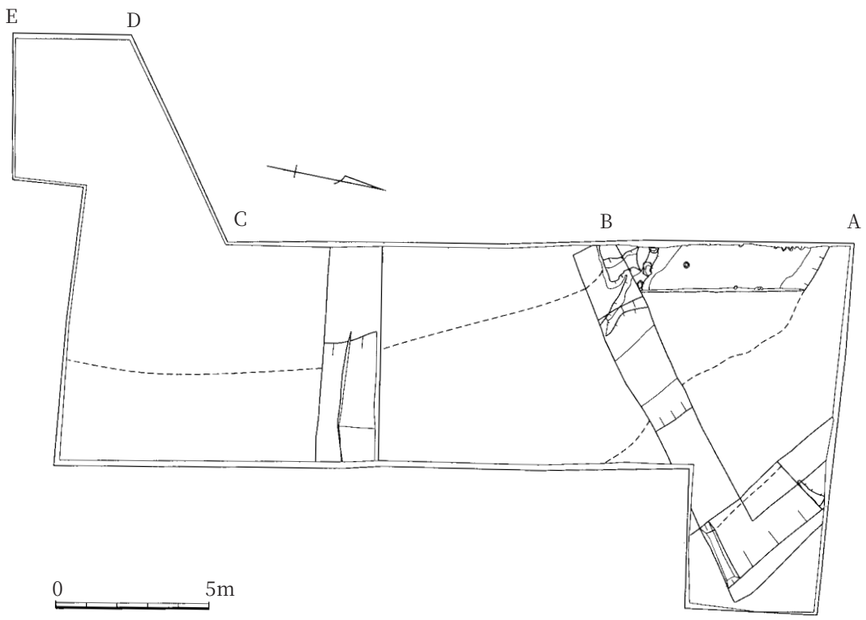
内側周溝のサブトレンチを掘り下げた結果、周溝底は、検出面から1.3m掘り下げたところで検出

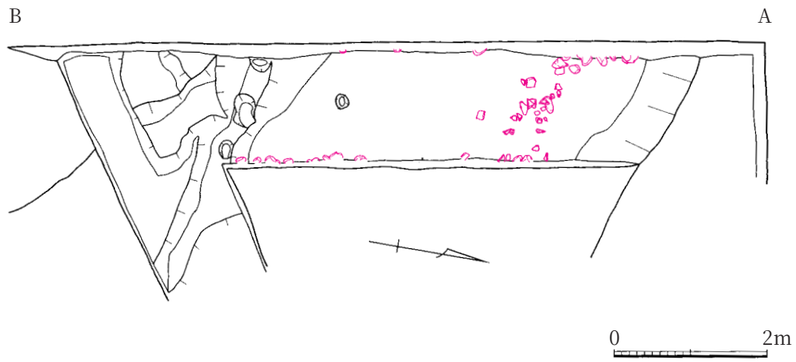
した。検出面における幅は3.67m、底幅は約2.1m、底の標高は113.3～113.1mである。方向軸をみると、調査区東側では現墳丘裾部を通り、A区サブトレンチの内側周溝に延びているのが確認された。周溝埋土の堆積状況は、６褐色土、７褐色土、９灰褐色土は、全体的に粘土質のブロック・礫が含まれており、墳丘盛土の流土であると見られる。いずれの層もレンズ状堆積が厚いため、短期間のうちに流れ込んだものと思われる。また６・７層が堆積した後、中世の溝（５層）が掘り込まれた後、整地されている。

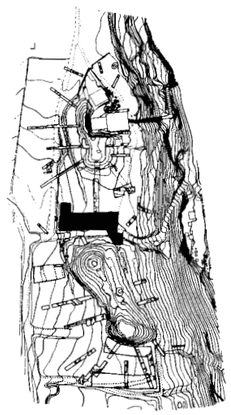
外側周溝サブトレンチでは地山層が不明瞭であったため、さらに長さ1.34m、幅0.1mのサブトレンチを東側壁面に沿って設定した。周溝底は、検出面から0.4m掘り下げたところで確認し、検出面における幅は1.1m、底幅0.7m、底の標高は112.6mで断面が逆台形を呈している。方向軸は内側周溝と平行して12トレンチに延びているのが確認された。周溝埋土の堆積状況は、14褐色土、15灰褐色土、16褐色土、17褐色土は全体的に硬質で16・17層は粘質である。いずれもレンズ状堆積である。

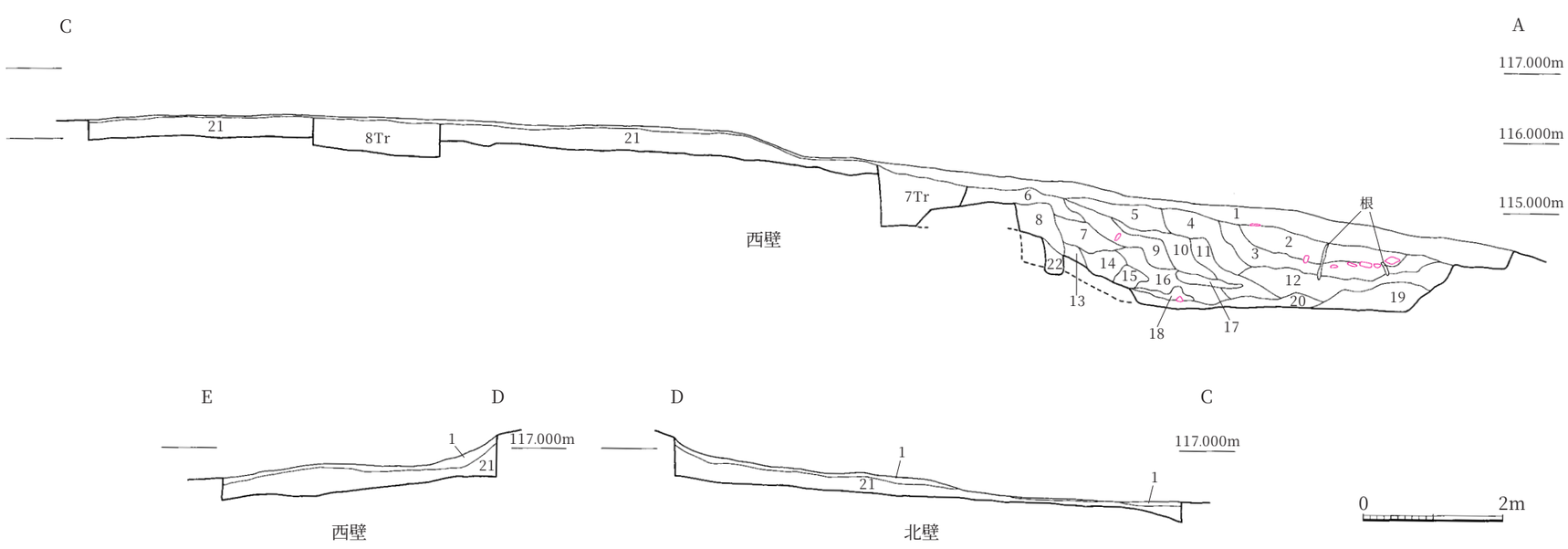
出土遺物は大型平底壷、坏蓋、器台が出土したがほとんどが破片である。

第40図10～15・17・18がB区出土須恵器である。10は平底壷の頸部である。２条の沈線が施され、その上下にカキメ後波状文が施されている。11は坏蓋で、復元口径12.2cmを測る。外面には１条の沈線が回り、内外面とも回転ナデによって調整が施されている。口縁部付近には明瞭ではないが段の名残が見られる。12は鼈の口縁部である。端部にかけて大きく外反し端部は若干内湾し、口縁部と頸部に１条ずつ沈線が回っている。復元口径14.4cm、残存高5.0cmを測る。外面はカキメ後１条の波状文を施し、内面にも波状文を施している。13は残存高2.5cm、脚部との接合面の復元径4.4cmを測る脚台付の壷である。外面はカキメ後にヘラ記号が施されているが摩滅している為不明瞭である。内面には壷内面と脚部とを接合するためにタタキ調整の後工具ナデによる調整を施されているが、タタキによる当て具痕が強く残っている。14は器台の頸部であろう。復元頸部径9.0cm、残存高6.6cmを測る。外面は３条の沈線が斜めに回り、一番上の沈線は始めと終わりが確認できる。外面はカキメとナデ後波状文によって調整が施されており、内面上方では工具ナデと縦方向のヘラケズリによる調整が施されている。15は器台の脚部で残存高5.2cmを測る。外面には２条の沈線が３条の波状文を挟む形で回っており、波状文を施文した後に沈線を施している。上の沈線と比べ下の沈線は幅が広く明瞭である。またこれらの波状文の原体は同じもので左から右方向へ施文されたものと思われる。さらに方形スカシが波状文を切る形で４つあったと推定される。また断面の形から外側から作られたスカシだと思われる。外面は回転ハケによって調整が行われているが内外面とも摩滅している為、不明瞭である。17は器台の脚部で残存高6.7cmを測り、２条の沈線が回っている。外面は沈線の上にカキメが施され、それを挟むように２条の波状文が施されている。またカキメを波状文が切っていることから、カキメ後波状文を施文している。またどれくらいの大きさになるかわからないが、三角形のスカシが確認でき、断面の形から外側から作られたものと考えられる。内面は回転ナデによって調整されている。18は器台脚部で復元底径11.8cm、残存高4.5cmを測る。外面は１条の沈線が回り、全体をカキメによって調整した後、波状文を２条施している。これらの波状文は違う原体を使用していると思われる。またどのような形なのかわからないが、波状文を施文した後に外面からスカシ形成され内側をヘラケズリによって器面を整えている。　（玉川・末國）



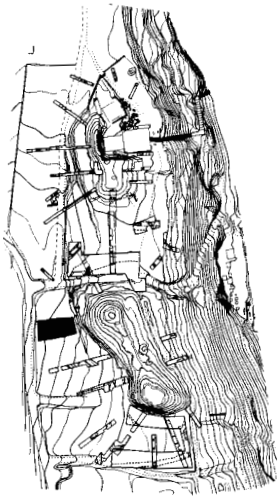






土層名称
1 灰褐色土層　（表土）
2 暗褐色土層　（やや粘性が強い）
3 暗褐色土層　（やや粘性が強い、礫を含む）
4 暗褐色土層　（やや粘性としまりがある）
5 暗褐色土層　（４層より粘性あり）
6 暗褐色土層　（しまりなく、砂質気味）
7 暗褐色土層　（６層より粘性あり）
8 褐色土層　（硬質でしまり有り）
9 暗褐色土層　（硬質でしまり有り、灰白色地山ブロックを少し含む）
10 にぶい黄褐色土層　（灰白色地山ブロック含む）
11 暗褐色土層　（やや明るい、硬質で、粘性、しまり有り）
12 暗褐色土層　（粘性でしまりがある。１～３cm大の小砂利を多く含む）
13 極暗褐色土層　（やや軟質だが、しまり有り）
14 褐色土層　（粘性が強い）
15 暗褐色土層　（粘性強く、しまり有り）
16 暗褐色土層　（粘性あり、灰白色地山ブロックを多く含む）
17 黒暗褐色土層　（粘性あり、根によるカクラン）
18 黒暗褐色土層　（粘性あり、根によるカクラン）
19 褐色土層　（粘性が強い、灰白色地山ブロック混入）
20 黒褐色土層　（やや軟質）
21 褐色土層　（粘性が強い、きめが細かく、砂質気味）
22 暗褐色土層　（軟質でしまり無し、弥生時代のピットが切られている）

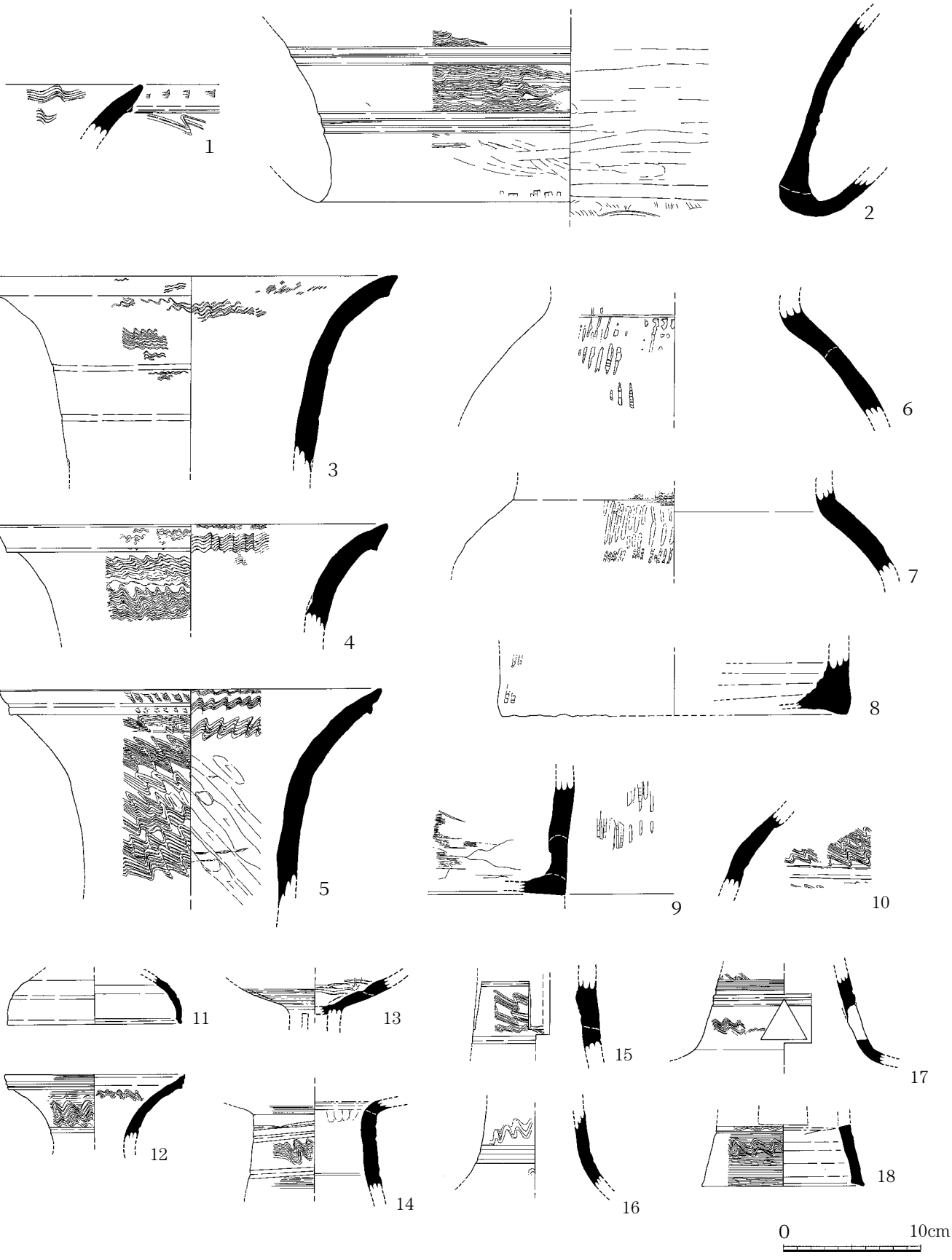
第38図　２号墳Ａ区実測図（1/80・1/200）



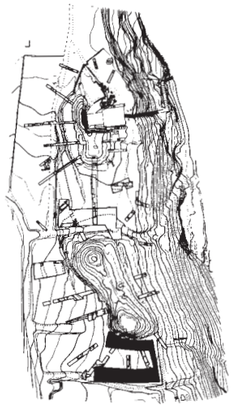
土層名称

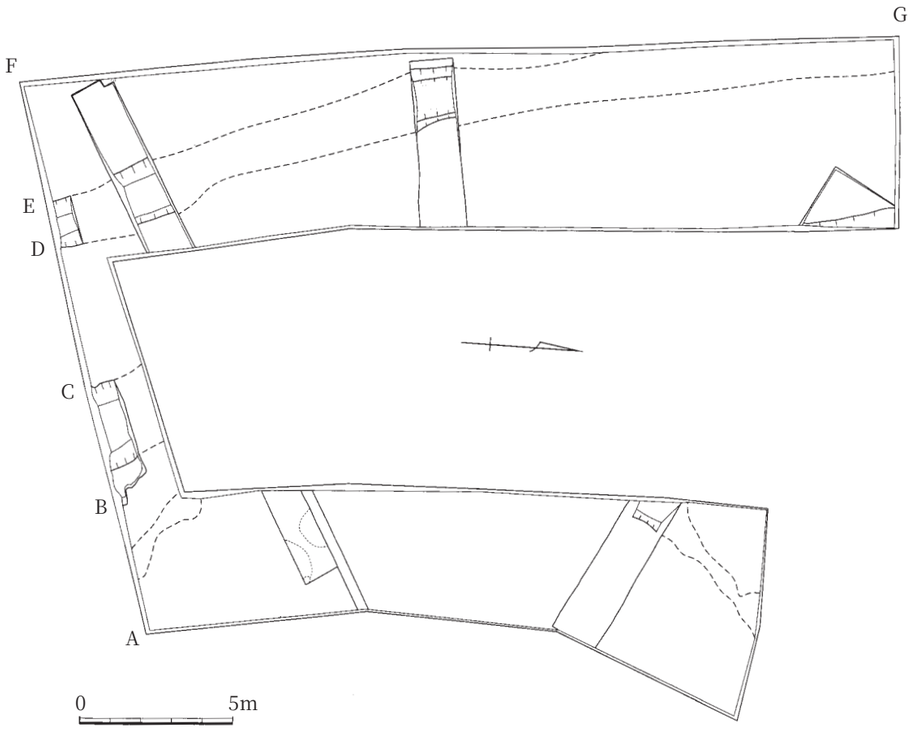
1 灰褐色土層　（表土）
2 褐色土層　（砂質を若干含む）
3 橙色土層　（5㎜大の小砂利を多く含む）
4 褐色土層　（やや軟質）
5 灰褐色土層　（1㎜以下の小砂利を少々含む。中世の溝カクラン）
6 褐色土層　（5㎜大の小砂利と粘質小ブロックを多く含む）
7 褐色土層　（粘質ブロックが6層より多く含まれ、暗い）
8 灰褐色土層　（小砂利、粘質ブロックを多く含む）
9 灰褐色土層　（小砂利、粘質ブロックを多く含む。8層より明るい）
10 黒褐色土層　（やや粘性あり、やや硬質）
11 明褐色土層　（やや粘性あり、やや硬質）
12 明褐色土層　（やや軟質）
13 明褐色土層　（やや軟質、12層より明るい）
14 褐色土層　（やや硬質）
15 灰褐色土層　（やや硬質）
16 褐色土層　（やや硬質、やや粘性あり）
17 褐色土層　（やや硬質、やや粘性あり、16層より暗い）
18 明褐色土層　（硬くしまる、やや粘性あり、基盤層）
19 橙色土層　（粘性あり、ブロック）
20 明褐色土層　（やや軟質）

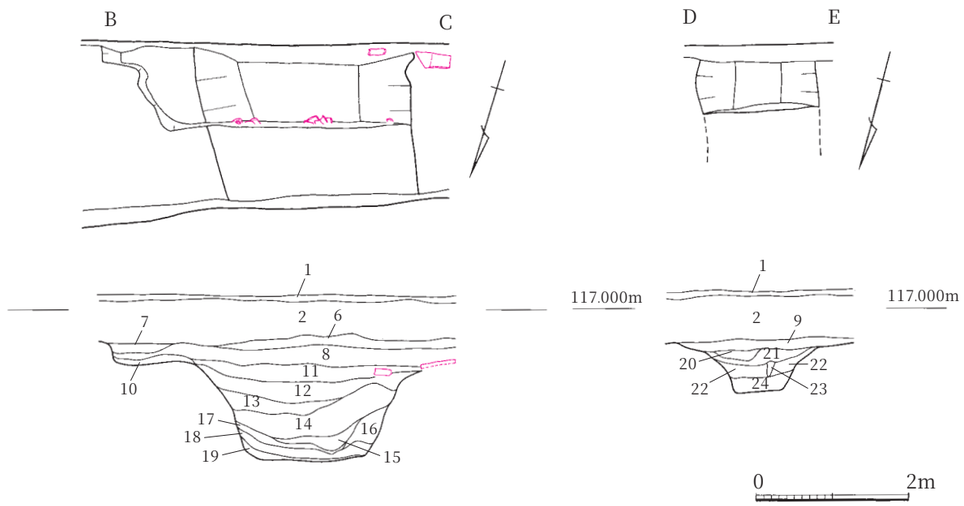
第39図　２号墳Ｂ区実測図（1/80）



第40図　２号墳Ａ・Ｂ区出土遺物実測図（1/4）

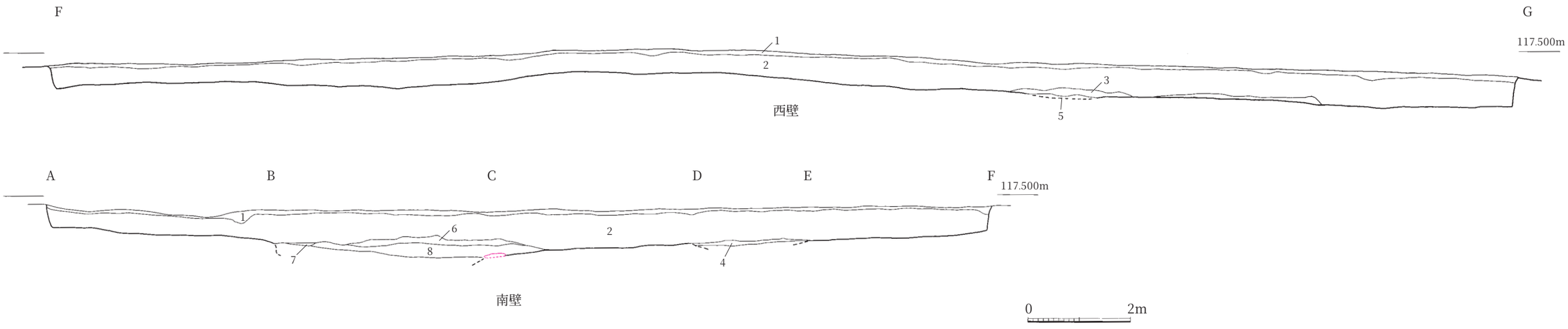






土層名称

1	にぶい赤褐色土層	（表土）	
2	明赤褐色土層	（粘質、硬くしまっている）	
3	褐色土層	（やや軟質、黄色土が少し混ざる）	
4	褐色土層	（やや軟質、黄色土が多く混ざっている）	
5	黄橙色土層	（やや軟質、１㎜大の小礫を多く含む）	
6	暗褐色土層	（粘質で、しまり有り）	
7	暗褐色土層	（粘質はあまり無いが硬くしまる）	
8	暗褐色土層	（やや軟質）	
9	暗褐色土層	（やや軟質で、黄色土が少し混ざる）	
10	褐色土層	（砂質で粘質有り、しまりはゆるい）	
11	極暗褐色土層	（軟質でしまりはゆるい）	
12	暗褐色土層	（粘質で硬くしまる。１cm大の小礫を多く含む）	
13	暗褐色土層	（やや軟質で粘質あり、５㎜大の小礫を少し含む）	
14	黒褐色土層	（軟質、粘質共にあり、しまりはゆるい。５㎜大の小礫を少し含む）	
15	暗褐色土層	（粘質でしまりはややゆるい。５㎜大の小礫を若干含む）	
16	暗褐色土層	（軟質、粘質共にあり、しまりはゆるい）	
17	暗褐色土層	（粘質で硬くしまる）	
18	褐色土層	（粘質で硬くしまる）	
19	褐色土層	（粘質のある砂質でしまりはゆるい）	
20	褐色土層	（やや軟質で、黄色土が多く混ざる）	
21	褐色土層	（軟質で小礫を含む）	
22	褐色土層	（軟質で小礫を多く含む）	
23	褐色土層	（根痕）	
24	暗褐色土層	（やや軟質で粘性有り、しまりはゆるい）	



第41図　２号墳Ｃ区実測図（1/80・1/200）

C区（第41・42図、図版48・49・58）

墳丘西側の１・２・３トレンチで内側と外側の周溝が確認された。これら２条周溝の形態を平面的に把握するため平坦面西側に長さ28.8m、幅6.1m、東側に長さ21.2m前後、幅4.3m前後の不定方形の調査区、さらに南側に東西の調査区をつなぐ長さ8.5m、2.2mの調査区を設けた。

調査の結果、保存のため遺構検出にとどめたが、調査区西側で溝が南北に若干丸みを帯びながら直線的に巡っているのが確認された。また、調査区東側から6.4m地点でも南北に巡る溝を検出した。これら２条に巡る溝は、１・２・３トレンチで検出した周溝とそれぞれつながることから、内・外側周溝であると判断できる。さらに南側崖面の内側と外側の周溝の方向を確認するため、調査区の南側壁面に沿ってサブトレンチを設定し、それぞれの周溝の一部を掘り下げた。

内側周溝のサブトレンチは、長さ約3.5m、壁面から幅約1.0mで設定した。検出面から1.4mほど掘り下げたところで周溝底を検出した。周溝の検出面の幅3.0m、周溝底の幅1.4m、底の標高は約115.0mで逆台形を呈している。周溝の方向軸は３トレンチで検出した内側周溝から、３・２・１トレンチの内側周溝を通り、若干丸みを帯びながら直線的に12トレンチ西側に向けて巡っているものと思われる。周溝埋土の状況は、全体的にレンズ状堆積で、11極暗褐色土層は大型平底壺や高坏等の須恵器の包含層、14黒褐色土層は弥生土器片を含む包含層である。なお11層では、肩部から底部にかけて残存している大型平底壺が、土圧により押しつぶれた状態で出土した。それより下位の層である12～19層がレンズ状堆積していることから、11層は墳丘にある一定期間の残っていた墳丘表土層が、流れ込んだものと考えられる。

外側周溝サブトレンチは、長さ1.6m、壁面からの幅0.9mで設定した。検出面から0.7m掘り下げたところで底を検出した。検出面の幅約1.6m、底幅0.6m、底の標高約115.9mで、逆台形を呈している。底面から方向軸をみると、内側周溝と同様若干の丸みを帯びながら３・２・１トレンチをほぼ直線状に巡り、崖面の方向に延びているのが確認された。周溝埋土は、全体的にレンズ状に堆積している。

出土遺物は、第42図１～３である。１～３は須恵器で、１は坏身である。復元口径11.8cm、残存高4.6cmを測る。外面は回転ヘラケズリとナデによって調整が施されている。内面は回転ナデによって調整が施されている。口縁部に6.1cmほど蓋の口縁部が融着している。２は高坏の脚部である。脚底径12.8cm、残存高9.75cmを測り、脚端部には１条の沈線が回っている。外面は全体的にカキメによって調整が施されており、１部に自然釉がかかっている。脚端部は回転ナデによって調整されている。また方形スカシが３つあり、方形スカシの間に細かな三角スカシが施されている。脚端部には焼成時に融着した窯床のものと思われる粒土が付着している。なお、１トレンチ出土遺物で、接合資料があったため本調査区で報告した。３は大型平底壺の頸部から底部であり、底径31.0cm、残存高38.9cmを測る。外面は頸部に波状文が施されヨコナデによって調整されている。胴部には全体的に上から下方向にタタキが施された後、回転カキメと１部ナデによって調整されている。内面はタタキのあて具痕が確認できるが、回転ナデで調整されているため不明瞭である。底部外面は摩滅により不明だが、内面はヨコナデによって調整されている。底部が存在する形態だが、内側に向かってそっているが、焼成段階の歪みと思われる。

その他の遺構として、調査区南側で弥生時代の石蓋土壙墓の石蓋であると思われる破片が内側周溝の肩で検出しており、さらに城ノ越期の小児甕棺墓も数基検出していることから、台地縁辺部に

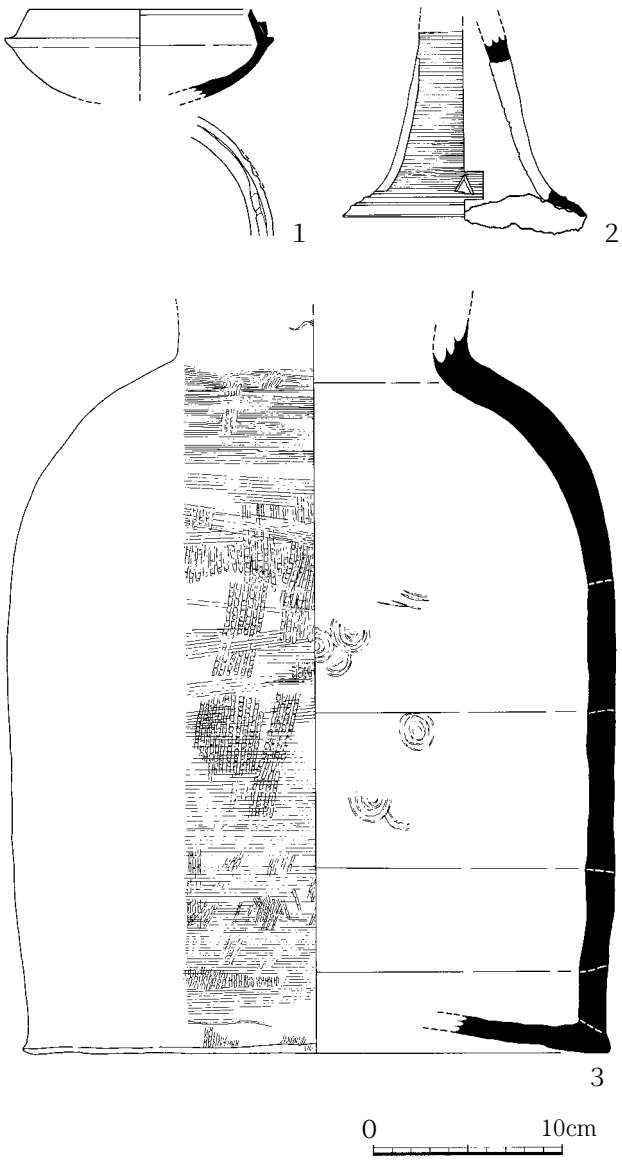
当たるこの箇所が弥生時代でも墓域として使用されていたことが窺える。

（玉川・末國）

D区（第43図、図版50）

１号墳２トレンチで確認した溝状遺構が周溝であるか、また２号墳外側周溝との切り合いがあるかを確認するため、A区南東側の平坦面に１号墳２トレンチにかかるように調査区を設定した。調査区は長さ約9.5m、幅約4.0mの不定方形で設けた。

調査の結果、地表から約0.5mで切り合うことなくほぼ平行に、南北巡っている２条の溝を検出した。検出面での溝幅は東側で1.4m前後、西側で1.3m前後である。両溝の間には何らかの攪乱が見られる。東側の溝の北側で、別遺構の切り合いが見られた。この切り合い関係を縦断面確認するため、また遺構のつながりを明らかにするために、サブトレンチとして北壁から2.3m地点まで溝の主軸に0.2m弱のアゼを残し、溝の掘り下げを行った。

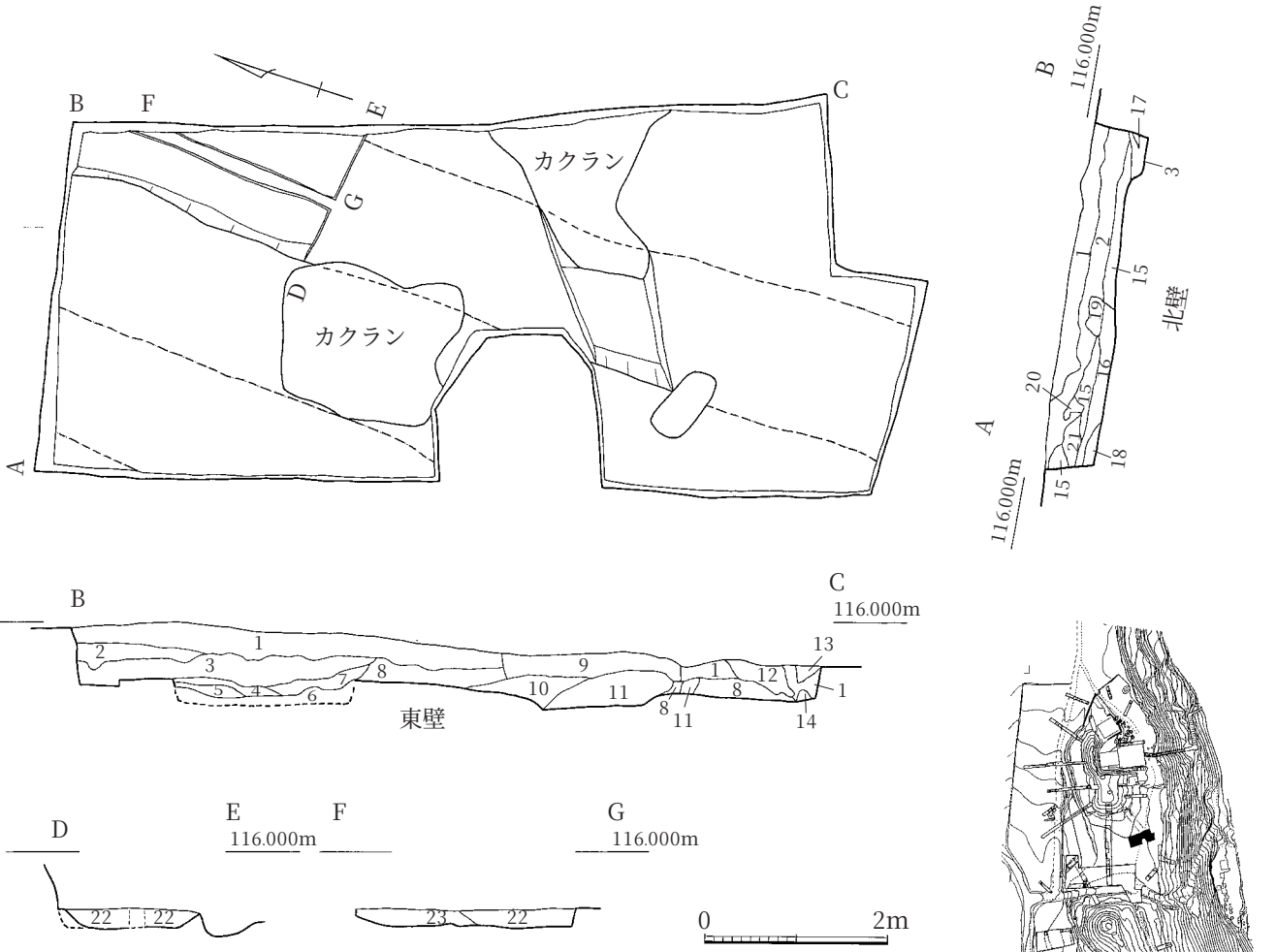


第42図　２号墳Ｃ区出土遺物実測図（1/4）

掘り下げの結果、検出面から0.2m下で溝の底を検出した。溝の底幅は1.0m、底の標高は115.2mを測る。埋土の堆積状況から、遺構の切り合いではなく流れ込みによる土の違いであるものと考えられる。

また、遺構のつながりを見ると東側の溝は、１号墳２トレンチで検出した溝底の標高が114.95m、サブトレンチ内の調査区北壁側の溝底が115.3mで標高差が0.35mあることから、東側の溝は北から南方向に下降していることが判明した。この溝は、１号墳１トレンチでは検出されていないことから、D区と１トレンチの間で立ち上がっているものと想定される。１号墳で検出した周溝から現墳丘までの距離と、東側溝から現墳丘までの距離はほぼ同じであることから、東側溝については１号墳に伴う周溝であると考えられる。また、１号墳９トレンチで周溝が見られないことから、９トレンチから１トレンチ付近まで周溝のない空間が存在することから、この箇所が１号墳に入るための陸橋部ではなかろうか。

西側の溝については、サブトレンチを入れていないため、溝底からの方向軸ではなく、検出面からの溝の方向軸から遺構のつながりを考える。２号墳９トレンチで検出した溝と西側の溝とを平面



土層名称

1	明黄褐色土	（やや粘質で、若干しまりがある。きめが細かい）	
2	灰黄褐色土	（粘質あり、しまり良く、きめが細かい）	
3	褐色土	（粘質あり、しまり良く、きめが細かい）	
4	明黄褐色土	（粘質あり、しまり良く、きめが細かい）	
5	褐色土	（粘質あり、しまり良く、きめが細かい）	
6	褐色土	（粘質あり、しまり良く、きめが細かい）	
7	明褐色土	（粘質あり、しまり良く、きめが細かい）	
8	褐色土	（粘質あり、しまり良く、きめが細かい）	
9	暗褐色土	（粘質有り、しまりは良くない）	
10	明褐色土	（砂質でしまり良く、0.5～1cmの小石が混じる）	
11	灰褐色土	（砂質でしまり良い）	
12	黒色土	（粘質あり、カクラン根痕、しまり悪い）	
13	黒色土	（粘質あり、カクラン根痕、しまり悪い）	
14	黒色土	（粘質あり、カクラン根痕、しまり悪い）	
15	黄褐色土	（粘質でしまり有り）	
16	褐色土	（粘質でしまり有り）	
17	灰黄褐色土	（カクラン根痕）	
18	灰黄褐色土	（砂質でしまり無し）	
19	灰黄褐色土	（カクラン根痕）	
20	灰褐色土	（カクラン根痕）	
21	灰黄褐色土	（カクラン根痕）	
22	暗褐色土	（粘質でしまり有り）	
23	褐色土	（しまり良く、きめが細かい）	

第43図　２号墳Ｄ区実測図（1/80）

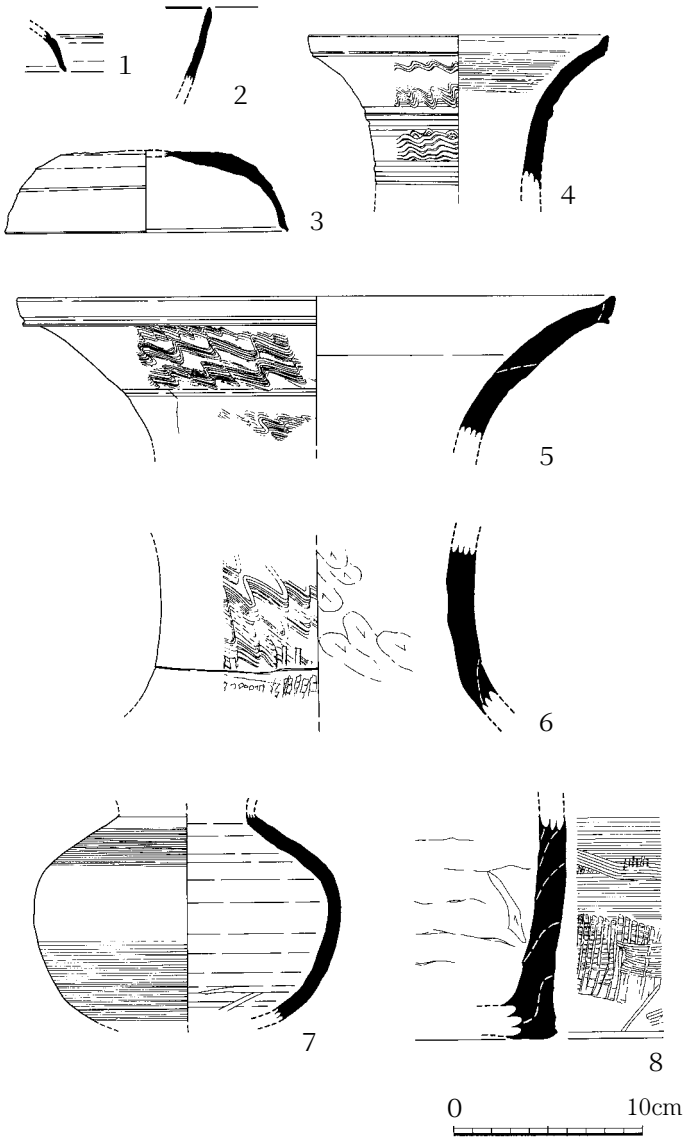
的に結ぶと、Ａ区・13トレンチで検出した内側周溝と平行に巡る形となる。以上のことから、溝の時期を決定する遺物が出土していないものの、２号墳に伴う外側の周溝であると考えられる。（玉川）

２号墳出土遺物（第44図、図版28）

ここでは、調査時の表面採集、もしくはトレンチ内から出土したものの、注記ミス等で出土地点が不明な遺物について述べる。

１～８はいずれも須恵器である。１は坏蓋で口縁部のみの残存である。端部付近でわずかに外反し、内面には段を有する。外面調整は沈線、回転ナデ、内面調整は回転ナデが施される。２は口縁

部であるが、器種不明である。外面にはナデ、内面には回転ナデが施される。３は坏蓋である。天井部は比較的平坦に仕上げられ、口縁部との境をなす稜は明瞭である。端部はやや外反し、内面には段を有する。外面調整は天井部が回転ヘラケズリ、口縁部が回転ナデ、内面調整は回転ナデが施される。４は長頸壺の口縁部である。端部にかけて外反しながら立ち上がり、端部は内湾している。外面調整は端部がナデ、その下部は沈線を２条施した後、１段目はナデ後波状文、２段目はカキ目後波状文を施文している。内面は端部から順に、ナデ、カキ目、回転ナデが施される。５は大型平底壺の口縁部である。端部にかけて大きく外反し、端部はやや内面側に立ち上がる。外面調整は口縁端部下部と中位に沈線を施し、ナデ・工具ナデの後波状文を施文する。端部から内面にかけては回転ナデが施される。６は大型平底壺の頸部である。口縁端部にむけて、やや外反しながら立ち上がる。外面調整は口縁部側が回転ナデの後波状文、胴部側がタタキの後工具ナデが施される。内面調整は指押え、ナデの後に回転ナデが施される。７は短頸壺と思われる。頸部から胴部にかけては直線的に広がり、胴部中位で最大径を測る。底部にかけては緩やかに内湾している。外面調整は胴部中位がナデ、それ以外にはカキ目が施される。内面調整は全体にナデが施される。８は大型平底壺の底部である。胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面調整はタタキの後、上部にカキ目を施す。内面調整はナデが見られる。底面はやや丸みを帯びて仕上げられ、製作時に下に敷いたと思われる植物の痕跡が見られる。（若杉）



第44図　２号墳出土遺物実測図（1/4）

(4) その他の遺物

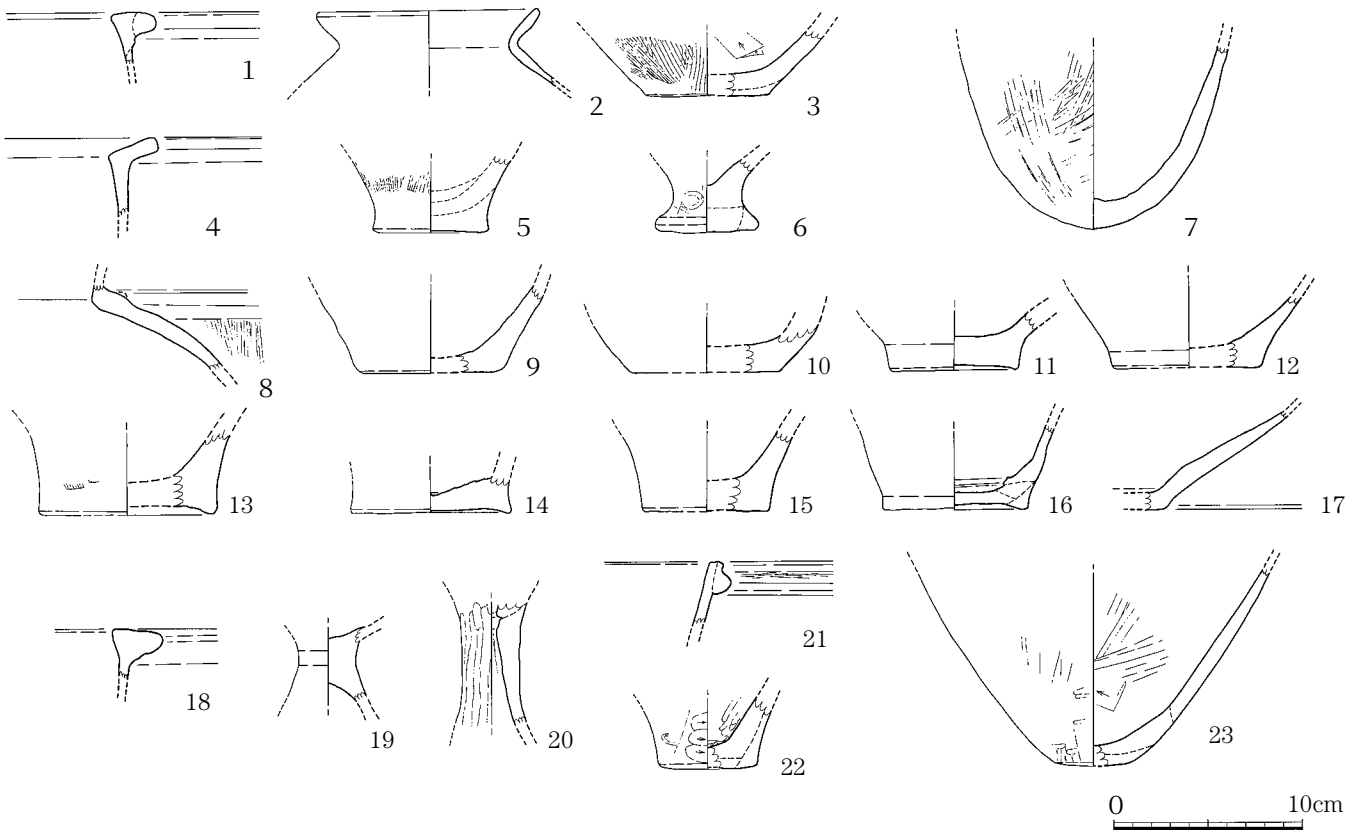
弥生時代遺物

１号墳（第45・46図、図版63・64）

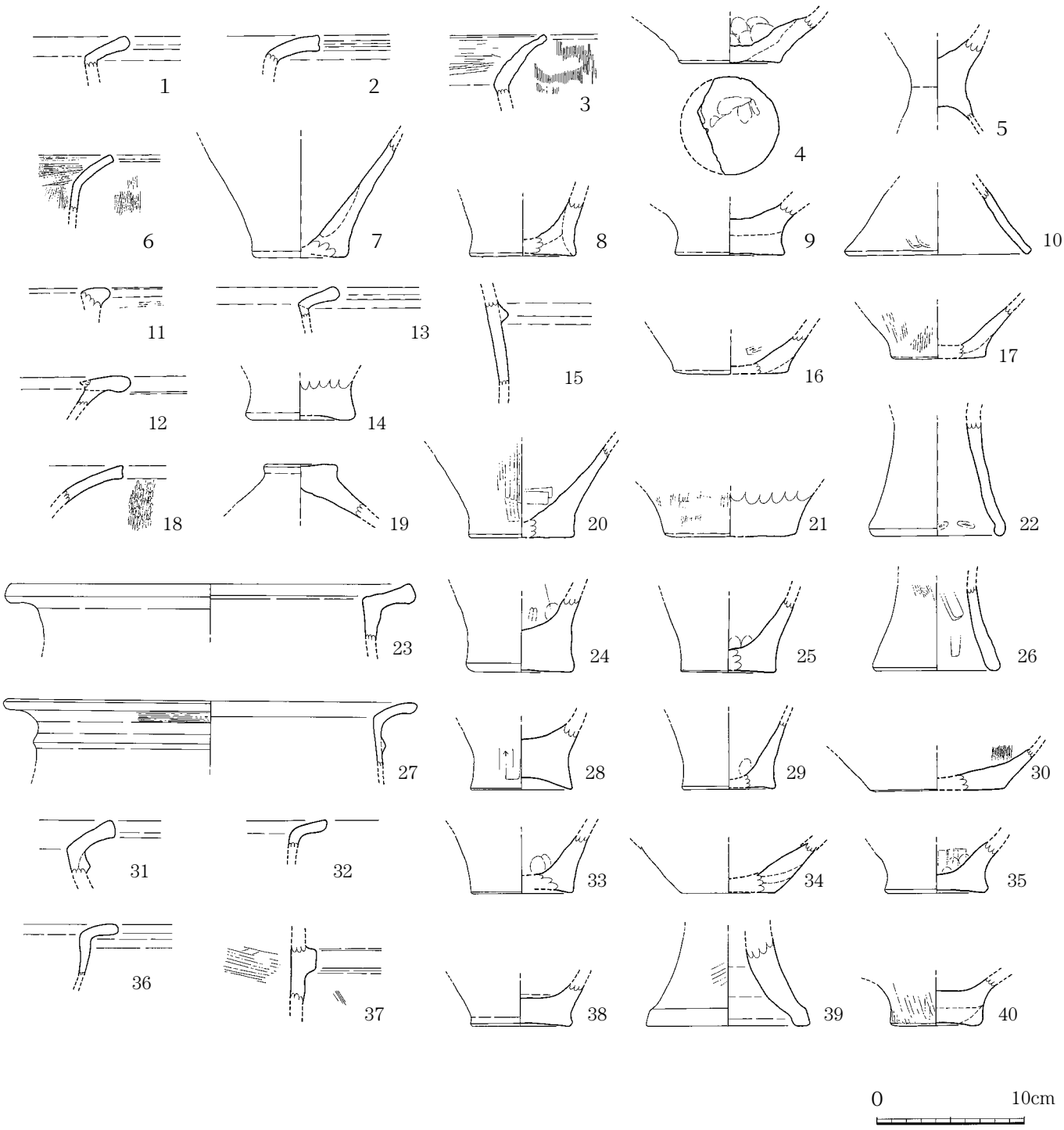
１号墳に伴う弥生時代の遺物は、ほとんどが後世の攪乱を受け、その層位的解釈は困難である。ただし５・９トレンチに係る弥生遺物は、一部残存した遺構に付随するものもあり、弥生時代の遺構の広がりをを示している。詳細については各項で記した通りであるので、ここでは割愛する。

第45図１・２は２トレンチ、３～６は３トレンチ、７は５トレンチ、８～17は６トレンチ、18は７トレンチ、19・20は８トレンチ、21～23は９トレンチから出土した。１・４・18・21は甕の口縁部である。１・18は城ノ越式、21は下城式と考えられる。２は明赤褐色に焼成した壺片である。３は甕の底部と考えられる。５・６は城ノ越式と考えられる甕の底部であり、６はミニチュア土器の可能性もある。９～16・22は甕の底部で、８は壺の肩部、17は壺の底部である。底部はいずれも平底か若干の窪み底で大半は中期前半の時期に比定できよう。19・20は高坏、23は小さな平底を呈する甕の底部である。

第46図１～10は10トレンチ、11～17・21は11トレンチ、18～20・22は12トレンチ、23～33は13トレンチ、34～39は15トレンチから出土し、40は表採資料である。口縁部のうち12を除いて他は全て甕と考えられる。11が城ノ越式である以外は、跳ね上げ口縁のものがほとんどである。12は須玖式系壺の口縁部である。15・37は甕の胴部であるが、37は帯状突帯を有し、弥生後期後葉に比定できよう。19は甕、５・10は高坏、22・26・39は器台である。その他は全て甕、及び壺の底部である。甕底部のうち、14・24・28は城ノ越式と考えられる。



第45図　１号墳２・３・５～９トレンチ出土遺物実測図（1/4）

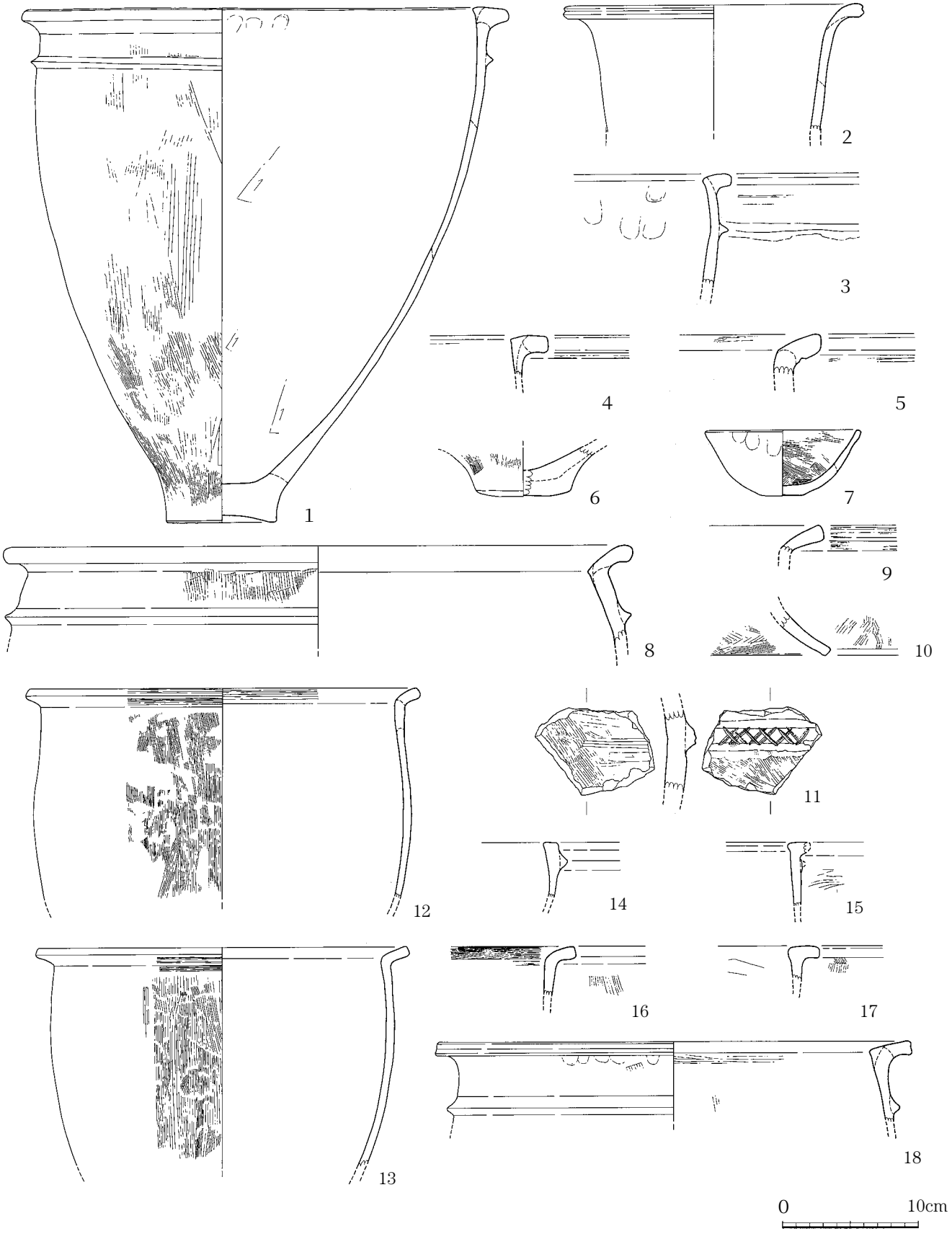


第46図　１号墳10～13・15トレンチ出土・表採遺物実測図（1/4）

２号墳（第47図、図版64）

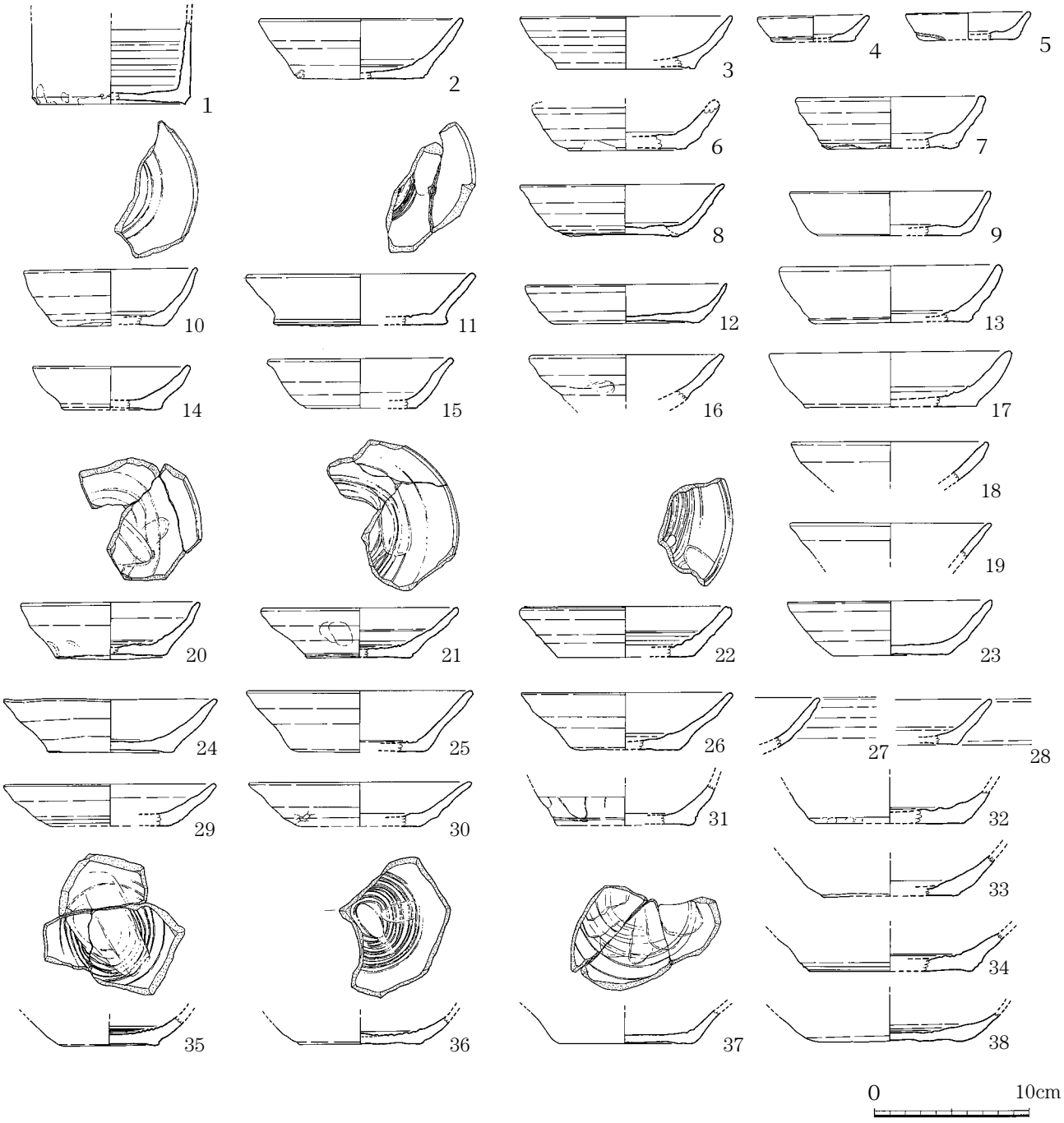
２号墳より出土した弥生遺物も、１号墳と同様にその大半が後世の攪乱を受けている。しかしながらＣ区で検出した小児甕棺は、墓壙上層が古墳築造時の削平を受けているものの、下層は消失を免れ、掘り方が一部残存していた。また、他にも石蓋土壙墓に使用されたと考えられる石材が出土していることから、古墳築造以前は、当地が弥生の墓域であった可能性が極めて高い。なお、Ｃ区で検出した上記の小児甕棺は、現状保存の形をとったため、今回報告書には掲載していないが、口縁部は跳ね上げ状を呈し、第47図掲載の甕形土器群とほぼ同時期であると考えられる。

第47図１～７は１トレンチ、９・10は10トレンチ、11は12トレンチ、12～17は14トレンチから出土し、８・18は一括資料である。１は小児甕棺と考えられ、城ノ越式の特徴を呈し、口縁部形態



第47図　２号墳第１・６・10・12・15トレンチ出土遺物実測図（1/4）

から、須玖式Ⅰ式への移行形態とも考えられる。甕形土器のうち、３・４・15・17は城ノ越式、14は下城式、その他多くは跳ね上げ口縁と考えられ、時期的に著しい格差は認められない。11は甕の胴部であるが、帯状突帯の形態は弥生後期末に比定される。７は鉢であり、11と近い時期とも考え



第48図　１号墳第２・４～６トレンチ出土遺物実測図（1/4）

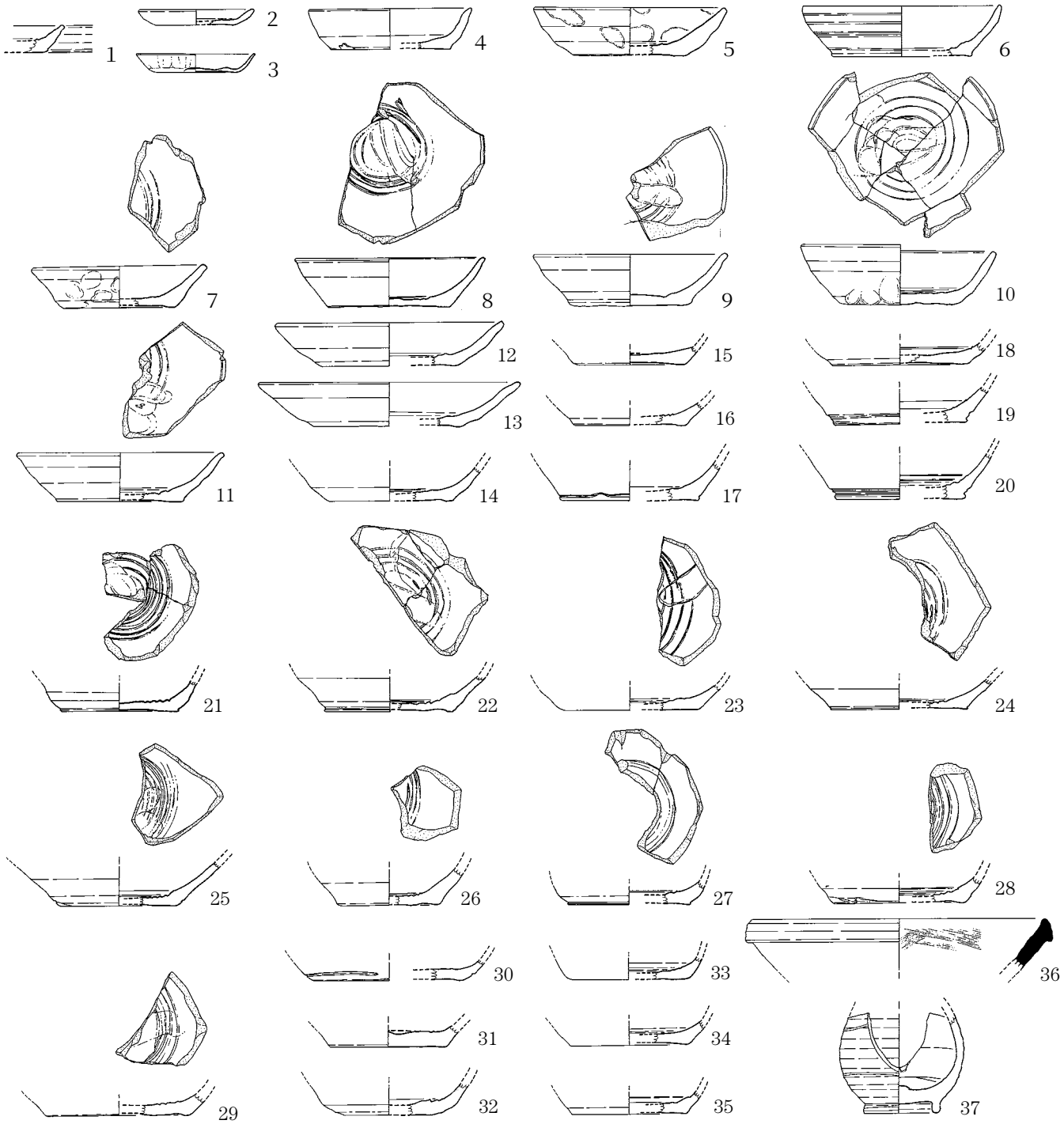
られる。２・６は壺、10は高坏脚部である。１・２号墳出土の弥生土器は、城ノ越式、須玖式、下城式が大半を占め、ほぼ弥生中期初頭～中期前半に比定され、僅かに弥生後期の遺物も認められる。器種は甕、壺を主体として少量の高坏、器台、鉢で構成されており、その様相は典型的な豊後の在地性とは異なった、より北部九州的な生活文化であったことを想定させる。　（伊藤）

中～近世遺物

１・２号墳（第48～50図、図版65・66）

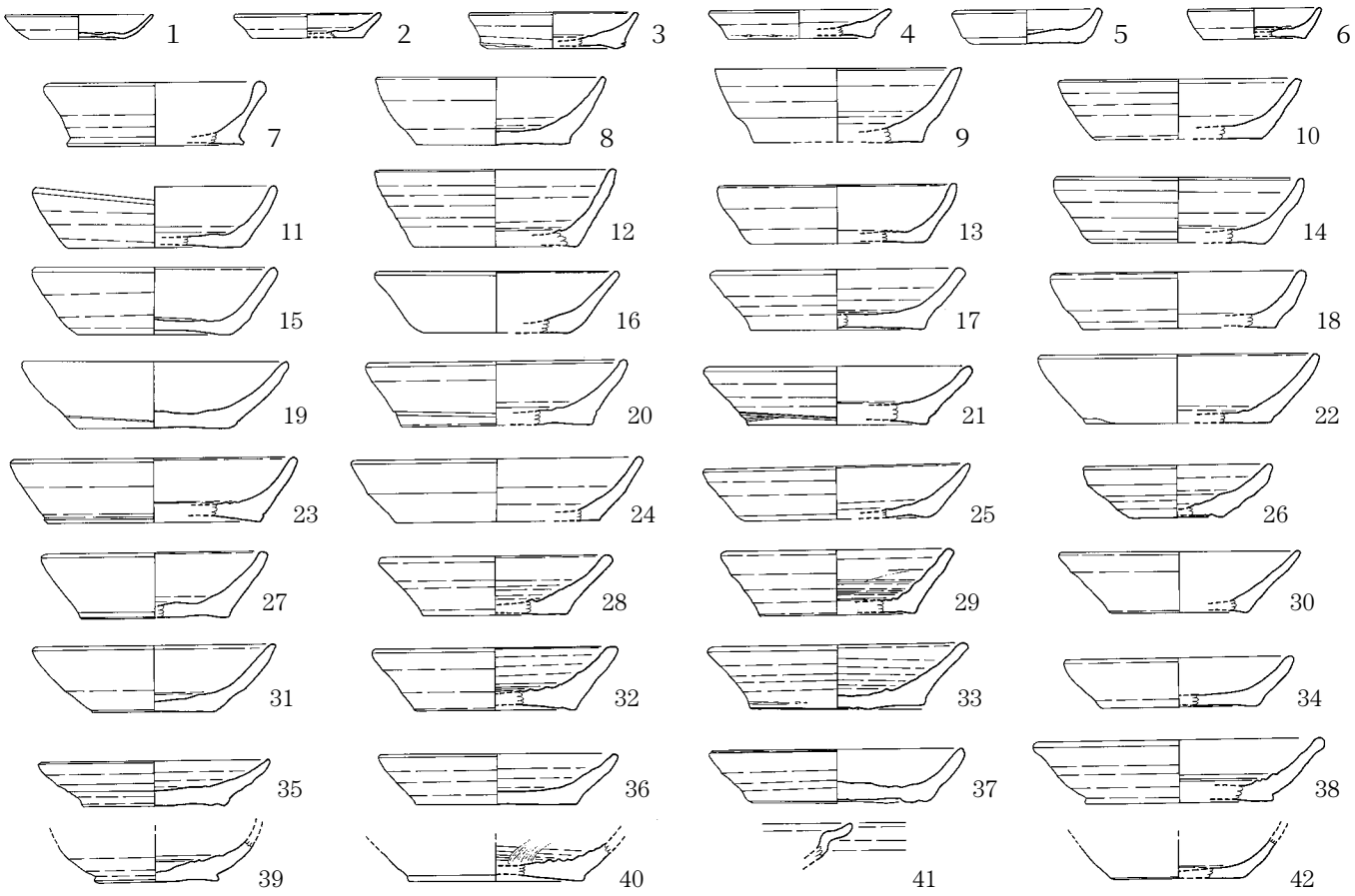
中世の遺物はほとんどが１号墳から出土している。特に墳丘南側の社殿周辺でまとまって出土し、墳丘南側斜面にも層を成して堆積していた。以上のことから１号墳南側を中心に、中世段階で一定期間利用した祭祀的意味合いを持つ施設の存在が想定される。

第48図１は２トレンチ、２・３は４トレンチ、17・28は６トレンチからの出土で、他は５トレンチからの出土である。１は陶器質の瓶で内面にロクロ目が残る。２・３・12～14・26・27は底部から口縁部までやや内湾する形態であるが、３・12は口縁端部を尖らせ、14は他と比べて底径が小さい。８・15・16・24も内湾気味に立ち上がるが口縁部は外反し、８は底部との境に粘土接合痕が残る。４・５は小皿である。６・７・17は全体的に肥厚しており、17の内底面には明瞭に渦状ナデが残る。９・11・19・21～23・25・28は底部から口縁部にかけて直線的に延びるが、28の口縁部はやや外反し、22・23は肥厚する。18・20も底部から口縁部下まで直線的に延びる形態であるが、口



第49図　１号墳７・８・10トレンチ出土遺物実測図（1/4）

0　10cm



第50図　１号墳15トレンチ及び２号墳出土遺物実測図（1/4）

縁下で内側に折れる。29・30は器高が低く、外反気味に延びる。32～38は坏の底部である。

第49図１～15・17～26・30・31は７トレンチ、16・27～29・32・36・37は８トレンチ、33～35は10トレンチからの出土である。１～３は小皿である。２は煤が付着しており、３は胎土が白色で、共に灯明皿として用いられている。４・６・８・10は底部から口縁にかけて内湾気味に立ち上がり、４の底面は糸切り痕が残るが、底部との境にヘラの痕が残る。１・12・13も内湾して立ち上がるが口縁部はやや外反もしくは外側に折れる。７は底部から口縁にかけて直線的に延びる。14～31・33～35は坏の底部である。ほとんど外底面には糸切り痕が残るが、19・33には確認できなかった。32は小皿の底部であると思われる。36は東播系須恵器の鉢の口縁部、37は肥前系染付け瓶である。調整は、８～10が内底面の渦状ナデを一部ナデ消しており、20～29は明瞭に渦状ナデが残る。

第50図１～40は１号墳15トレンチ、41は２号墳５トレンチ、42は１号墳の６トレンチからの出土である。１～６は小皿で、その他の土師質土器は坏である。１・２・16・28～30・33は底部から口縁部にかけて直線的に延びるが、29の内面には渦状ナデが明瞭に残り、28の口縁端部は肥厚する。３～６・９～12・17・18・22・24・25・27は内湾気味に立ち上がる形態で、９は口唇部に面取調整を施す。24は途中で僅かに内側に折れる。７は形状的に少なく、内面のみ内側に折れ口縁端部は肥厚する。15・21・23・32はやや上げ底気味で、23は外面底部との境に沈線を施し、32は肥厚する。26は底径、器高共に小さくなり、肥厚する。31は口縁まで直線的だが内面のみ途中で内に折れる。34～38はいずれも他と比較して器高が低い。38は口縁端部のみ肥厚する。39・40・42は坏の

底部、41は唐津焼水縁皿の口縁部である。また５・８・35・39の底面には板状圧痕が残る。

これらの坏の器形を見てみると底部から口縁部にかけて内湾しながらそのまま立ち上がるタイプ（Ａ類）、底部から口縁部にかけての断面外形は直線気味、又は一端外反しそこから内湾気味に立ち上がるタイプ（Ｂ類）、器高が低く、低部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がるタイプ（Ｃ類）に分類される。実際には、第48図ではＡ類－６～13・17、Ｂ－15・16・18～21・25・26、Ｃ－29・30。第49図ではＡ類－４～６、Ｂ類－７・８・10・11・25、Ｃ類－12・13。第50図（１号墳15トレンチ及び２号墳出土）ではＡ類－７～25、Ｂ類－27～33、Ｃ類－34～38と考えられる。最も量の多いのはＡ類で、15世紀中頃に比定できる。また、Ｃ類は16世紀前半頃の特徴を呈し、総じて土師質土器は15世紀中頃～16世紀前半頃のものと考えられる。（田中）

（5）関連遺物（第51～55図、図版59～62）

前述したように昭和３（1928）年に後円部が破壊された際に馬具や須恵器など多数の遺物が出土している。また、古墳群近辺の畑では石室に安置されていたと考えられる石枕も発見されている。

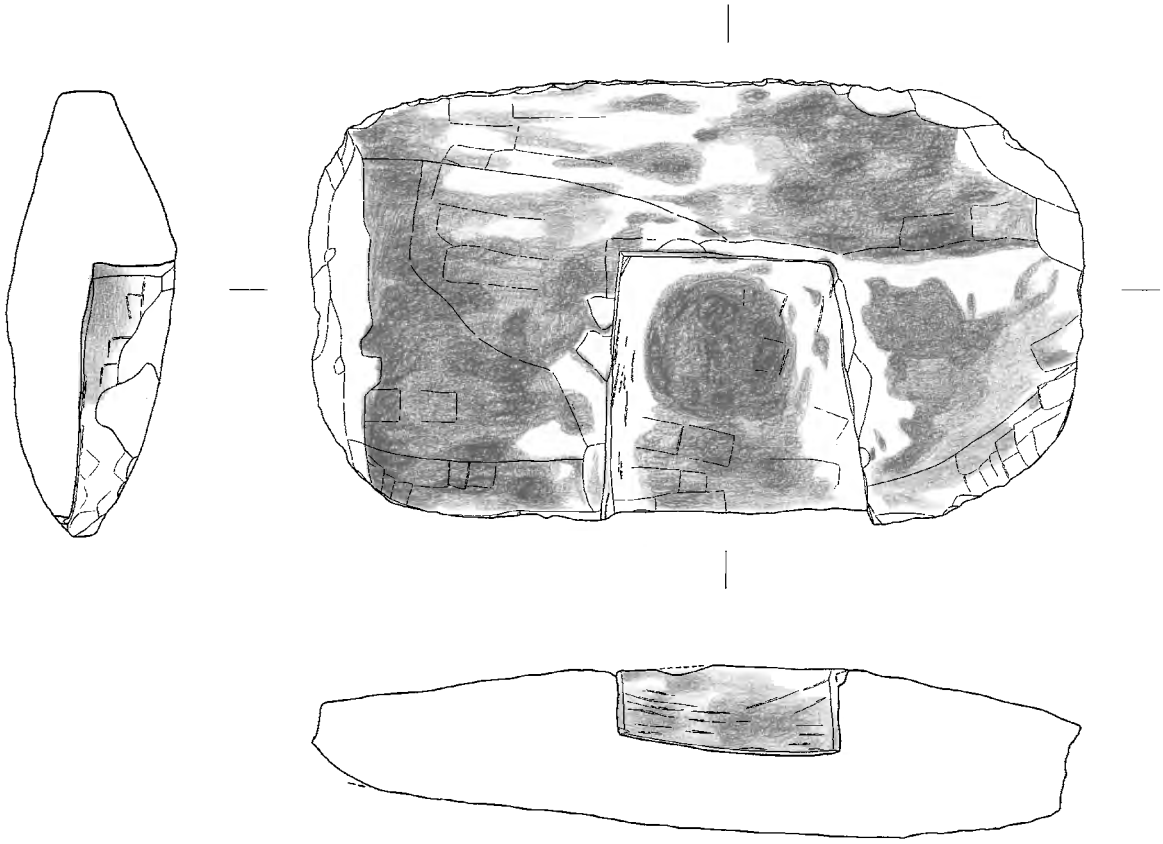
これらの遺物は古墳の土地所有者、別府大学、日田市教育委員会と分散所有されている。今回報告の機会をえたことから、ここで紹介する。

石枕（第51図、図版59）

当石除去時と思われる欠損や摩耗が全体的に見られる。一方の面（図面正面）のやや中央部に、平面台形の掘り込みをもつ。その掘り込みに頭部を設置したと思われる点、後頭部を設置したと思われる場所が若干窪んでいる点、掘り込みの端部に石灰と思われるものが付着する点、以上のことなどから石枕であると考えられる。断面を見て分かるとおり面は平坦ではなく、中央の掘り込み部が最も高く、外側に向かって低くなっていくという傾向をもつ。この面の裏面も掘り込みはないが、同様な状況を呈す。図面向かって右端部は、割ったのみでその後、面取り等の整形はおこなっていない。左端部は、磨耗や欠損がみられるが、その状況から、１cm以内で端部となり、なおかつ面取りをおこなっていたものと考えられる。上端部も、面取りを行っている。下端部は中央の掘り込み部分には面を持つが、その両脇には面を持たない。調整は、全体にノミ痕がみられる。最大長が82cm、最大幅が47cm、最大高が18.2cmである。（吉田和）

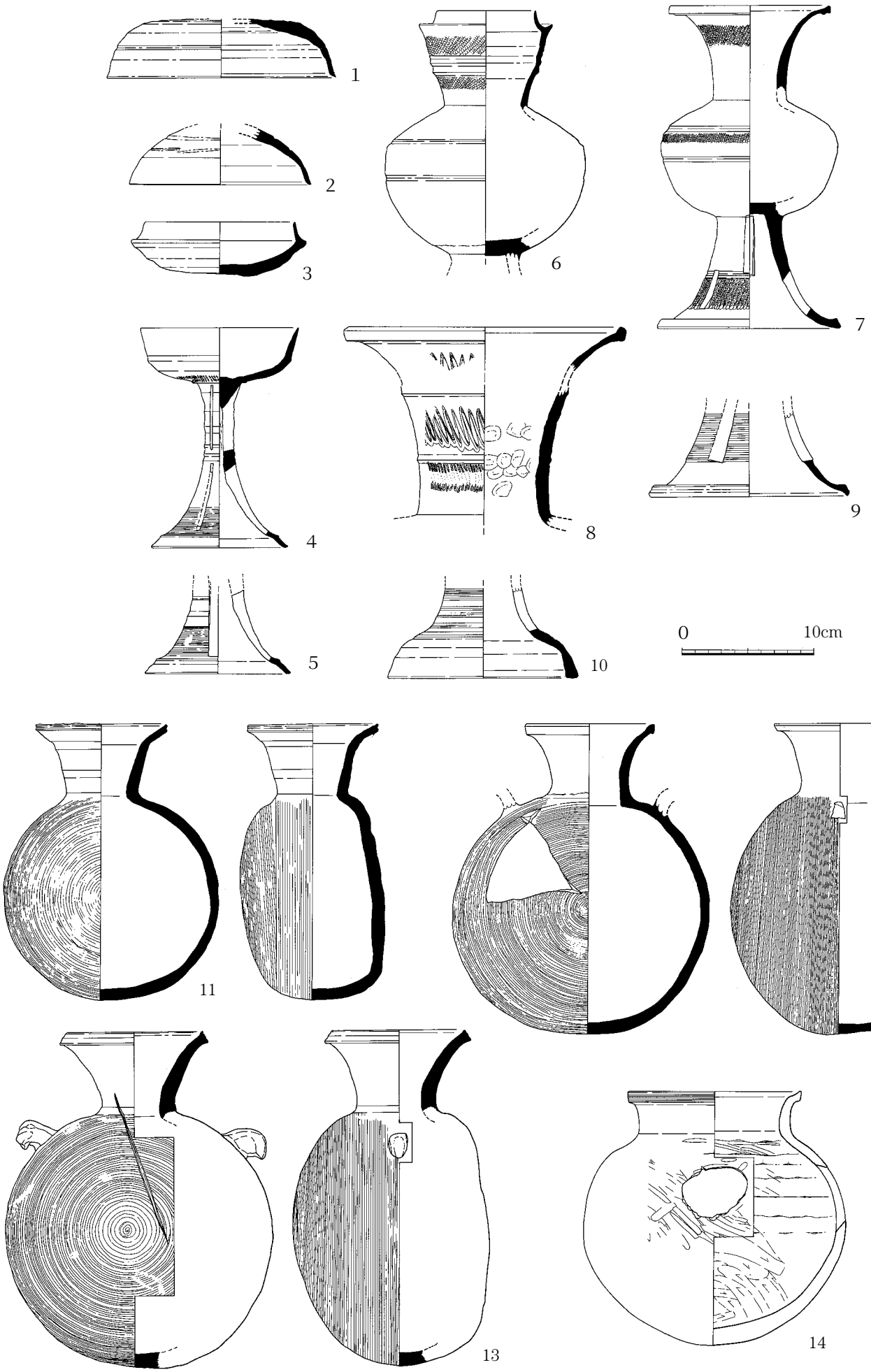
須恵器（第52図、図版58・59）

第52図１・２は坏蓋である。１は天井部が平坦に仕上げられ、口縁部との境に沈線が施されるが、稜は明瞭ではない。口縁端部はやや外反させており、内面には段を有する。外面調整は回転ヘラケズリ後ナデ、内面調整は回転ヘラケズリ後、天井部付近に不整方向のナデが施される。２は天井部を丸く仕上げ、口縁端部にかけて内湾する。端部内面には段を有する。内外面とも沈線、回転ナデが施される。３は完形の坏身である。底部は比較的平坦に仕上げられ、丸みを帯びながら立ち上がる。受け部端部は丸く仕上げられ、口縁端部に向けて、直線的に内傾する。端部内面には段をともなう。外面調整は底部全体にヘラケズリ、受け部から口縁端部かけ回転ナデが施される。内面調整は口縁部が回転ナデ、底部にはナデが施される。４は無蓋高坏である。口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸く仕上げる。脚部は上部を細く仕上げ、中位あたりから外反し、端部手前で「く」の

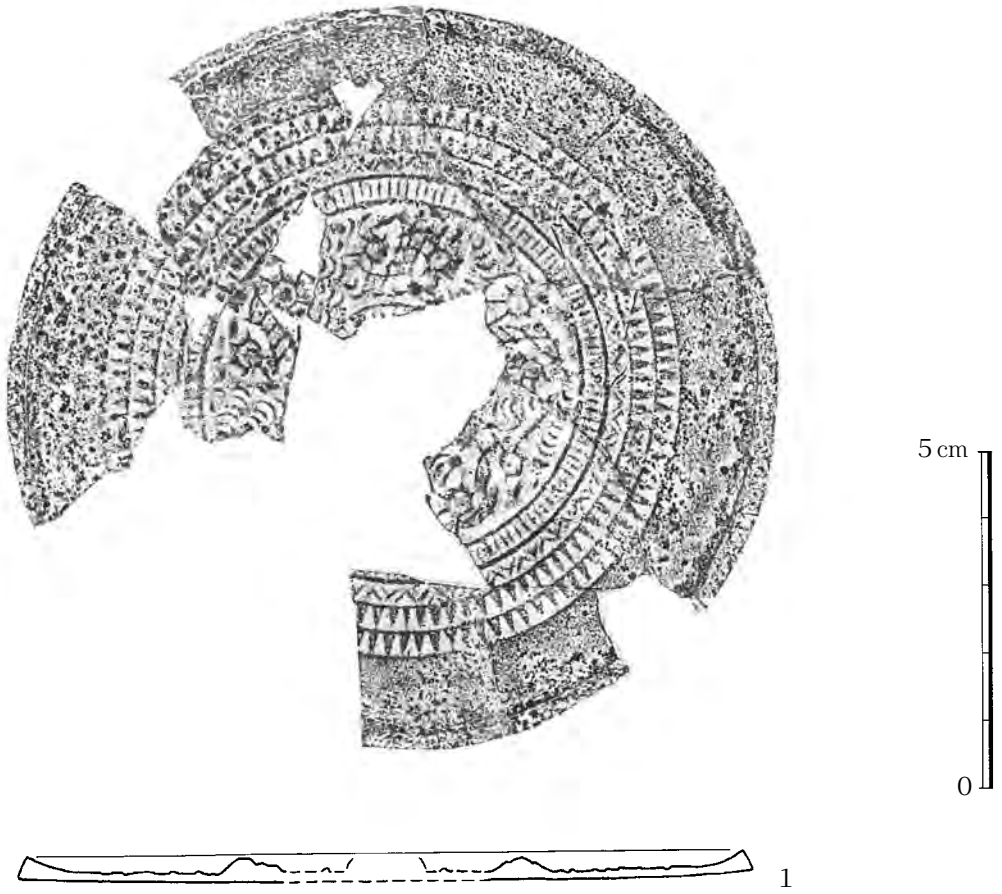


第51図　伝１号墳出土遺物実測図（１）(1/8)

字に屈曲し、丸く仕上げる。口縁部は回転ナデ、回転ヘラケズリを施し、脚部との接合部付近は刻み目を施文する。脚部は全体にカキ目を施した後、上半にナデ・指押え、端部付近に回転ナデが見られる。スカシは幅の狭い方形スカシを３方向に穿孔する。５は端部に向って緩やかに外反し、端部を緩く内湾させて、丸く仕上げる。外面調整は上部からナデ、カキ目、ナデの順に施し、方形スカシを４方向に穿孔する。６～８は壺である。６は有蓋で頸部から口縁部は外傾して立ち上がり、受け部で外反する。口縁端部は内湾しながら立ち上がる。また、この部分は他の部位と比べて色調が異なり、蓋を被せて焼成したと考えられる。頸部から胴部にかけては大きく外傾し、胴部中位よりやや上で最大径を測る。その下部は脚部との接合部へ緩やかに内湾する。外面調整は口縁端部に回転ナデ、頸部かけては沈線を施した後、その上下にタタキを施し、受け部側と頸部側を一定の幅でナデ消している。胴部は回転ナデの後、中位に２条の沈線を施す。内面調整は全体にわたり回転ナデを施す。また胴部上位には自然釉が付着するが、頸部より上はそれが見られないため、ある段階まで別々に焼成し、その接合したと思われる。７は無蓋で頸部から大きく外反しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚させ、ほぼ水平に仕上げる。胴部にかけては外傾し、胴部中位よりやや上で最大径を測る。脚部へ緩やかに内傾し、接合部付近で急激に内湾する。脚端部にかけて大きく外反しながら広がり、端部はほぼ水平となる。外面調整は口縁端部が回転ナデ、その下部にタタキを施した後、胴部上部までナデを施す。胴部中位に２条の沈線を施した後、刻み目を施文し、その上下をナデ消している。脚部はナデを施した後、沈線を１条施文し、その下部にタタキを施す。沈線を挟んでその上下に３方向の方形スカシを穿孔する。内面は全体にナデを施す。８は長頸壺の口縁部から頸部である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部付近で肥厚させ、大きく広がる。



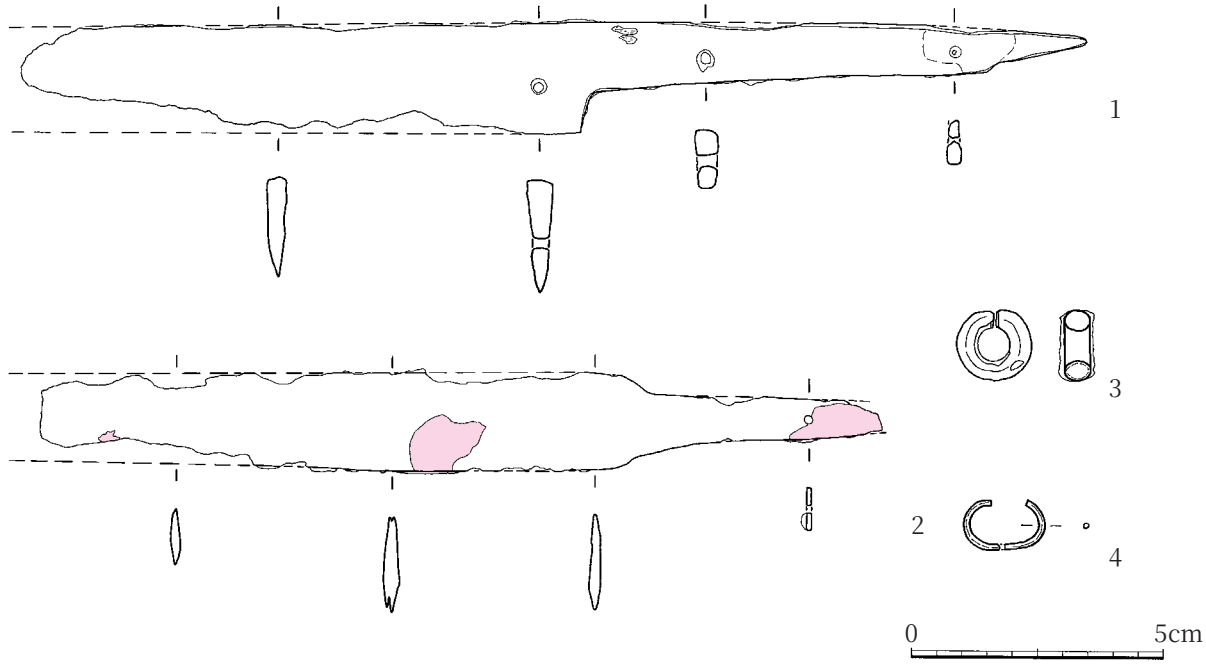
第52図　伝１号墳出土遺物実測図（２）(1/4)



第53図　伝１号墳出土遺物実測図（３）(2/3)

外面調整は端部に回転ナデを施す。その下位は回転ナデの後、断面台形もしくは三角形の突帯をつけ、それを挟んで、上・中段に波状文、下段にタタキを施す。内面は回転ナデ後指押えを施す。

９、10は壺脚部である。９は端部に向かって大きく外反させ、端部は「く」の字に屈曲させてシャープに仕上げる。外面調整はカキ目、ナデが施され、カキ目の部分には方形スカシが３方向に穿孔される。内面調整は回転ナデが施される。10は端部に向かって外反し、端部を緩やかに内湾させ、肥厚させて先端を水平に仕上げる。外面調整はカキ目の後、ナデが施され、方形スカシが４方向に穿孔されたと思われる。内面調整は回転ナデが施される。11～13は提瓶である。11は把手のないタイプである。口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部手前で大きく開く。端部には沈線を施し、丸く仕上げている。外面調整は口縁部から頚部かけて回転ナデを施すが、頚部近くはその後、ナデ消されている。胴部は回転カキ目を施す。内面調整は口縁部から頚部にかけて回転ナデである。12は把手をもつタイプであるが、欠損している。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部を肥厚させ、丸く仕上げ、底部はやや平坦気味である。外面調整は口縁部から頚部にかけて回転ナデ、胴部は回転カキ目を施す。内面調整は口縁部から頚部は回転ナデ、胴部は回転ナデで仕上げる。13も把手をもつタイプで完形である。把手は貫通しない。口縁部は外反しながら大きく開き、端部をやや肥厚させる。外面調整は口縁部から頚部に回転ナデ、胴部に回転カキ目を施す。内面調整は口縁部から頚部は回転ナデ、胴部は回転ナデで仕上げられる。14は完形の土師器壺である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部を肥厚させ、広がる。端部はシャープに仕上げる。胴部はやや扁平な円形を呈し、中位で最大径を測る。胴部中位には長径約５cm、短径約４cmの楕円形の



第54図　伝１号墳出土遺物実測図（４）(1/3)

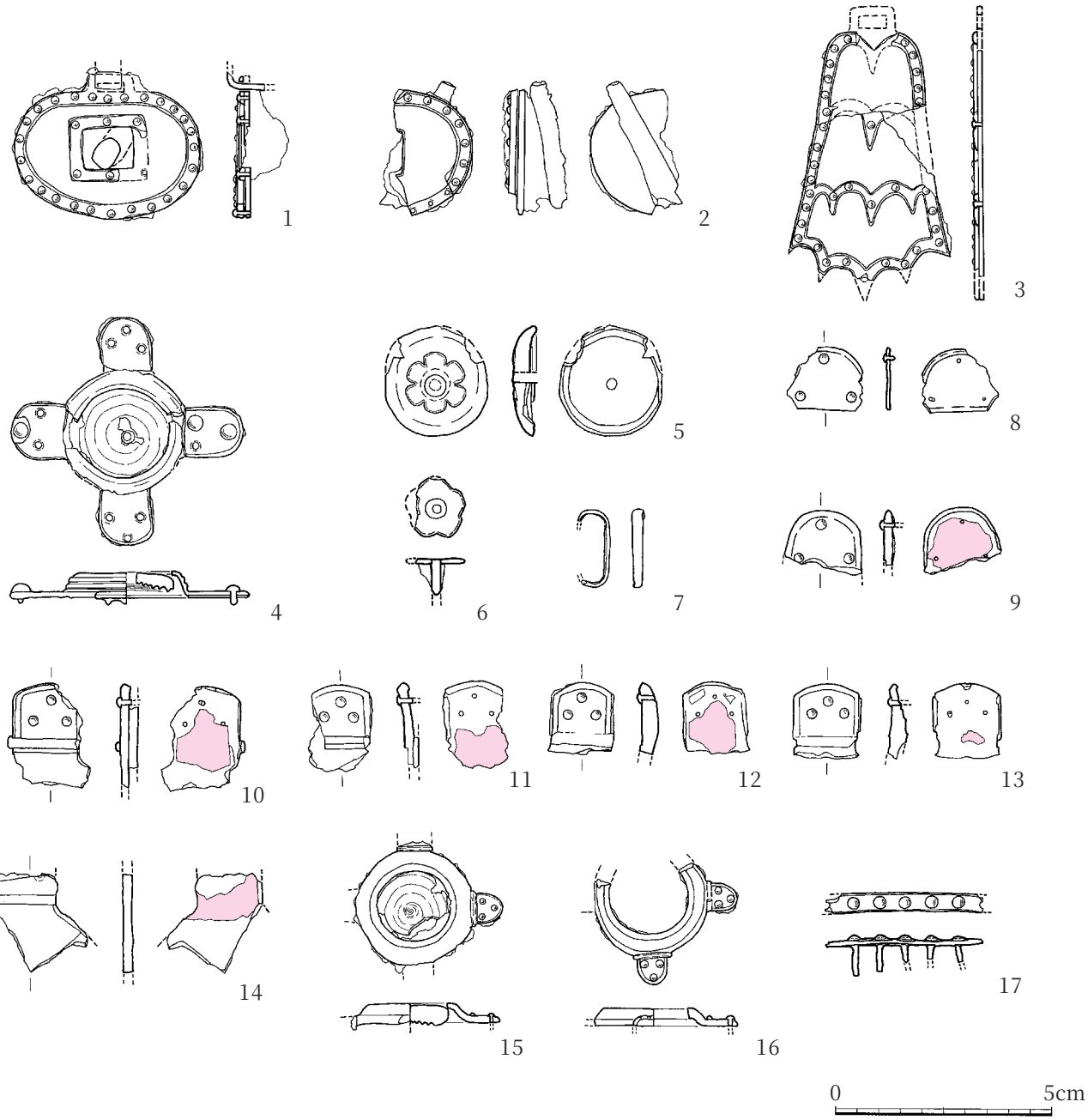
打ち欠きが見られる。外面調整は口縁端部がカキ目、ナデが施される。胴部はタタキにより成形される。器面全体に丹の塗布がみられる。内面調整は口縁端部に工具よるナデが見られる。その下部から頚部にかけてはナデが施され、丹が塗布される。胴部は丹の塗布後、ケズリが施される。（若杉）

鏡（第53図、図版60）

仿製の変形五獣鏡である。既に『大分の歴史（１）』大分合同新聞社1976に記載されているので、文言の一部を引用して報告することとする。鏡は面径14.5cmを測り、鈕を含む３分の１弱を欠失する。鏡背、鏡面とも緑錆で覆われているが、鏡背の右側半分は残りが良い。鏡面は僅かに凸面状を呈し、織物の繊維が部分的に付着する。錆が取れた部分は白銅質の輝きが見える。鏡縁は斜縁状の素文縁で、外区は二重の陽起鋸歯文帯、複線波文帯、櫛歯文帯となる。内区にはデフォルメされた獣文が高肉彫りされている。体部はＳ字状にまがり、両端は六角形ないし七角形の突出がある。この突出部の角から短い突線が放射状につく。突出間の体部には、網目状の突線文が描かれている。この突出部は獣の胸部と尾部を現しているものと思われ、突出部から省略された頭部や髭、後脚や尾とみられる突線が伸びる。各獣形間には鱗状のＣ字形を呈した短い線で埋められている。鈕の付近には圏線が残る。内区の獣形は、同市の有田古墳や法恩寺第４号墳出土の鏡によく類似していて注目される。（下村）

大刀・耳環（第54図、図版60・61）

第54図１は大刀である。残存するのは茎部と刀身部の半分までである。茎には若干木質が残存している。残存長は42.05cmを測り、刀身幅は元幅で4.4cm、刀身厚さ1.05cmである。目釘孔は茎部に２孔、刀身元に１孔穿たれており径が平均４mmである。茎部の長さからかなり大形の大刀と思われ、また目釘孔が刀身元にあることが注目される。２は鉄剣である。切先を欠損しており錆によって状態がかなり悪く、後世に保存処理されたと思われるような痕跡が剣身と茎の端部（トーン部



第55図　伝１号墳出土遺物実測図（５）(1/3)

分）に見受けられる。残存全長は33.25cm、剣身長23.85cm、身幅4.15cm、茎長9.4cmである。茎には目釘孔が１孔穿たれている。３・４はタイプの異なる銀環である。３は中空式の銀環で縦径2.75cm、横径３cmとわずかに楕円形である。ほぼ全面にわたって石灰質の付着物があり断面径は環端部の欠損部から約１cmを測る。また、素材である銀の厚みは約0.5mmである。４は逆に細身の銀環である。環中央部で折れていて接合しないが同一固体と思われる。断面径は約0.19cmである。

（越知）

馬具（第55図、図版60～62）

第55図１・２は対を成す心葉形鏡板である。１はほぼ完形であり、立聞には吊り金具の一部が残っている。鉄地銀張で、銀張の鋲を密にうつ。中央部に銜を通す方形孔をあける。錆によって明確ではないが方形孔の中に欠損した銜の断面が僅かに観察される。長さは6.72cm、幅8.6cmである。

２は半分欠損しているがかろうじて中央部の銜を通す方形孔の端部が残り、裏面には引手か銜の一部と思われる棒状の鉄が錆と共に付着している。棒状の鉄を含めた最大長は6.15cm、最大幅4.3cmである。３は鐘形の下部を垂らす５棘葉形杏葉である。鉄地金銅張で、鋲を密にうつ。部分的に欠損するが棘状の装飾は体部上位に１つ、中位に１つ、下位に３つ配されているとみられる。残存長は11.45cm、幅は7.4cm、鋲頭の径は0.3cm、鋲芯の径は0.2cmである。４は貝製辻金具である。鉄地金銅張りで貝の中央には飾り金具を付けていた径約0.45cmの孔が存在する。脚形は３鋲半円形で４脚ある。責金具は残存していないので不明である。鋲の大きさも他の貝製辻金具とは異なり鋲頭の径が0.75cmとなる。脚長は約2.5cmである。鉢部の腹部への装飾は若干の凹線を施すもので径は約5.7cmであり、そこに径約4.5cmのイモガイの螺塔部が嵌め込まれている。５は鉄地金銅張の辻金具の鉢部である。形態は扁平で、径は約５cm、厚さ約１cmである。花形座と宝珠飾りの芯が観察され、花形座は６弁の１枚であり、宝珠飾りは不明であるが芯の径は約0.5cmを測る。６は鉄地金銅張の飾金具である。貝製辻金具の中央を飾る５弁の花紋様を呈する花形座と、これを留める心棒である。花形座の最大幅2.68cm、厚さ約0.2cm、心棒の径0.4cmを測る。７は鉄地金銅張の責金具である。端部は両方とも折れているがほぼ完形に近い。幅0.5cmで断面が蒲鉾状を呈する。８～14は辻金具か雲珠の脚部と思われる。８は厚さが他とは異なりかなり薄い、裏面には塗金の折り込んだ端部が観察される。長さ2.9cm、幅3.47cm、厚さ0.15cm、鋲頭の径0.47cm、鋲芯の径0.15cmを測る。９は付け根が欠損しており責金具が付属したかどうかは不明である。長さ３cm、幅3.6cm、厚さ0.61cm、鋲頭の径0.45cm、鋲芯の径0.15cmを測る。10は幅0.45cmの責金具が残存している。表面は反ってはなく平坦である。裏面には脚部とは別の鉄地部分が残っている。長さ4.8cm、幅3.8cm、厚さ0.8cm、鋲頭の径0.45cm、鋲芯の径0.18cmを測る。11は責金具が残存していないが表面に責金具の痕跡が残り、若干反っている。長さ4cm、幅2.95cm、厚さ0.6cm、鋲頭の径0.45cm、鋲芯の径0.2cmを測る。12も同様であるが表面の責金具の痕跡は明確ではない。裏面も塗金の折り込みは不明瞭である。長さ3.3cm、幅3.08cm、厚さ0.75cm、鋲頭の径0･45cm、鋲芯の径0.2cmを測る。13も表面に責金具の痕跡が残り、若干反っている。長さ3.4cm、幅3.12cm、厚さ0.8cm、鋲頭の径0.45cm、鋲芯の径0.2cmを測る。14は脚部と思われる部分がほとんど欠損している。表面に責金具の痕跡が観察され下部が鉄地のみ、上部が鉄地金銅張で、鋲の芯がわずかに残存している。長さ4.55cm、幅4.4cm、厚さ0.43cm、鋲頭は不明、鋲芯の径0.2cmを測る。なお、９～14の裏面には革が付着していた痕跡（トーン部分）が観察され、また９・12～13の裏面には塗金の折り込んだ端部も認められた。15は鉄地銀装の扁平な貝製辻金具である。脚形は３鋲半円形で、４脚あるが１脚しか残存していない。責金具は２本残存し、鉄地銀装の無地で脚部の付け根に１本付くタイプである。鋲頭の径は0.27cmを測り、脚の長さは1.4cm、鉢部の径は5.25cm、そこに径約３cmのイモガイの螺塔部が嵌め込まれているが現状は外れている。16も15と同様に鉄地銀装の扁平な貝製辻金具である。脚形は３鋲半円形で４脚あるが２脚しか残存していない。責金具は２本残存し、鉄地銀装の無地で脚部の付け根に１本付くタイプである。鋲頭の径は0.35cmを測り、脚の長さは約1.4cm、鉢部の径は約5.2cmである。鉢部の腹部への装飾は錆による膨張で不明瞭であるため凹線かは不明であるが、頂部に１段平坦面があり、腹部下にも脚部と同じ高さで１段平坦面がある。貝は外れており現存しない。17は鉄地金銅張の磯金具の一部と思われる。鋲頭の径0.55～0.6cm、芯の径が約0.21cmである。（越知）

第２表　出土土器観察表（１）

挿図番号	古墳番号	Tr	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第18図１	1	1	２層	須恵	壺				(4.7)	タタキ ハケ	ナデ	ABDEH	良好	淡灰褐色	黄灰褐色	
第18図２	1	1	２層	須恵	甕				(7.4)	—	—	ABEH	やや不良	淡黄褐色	黄灰褐色	
第18図３	1	1	表土	須恵	壺				(4.3)	タタキ	ナデ 指押え	BEH	良好	黄灰褐色	灰黒色	外面自然釉
第18図４	1	2	SD1 P1	須恵	ハソウ		(13.4)	(6.7)	(7.2)	回転カキ目 回転ヘラケズリ	—	BDE	不良	黄灰褐色	暗赤褐色	
第18図５	1	8	南側落ち	須恵	短頸壺				(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	EH	やや不良	乳黄灰色	乳黄灰色	
第18図６	1	8	南側落ち	須恵	坏蓋				(3.1)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	ABEH	良好	青灰色	青灰色	
第18図７	1	7	溝上	須恵	ハソウ		(9.4)		(5.4)	回転カキ目 回転ヘラケズリ	回転ナデ	EH	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第18図８	1	7	サブTr	須恵	器台			(16.8)	(6.9)	—	—	EH	良好	暗青灰色	淡黄灰色	方形スカシ
第18図９	1	8	須恵器集中区	須恵	坏蓋	(13.6)			4.1	回転ナデ	回転ナデ	EH	良好	黒灰色	黒灰褐色	須恵器集中区
第18図10	1	8	北側須恵器集中区	須恵	坏身	(13.0)			(5.2)	—	—	DE	良好	青灰色	青灰色	須恵器集中区
第18図11	1	8	北側須恵器集中区	須恵	坏身	(13.4)			(4.4)	回転カキ目 回転ヘラケズリ	回転ナデ	E	良好	淡灰色	淡灰色	須恵器集中区
第18図12	1	8	北側須恵器集中区	須恵	坏身	(15.0)			4.8	回転カキ目 回転ヘラケズリ	回転ナデ	BEG	良好	灰色	灰色	須恵器集中区、底面にヘラ記号
第18図13	1	6	一括	須恵	大型 平底壺				(10.8)	タタキ・カキメ 波状文	ナデ	C	良好	淡黄褐色	明黄灰色	タタキは外面平行、内面同心円
第18図14	1	6	一括	須恵	大型 平底壺				(13.2)	タタキ	タタキ	H	良好	淡黄緑色	明黄灰色	タタキは外面平行、内面同心円
第18図15	1	6		須恵	大型 平底壺			(27.4)	(9.5)	カキ目・タタキ 回転ヘラケズリ	ナデ・タタキ	ABH	良好	青灰色	淡黄灰色	1号墳後円部側の資料と接合。客土か？
第20図１	2	1	内溝	須恵	大型 平底壺	(33.2)	(29.3)		(37.6)	タタキ・カキ目・ナデ	ナデ	ABE	良好	暗灰褐色	淡灰褐色	No.285と同一個体か？
第20図２	2	1	内溝	須恵	大型 平底壺		(29.0)	29.0	(30.4)	タタキ・カキ目・ナデ	ナデ	ABEH	良好	淡灰褐色	灰褐色	No.286と同一個体か？
第20図３	2	1	内溝	須恵	大型 平底壺	(33.2)	(29.0)	29.0	45.3	タタキ・カキ目・ナデ	ナデ	ABE	良好	暗灰褐色	淡灰褐色	No.285と286の合成図
第20図４	2	1	内溝	須恵	大型 平底壺	28.9	32.5	(27.0)	47.7	タタキ・波状文 ナデ	ナデ・波状文 指押え	BE	良好	青灰色	青灰色	口唇部に刺突状文
第21図１	2	1	一括	須恵	大型 平底壺	(29.2)			(3.5)	ナデ・波状文	ナデ	BCEF	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第21図２	2	1	内溝	須恵	大型 平底壺	30.3			(20.4)	タタキ・波状文 ナデ	ナデ	ABE	良好	灰褐色	明灰褐色	
第21図３	2	1	内溝	須恵	大型 平底壺			(34.5)	(29.0)	ナデ	ナデ	ABCE	不良	灰褐色	淡褐色	ナデは指と工具による
第21図４	2	1	一括	須恵	壺				(1.6)	—	ナデ	BCEF	良好	明灰褐色	淡灰褐色	
第24図１	2	2	内溝	須恵	大型 平底壺	(30.4)			(10.7)	回転ナデ・波状文	回転ナデ・波状文	ABE	良好	淡灰褐色	灰褐色	
第24図２	2	2	内溝	須恵	長頸壺				(11.6)	ナデ・波状文	ナデ	ABCEF	良好	明淡灰茶褐色	明淡灰褐色	
第24図３	2	3	内溝	須恵	蓋付壺	受部 (11.0)			(4.5)	回転ナデ・波状文	回転ナデ・指押え	BCEF	良好	淡黄灰色	黒灰色	外面に自然釉
第24図４	2	2	内溝	須恵					(3.0)	カキ目・ナデ 波状文	ナデ	EF	良好	青灰色	青灰色	
第25図１	2	5	内溝	須恵	大型 平底壺	25.8		26.3	48.3	タタキ・カキ目・ナデ ヘラケズリ・波状文	ナデ	AB	良好	青灰色	青灰色	
第25図２	2	5	内溝	須恵	大型 平底壺	25.0		(26.0)	44.8	タタキ・ナデ 波状文	タタキ・ナデ	BCEF	良好	青灰色	青灰色	底面にヘラ記号
第26図１	2	5	内溝	須恵	大型 平底壺	28.5	29.6	28.7	50.5	タタキ・カキメ 波状文	ナデ・波状文	ABE	良好	淡黄青灰色	淡黄青灰色	内面波状文は口縁部のみ、ヘラ記号
第26図２	2	5	内溝	須恵	大型 平底壺	24.4	(31.9)		(39.2)	タタキ・波状文 回転ナデ	波状文・タタキ	ABEH	良好	淡青灰色	黄灰色	
第26図３	2	2	内溝	須恵	大型 平底壺			(30.8)	(26.1)	タタキ・カキ目	タタキ・ナデ	ABCEH	やや不良	淡灰色	淡灰褐色	タタキは外面平行、内面同心円
第26図４	2	5	内溝	須恵	大型 平底壺	(24.2)			(3.5)	カキ目・ナデ 波状文	ナデ・波状文	AEH	良好	青灰色	青灰色	
第26図５	2	5		須恵	大型 平底壺	(26.6)			(10.5)	カキ目・波状文	ナデ・波状文	ABEH	良好	灰褐色	淡灰色	
第26図６	2	5	内溝	須恵	大型 平底壺	(25.4)			(14.0)	ナデ・波状文	ナデ・波状文	ABEH	良好	灰褐色	淡灰色	
第26図７	2	5	一括	須恵	壺				(1.5)	—	—	ABCEF	良好	明灰褐色	淡赤灰褐色	
第26図８	2	5	内溝	須恵	横瓶				(4.0)	カキ目	ナデ・タタキ	AEF	良好	青灰色	黄灰褐色	窯床の焼土付着
第27図１	2	6	内溝	須恵	大型 平底壺				(5.2)	ナデ・波状文	ナデ	ABEF	良好	灰黒色	明灰褐色	
第27図２	2	6	外溝	須恵	大型 平底壺				(4.9)	回転ナデ・波状文	回転ナデ	CEF	良好	明黄灰色	暗黄灰色	
第27図３	2	6	内溝	須恵	甕	(14.2)			(1.9)	波状文・カキ目 回転ナデ	回転ナデ・波状文	BE	良好	暗褐色	淡灰色	
第27図４	2	6	内溝	須恵	器台				(6.4)	波状文・カキ目 回転ナデ	ナデ・回転ナデ	BE	良好	青灰色	黄褐色	
第27図５	2	6	内溝	須恵	大型 平底壺	(22.0)			(3.3)	ナデ	ナデ	CEF	良好	淡黄灰色	青灰色	
第27図６	2	6	内溝	須恵	大型 平底壺	(30.8)			(5.4)	カキ目・ナデ 波状文	ナデ	BEH	良好	青灰色	青灰色	
第27図７	2	6	内溝	須恵	長頸壺				(13.2)	ナデ・カキ目・波状文	ナデ・タタキ	ABEH	良好	淡灰色	淡灰色	タタキは外面平行、内面同心円
第27図８	2	6	内溝	須恵	大型 平底壺	(27.4)			(6.7)	ナデ・波状文	ナデ・波状文	ABEF	良好	灰褐色	乳灰褐色	
第27図９	2	6	内溝	須恵	長頸壺				(9.7)	ナデ・カキ目・波状文	ナデ・タタキ	BCEF	良好	淡灰褐色	暗灰褐色	内面タタキは同心円文
第27図10	2	6	内溝	須恵	甕				(9.3)	ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	BE	良好	黄褐色	青灰色	タタキは外面平行、内面同心円
第27図11	2	6	内溝	須恵	大型 平底壺				(8.6)	カキ目・ケズリ タタキ	ナデ・指押え＋ケズリ	ABEF	不良	灰茶褐色	乳灰茶褐色	
第27図12	2	6		須恵	短頸壺	(10.2)	(23.6)		21.0	タタキ・カキ目＋ナデ	ナデ・タタキ	ACE	良好	灰白色	灰白色	タタキは外面平行、内面同心円
第27図13	2	6	内溝	須恵	壺		(14.2)		(7.1)	タタキ・カキ目	タタキ	BEF	良好	淡褐色	淡褐色	タタキは外面平行、内面同心円
第27図14	2	6	内溝	須恵	短頸壺		(17.6)		(10.6)	ナデ・カキ目	ナデ・タタキ	EH	良好	灰褐色	灰白色	
第28図１	2	6	内溝	須恵	器台			30.7	(40.4)	カキ目・ナデ 波状文	回転ナデ	ABE	良好	淡青灰色	乳青灰色	スカシは三角形の５段
第28図２	2	6	内溝	須恵	器台		(11.4)		(10.2)	カキ目・波状文	ナデ・指押え	BCE	良好	淡褐色	青灰色	スカシ３方向
第28図３	2	6	内溝	須恵	器台		(9.7)		(13.9)	ナデ・カキ目・波状文	ナデ	AEH	良好	淡青灰色	淡青灰色	方形スカシ
第28図４	2	6	内溝	須恵	器台		(12.1)		(8.5)	カキ目・波状文	ナデ	AE	良好	淡青灰色	淡青灰色	三角スカシ

第３表　出土土器観察表（２）

挿図番号	古墳番号	Tr	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第28図５	2	6	内溝	須恵	器台				(5.8)	波状文・カキ目 回転ナデ	ナデ・回転ナデ	BE	良好	淡灰色	黄褐色	
第28図６	2	6	内溝	須恵	器台			(21.5)	(10.4)	カキ目・ナデ 波状文	指押え・回転ナデ	BCEF	良好	淡黄灰色	淡青灰色	スカシ４方向
第28図７	2	6	内溝	須恵	器台			(25.8)	(11.0)	カキ目・波状文	ナデ	BEH	良好	灰褐色	淡褐色	スカシ４方向か？
第28図８	2	6	内溝	須恵	器台			(24.6)	(12.0)	ナデ・波状文 カキ目	ナデ	BCEF	良好	淡灰褐色	暗灰褐色	スカシ５か６
第28図９	2	6	内溝	須恵	器台			(16.8)	(10.3)	カキ目・ナデ 波状文	指押え・ナデ	BEF	良好	淡青灰色	淡青灰色	スカシ３方向
第28図10	2	6	内溝	須恵	器台				(10.5)	カキ目・ナデ 波状文	指押え・回転ナデ	CEF	良好	淡黄青灰色	淡黄青灰色	
第28図11	2	6	内溝	須恵	器台				(8.9)	カキ目・波状文	回転ナデ	ABE	良好	淡褐色	淡褐色	スカシ有り
第28図12	2	6	内溝	須恵	器台				(5.0)	ナデ・波状文＋カキ目	ナデ	ABCEF	良好	灰褐色	淡灰褐色	
第32図１	2	9		須恵	坏蓋	13.6			4.9	－	タタキ・ナデ	BCE	良好	青灰色	黄褐色	外面に付着物
第32図２	2	9	外溝	須恵	高坏				(3.1)	回転ナデ	回転ナデ	BCDEF	良好	暗青灰色	淡青灰色	
第32図３	2	9	外溝	須恵					(1.7)	ナデ・波状文	ナデ	AE	良好	青灰色	青灰色	
第32図４	2	10	クビレ部	須恵	大型 平底壺				(5.5)	カキ目・ナデ 波状文	ナデ	ABCEF	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第32図５	2	9	外溝	土師	高坏	(26.2)			(4.2)	回転ナデ＋タテハケ	回転ナデ＋工具ナデ	ABDE	良好	明赤褐色	橙褐色	
第32図６	2	9	外溝	土師	高坏	(24.6)				タタキ・回転ナデ	回転ナデ＋工具ナデ	ABDEH	良好	淡橙褐色	淡明橙褐色	
第32図７	2	10	内溝	須恵	大型 平底壺	26.4	(29.5)	(29.2)	59.6	タタキ・カキ目 ケズリ・ナデ	ナデ・タタキ	ABEH	良好	淡青灰色	淡黄灰褐色	
第32図８	2	10	内溝	須恵	大型 平底壺			(26.6)	(12.4)	タタキ・カキ目＋ナデ	ナデ・タタキ 指押え	ABE	良好	淡褐色	淡褐色	
第32図９	2	10	内溝	須恵	大型 平底壺			(26.7)	(19.7)	ナデ・タタキ・カキ目	ナデ・タタキ	ABEH	良好	淡黄灰色	淡灰褐色	タタキは外面平行、 内面同心円
第32図10	2	10	内溝	須恵	大型 平底壺			(29.0)	(15.9)	タタキ・カキ目	タタキ・ナデ	ABEH	良好	淡明灰色	灰褐色	タタキは外面平行、 内面同心円
第32図11	2	10	内溝	須恵	大型 平底壺			(34.5)	(17.1)	ナデ・タタキ・カキ目	ナデ・タタキ	ABH	良好	淡灰褐色	灰褐色	タタキは外面平行、 内面同心円
第36図１	2	14		須恵	坏身	(13.2)			(4.4)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	EF	良好	灰黒色	灰黒色	
第36図２	2	14	検出面	須恵	器台				(24.0)	カキ目・波状文	ナデ	B	良好	青灰色	茶灰色	4方向方形スカシ
第36図３	2	14	検出面	須恵	器台			(23.4)	(7.0)	カキ目	回転ヘラナデ	ABEH	良好	青灰色	茶灰色	方形スカシ
第36図４	2	14		須恵	大型 平底壺	(31.8)			(7.1)	回転ナデ・波状文	回転ナデ	ABEH	良好	黄白灰色	黄白灰色	口縁部に断面三角形 突帯
第36図５	2	14		須恵	大型 平底壺	(28.3)			(7.2)	カキ目・波状文 ナデ・刺突文	波状文・ナデ	ABEGH	良好	淡黄灰色	茶黄白灰色	口縁部に断面台形突帯
第36図６	2	14	検出面	須恵	大型 平底壺			(25.4)	(22.9)	ナデ・タタキ ヘラケズリ	ナデ・タタキ	ABEH	良好	灰褐色	淡灰褐色	
第36図７	2	14	内溝	須恵	横瓶	7.8	長26.9 短20.7			カキ目・ナデ	ナデ	ABCF	良好	淡黒灰色	乳黄灰色	口縁部に蓋を被せて 焼成した痕跡あり
第36図８	2	17	内溝	須恵	？				(4.7)	タタキ・波状文 カキ目	ナデ	BCEF	良好	淡灰褐色	明灰褐色	
第36図９	2	17	内溝	須恵		(25.0)			(7.3)	ナデ・波状文	ナデ	ABE	良好	灰褐色	淡灰褐色	
第40図１	2	A	サブＴｒ	須恵	大型 平底壺				(3.8)	ナデ・波状文	ナデ・波状文	BCE	やや不良	淡灰色	淡灰色	
第40図２	2	A	内溝	須恵	甕				(15.5)	波状文・ナデ・タタキ	ナデ・タタキ	BE	良好	黒褐色	黒褐色	
第40図３	2	A	内側周溝 茶褐直上	須恵	大型 平底壺	(30.0)			(14.3)	波状文	波状文	ABE	不良	乳灰色	乳灰色	
第40図４	2	A	サブTr	須恵	大型 平底壺	(33.0)			(7.7)	ナデ・波状文	ナデ・波状文	ABEH	不良	乳灰色	乳灰色	
第40図５	2	A		須恵	大型 平底壺					波状文	回転ナデ・波状文	AEBH	良好	淡黄青灰色	淡黄青灰色	
第40図６	2	A	サブTr	須恵	大型 平底壺				(8.3)	ナデ・タタキ	ナデ	BE	不良	明灰色	明灰色	
第40図７	2	A	サブTr	須恵	大型 平底壺				(6.5)	タタキ	－	ABDEH	不良	乳灰褐色	乳灰褐色	
第40図８	2	A	サブTr	須恵	大型 平底壺			(25.7)	(4.5)	タタキ	ナデ	ABEH	不良	淡黄灰色	淡黄灰色	
第40図９	2	A	サブTr	須恵	大型 平底壺				(8.2)	タタキ・ナデ	ナデ	AB	不良	乳灰色	乳灰色	
第40図10	2	B	表土	須恵	大型 平底壺				(5.7)	波状文＋カキ目	ナデ	BC	不良	明灰色	明灰色	
第40図11	2	B	内溝	須恵	坏蓋	(12.2)			(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	CH	良好	青灰色	青灰色	
第40図12	2	B	検出面	須恵	瓶	(14.4)			(5.0)	カキ目・波状文	回転ナデ 波状文	ABEH	良好	黒灰色	淡灰色	
第40図13	2	B	上層	須恵	脚付壺				(2.7)	ナデ・カキ目	ナデ・タタキ	BC	やや不良	明灰色	明灰色	外面にヘラ記号 内面に当て具痕
第40図14	2	B	検出面	須恵	器台				(6.6)	ナデ・カキ目 波状文	ナデ・ケズリ・タタキ	ABH	良好	青灰色	黄灰色	
第40図15	2	B	検出面	須恵	器台				(5.2)	波状文	ナデ	ABH	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	方形スカシ
第40図16	2	A	サブTr	須恵	器台				(5.0)	波状文	ナデ	AB	良好	灰褐色	灰褐色	
第40図17	2	B	内溝	須恵	器台				(6.5)	波状文・カキ目 回転ナデ	回転ナデ	BCH	良好	青灰色	青灰色	
第40図18	2	B	検出面	須恵	器台			(11.8)	(4.5)	カキ目・波状文	回転ナデ	ABH	良好	青灰色	青灰色	方形スカシ
第42図１	2	C	内溝	須恵	坏身	(11.8)			(4.6)	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ	AEF	良好	灰黒色	灰白色	口縁部に蓋の口縁部 が付着
第42図２	2	C	内溝	須恵	高坏			12.8	(9.8)	カキ目・回転ナデ	ナデ	ABEH	良好	青灰色	青灰色	写No.44と接合？ 窯床の土付着
第42図３	2	C	6～7層	須恵	大型 平底壺		31.0	32.2	(38.9)	カキ目・タタキ 波状文	回転ナデ・タタキ	ABDGH	やや不良	乳灰褐色	乳灰褐色	内側周溝 内面の当て具痕をナデ消し
第44図１	2	一括		須恵	坏蓋				(2.2)	回転ナデ	回転ナデ	CE	良好	青灰色	青灰色	
第44図２	2		一括	須恵					(4.2)	ナデ	回転ナデ	AEH	良好	青灰色	淡灰色	
第44図３	2		一括	須恵	坏蓋	(14.8)			(4.3)	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	BCE	良好	青灰色	青灰色	
第44図４	2	一括		須恵	長頸壺	(15.9)			(8.1)	カキ目・波状文・ナデ	カキ目・ナデ	ABEH	良好	黄青灰色	黄青灰色	
第44図５	一括			須恵	大型 平底壺	(31.6)			(7.7)	ナデ・波状文	ナデ	ABE	良好	灰褐色	淡灰褐色	

第４表　出土土器観察表（３）

挿図番号	古墳番号	Tr	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第44図６	一括			須恵	大型平底壺				(8.9)	タタキ・波状文回転ナデ	指押え・回転ナデ	BEF	良好	灰褐色	淡灰褐色	
第44図７	2	一括		須恵	短頸壺		(16.2)		(11.2)	ナデ・カキ目	ナデ	BCEF	良好	明灰褐色暗灰褐色	淡灰褐色	
第44図８	2	一括		須恵	大型平底壺				(11.9)	タタキ・カキ目	ナデ	BCE	良好	淡褐色	淡褐色	
第45図１	1	2	中層	弥生	甕				(2.7)	ナデ	ナデ	ABDE	やや不良	淡橙褐色	淡褐色	
第45図２	1	2	中層	土師	小型坩	(11.8)			(3.8)	ナデハケ	ナデ？	ABDE	やや不良	明赤褐色	淡赤褐色	
第45図３	1	3	一括	弥生	甕	(6.5)			(3.4)	ナデハケ	ナデ指押え	ABDEH	やや不良	黒褐色	淡褐色	
第45図４	1	3	墳丘土	弥生	甕				(4.2)	—	ナデ？	ABDE	良好	橙褐色	淡灰褐色	
第45図５	1	3	一括	弥生	甕	(6.1)			(3.8)	ハケナデ	—	ABDE	良好	淡灰褐色	—	内面剥離
第45図６	1	3	一括	弥生	甕	(5.4)			(3.9)	ナデ指押え	—	ABCDEH	やや不良	暗赤褐色	淡赤褐色	
第45図７	1	5	上～中層	弥生	甕				(9.6)	ハケ	ナデ	ABDEG	良好	暗茶褐色	暗黄茶褐色	
第45図８	1	6	上層	弥生	甕				(4.5)	ハケ後ナデ	ナデ	ABEF	良好	暗黄褐色	黄灰褐色	
第45図９	1	6	廃土	弥生	甕?壺?			(7.6)	(4.7)	？	？	BG	良好	明赤茶褐色	暗黄褐色	
第45図10	1	6	上層	弥生	甕			(8.0)	(3.5)	ナデ	？	ABCDEF	やや不良	淡黄褐色	暗黄褐色	
第45図11	1	6	上層	弥生	甕			(6.6)	(3.1)	ナデ	ナデ	AB	やや不良	淡黄褐色	灰褐色	
第45図12	1	6	上層	弥生	甕			(7.9)	(3.7)	ナデ	ナデ	AB	やや不良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第45図13	1	6	上層	弥生	甕			(9.5)	(4.1)	ナデ	ナデ	AB	良好	明黄褐色	橙褐色	
第45図14	1	6	上層	弥生	甕			(8.5)	(1.9)	ナデ	—	AB	良好	明赤褐色	黒褐色	
第45図15	1	6	上層	弥生	甕			(6.4)	(4.2)	ナデ	ナデ	AB	やや不良	明黄褐色	明橙褐色	
第45図16	1	6	上層	弥生	甕			(7.5)	(4.4)	ナデ	ナデ	AB	やや不良	暗黄褐色	黄褐色	
第45図17	1	6	上層	弥生	甕棺?				(5.1)	ナデ	ナデ	AB	良好	赤褐色	灰褐色	赤色顔料付着？
第45図18	1	7	南側	弥生	甕				(2.7)	ナデ	ナデ	BDEG	やや不良	黄褐色	黄褐色	
第45図19	1	8	南側	弥生?土師?	高坏				(4.3)	—	—	ABD	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第45図20	1	8	中央		高坏				(6.4)	ヘラミガキ	ナデ・しぼり痕	BEG	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第45図21	1	9	表土	弥生	甕				(3.4)	ナデ	—	ABDEH	良好	暗茶褐色	暗褐色	
第45図22	1	9	版築	弥生	甕			(5.2)	(3.8)	ケズリ・ナデ	ナデ・ミガキ	ABDEH	やや不良	明褐色	暗褐色	内面工具ナデ
第45図23	1	9	R１	弥生	甕			(4.0)	(10.3)	ミガキ・ハケ	ハケ	ABDEH	良好	橙褐色	暗茶褐色	内面工具ナデ
第46図１	1	10	溝	弥生	甕				(2.1)	ナデ	ナデ	ABCDE	良好	黄褐色	黄褐色	
第46図２	1	10	溝	弥生	甕				(2.0)	ナデ	ナデ	ABE	良好	黄灰褐色	黄灰褐色	口縁部に沈線
第46図３	1	10	表土盛土	弥生	甕				(4.1)	ハケ	ハケ・ナデ	ABDE	良好	黄褐色	黄褐色	
第46図４	1	10	表土盛土	弥生	壺			(6.6)	(3.0)	ナデ	ナデ・指押え	ABCD	良好	黄褐色	黄褐色	底面指押え
第46図５	1	10	表土	弥生	高坏				(5.5)	—	—	ABH	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第46図６	1	10	版築２層	弥生	甕				(3.9)	ハケ・ナデ	ハケ	ABH	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	外面上部工具ナデ
第46図７	1	10	表土	弥生	甕			(6.4)	(8.0)	—	—	ABDH	良好	淡褐色	暗黄褐色	
第46図８	1	10	表土盛土	弥生	甕			(7.0)	(3.9)	ナデ	ナデ	ABDE	良好	黄褐色	黄褐色	
第46図９	1	10	表土盛土	弥生	壺			(7.0)	(3.5)	—	—	ABCDEG	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第46図10	1	10	表土盛土	弥生	高坏			(12.6)	(4.5)	ナデ	ナデ	ABCEF	良好	黒茶褐色	淡黄褐色	
第46図11	1	11	溝下層	弥生	甕				(1.4)	ハケ・ナデ	—	ABDEH	良好	明褐色	—	
第46図12	1	11	溝内ピット	弥生	壺				(2.0)	—	—	ABDEH	良好	淡褐色	淡褐色	
第46図13	1	11	溝内ピット	弥生	甕				(2.1)	—	—	ABDEH	良好	淡褐色	淡褐色	
第46図14	1	11	表土	弥生	甕			(2.7)	(7.4)	—	—	ABDEH	良好	淡茶褐色	—	底面ナデ？
第46図15	1	11	溝内ピット	弥生	甕				(5.9)	ナデ	一部ナデ？	ABDEH	良好	淡黄褐色	淡明褐色	
第46図16	1	11	表土	弥生	甕			(7.7)	(2.6)	—	工具ナデもしくはミガキ	ABDEH	良好	淡茶褐色	淡灰褐色	
第46図17	1	11	表土	弥生	甕			(6.4)	(3.5)	ハケ	—	ABDEH	良好	淡赤褐色	淡茶褐色	底面ミガキ？
第46図18	1	12	溝状	弥生	壺				(2.7)	ミガキ	—	ABE	良好	赤褐色	淡黄褐色	丹塗り
第46図19	1	12	溝状	弥生	甕	(5.0)			(3.7)	—	—	ABDEH	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第46図20	1	12	検出面	弥生	甕			(7.2)	(6.3)	ハケ	ナデ	ABEH	良好	橙褐色	暗茶褐色	内面に工具痕
第46図21	1	11	表土	弥生	甕			(8.8)	(3.0)	ハケ・ナデ	—	ABDEH	良好	褐色	—	
第46図22	1	12	溝状	弥生	器台			(9.2)	(7.6)	ナデ	ナデ	ABD	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	
第46図23	1	13	上層一括	弥生	甕	(27.8)			(3.8)	ナデ	—	ABD	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第46図24	1	13	上層一括	弥生	甕			7.4	(5.2)	—	ミガキ指押え	ABDEH	良好	橙褐色	茶褐色	
第46図25	1	13	周溝	弥生	甕			(6.4)	(4.7)	ナデ	ナデ指押え	ABDH	良好	橙褐色	黄褐色	
第46図26	1	13	一括	弥生	器台			(8.2)	(6.0)	ハケ	ナデ	ABDE	良好	明褐色	暗淡褐色	内面に工具痕
第46図27	1	13	上層一括	弥生	甕			(28.0)	(4.5)	ハケナデ	—	ABEH	良好	淡褐色	灰褐色	
第46図28	1	13	西側	弥生	甕				(8.9)	(4.5)	ナデ	—	ABDEH	良好	淡黄褐色	灰褐色	外面は工具ナデか？
第46図29	1	13	一括	弥生	甕				(6.4)	(4.6)	ナデ	—	ABH	良好	黄褐色	暗黄褐色	

第５表　出土土器観察表（４）

挿図番号	古墳番号	Tr	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第46図30	1	13	東側	弥生	壺			(9.0)	(2.7)	—	ハケ	ABDE	良好	淡黄褐色	淡橙褐色	
第46図31	1	13	上層一括	弥生	甕				(3.6)	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	明褐色	淡褐色	
第46図32	1	13	下層	弥生	甕				(2.2)	ナデ	—	ABDH	良好	茶褐色	暗茶色	
第46図33	1	13	上層一括	弥生	甕			(7.0)	(3.8)	—	指押え	ABD	良好	明褐色	淡明褐色	
第46図34	1	15	表土	弥生	甕			(6.2)	(3.4)	—	—	ABCDF	良好	赤褐色	淡黄褐色	南側拡張部
第46図35	1	13	上層一括	弥生	甕			(7.0)	(3.4)	ナデ	指押え	ABDH	良好	淡黄褐色	淡橙褐色	内面に工具痕もしくはナデ
第46図36	1	15	褐色土層	弥生	甕				(3.5)	ナデ	—	ABCDF	不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第46図37	1	15	11層	弥生	甕				(3.6)	ハケ	ハケ	ABCDE	良好	淡黄褐色	淡赤褐色	
第46図38	1	15	表土	弥生	甕			(6.9)	(2.8)	ナデ	ナデ	ACDEF	良好	橙褐色	淡黒褐色	
第46図39	1	15	表土	弥生	器台			(5.4)	(6.0)	ハケ	ナデ	ABDEF	良好	橙褐色	橙褐色	
第46図40	1		表採	弥生	壺	6.3			(3.3)	ハケ ナデ	ナデ	ABDEGH	良好	暗淡褐色	暗褐色	外面工具ケズリ・ナデ
第47図１	2	1	内溝	弥生	甕	(40.7)	(38.4)	8.1	37.8	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ABDE	良好	褐色	暗褐色	
第47図２	2	1	中溝	弥生	壺	(22.0)			(9.3)	—	ナデ	ABDEF	不良	黄褐色	明褐色	
第47図３	2	1	内溝	弥生	甕				(8.3)	ナデ	ナデ・指押え	ABDEF	良好	暗黄褐色	暗淡褐色	
第47図４	2	1	中溝	弥生	甕				(3.1)	ナデ・ハケ	ナデ	ABDEH	良好	淡橙褐色	褐色	
第47図５	2	1	一括	弥生	甕				(3.1)	ナデ	ナデ	ABDEG	良好	暗淡褐色	淡褐色	
第47図６	2	1	外溝	弥生	壺			(6.9)	(3.6)	ハケ・ナデ	—	ABEFH	良好	褐色	淡灰褐色	
第47図７	2	1	外溝	土師	鉢	(11.4)		(3.3)	4.8	ナデ・指押え	ナデ・ハケ	ABDE	やや不良	淡褐色	褐色	
第47図８	2	一括		弥生	甕	(46.2)			(7.5)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	ABDE	やや不良	淡褐色	淡褐色	
第47図９	2	10	内溝	弥生	甕				(2.1)	ナデ・ハケ	ナデ	ABDE	不良	淡黄褐色	明淡褐色	
第47図10	2	10	内溝	弥生	高坏				(3.0)	ハケ	ハケ	ABDE	良好	淡褐色	暗灰褐色	
第47図11	2	12	一括	弥生	甕				(6.1)	ナデ・ハケ	ハケ	BCDE	良好	淡褐色	淡黄褐色	突帯に施文
第47図12	2	14	一括	弥生	甕	(28.9)	(27.6)		15.4	ハケ・ナデ	ナデ	ABDE	良好	暗茶褐色	暗黄褐色	一部丹塗り
第47図13	2	14	一括	弥生	甕	(27.4)	(25.2)		(16.0)	ハケ・ナデ	ナデ	ABDE	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	一部丹塗り、煤付着
第47図14	2	14	検出面	弥生	甕				(4.0)	ナデ	—	ABDE	良好	暗淡黄褐色	暗淡黄褐色	
第47図15	2	14	一括	弥生	甕				(4.7)	ハケ・ナデ	ナデ	ABDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	丹塗り、突帯痕あり
第47図16	2	14	一括	弥生	甕				(3.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ABDE	良好	暗淡黄褐色	暗淡黄褐色	
第47図17	2	14	一括	弥生	甕				(2.6)	ハケ・ナデ	ナデ	ABE	良好	暗淡黄褐色	暗淡黄褐色	内面に工具痕
第47図18	2	一括		弥生	甕	(34.9)			(5.9)	ナデ・ハケ・指押え	ナデ・ハケ	ABDE	やや不良	黄褐色	淡黄褐色	口縁部丹塗り
第48図１	1	2	２層一括	陶	瓶			(9.5)	(5.4)	—	—	ABEH	良好	暗緑褐色	暗淡褐色	外面釉、内面ロクロ目
第48図２	1	4	SX1 一括	土師	皿	(12.8)		(8.2)	3.9	ナデ	ナデ	ACDEFH	良好	淡赤褐色	淡黄褐色	底面糸切り、内底面工具ナデ
第48図３	1	4	SX1 一括	土師	皿	(13.4)		(8.8)	(3.4)	ナデ	ナデ	ADEFH	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第48図４	1	5	P17	土師	坏	(7.2)		(5.4)	1.8	ナデ	ナデ	ADE	良好	橙褐色	橙褐色	下層、底面糸切り
第48図５	1	5	下層	土師	坏	(8.0)		(6.0)	2.8	ナデ	ナデ	AE	良好	橙褐色	橙褐色	トレンチ南端、底面糸切り
第48図６	1	5	下層	土師	坏			(7.4)	(3.3)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	茶褐色	茶褐色	トレンチ南端、底面糸切り
第48図７	1	5	P13～16	土師	坏	(12.2)		(8.3)	3.3	ナデ	ナデ	ADEG	良好	橙褐色	淡橙褐色	下層、底面糸切り
第48図８	1	5	P９	土師	坏	(13.2)		(7.0)	3.3	ナデ	ナデ	ADE	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	底面糸切り
第48図９	1	5	下層	土師	坏	(13.0)		(9.2)	2.9	ナデ	ナデ	ABDG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	トレンチ南端、底面糸切り
第48図10	1	5	P９	土師	坏	(11.2)		(7.0)	3.6	ナデ	ナデ	ADEG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	底面糸切り
第48図11	1	5	P15	土師	坏	(14.8)		(5.6)	3.3	ナデ	ナデ	ABDG	良好	明黄褐色	名桜褐色	底面糸切り
第48図12	1	5	P15	土師	坏	(13.0)		(9.2)	2.5	ナデ	ナデ	ABDE	良好	暗橙褐色	暗橙褐色	底面糸切り
第48図13	1	5	上層	土師	椀	(14.0)		(10.0)	3.7	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	橙褐色	橙褐色	トレンチ南半
第48図14	1	5	下層	土師	坏	(10.2)		(6.6)	3.8	ナデ	ナデ	ADE	良好	橙褐色	橙褐色	トレンチ南端、底面糸切り
第48図15	1	5	P13～16	土師	坏	(12.0)		(7.1)	3.2	—	ナデ	ABDG	良好	暗黄橙色	暗黄橙色	下層、底面糸切り？
第48図16	1	5	P18	土師	坏	(12.5)			(3.0)	—	—	DEH	良好	橙褐色	橙褐色	
第48図17	1	6	一括	土師	坏	(15.6)		(11.0)	3.5	ナデ	ナデ	ACD	良好	暗黄褐色	明橙褐色	底面糸切り
第48図18	1	5	上下層	土師	坏	(12.6)			(2.5)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	明黄茶褐色	明黄茶褐色	トレンチ南半
第48図19	1	5	P17	土師	坏	(13.0)			(2.4)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	下層
第48図20	1	5	上層	土師	坏	(11.6)		(7.0)	3.7	ナデ	ナデ	BDE	良好	明黄褐色	明黄褐色	トレンチ南半、底面糸切り
第48図21	1	5	P17	土師	坏	(12.7)		(7.0)	3.2	ナデ	ナデ	ADE	良好	明黄褐色	明黄褐色	下層、底面糸切り
第48図22	1	5	下層	土師	坏	(13.7)		(8.8)	3.3	ナデ	ナデ・ヘラガキ	ADEG	良好	橙褐色	橙褐色	トレンチ南端、底面糸切り
第48図23	1	5	P10	土師	椀	(13.2)		(7.4)	(3.5)	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面糸切り
第48図24	1	5	上層	土師	坏	(13.8)		(8.0)	3.4	ナデ	ナデ	DE	良好	明褐色	明褐色	トレンチ南半、底面糸切り　復元？
第48図25	1	5	P17・18	土師	坏	(14.4)		(8.6)	4.0	ナデ	ナデ	ADE	良好	明黄褐色	明黄褐色	下層、底面糸切り
第48図26	1	5	P12	土師	坏	(13.6)		(6.4)	3.6	ナデ	ナデ	AEG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	

第６表　出土土器観察表（５）

挿図番号	古墳番号	Tr	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第48図27	1	5	上層	土師	坏				(3.2)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	トレンチ南半
第48図28	1	6	中～下層	土師	坏				(2.9)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	明茶褐色	明茶褐色	トレンチ東半、底面糸切り
第48図29	1	5	P18	土師	皿	(13.4)		(7.8)	2.7	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	AE	良好	明赤褐色	橙褐色	下層、底面糸切り
第48図30	1	5	P18	土師	坏	(14.3)		(7.9)	2.8	ナデ	ナデ	ADE	良好	黄橙色	黄橙色	下層、底面糸切り
第48図31	1	5	南端	土師	坏			(8.7)	(2.3)	ナデ	ナデ	ABD	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	外面指頭圧痕
第48図32	1	5	P11	土師	坏			(9.4)	(2.0)	ナデ・指押え	ナデ	AE	良好	明赤褐色	明赤褐色	底面糸切り
第48図33	1	5	P15	土師	坏			(8.7)	(2.5)	ナデ	ヘラガキ後ナデ	AE	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第48図34	1	5	下層	土師	坏			(10.4)	(2.2)	ナデ	ナデ	ADG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	トレンチ南端、底面糸切り
第48図35	1	5	P17	土師	坏			(6.4)	(2.0)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	下層、底面糸切り後ナデ
第48図36	1	5	下層	土師	坏			(7.8)	(1.8)	ナデ	ナデ・ヘラガキ	DEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	トレンチ南端、底面糸切り
第48図37	1	5	上下層	土師	坏			(8.8)	(2.3)	ナデ	ナデ	ADE	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	トレンチ南半、底面糸切り
第48図38	1	5	P８	土師	坏			(9.4)	(1.7)	ナデ	ナデ	ADE	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	底面糸切り
第49図１	1	7	北側拡張区	土師	坏				1.8	ナデ	ナデ	ADEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図２	1	7		土師	皿	(7.7)		(5.2)	1.0	ナデ	ナデ	DEG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	底面糸切り、煤付着
第49図３	1	7	北側拡張区	土師	皿	(8.0)		(5.6)	1.2	ナデ	ナデ	G	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	底面ナデ
第49図４	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏	(10.9)		(8.0)	2.7	ナデ	ナデ	BDEG	良好	明黄茶褐色	明黄茶褐色	底面糸切り、ヘラ痕
第49図５	1	7	北側拡張区	土師	坏	(12.9)		(7.6)	3.2	ナデ・指押え	ナデ・指押え	BDE	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第49図６	1	7	北側拡張②上層	土師	椀	(13.4)		(9.4)	3.4	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	淡橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第49図７	1	7	北側拡張区	土師	坏	(11.5)		(7.5)	2.8	ナデ・指押え	ナデ	DEG	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第49図８	1	7	拡張黄褐色土中層	土師	坏	(12.4)		(8.2)	3.2	ナデ	ナデ	ADE	良好	黄褐色	黄褐色	底面糸切り
第49図９	1	7	拡張黄褐色土中層	土師	坏	13.2		8.2	3.4	ナデ	ナデ	ADG	良好	橙褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図10	1	7	拡張黄褐色土中層	土師	坏	(13.0)		(8.0)	4.0	ナデ	ナデ・ヘラガキ	ADEH	良好	明茶褐色	明茶褐色	底面糸切り、ヘラナデ
第49図11	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏	(13.8)		(8.5)	3.3	ナデ	ナデ	ADEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図12	1	7	北側拡張区下層	土師	坏	(15.3)		(9.0)	3.9	ナデ	ナデ・ヘラガキ	ADEG	良好	黄茶褐色	淡茶褐色	底面糸切り
第49図13	1	7	北拡張黄褐色土層	土師	坏	(17.6)		(9.8)	2.9	ナデ	ナデ	AD	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底面糸切り
第49図14	1	7	北側拡張区	土師	坏			(8.2)	(2.2)	ナデ	ナデ	ABD	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図15	1	7		土師	坏			(7.2)	(1.2)	ナデ	ナデ	DEG	良好	明黄茶褐色	明黄茶褐色	底面糸切り
第49図16	1	8	中央	土師	坏			(7.4)	(1.2)	ナデ	ナデ・ヘラガキ	ADEG	良好	赤茶褐色	赤茶褐色	底面糸切り
第49図17	1	7	北側拡張区	土師	坏			(9.2)	(2.8)	ナデ	ナデ	ABDEG	良好	黄茶褐色	黄茶褐色	底面糸切り
第49図18	1	7	北側拡張②	土師	坏			(9.2)	(1.3)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	底面糸切り
第49図19	1	7	南側拡張区	土師	坏			(9.0)	(2.1)	ナデ・ヘラガキ	ナデ	ADE	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第49図20	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏			(8.8)	(3.0)	ナデ・ヘラガキ	ナデ	DEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図21	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏			(8.0)	(2.1)	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	ADEG	良好	茶褐色	茶褐色	底面糸切り
第49図22	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏			(8.8)	(2.3)	ナデ	ナデ	ABDEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図23	1	7	北側拡張区	土師	坏			(9.0)	(1.4)	ナデ	ナデ	BD	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図24	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏			(9.2)	(2.0)	ナデ	ナデ	ADEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図25	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏			(7.8)	(3.0)	ナデ	ナデ・ヘラガキ	BDEG	良好	明黄茶褐色	明黄茶褐色	底面糸切り、ヘラ痕
第49図26	1	7	南側拡張区	土師	坏			(6.8)	(2.5)	ナデ	ナデ・ヘラガキ	ADEG	良好	明茶褐色	明茶褐色	底面糸切り
第49図27	1	8	北側	土師	坏			(8.2)	(1.6)	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	ADEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図28	1	8	中央	土師	坏			(8.8)	(1.7)	ナデ	ナデ・ヘラガキ	ADEG	良好	明茶褐色	明茶褐色	底面糸切り
第49図29	1	8	中央	土師	坏			(9.6)	(1.0)	ナデ	ナデ	BDG	良好	黄褐色	黄褐色	底面糸切り
第49図30	1	7	北側拡張黒色土層	土師	坏			(10.0)	(1.3)	ナデ	ナデ	ADG	良好	黄褐色	黄褐色	底面糸切り、ヘラ切り
第49図31	1	7		土師	坏			(7.6)	(1.4)	ナデ	ナデ・ヘラガキ	BDEG	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	底面糸切り
第49図32	1	8	北側	土師	坏			(5.8)	(2.0)	ナデ・ヘラケズリ	－	BDEG	良好	明黄褐色	明黄褐色	底面糸切り
第49図33	1	10	表土盛土	土師	坏			(7.3)	(1.5)	－	－	ABCDEF	良好	赤褐色	赤褐色	
第49図34	1	10	表土盛土	土師	坏			(7.8)	(1.7)	ナデ	ナデ	CDF	良好	黄褐色	暗黄褐色	底面糸切り
第49図35	1	10	表土盛土	土師	坏			(7.6)	(2.0)	ナデ	ナデ	BCDF	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第49図36	1	8		瓦器	擂鉢	(19.6)			(4.0)	ナデ	ナデ・ハケ	E	良好	灰黒色	灰色	
第49図37	1	8	中央	磁器	壺		8.3	5.2	(6.6)	－	－	G	良好	淡水色	暗肌色	
第50図１	1	15	南側暗褐色土層	土師	皿	(7.7)		(5.0)	1.6	ナデ	ナデ	ABCD	良好	淡赤褐色	淡黄褐色	底面糸切り
第50図２	1	15	北側暗褐色土層	土師	皿	(7.6)		(5.8)	1.3	ナデ	ナデ	BCDF	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第50図３	1	15	北側暗褐色土層	土師	皿	(9.0)		(6.8)	1.9	ナデ	ナデ	ABDE	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第50図４	1	15	北側暗褐色土層	土師	皿	(9.8)		(8.0)	1.6	ナデ	ナデ	ABCEH	良好	黄茶褐色	黄茶褐色	底面糸切り
第50図５	1	15	北側黄褐色土層	土師	皿	(7.5)		(5.6)	1.8	ナデ	ナデ	ABCDEF	良好	濃黄褐色	濃黄褐色	底面糸切り・板状圧痕
第50図６	1	15	北側暗褐色土層	土師	皿	(7.1)		(5.4)	1.6	ナデ	ナデ・工具ナデ	ACDF	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り

第７表　出土土器観察表（６）

挿図番号	古墳番号	Tr	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第50図７	1	15	北側暗褐色層	土師	坏	(10.8)		(9.4)	3.3	—	—	ABDEH	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	
第50図８	1	15	北側暗褐色層	土師	坏	(12.2)		8.2	3.6	—	—	ABCDEH	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り後、板状圧痕
第50図９	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(13.0)		(9.0)	3.9	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	底面糸切り
第50図10	1	15	北側暗褐色層	土師	坏	(12.8)		(8.4)	3.2	ナデ	ナデ	ABCDH	良好	淡褐色	淡褐色	底面糸切り
第50図11	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(13.0)		(9.2)	3.2	ナデ	ナデ	ABDE	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面糸切り
第50図12	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.2)		(8.7)	4.1	ナデ	ナデ	ABCDEF	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	底面糸切り
第50図13	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.4)		(9.0)	3.1	ナデ	ナデ・工具ナデ	ACDE	良好	濃赤褐色	濃赤褐色	底面糸切り
第50図14	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(13.0)		(9.0)	3.4	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第50図15	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(13.1)		(8.0)	3.6	ナデ	ナデ	ABCDE	良好	暗橙褐色	暗橙褐色	底面糸切り
第50図16	1	15	北側黄褐色土層	土師	坏	(12.8)		(7.6)	3.3	—	—	ABCDEF	良好	黄褐色	黄褐色	底面糸切り
第50図17	1	15	北側黄褐色土層	土師	坏	(13.0)		(9.2)	3.2	ナデ	ナデ	ACDEF	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第50図18	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(13.0)		(10.2)	3.0	ナデ	ナデ・工具ナデ	ABCDF	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第50図19	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(14.2)		(8.1)	3.6	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面糸切り
第50図20	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(15.9)		(10.0)	3.4	ナデ	ナデ	ABCDE	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第50図21	1	15	一括	土師	坏	(14.2)		(9.2)	3.1	ナデ	ナデ・工具ナデ	ABCDE	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第50図22	1	15	暗褐色土層	土師	坏	(14.9)		(9.8)	3,7	ナデ	ナデ	ABDE	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面糸切り
第50図23	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(15.3)		(11.3)	3.4	ナデ	ナデ・工具ナデ	ABCDF	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	底面糸切り 外面工具による沈線
第50図24	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(15.6)		(10.8)	3.3	ナデ	ナデ	ACDEH	良好	橙茶褐色	橙茶褐色	底面糸切り
第50図25	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(14.2)		(9.7)	2.8	ナデ	ナデ	ABDE	良好	明橙褐色	明橙褐色	底面糸切り
第50図26	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(10.0)		(5.0)	2.8	ナデ	ナデ	ABCDEH	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面糸切り
第50図27	1	15	暗褐色土層	土師	坏	(12.0)		(7.8)	3.5	ナデ	ナデ	ABDE	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第50図28	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(11.6)		(7.6)	3.1	ナデ	ナデ	ABCDF	良好	赤褐色	赤褐色	土器集中区一括 底面糸切り
第50図29	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.4)		(8.2)	3.4	ナデ	ナデ・工具ナデ	ACDEF	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第50図30	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.6)		(7.2)	3.3	ナデ	ナデ	ACDEF	良好	赤褐色	赤褐色	底面糸切り
第50図31	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.9)		(6.5)	3.5	ナデ	ナデ	ABDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底面糸切り後、ヘラケズリ
第50図32	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.8)		(8.3)	3.3	ナデ	ナデ	ABCDEF	良好	濃黄褐色	濃黄褐色	底面糸切り
第50図33	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(13.8)		(9.0)	3.5	ナデ	ナデ	ABCDEG	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第50図34	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(11.8)		(8.1)	2.6	ナデ	ナデ	ABCDE	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底面糸切り
第50図35	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.2)		(7.8)	2.4	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底面糸切り・板状圧痕
第50図36	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	(12.6)		8.6	2.7	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底面糸切り
第50図37	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏	13.6		9.2	3.0	ナデ	ナデ	ABDE	良好	橙褐色	橙褐色	底面糸切り
第50図38	1	15	北側暗褐色層	土師	坏	(15.4)		(10.0)	3.3	ナデ	ナデ	ABDEH	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面糸切り
第50図39	1	15	北側暗褐色層	土師	坏			(6.6)	(3.0)	ナデ	ナデ	ABDH	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面板状圧痕
第50図40	1	15	北側暗褐色土層	土師	坏			(9.1)	(2.1)	ナデ	ナデ	ABDE	良好	淡橙褐色	淡橙褐色	底面糸切り
第50図41	2	5	内溝	陶	水縁皿				(1.9)	ナデ	ナデ	D	良好	黄緑褐色	黄緑褐色	
第50図42	1	6	外溝	土師	坏			(6.8)	(2.1)	ナデ	ナデ	ABDEF	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底面糸切り
第52図１	伝1		石室？	須恵	坏蓋	(17.2)			(4.4)	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ 不整方向ナデ	ADH	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	
第52図２	伝1		石室？	須恵	坏蓋	(13.9)			(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	ABEF	良好	暗灰褐色 黒灰褐色	淡灰茶褐色	
第52図３	伝1		石室？	須恵	坏身	(11.2)		(7.2)	4.1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 不整方向ナデ	AE	良好	灰黒色	灰黒色	
第52図４	伝1		石室？	須恵	高坏	12.0		(10.4)	16.6	カキ目・回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 不整方向ナデ	BEF	良好	灰白色	灰白色	スカシは３方向、坏部下部に刻み目
第52図５	伝1		石室？	須恵	高坏			(11.0)	(6.4)	ナデ・カキ目	ナデ	AEF	良好	灰黒色	灰黒色	
第52図６	伝1		石室？	須恵	台付壺	(7.4)		15.2	(19.0)	回転ナデ	回転ナデ	CE	良好	灰黒色	灰黒色	外面自然釉、蓋を被せて焼成
第52図７	伝1		石室？	須恵	台付壺	12.0	13.2	14.0	24.5	回転ナデ	ナデ	AEF	良好	灰褐色	灰褐色	スカシは２段、３方向
第52図８	伝1		石室？	須恵	長頸壺	(20.6)			(15.0)	タタキ・ナデ 波状文	指押え・ナデ	CE	良好	淡赤灰色	暗赤灰色	
第52図９	伝1		石室？	須恵	台付壺			(15.2)	(6.5)	カキ目・回転ナデ	回転ナデ	ACE	良好	灰黒色	灰黒色	スカシは４方向
第52図10	伝1		石室？	須恵	台付壺			(14.2)	(6.9)	カキ目・ナデ	ナデ	CEF	良好	淡青灰色	淡灰色	スカシ４方向
第52図11	伝1		石室？	須恵	提瓶	9.6	16.3		20.9	カキ目・回転ナデ	—	EH	良好	暗青灰色	暗青灰色	完形
第52図12	伝1		石室？	須恵	提瓶	10.4	20.1 14.7		25.5	回転ナデ・カキ目	回転ナデ	AEFH	良好	灰白色 灰黒色	灰褐色	外面自然釉付着
第52図13	伝1		石室？	須恵	提瓶	(9.8)	25.3 14.7	23.5		回転ナデ・カキ目	回転ナデ	AEF	良好	灰黒色	灰黒色	外面自然釉付着
第52図14	伝1		石室？	土師	壺	13.1	19.8		19.2	ナデ・タタキ・ミガキ	ナデ・ケズリ	ABCDE	良好	橙褐色	淡茶褐色	胴部打ち欠き 外面全面丹塗り

法量の単位はcm。（　）書きは、残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第８表　鏡観察表

挿図番号	古墳番号	遺構名	鏡式	種類	法　量				備　考
					面径(㎝)	文様部厚(㎝)	縁部厚(㎝)	重量(g)	
第53図	伝１	石室？	変形五獣鏡		14.5	0.5	0.45	159.337	

第９表　刀剣観察表

挿図番号	古墳番号	遺構名	器種	法　量						備　考
				全長(cm)	刃部長(cm)	刃部幅(cm)	茎幅(cm)	刃部厚(cm)	重量(g)	
第54図１	伝１	石室？	大刀	42.05	(23.15)	(4.40)	2.60	1.05	390.161	目釘孔３つ
第54図２	伝１	石室？	鉄剣	33.25	(23.85)	(3.85)	2.50	(0.65)	178.864	目釘孔１つ、保存処理痕(トーン部分)

第10表　耳環観察表

挿図番号	古墳番号	遺構名	器種	作り	法　量			備　考
					外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)	
第54図３	伝１	石室？	耳環	銀造り？	3.00	1.00	7.507	中空式、付着物有り
第54図４	伝１	石室？	耳環	銀造り	不明	0.19	1.748	同一個体だが接合せず

第11表　馬具観察表

挿図番号	古墳番号	遺構名	器種	作り	法　量				鋲　数	備　考
					全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第55図１	伝１	石室？	鏡板	鉄地銀張	6.72	8.60	0.59	105.184	32	吊り金具の一部残存
第55図２	伝１	石室？	鏡板	鉄地銀張	(6.15)	(4.30)	0.67	50.362	10	衝もしくは引手が付着
第55図３	伝１	石室？	杏葉	鉄地金銅張	(11.45)	7.40	0.50	67.078	34	
第55図４	伝１	石室？	貝製辻金具	鉄地金銅張	(10.76)	(10.48)	1.20	61.411	12	同一個体であるが接合できず
第55図５	伝１	石室？	辻金具	鉄地金銅張	(5.10)	(4.25)	(1.13)	32.041	0	鉢部のみ、中央飾金具の孔あり
第55図６	伝１	石室？	飾金具	鉄地金銅張	(2.68)	(2.30)	0.20	4.846	0	
第55図７	伝１	石室？	責金具	鉄地金銅張	3.60	0.50	0.25	1.956	0	
第55図８	伝１	石室？	脚部	鉄地金銅張	(2.90)	(3.47)	0.20	5.784	3	
第55図９	伝１	石室？	脚部	鉄地金銅張	(3.00)	(3.60)	(0.50)	9.724	3	裏面革付着痕有り(トーン部分)
第55図10	伝１	石室？	脚部	鉄地金銅張	(4.80)	(3.80)	(0.80)	24.782	3	裏面革付着痕有り(トーン部分)
第55図11	伝１	石室？	脚部	鉄地金銅張	(4.00)	(2.95)	(0.60)	13.497	3	裏面革付着痕有り(トーン部分)
第55図12	伝１	石室？	脚部	鉄地金銅張	(3.30)	3.08	(0.75)	17.259	3	裏面革付着痕有り(トーン部分)
第55図13	伝１	石室？	脚部	鉄地金銅張	(3.40)	3.12	(0.80)	14.535	3	裏面革付着痕有り(トーン部分)
第55図14	伝１	石室？	脚部	鉄地金銅張	(4.55)	(4.40)	0.43	22.325	1	裏面革付着痕有り(トーン部分)
第55図15	伝１	石室？	貝製辻金具	鉄地銀張	(6.81)	(6.02)	1.20	35.810	3	脚部１本残存
第55図16	伝１	石室？	貝製辻金具	鉄地銀張	(6.55)	(5.50)	0.80	18.591	6	貝欠損、脚部２本残存
第55図17	伝１	石室？	磯金具	鉄地金銅張	(7.25)	0.90	0.20	7.591	7	鞍金具の一部

Ⅴ　考察

(1) 墳丘について（第56～58図）

ここでは、各トレンチで得た成果をもとに、１号・２号墳の形態及び規模の検討をし、墳丘の復元を行いたい。

１号墳（第56・58図）

１号墳では、合計15箇所[1]のトレンチを設定し、墳丘端部、クビレ部、テラス面、周溝等の検出を行った。その結果、７～10トレンチで基盤層を掘り込んだ落ち込みが検出され、落ち込みの上端あたりから版築が確認された。この箇所が墳端である可能性が高い。また、３・６・９～11トレンチでは、里道より高さ約1.0mの基盤層削り出しによるテラスが見られ、現状の墳丘とテラス上端のラインがほぼ平行に巡っているのが確認された。また、３・９～15トレンチで、検出面の幅が2.0m～3.0mの周溝が検出された。この周溝は、テラス下端からさらに3.0m～4.0m外側の位置で、テラス斜面のラインと平行して巡っている。周溝の断面形はほとんどが逆台形を呈し、底面及び周溝周辺にピット群が伴う。現状の墳形と周溝およびテラスは、鍵形に巡ることが明らかになった（第56図）。また、現状の墳丘では葺石等は見られず、周溝埋土にも葺石に使用したと思われる礫はほとんど検出できなかったことから、葺石は伴わない可能性が高い。

墳丘築造技術についてみると、当古墳の構造上の特徴として、２・７～10トレンチで検出した墳丘側の基盤層の掘り込み、墳丘北側の周溝底面のそれぞれのレベル差があげられる。

掘り込みについては、前方部の北側と南側で検出し、１トレンチ及び後円部側では確認できなかった。また掘り込みの下端を見ると、ほぼ同レベルまで基盤層を掘り込んでいるのが分かる（第58図）。つまり、ただ単に設計を規定するための掘り込みではなく、1トレンチで検出した石室（第２主体部）を構築する基盤層削り込みの墓坑ラインである可能性が高い。主体部を基盤層に掘り込んだ墓坑内に設置する古墳の例としては、持丸古墳群２号墳[2]、山王山古墳[3]、三苫京塚古墳[4]、広石古墳群Ⅵ地点２号墳[5]、岩谷古墳[6]などが挙げられる。さらに、９トレンチ（第13図）では、基盤層の掘り込みが墳丘側で若干立ち上がっている。こうした例は、三沢古墳群23号[7]でもみられるように、主体部の墓坑周辺に溝を掘ることによって、馬蹄形の土堤を形成し、盛土の流出を防ぐ施設である可能性強い。この構築方法は、北部九州で多くみられる、内護列石で墳丘盛土の流出を防ぐ構造と同様の機能を持つものであると思われる。

周溝については、11トレンチの周溝底面の標高が一番深く114.65mで、トレンチより西側の３・10トレンチの標高は113.6mで1.05m浅くなる。また、東側の12・13トレンチの標高は114.1mで0.55m浅くなることから当時周溝を掘る段階で、旧地形に左右されて造営されたことが窺える。しかし、平面的なプランは、テラス斜面のラインとほぼ平行し、現墳丘端部のラインとも平行していることから、緻密なプランニングのもとに造成されたものと考えられる。しかし、南側崖斜面に周溝が巡るかどうかは今回の調査では明らかにできなかった。現状で崩落等が激しいので、周溝が残存している可能性は低い。また、14トレンチより西の９トレンチで周溝が見られなかったことから、９トレンチから２号墳Ｄ区の付近が１号墳に取り付くための道としての陸橋部の可能性がある。

以上から墳丘規模を考えると、１号墳は総長54.3m、墳長33.8m、後円径20.0m、前方部長16.5m、前方部幅17.6m、クビレ幅13.7mを測る古墳になると思われる。

２号墳（第56・57図）

２号墳では、合計17箇所のトレンチと４箇所の調査区を設定し、墳端、周溝の確認を行った。

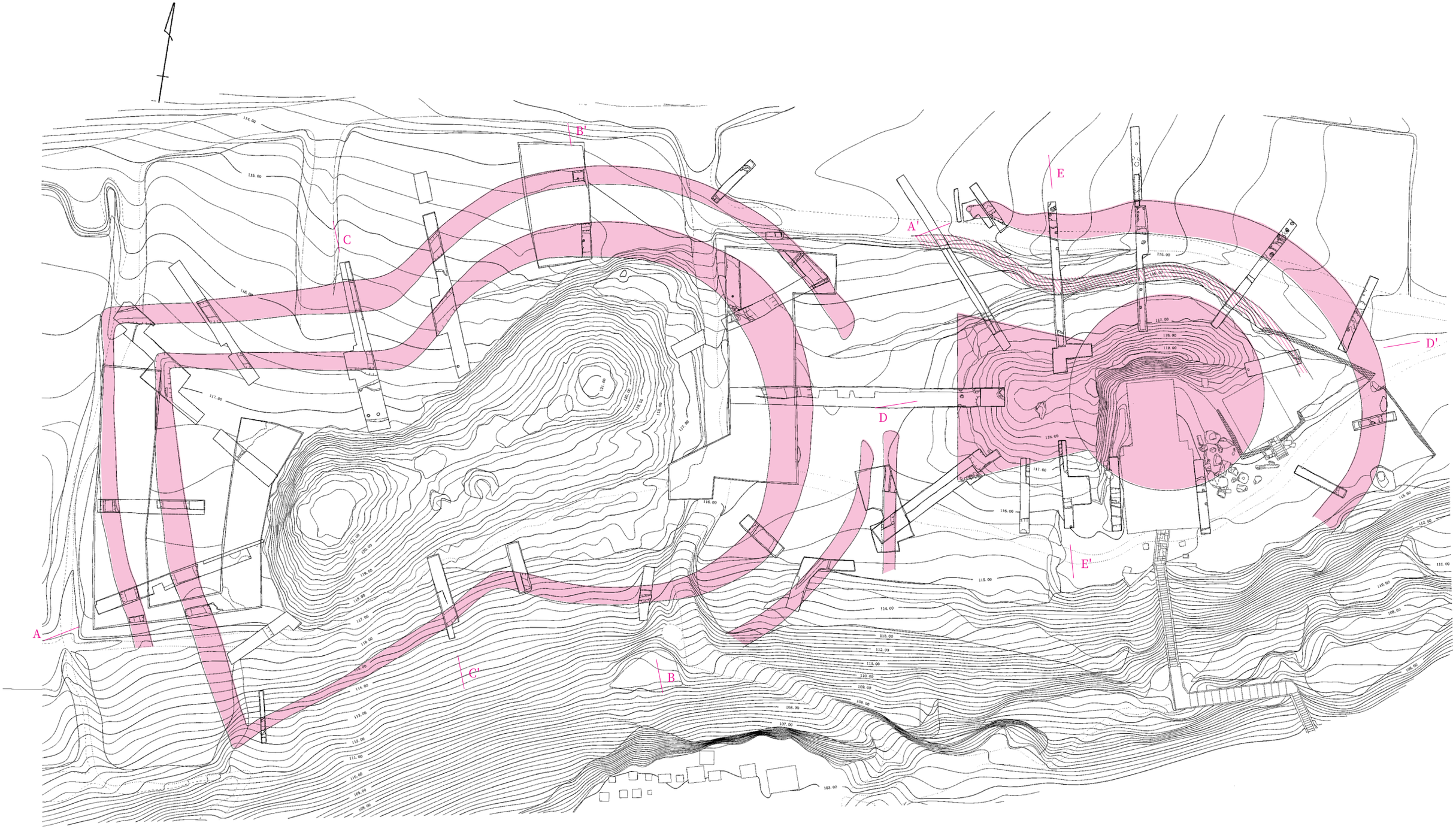
調査の結果、内外の二重の周溝が鍵形に巡ることが明らかになった。また、現状で墳丘西側が後円部、東側が前方部であると判断されてきたが、西側が前方部、東側が後円部と逆転することが確認された。さらに、後円部東側に７トレンチＢ（第30図）を設定したところ、上面が里道や土取り等で削平を受けているが、版築状の盛土が確認された。この版築は周溝手前まで確認できることから、墳丘端部を考える上で重要なポイントとなる。

次に墳丘の築造技術について検討する。10トレンチ（第31・57下図）墳丘側の標高117.0m付近で、主体部の石材（天井石付近）と思われる石積みが検出された。この石積みが主体部の石材であるなら、おおよそ115.0mで入口床面が検出されると推測できる。つまり１号墳の前方部と同様、基盤層を掘りぬいて墓坑を形成し、主体部を構築している可能性が高い。それを裏付けるように、前方部・後円部の墳頂部に主体部崩落に伴う落ちが見られない。

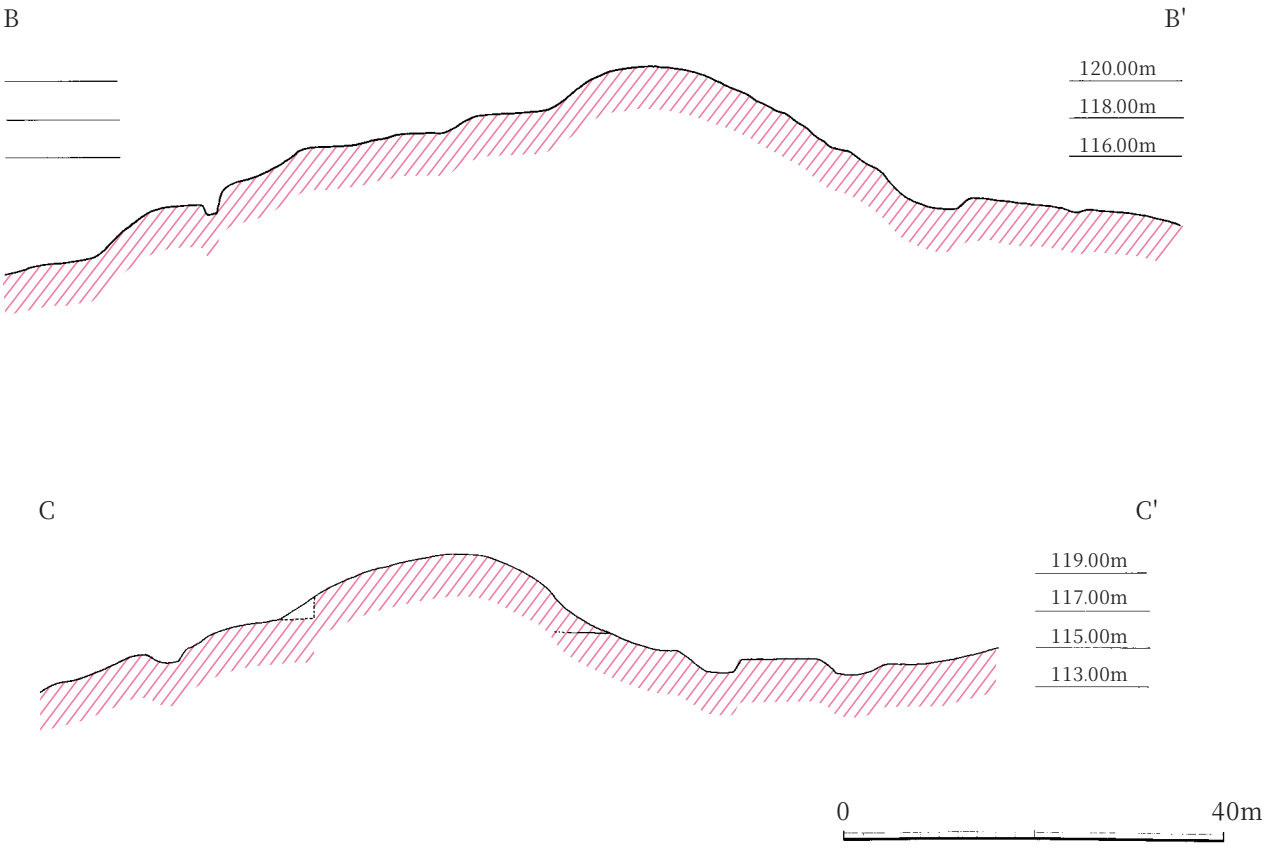
周溝については、内側・外側の周溝が墳丘北半で確認され、さらに南側崖面でも内側周溝を検出した。北側の内側周溝底面の標高については、５トレンチより東側で113.5m前後であるのに対し、西側では115.0m前後と1.5mほど高い。つまり旧地形を考えると、クビレあたりのＣ－Ｃ’から東側は谷地形になっていたため、地形に合わせて周溝が掘り込まれたと考えられる。さらに、第56図下の２号墳縦断面図（Ａ－Ａ’）の西側と東側の内側周溝底面の標高を比較すると、2.05m東側が低いことからも裏付ける。このように周溝底面が地形に合わせて掘られているため、各トレンチで検出した周溝底面に標高差がある。しかし平面プランは、内・外側周溝がほぼ等間隔に巡っていることから、墳丘築造における平面的な設計プランに規格性があったと推測される。さらに南側崖面に内側周溝が掘られていることは、台地の下に向けて“見せる”という視覚的効果と、墓域空間としての境界的な意味合いが加味されていると理解される。１号墳と２号墳の間の周溝については、Ｂ区、12・16トレンチから続き７トレンチに向けて、周溝の深さが浅くなっており、また８トレンチでは、外側周溝はほぼ検出できず、１号墳と共に周溝のない空間が存在する。これらの周溝の深さが浅い箇所、もしくは周溝が無い箇所の存在はやはり、１・２号墳に取り付く通路として設けられた陸橋部の可能性を示唆する。

墳丘規模については、周溝底の軸方向から平面的な広がりを想定したところ、総長が最低でも85.5mを測ることになる。墳丘部については調査区を設定していないこともあり、墳丘規模は不明である。しかし、隣接する１号墳を参考にして墳丘部の復元をした場合、図示してはいないが７トレンチの成果を加味すると、１号墳の２倍の約65mの規模になるものと想定される。

先にも述べたが葺石等については、現状で墳丘がかなり改変を受けているため残っていないが、各トレンチで大型平底壺とともに礫を大量に検出した。このことはこの礫が葺石に使われていたことを窺わせるものであり、墳丘上に立てられていた大型平底壺と共に周溝内に流れ込んだことを示している。



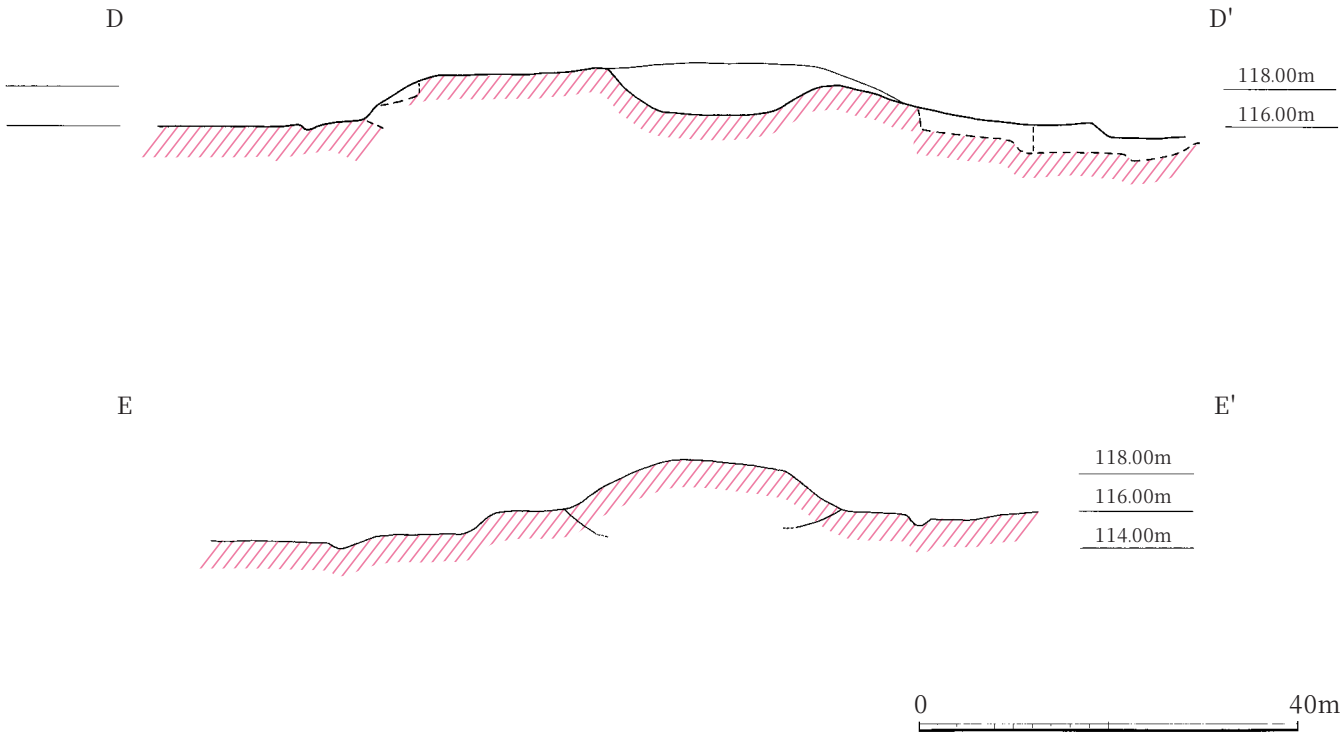
第56図　墳丘復元図及び２号墳縦断面図（Ｓ＝1/400）



第57図　２号墳横断面図（Ｓ＝1/400）

最後に１号墳、２号墳の築造時期差の問題だが、両古墳とも周溝が切り合うこともなく、陸橋部を共有することから、古墳築造のプランに初めから２基を築造する計画があったものと考えられる。また、周溝底面の標高がそれぞれ相違するが、等間隔で周溝やテラスが墳丘を巡ることは、規格性が強い築造といえる。この他、他に類を見ない大型平底壺や金銅張りの馬具、三輪玉が出土している点や、古墳が立地する位置が筑後、筑前、豊前の境界にあたり、往来が比較的容易な場所に所在することから、被葬者は重要なポストを担う人物であったと考えられる。それを裏付けるように、２号墳は当該時期における豊後では最大級の前方後円墳としての規模を誇っている。朝日天神山古墳群は、大和王権の比較的強い統制下のもとに築造された古墳であるのではないだろうか。（玉川）

註１）14トレンチＡ・Ｂ・Ｃ、３トレンチＡ・Ｂを合わせると計18箇所になる。
註２）福岡県甘木市安川町に所在する古墳で、径16mの円墳で、単室の横穴式石室を主体部とする。６世紀前半～中ごろと推定される。
註３）福岡県八女郡広川町に所在する古墳で、径13～15mの円墳で単室の横穴式石室を主体部とする。６世紀の第３四半期に築造・初葬されたと推定される。
註４）福岡県福岡市東区に所在する古墳で、径13～15mの円墳で単室の横穴式石室を主体部とする。６世紀の第３四半期に築造・初葬されたと推定される。
註５）福岡県福岡市西区に所在する古墳で、径14mの円墳で単室両袖形の横穴式石室である。６世紀後半～末と推定される。
註６）山口県下関市に所在する古墳。



第58図　１号墳縦・横断面図（Ｓ＝1/400）

註７）福岡県小郡市に所在する古墳群で墳径は周溝まで含めると23.5m、楕円形気味の円墳で、複室の横穴式石室を内部主体とする。６世紀中葉～後半に推定される。

（参考文献）

高山明ほか　『持丸古墳群－甘木市安川町大字持丸所在古墳群の調査－甘木市文化財調査報告　第一集』 甘木市教育委員会　1974年

土生田純之ほか　「横穴式古墳構築過程の復元」『古墳構築の復元的研究』 雄山閣　2003年

川述昭人　『山王山古墳－福岡県八女郡広川町大字長延所在古墳の調査－広川町文化財調査報告書　第三集』 広川町教育委員会　1983年

下村智・加藤良彦　「広石遺跡群Ｃ地点・広石古墳群Ⅴ群」『生松台－西区野方土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の調査－福岡市埋蔵文化財調査報告書　第226集』 福岡市教育委員会　1990年

瀧本正志　『三苫京塚古墳－福岡市埋蔵文化財調査報告書　第243集－』 福岡市教育委員会　1991年

速水信也　『三沢古墳群Ⅱ－三沢土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書７－小郡市文化財調査報告書　第79集』上巻　小郡市教育委員会　1992年

(2) 遺物について

１．大型平底壺

朝日天神山古墳群では、これまで類を見ない大型平底壺がまとまって出土した。２号墳からは合計40個体以上が出土している。

２号墳の前方部側に位置する１トレンチの内側周溝からは完形に近い形で２個体分が出土した。同じく前方部側の２トレンチからも口縁部と胴部の大型破片がそれぞれ検出されている。北側クビレ部に設定した５トレンチからは完形に復元できる５～６個体分がまとまって出土しており、各トレンチの中では最も集中している。同じくクビレ部に位置する６トレンチからも口縁部の破片が多くみられ、その他、大型器台が10個体以上と短頸壺などが出土していて注目される。南側クビレ部に設定した10トレンチには完形を含む大型破片がまとまっており、特に胴部から底部の破片が目立つ。クビレ部に近い14トレンチからも口縁部や胴部下半がまとまって出土している。同時に大型器台や完形の横瓶などが伴っていた。後円部側の17トレンチからは口縁部の破片が１点のみ検出されている。また、後円部側のＡ区では破片ではあるが、口縁部、肩部、底部などがそれぞれみられ、後円部北側に設定したＢ区では、６トレンチに近いこともあって大型器台が多く出土している。Ｃ区は前方部側に位置する調査区で、数は多くないが大型の破片が出土している。２号墳では破片まで含めると全面的に出土するが、完形品や大型破片の検出状況は二重に巡る周溝の内側周溝からであり、特に両側のクビレ部に集中し、前方部側からも完形もしくは完形に近い形のものが出土する傾向にある。

このように、出土状況から見ればこれらの大型平底壺は墳丘に樹立されていたと考えて差し支えなかろう。つまり、埴輪と同じ用途に供されたものと考えることができる。

また、１号墳には15本のトレンチを入れたが、前方部側の１トレンチと後円部側の６トレンチから原位置をとどめない状態で破片がわずかに出土したのみであり、１号墳にはもともと大型平底壺は伴っていなかったとみた方がよさそうである。

次に、形態的特徴をみてみると、器形や調整、施文（第60図）など個体差が大きく、どれひとつとして同じものは存在しない。しかし、大枠で括ると４類に分類が可能（第59図）である。

Ⅰ類　全体的な器形は肩部が張らずなで肩で、最大径は底部にあるものが多く安定したプロポーションを有している。口縁部は緩やかに外反し端部は内傾するものがある。口縁端部外面には櫛描波状文を施すものと無いものが存在する。口縁部内面は無文でナデ仕上げである。底面は厚くしっかりと作られ、接合痕の分る個体では底面の外側に粘土紐を接合して積み上げている。底部外面にはヘラケズリが施される。器高は44.8～48.3cm、底径は26.0～29.0cmである。口径は25.0～25.8cmであるが、20図－３は全出土資料中最も口径が大きく33.2cmを測る。それぞれ調整の違いによってさらに３つに細分することができる。

ａ　25図－１、ｂ　20図－3、ｃ　25図－２

Ⅰ類は概ね作りは良好であるが出土個体数は少ない。他の大型平底壺のモデル的存在であろうか。ｃは作りがやや粗雑で調整はⅡ類に類似している。

Ⅱ類　全体的なプロポーションはなで肩であるが胴部に丸味を持っている。口縁部は外反するものと立ち気味のものとがある。端部は僅かに内湾し、端部外面には櫛歯刺突列点文を施す。また、口縁部内外面には櫛描波状文が施文される。胴部外面は粗い縦方向の平行タタキの後ナデ調整が加

えられカキ目を施さない。内面には当て具痕が僅かに残る。底面はしっかりした作りで、底面の上に粘土紐を積み上げている。調整の違いによってさらに２つに細分することができる。器高は47.7cm、口径24.4～28.9cm、底径27.0cmを測り、法量的にはⅠ類と変わらない。

a　20図－４、b　26図－２

Ⅱ類はⅠ類に比べ肩部が丸味を持って張っている。個体数はⅠ類に比べかなり増加している。

Ⅲ類　全体的なプロポーションは肩部に張りを持ち、胴部には張りを持たず直線的に底部に到るタイプである。口頸部も直線的に立ち上がって大きく外反し、端部はやや内湾する。口頸部は比較的長く、外面全体に数段の櫛描波状文を施している。端部外面には櫛歯刺突列点文を施すものとそうでないものが存在する。口縁内面には３段の櫛描波状文を施文する。胴部外面は縦方向の平行タタキで調整された後、横方向のカキ目が施されている。内面には同心円の当て具痕が残っているが多くはナデ消されている。底面は上げ底気味になるものが多い。底部の接合痕の明らかなものは底面の上に粘土紐を積み上げている。底部外面にはヘラ削り調整がみられるものがある。口径は26.4～28.5cm、器高は50.5～59.6cm、底径28.7～31.0cmを測り、法量的には最も大きい類である。これらもさらに細分することができる。

a　26図－１、b　32図－７、c　42図－３

Ⅲ類はⅡ類よりもさらに肩部が張り全体的に直線的な感じを受ける。２号墳出土の個体の中ではこのⅢ類が最も数が多い。Ⅱ類とともに大型平底壺の主体を占めるものである。

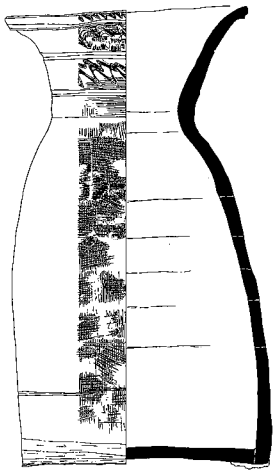
Ⅳ類　これまでのⅠ類～Ⅲ類と趣を異にするタイプのものである。肩部以上を欠失するが、なで肩を呈すると推察され、胴部最大径は下半に位置する。底面は製作時の重みでへたって外開きになっている。復元底径は34.5cmを測る。外面調整は縦方向のナデを施した後、部分的に横方向の工具ナデが施されている。内面もナデ調整で成形されている。極めて稚拙な作りでタタキ技法は使用されていない。類例はほとんど無く、イレギュラーな製品といえよう。

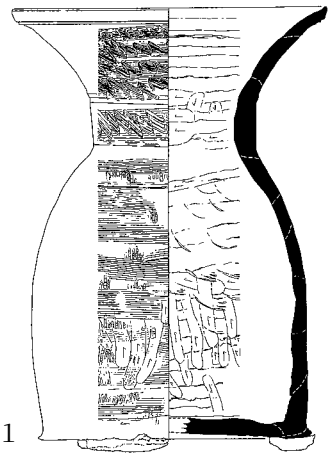
以上、４分類してそれぞれの特徴をみてきた。器形は30cm前後の大きな平底を有し、底部に穿孔などは認められない。胎土は精良で、焼成は堅緻に焼き上がったものとそうでないものとが存在する。特に平底壺の多くは底部付近の焼成があまり良くない。また、焼成堅緻な個体の底部には窯床や固定に使用したと考えられる粘土の塊りが熔着している。このことは平底壺が正立した状態で焼成されたことを示している。中には底面に植物繊維の圧痕なども観察される。

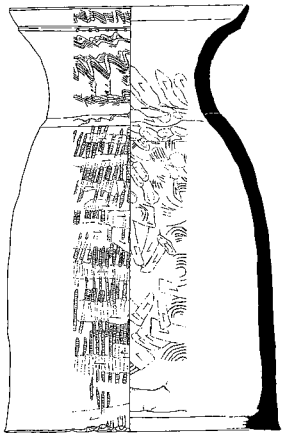
ところで、これらの大型平底壺は底面の粘土塊熔着状況から、大型器台や環状把手付横瓶，高坏、蓋坏など須恵器と同一の窯で焼成されたことが分かる。これらの須恵器は器壁がやや厚めであるものの同時期の須恵器と製作技法や調整、施文技法など大きく異なることはない。このように窯詰めが同じであるとすれば、他の須恵器と同様大型平底壺も須恵器工人によって製作されたことは間違いなかろう。墳丘に樹立することを目的に製作されたためか、一般的な須恵器と比較すれば器壁が厚く、粗雑な作りで極めて異質なものになっている。

それでは何をモデルとして製作されたものであろうか。国内では今のところ全く同じような類例はない。時期的、形態的特徴や調整技法からみれば古墳に副葬される、いわゆる百済系とされる平底瓶や福岡県稲築町次郎太郎２号墳出土の須恵器系埴輪(1)（第67図１・２）が参考になろう。百済系平底瓶については福岡市広石古墳Ⅰ－1号墳出土例(2)をもとに小田富士雄氏によって研究(3)が開始された。広石古墳出土例は短頸で胴部の張った器形であるが、大型平底壺に器形が類似したものに

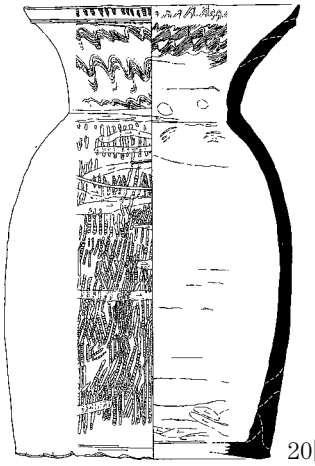
Ⅰ類

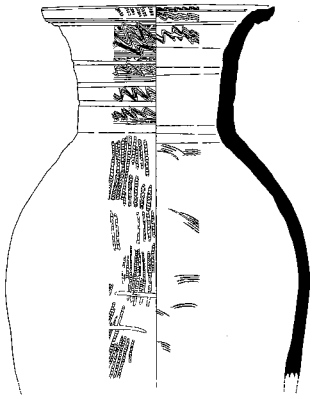

25図1


20図3

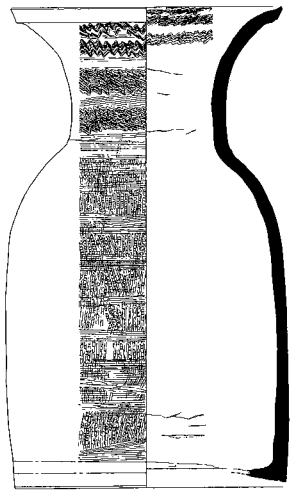

25図2

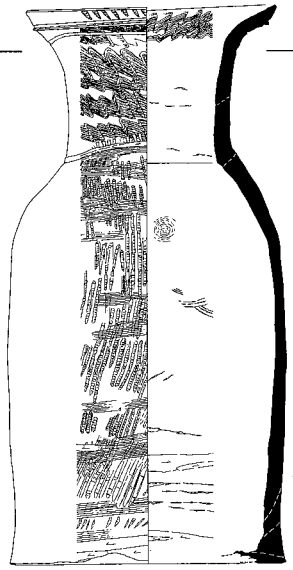
Ⅱ類

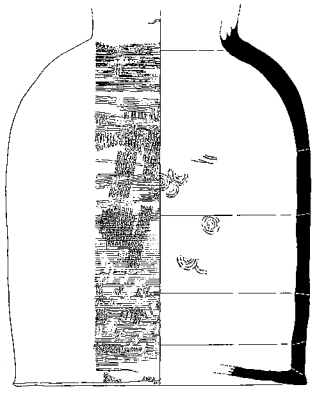

20図4


26図2

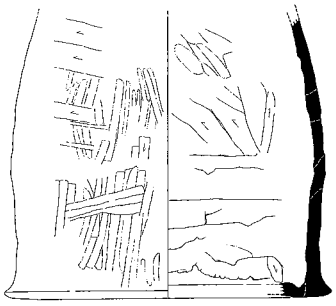
Ⅲ類


26図1


32図7


42図3

Ⅳ類


21図3

0　20　40cm

※番号は図版番号と同一

第59図　大型平底壺分類図（1/8）

は、春日市赤井手古墳[4]（第67図10・11）、粕屋町脇田山古墳[5]、荒尾市野原７号墳[6]（第67図９）例などがある。これらは最大径が底部や底部近くにあり安定したプロポーションを有している。外面には凹線文や縦方向の平行タタキ、底部にはヘラケズリなどが施されている。また、やや形態は異なるが筑紫野市剣塚第３号墳[7]（第67図12）、甘木市大岩西部２号墳[8]例なども挙げられる。九州以外では、愛媛県上難波南10号墳[9]、大阪府神山丑神６号墳[10]出土例などが参考になろう。この２例については胴部に環状把手が付いていて興味深い。

一方、次郎太郎古墳出土の須恵器系埴輪とされるものは、内底面にヘラケズリが施され、外面に平行タタキとカキ目、内面には同心円の当て具痕が明瞭に残っている。形態的には底部から外開きに立ち上がるが、調整は大型平底壺に類似している。これらについては実見する機会[11]を得たが、その際、所蔵されていた資料の中に平底壺の破片が１点存在していた。復元底径は23cmで、やや外開きに立ち上がっている。同古墳出土品かどうかは確定できなかったが、朝日天神山古墳以外にも平底壺の存在が明らかになった。次郎太郎2号墳はＭＴ15形式と報告されているので朝日天神山２号墳よりも時期的には古い。今後、系譜関係があるのかどうか検討が必要であろう。なお、２点の須恵器系埴輪とされるものは有孔の平底壺である可能性が高いが、これらについては既に大竹弘之氏[12]や若松良一氏[13]らが指摘しているところである。

以上のことから、大型平底壺は嘉穂地方の古墳群の影響を受けつつも、赤井手古墳や野原７号墳例などの６世紀前半代に属する平底瓶をモデルとして成立[14]したものではなかろうか。これらの平底瓶の高さを２倍にすると、大型平底壺１類ａに極めて近い形態となる。

それでは、これらの平底壺はどこで生産されたのであろうか。底部に熔着した粘土塊に軽石が多く含まれていることから、在地産であることは間違いない。西方30kmに位置する朝倉窯では５世紀前半以降、渡来系工人によって須恵器の生産がなされ、５世紀後半まで操業される。５世紀後半には窯拡散の動きがみられ[15]、各地に新たに窯が成立する。日田地方では今のところ窯の存在は明らかではないが、地域色の強い須恵器が分布する。２号墳から出土した環状把手付横瓶はそのひとつで、他に類例を見ないものである。直口縁で本来蓋が付いていた当り痕が残っている。市域内の法恩寺４号墳[16]出土の提瓶には４個の環状把手が付く。また、吉井町出土の提瓶も胴部に環状把手を持っているし、甘木市の古熊古墳[17]出土の提瓶には横位置に環状把手が付いている。これらの資料は類似点が多く、近くに窯の存在が推測される。愛媛県及び大阪府で出土している環状把手を持つ平底瓶の存在も気になるところである。

いずれにしても、大型平底壺は在地の窯で焼成され、櫛描波状文や刺突列点文が多用されることなどを考慮すると朝倉窯の系譜を引く工人が関与していた可能性も捨てきれない。大型平底壺は墳丘に立て並べる仮器として、古墳造営者の発注に応じて短期間に生産されたものではなかろうか。

（下村）

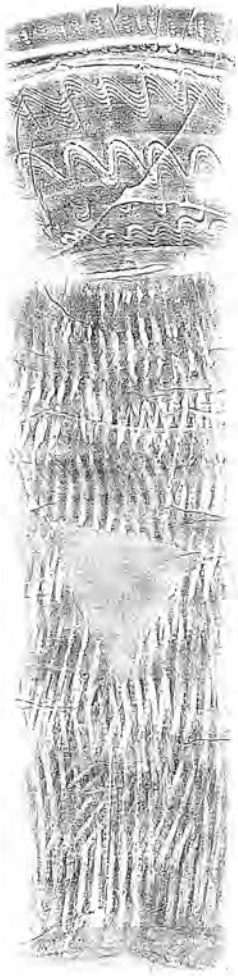
註１）上野智裕・岸本圭　『次郎太郎古墳群』稲築町文化財調査報告書第４集　稲築町教育委員会　1997年
水ノ江和同・重藤輝行・尾園晃・岸本圭　「福岡県稲築町次郎太郎古墳群の研究」『九州考古学』第72号　1997年

註２）山崎純男・柳沢一男・浜石哲也編　『広石古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集　福岡市教育委員会　1977年

註３）小田富士雄　「西日本発見の百済系土器」『古文化談叢』第５集　1979年

25図１

20図３



20図４

26図１

32図７

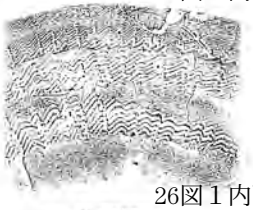
20図３底面

20図４内面

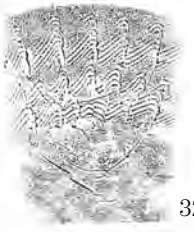
26図３外面

26図３内面

26図２内面



26図１内面

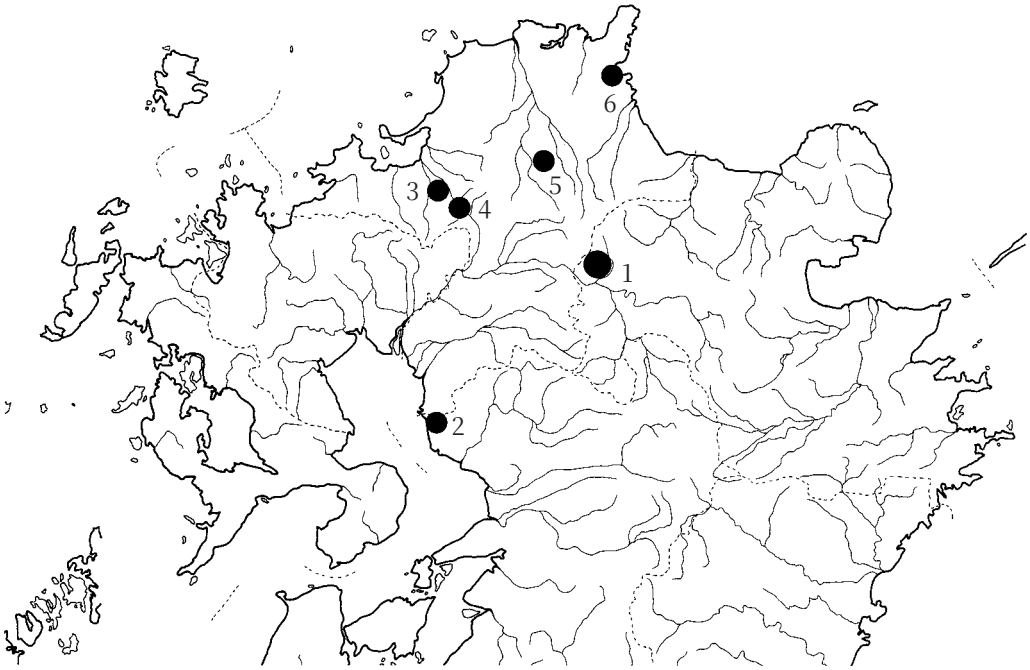


32図７内面

0　　10cm

第60図　大型平底壷拓影（1/4）

※番号は図版番号と同一



1　朝日天神山古墳群　　2　野原古墳群　　3　赤井手古墳
4　剣塚第３号墳　　5　次郎太郎古墳群　　6　天観寺山窯跡群

第61図　関連遺跡分布図（1/200万）

註４・５）丸山康晴編　『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第６集　春日市教育委員会　1980年

註６）坂本経堯　「荒尾野原古墳」『肥後上代文化の研究』　1979年
中原幹彦　「野原古墳群」『荒尾の文化遺産』荒尾市史別編一　2003年

註７）石山勲編　「剣塚第３号墳」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ⅩⅩⅣ上巻　福岡県教育委員会　1978年

註８）柳田康雄　「大岩西部２号墳」『甘木市史資料』考古編　福岡県甘木市　1984年

註９・10）田口一郎　「平底短頸瓶覚書」『群馬考古学手帳』５　群馬土器観会　1995年

註11）稲築町教育委員会の上野智裕氏にご配慮頂いた。

註12）大竹弘之　「韓国全羅南道の円筒型土器」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会　2002年

註13）若松良一　「武蔵埼玉古墳群と朝鮮半島系遺物」『古代史研究』第18号　古代史研究会　2001年

註14）若松良一編　『奥の山古墳　瓦塚古墳　中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第７集　1989年
報文では、中の山古墳出土の有孔平底壺のモデルはいわゆる百済系の平底壺に求められた。註13では韓国全羅南道の栄山江流域にみられる在地の古墳に伴う有孔平底壺に類例が求められている。

註15）吉武孝礼・松尾宏　「北部九州における渡来文化の様相」『渡来文化の受容と展開』第46回　埋蔵文化財研究集会　発表要旨集　埋蔵文化財研究会　1999年

註16）賀川光夫編　『大分県日田市法恩寺古墳』日田市教育委員会　1959年

註17）柳田康雄　「古熊古墳」『甘木市史資料』考古編　福岡県甘木市　1984年

２．三輪玉

三輪玉は古墳時代中期から終末期にかけて見られる大刀の装飾具である。三輪玉に最初に注目したのは神田孝平氏で“枕石”、また大和の三輪山より多く出土するので“三輪玉”ともいうと記している(1)。用途については、神田氏は馬具説を唱え、濱田耕作氏は首飾りとして考えている(2)。その後、後藤守一氏が大刀形埴輪の研究を行なう中で三輪玉が大刀の勾金の装飾であることを確認し、用途が確定した(3)。また、氏は三輪玉出土古墳の集成を行っている。さらに堤圭三郎氏は坊主山１号墳出土の三輪玉についての考察を加え、形態や刀剣への装着個数などから時期変遷を指摘している(4)。

三輪玉は伊勢神宮の20年に１度の式年遷宮に際して作り替えられる“玉纏太刀”に付く装飾の原形として考えられている(5)。白石太一郎氏は三輪玉の付く大刀を伝統的な倭風の大刀と考え、畿内の最高支配者層やそれに準ずる被葬者の古墳ではこの種の大刀の副葬や大刀形埴輪の樹立という伝統的価値観を重視していたと考えている。このようなことから三輪玉を装着した大刀はある種、権威の象徴として捉えることができると考えていいだろう。

以上のような観点から現在確認されている三輪玉について考えてみたい。

現在、三輪玉の出土が確認されているのは、第62図・第12表に示すとおり、全国で51ヶ所あり、そのほとんどが古墳の主体部からのものである。この他に、沖ノ島の祭祀遺跡出土のものや集落からの出土・表採品があるが、ここでは古墳出土のものについて見ていきたい。

三輪玉が出土した古墳は現在48ヶ所確認されており、北は福島県から南は佐賀県・大分県まで全国にわたって見られ、畿内とその周辺で23ヶ所とほぼ半数が集中している。

三輪玉の素材には金銅製や水晶製・銀製・碧玉製などがあり、素材により形態に差異が見られる。金銅製や青銅製は背面が中空になっているのに対し、水晶製や碧玉製のものは背面を平滑に仕上げている。ここで、この素材別に出土古墳の数をみると金銅製・水晶製両方が出土している古墳が１ヶ所、金銅製が18ヶ所、水晶製が12ヶ所、その他青銅製・碧玉製・銀製などが数ヶ所で出土おり、大半が金銅製と水晶製という傾向がある。

次に出土古墳の墳形・時期をみていくと、前方後円墳が21ヶ所、円墳22ヶ所、その他不明が５ヶ所となっている。これらの古墳は５世紀中頃から７世紀代まで古墳時代中・後期を通じて見られるが、もっとも多く出土している時期は６世紀前半、次いで６世紀後半が多い。これを先ほど述べた素材の面からみると、５世紀中頃から後半にかけては金銅製が多く、水晶製が出現するのは５世紀末から６世紀初頭の段階である。この後、６世紀後半まで金銅製と水晶製の双方がみられるが、徐々に金銅製の数は少なくなっており、水晶製の数が増加している。

ここで三輪玉を所有する古墳が、地域内においてどのような位置付けになっているかを考えてみたい。まず、畿内で三輪玉を所有する古墳は６世紀前半を中心として５世紀中頃から７世紀初頭に至るまでみられ、各地域の首長が大和王権との姻戚関係など、深い関わりの中で三輪玉を所有していたと考えられる。こうした観点に立てば、畿内以外の地域で三輪玉を所有している古墳は、鏡や大刀類などの副葬品からその地域での最上位となる首長墳で、大和王権との深い関係にあったとみていいだろう。そこで、畿内以外の地域の古墳が地域首長墓として首長系列の継続的な流れの中で築造される古墳（継続的首長墳）と朝日天神山古墳群のようにそうでない古墳（非継続的首長墳）とに分けて考えてみたい(6)。まず、継続的な首長系列の中で築造された古墳は、５世紀後半：和田山５号墳・向出山１号墳、６世紀前半：めんぐろ古墳・長者ヶ平古墳・山津照神社古墳・鴨稲荷山古

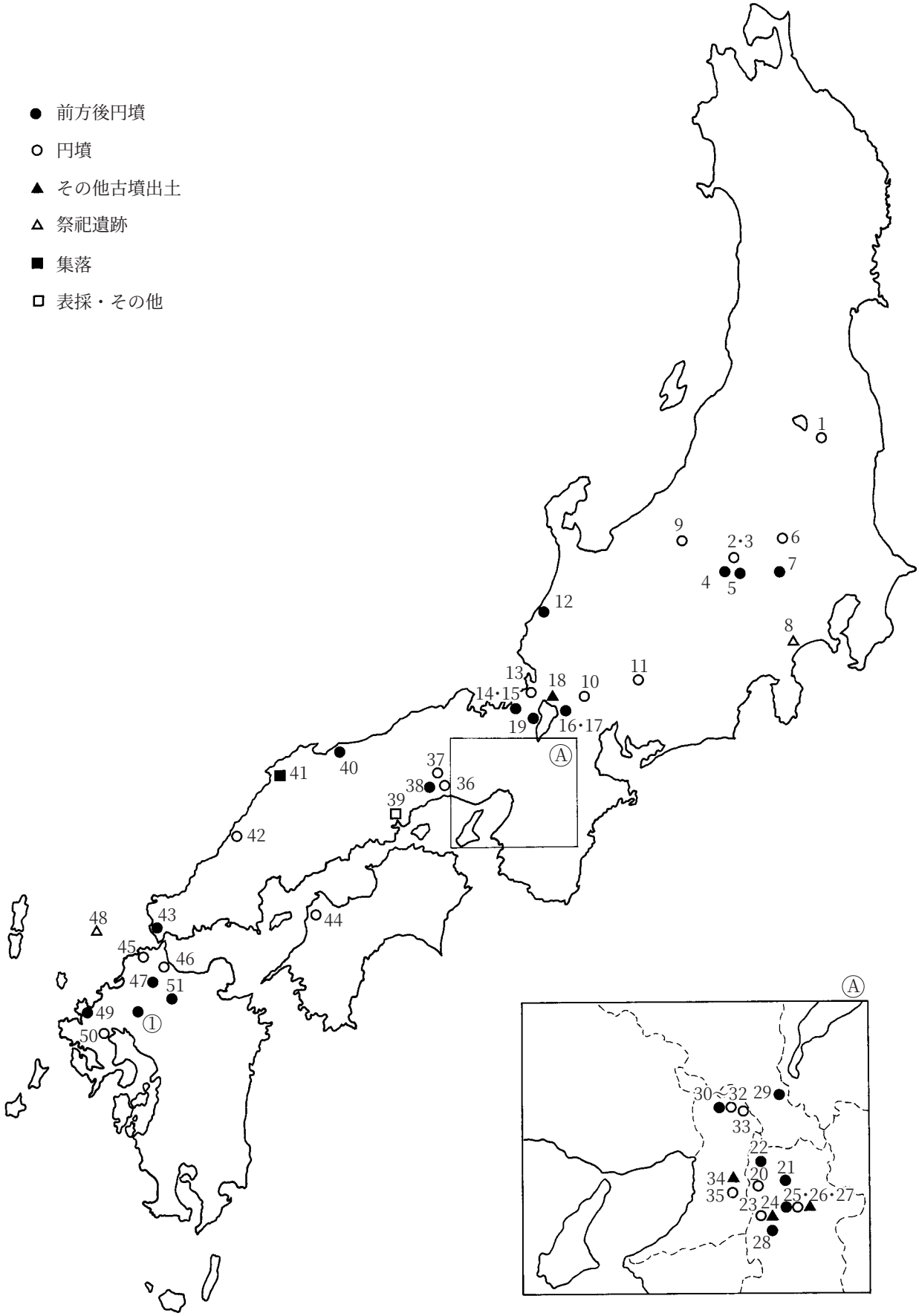
墳・十善の森古墳・簗瀬二子塚古墳・御三社古墳・蝦夷穴古墳、６世紀後半：池尻15号墳・西宮山古墳・丸山塚古墳・将軍山古墳・二子山古墳である。一方、非継続的な首長系列の中で築造される古墳は、５世紀後半：山ノ神古墳、６世紀前半：島田塚古墳・上ノ山古墳　６世紀後半：朝日天神山１号墳となる。畿内周辺や北陸・関東では、継続的首長墳が三輪玉をもっているのに対し、非継続的首長墳は北部九州とその周辺域に存在している。

ここで注目されるのが、福岡県の沖ノ島７号遺跡出土のものである。ここでは滑石製・水晶製が計17点出土している。沖ノ島遺跡では４世紀後半から９世紀前半までの祭祀遺構が確認されており、このうち７号遺跡では甲冑・装身具・馬具・鏡・大刀などが出土し、時期は５世紀後半から６世紀代に比定されている。詳細な検討が必要であるが、北部九州で三輪玉所有古墳が増加する時期と重なることと無関係とは考えにくい。また、これらの遺物は夥しく量が多く、その内容から国家祭祀の場として位置付ける考えが定着しているが、高島徹氏は国家祭祀と規定できるのは奈良時代以降と指摘されている(7)。

こうした点から三輪玉を所有した首長層が国家祭祀に直接的に関係したと断定できないが、やはり、前述したように大和王権と深い関係があると考えられる。これらの古墳が増加する６世紀前半は、磐井の乱を契機として、大和王権と地方首長との関係に変化が生じることが指摘されている(8)。こうしたことから継続的首長墳は６世紀前半以前においては、大和王権との緩やかな連合体の中での関係の中にあり、さらに磐井の墓とされる岩戸山古墳でも三輪玉を彫った石製品が出土していることは磐井が乱を起こす以前は大和王権の連合体に属していたと考えることもできる。ただ、磐井の乱の前後においては、諸説あるが、政情不安定な時期であり、そうした中で非継続的首長墳は権力強化を狙った大和王権と地方首長の従属的関係の中で三輪玉を保有していたのではないだろうか。継続的首長墳においてもこの時期以降はその関係に変化が生じたと思われる。

最後に繰り返しにはなるが、６世紀前半以降、非継続的首長墳が北部九州を中心とした地域に展開していることは、磐井の乱前後における地方基盤の強化を図る目的で三輪玉という祭祀的な遺物を共有することで、大和王権の傘下に置く目的があったと思われる。朝日天神山古墳群の被葬者が首長層として出現するのは、在地勢力の伸張によるものか、新興勢力によるものか、さらに詳細な検討が必要であるが、この時期における大和王権の基盤強化に参画し、日田盆地を含む筑後川上流域の支配者層としての地位を確立したのではないかと考えられる。　（若杉）

註１）神田孝平　『日本石器時代図譜』1885年
註２）濱田耕作編　「近江国高島郡水尾村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第八冊　1923年
註３）後藤守一　「所謂消火器形埴輪に就て」『考古学雑誌』第22巻7・8・12号　1932年
註４）堤圭三郎　「宇治市坊主山古墳出土の三輪玉について」『史想』第14号　1968年
註５）白石太一郎　「玉纏太刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集　1993年
註６）石野博信編　『全国古墳編年集成』1995年　雄山閣出版、河上邦彦『古墳時代の研究』10地域の古墳Ⅰ　西日本、岩崎卓也編　『古墳時代の研究』11地域の古墳Ⅱ　東日本　1990年　雄山閣出版などを参考にした。
註７）高島徹　「第三章 祭祀と遺跡・遺物 三 海と山の祭祀」『平成９年度春季特別展　まつるかたち－古墳・飛鳥の人と神－』大阪府立近つ飛鳥博物館　1997年
註８）佐藤長門　「倭王権の列島支配」『古代史の論点４　権力と国家と戦争』小学館　1998年



第62図　三輪玉出土古墳・遺跡分布図

第12表　三輪玉出土古墳一覧表

	古墳（遺跡）名	所在地	墳形	規模	主体部	種類	時期	副葬遺物	備考
1	蝦夷穴古墳	福島県須賀川市	円墳	37m	横穴式石室	水晶製	6世紀初頭	金銅製頭椎大刀、圭頭大刀	東北地方最大の横穴式石室
2	築瀬二子塚古墳	群馬県安中市	前方後円墳	78m	横穴式石室	金銅製	6世紀前半	刀装具、垂飾耳飾、馬具、挂甲小札、滑石製品	
3	後閑3号墳	群馬県安中市	円墳	12.6m	横穴式石室（T字型）	鋳造製	6世紀前半	鈴鏡、玉類、鉄鏃、刀子、紡錘車	周溝、基壇部に円筒埴輪造出状施設に形象埴輪
4	御三社古墳	群馬県富岡市	前方後円墳	？	横穴式石室	金銅製	6世紀前半	刀子、玉類	
5	二子山古墳	群馬県藤岡市	前方後円墳	57m	横穴式石室	金銅製	6世紀末～7世紀前半	乳文鏡、渦文鏡、頭椎・方頭大刀、鉄刀、鉄鏃、鉄地金銅張馬具、鉄製馬具	
6	七廻り鏡塚古墳	栃木県下都賀郡大平町	円墳	28m	舟形木棺・箱式木棺	金銅製	6世紀中頃	玉纏大刀、馬具	北陸地方最古の横穴式石室
7	将軍山古墳	埼玉県行田市	前方後円墳	91m	横穴式石室	金銅製水晶製	6世紀後半	環頭大刀、銀装大刀、冑、馬具、玉類	
8	御領原古墳群（大塚古墳群）	神奈川県伊勢原市	？	？	？	？	？		
9	本郷大塚古墳	長野県須坂市	円墳	20m	横穴式石室	？	7世紀		
10	舟木山29号墳	岐阜県本巣市	円墳	？	？	？	？		
11	千田17号古墳	岐阜県恵那市	円墳？	20m	横穴式石室	水晶製	7世紀		
12	和田山５号墳	石川県能美市	前方後円墳	63m	粘土槨	？	5世紀後半	鏡、冑、短甲、鉄刀、剣	
13	向出山１号墳（２号石室）	福井県敦賀市	円墳？	60m	竪穴式石室	金銅製	5世紀中頃	鉄地金銅装眉庇付冑2、鉄地金銅装挂甲	
14	十善ノ森古墳	福井県遠敷郡上中町	前方後円墳	60m	横穴式石室	金銅製	5世紀後半～6世紀前半	鏡、金銅製冠、金銅製馬具、刀、剣	北陸地方最古の横穴式石室
15	丸山塚古墳	福井県遠敷郡上中町	円墳	50m	横穴式石室	水晶製	6世紀中頃		畿内型横穴式石室
16	山津照神社古墳	滋賀県坂田郡近江町	前方後円墳	50m	横穴式石室	水晶製	6世紀前半		
17	岡山古墳	滋賀県坂田郡近江町	前方後円墳	？	？	？	？	鏡3、鉄刀、金銅冠、馬具	
18	雲雀山古墳	滋賀県東浅井郡湖北町	円墳	10数m?	竪穴式石室	？	5世紀中頃？	鏡、短甲、玉類	
19	鴨稲荷山古墳	滋賀県高島市	円墳	60m	横穴式石室	金銅製	6世紀前半～中葉	環頭大刀、鏡、装身具、馬具	家形石棺
20	二塚古墳	奈良県葛城市	前方後円墳	60m	横穴式石室	水晶製	6世紀中頃	鉄刀、剣、馬具、玉類	
21	星塚古墳	奈良県天理市	前方後円墳	38m	横穴式石室	水晶製？	6世紀前半	垂飾耳飾、金環、鏡、円頭大刀、馬具	
22	藤ノ木古墳	奈良県生駒郡斑鳩町	円墳	48m	横穴式石室	金銅製	6世紀後半	鏡4、玉纏大刀、金銅製・銀製品多数	家形石棺
23	植山古墳	奈良県橿原市	長方形	？	横穴式石室２基	水晶製	6世紀末～7世紀前半		家形石棺、東石室の排水溝から出土（盗掘）
24	船付山古墳	奈良県橿原市	円墳	？	？	滑石製	？	刀、槍、鉛環	
25	珠城山３号墳	奈良県桜井市	前方後円墳	47.5m	横穴式石室	青銅製碧玉製	6世紀後半	鉄刀4、挂甲小札、馬具	家形石棺２基
26	外鎌山北麓古墳群竜谷支群８号墳	奈良県桜井市	円墳	？	横穴式石室	水晶製	6世紀前半		
27	鳥見山古墳	奈良県桜井市	？	？	？	碧玉製	？	鏡、玉類、刀、剣	
28	市尾宮塚古墳	奈良県高市郡高取町	前方後円墳	44m	横穴式石室	水晶製	6世紀前半		
29	坊主山１号墳	京都府宇治市	前方後円墳	45m	木棺	金銅製	6世紀前半	金環、銅釧、鉄鏃	柄付近から出土
30	海北塚古墳	大阪府茨木市	円墳	？	？	金銅製	6世紀後半	環頭大刀、獣帯鏡、馬具、玉類	箱式石棺
31	南塚古墳	大阪府茨木市	前方後円墳	50m	横穴式石室	金銅製	6世紀前半	冑、挂甲、鉄鉾、鉄鏃、玉類	組合式石棺２基
32	青松塚古墳	大阪府茨木市	円墳	20m	？	水晶製	6世紀前半～中頃	鏡、玉、馬具	形象埴輪
33	芝山古墳	大阪府高槻市	前方後円墳	26m		金銅製	6世紀初頭	馬具、刀、剣、玉類	
34	愛宕塚古墳	大阪府八尾市	帆立貝？	？	？	水晶製	6世紀初頭	馬具、鉄鏃、矛	
35	藤の森古墳	大阪府藤井寺市	円墳	24m	横穴式石室	金銅製	5世紀中葉	形象埴輪（家・盾など）、玉類、短甲	畿内最古の横穴式石室
38	西宮山古墳	兵庫県龍野市	前方後円墳	34.6m	横穴式石室	銀製	6世紀前半～中葉	円筒・形象埴輪、鏡、鉄剣、馬具、玉類	円筒埴輪列
37	小野王塚古墳	兵庫県小野市	円墳	45m	？	碧玉製	5世紀中頃	鏡、冑、鉄刀など	
36	池尻15号墳	兵庫県加古川市	円墳	35m	横穴式石室	？	6世紀中頃	金銅製馬具など	
39	槌ヶ谷出土	岡山県牛窓町	表採(不明)	—	—	水晶製	？		宮内庁書陵部蔵
40	長者ヶ平古墳	鳥取県西伯郡淀江町	前方後円墳	60m	？	？	6世紀前半	鉄刀、素環頭大刀、馬具など	向山５号墳ともいう
41	西Ⅰ遺跡	島根県簸川郡斐川町	集落	—	—	水晶製	？		集落からの唯一の出土
42	めんぐろ古墳	島根県浜田市	円墳	？m	横穴式石室	金銅製	6世紀前半～中頃	鏡、鉄刀、鈴釧、馬具、玉類など	島根県最古の横穴式石室
43	上ノ山古墳	山口県下関市	前方後円墳	108m	横穴式石室	青銅製	6世紀前半	六鈴鏡	
44	大峰台客谷地区６号墳	愛媛県松山市	円墳	8m	横穴式石室	水晶製	7世紀前半		周溝内より出土
45	尾崎・天神山遺跡１号墳	福岡県遠賀郡遠賀町	円墳	？	？	金銅製	5世紀後半	鹿角製柄部、玉類など	
46	稲童21号墳	福岡県行橋市	円墳	22m	竪穴系横口式石室	金銅製？	5世紀中葉	鏡、玉類、鉄刀、剣、冑、短甲、馬具	
47	山ノ神古墳	福岡県嘉穂郡穂波町	前方後円墳	80m	竪穴系横口式石室？	金銅製	5世紀末～6世紀前半	鏡2、玉類、鉄刀、剣冑、短甲、馬具	江田船山古墳と同范鏡
48	沖ノ島7号遺跡	福岡県宗像市	—	—	—	水晶製滑石製	6世紀前半		
49	島田塚古墳	佐賀県唐津市	前方後円墳	35.2m	横穴式石室	金銅製	6世紀前半	六獣鏡、四獣鏡、鉄刀、冑、鎧、玉類	石室内に舟形石棺
50	竜王崎古墳群６号墳	佐賀県杵島郡白石町	円墳	？	？	青銅製	6世紀後半	胡禄金具、垂飾付耳飾、鏡、挂甲、直刀、鉄鉾、鉄鏃、鉄斧、刀装具	
51	朝日天神山１号墳	大分県日田市	前方後円墳	33m	横穴式石室	水晶製	6世紀後半	変形五獣鏡・馬具・耳環	
①	岩戸山古墳	福岡県八女市	前方後円墳	138m	横穴式石室？	大刀形石製品	6世紀中頃		筑紫の君磐井の墓？勾金に付した三輪玉

３．石枕

１号墳で石枕と思われるものが出土している。本項ではまず、古墳時代の枕の概略を検討する。その後、本墳出土の枕の位置づけについて考えてみたい。

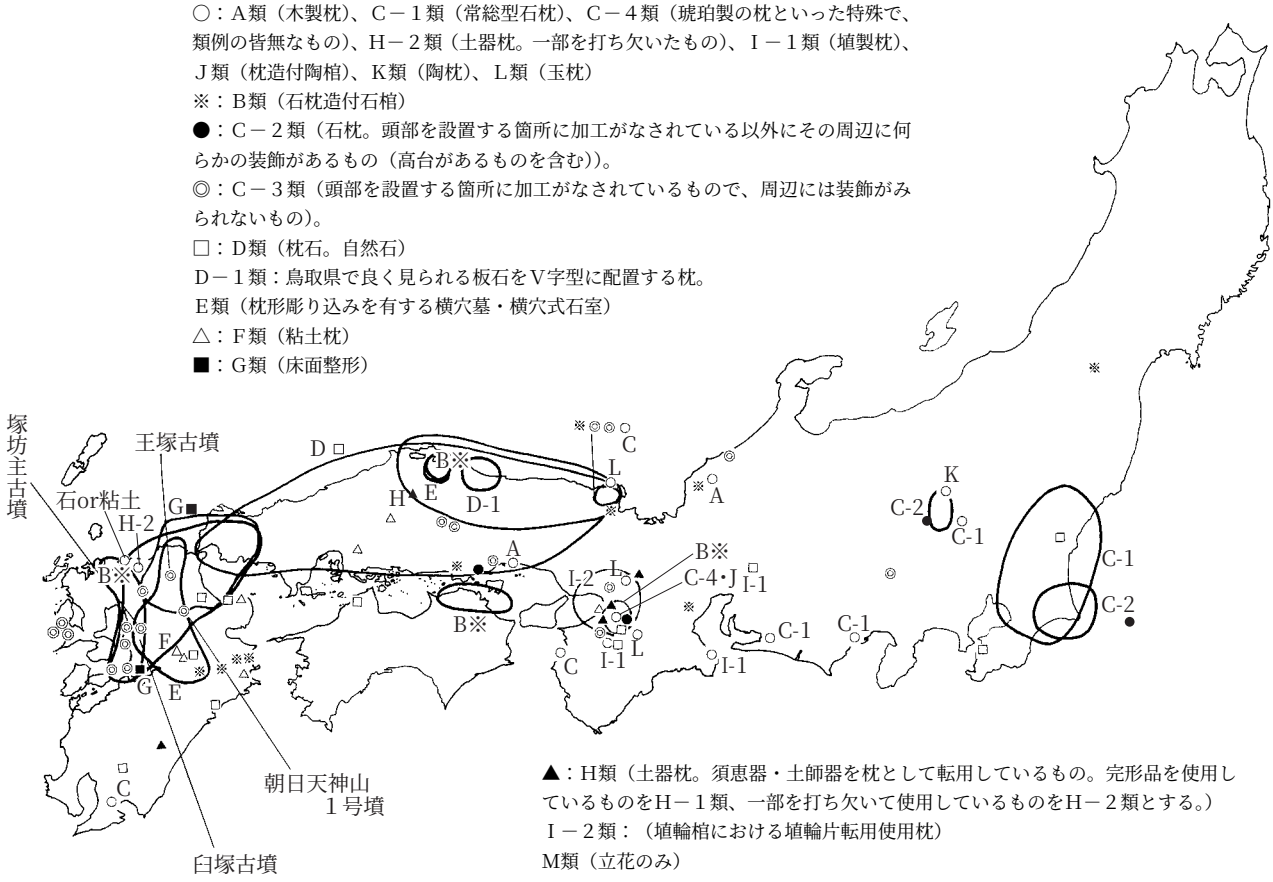
古墳時代の枕を全国的にとりあつかった文献としては、『図録　日本の石枕』（千葉県立房総風土記の丘1979）や安藤氏の論考（1988）があり、それらに古墳時代における多種多様の枕が集成されており、若干枕の種類、分布域に補足があるものの、今日でも、各材質・各形態の枕の分布傾向はほぼこれらの集成で基本的な概略がつかめることには変わりない。これらの集成を中心に、管見にふれたものを含めて作成したものが第63図の分布概念図である。遺漏があるかと思うが現時点で各枕の分布に関しては当図のように考えている。

以下、各枕について概述していく。なお、分類に関しては前述の『図録　日本の石枕』の分類案を大枠としつつ、若干の細分をおこなった私案を提示する。

Ａ類（木製枕）（第65図）：木製の枕。実際は多数存在すると思われるが、有機質で腐食しやすいため詳細不明。福井県・兵庫県で1例ずつ出土。

Ｂ類（石枕造付石棺）（第64・65図）：割竹形・舟形などの石棺の身に枕を彫り込んでいるもの。

Ｃ類（石枕）：埋葬施設とは別部品で、遺構というよりも遺物の概念に含めたほうが良いもので、頭部を設置する部分に目的に応じた加工が施されているもの。本稿ではさらに細分し、滑石系統の枕で、頭部を設置する箇所の周辺に高縁をめぐらし、立花をたてる立花受孔をもつもの（立花を伴



第63図　古墳時代における枕の分布概念図（ただしG類は弥生終末も含む）

う場合あり）、所謂「常総型」（沼沢1980）[1] の範疇に含まれるものをＣ－１類（第65図）とし、Ｃ－１類以外で、頭部を設置する箇所に加工がなされている以外にその周辺に何らかの装飾があるもの（高縁があるものを含む）をＣ－２類（第65図）とし、頭部を設置する箇所に加工がなされているもので、周辺には装飾がみられないものをＣ－３類（第65図）とする。琥珀製の枕といった特殊で、類例の皆無なものをＣ－４類（第65図）とする。

Ｄ類（枕石）（第65図）：頭部を設置する箇所に、Ｃ－１類のような加工が施されていないもので、自然石（板石・礫など）を使用しているもの。将来的にこれらの石の配置状況で細分することが可能であると思われる。ここでは鳥取県で良く見られる板石をＶ字型に配置する枕をＤ－１類（第65図）とする。

Ｅ類（枕形彫り込みを有する横穴墓・横穴式石室）（第64・65図）：横穴墓の床面や横穴式石室の石屋形などの施設に枕形の彫り込みを有するもの。将来的には細分が可能であると思われる。

Ｆ類（粘土枕）（第64図）：主に箱式石棺の床面において頭部が埋置されている箇所に粘土で枕を製作しているもの。

Ｇ類（床面整形）（第64・65図）：主に竪穴系埋葬施設で地山等の床面を整形し、枕としたもの。枕部を一段高くしたものや、枕部を丸形やＵ字形に掘り窪めたもの。今後細分が可能と思われる。

Ｈ類（土器枕）（第65図）：須恵器・土師器を枕として転用しているもの。完形品を使用しているものをＨ－１類、一部を打ち欠いて使用しているものをＨ－２類とする。

Ｉ類（埴製枕）：土製品。当初より枕を製作することを目的としたものをＩ－１類（第65図）、埴輪棺における埴輪片転用使用枕をＩ－２類（第65図）とする。

Ｊ類（枕造付陶棺）：陶棺の身に枕を造り付けているもの。奈良県で１例出土。

Ｋ類（陶枕）：陶製の枕。群馬県で１例出土。

Ｌ類（玉枕）：玉類を連結させて骨格を作り、その上に絹布を巻いたもの。

Ｍ類（立花）：古墳より立花のみ出土のもの。

これらの分布を東日本から分布域が広いものを中心にみていく。Ｃ－１類（常総型）が茨城県および千葉県を中心に分布し、分布図に表示していないもののＭ類（立花のみ）が千葉県を中心に茨城県・群馬県・静岡県でそれぞれ１例みられるという状況である。Ｃ－２類（周辺に何らかの装飾をもつもの）のうちＣ－１類と形態が類似し立花受孔をもたないタイプが分布規模をＣ－１類よりも小さくするものの茨城県・千葉県を中心に分布し、一部群馬県でも散見される。群馬県ではこのほか同様にＣ－２類で常総型に形態が類似せず、高縁のみのものがみられる。そのほか注目すべきものとしてはＫ類（陶枕）がある。

東北以北・北陸から中部にかけてはＡ・Ｂ・Ｃ－１・Ｃ－３・Ｉ－１類が散見される程度である。近畿（京都府日本海側は中国地方に含めて説明する）ではＢ類（石枕造付石棺）が大阪府を中心にみられる。またＩ－２類が埴輪棺の分布の広さと連動するように分布する。そのほか唯一の出土例であるＣ－４類（琥珀枕）や２例のみの出土のＬ類（玉枕）がみられるのも注目される。Ｊ類（枕造付陶棺）も類例がない。畿内およびその周辺ではＩ－１（埴製枕）みられる。

中国（京都府日本海側は中国地方に含めて説明する）では中国全域にわたってＤ類（自然石）が目立つ。鳥取県の西側ではＤ－１類（板石をＶ字型に組む）が目立つ。京都府・島根県の一部でＢ類がみられる。また、島根県ではＢ類（石枕造付石棺）と同様な分布でＥ類（枕形掘り込みを有す

る横穴墓・横穴式石室）がみられる。京都府・兵庫県・鳥取県・島根県にわたってH類（土器枕）がみられる。山口県は九州に主に分布するF類（粘土枕）・G類（床面整形）の分布域の一部を形成している。

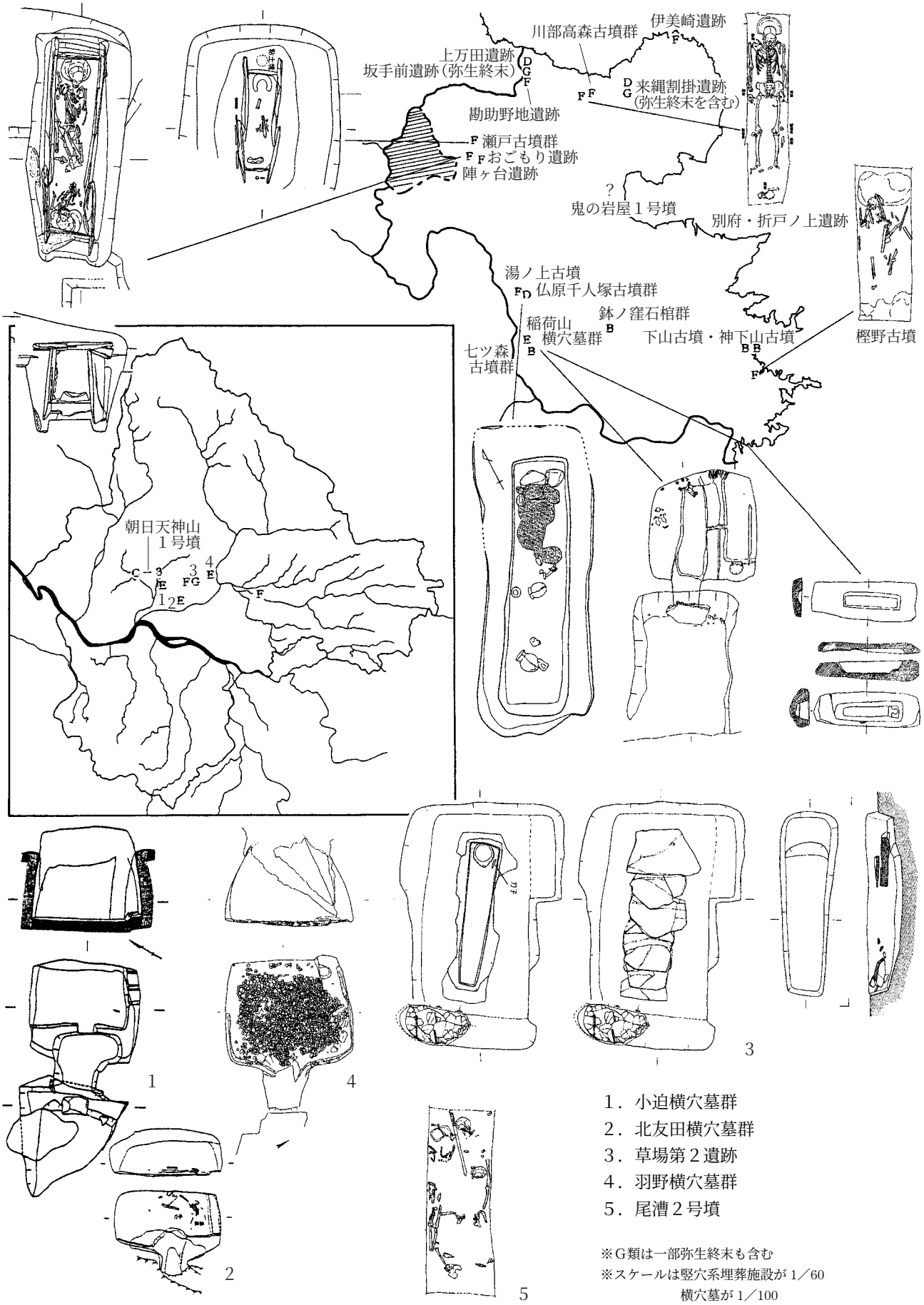
四国ではB類（石枕造付石棺）が香川県に集中する。

九州では、北部九州から中九州にかけて、B類（石枕造付石棺、熊本県を中心に佐賀県・熊本県および大分県）、E類（枕形掘り込みを有する横穴墓・横穴式石室、熊本県を中心に福岡県・大分県・宮崎県）、F類（粘土枕、福岡県を中心に熊本県・大分県・山口県）、G類（床面整形、福岡県を中心に大分県・熊本県・山口県）、そしてC－3類（頭部設置箇所に加工、周辺に装飾無し、主に熊本県・福岡県）が複雑に絡み合って分布する。また福岡県甘木市周辺では自然石使用のD類の枕がみられる。

今一度これらのことをふまえ当古墳出土の石枕を検討してみると、当古墳のものは113Pで説明したとおり端部に面取りをおこなっており、三重県茶臼山古墳（第65図）でみられるような石棺の床面を形成するB類である可能性はないし、福岡県王塚古墳（第65図）の石屋形内の様な枕形の掘り込みを有するE類の可能性もない。よってC－3類と考えられる。C－3類の分布は九州（北部九州～中九州にかけて）が分布の中心でその他の地域では散見される程度である。主体部は竪穴系埋葬施設から横穴式石室とバラエティに富む。竪穴系埋葬施設では箱式石棺を主体部にするものがほとんどで、分布は概ね集中分布せず、散見程度ものが多い。主体部を横穴式石室に限ると、つまり時期を古墳時代後期に狭めるとその分布域は、確かに大阪府で散見されるものの、分布の中心は九州（北部九州～中九州にかけて）である（朝鮮半島においても第65図の様にみられる）(3)。朝日天神山1号墳はすでに後円部側の主体部は破壊されているが、主体部想定箇所周辺に散在する石材の状況や、前方部で一部確認されている主体部らしき石積みをおこなっていること、出土遺物から古墳時代後期の築造であることなどから、後円部の主体部は横穴式石室であったと考えられる。よってこの分布とも矛盾しない。当古墳の石枕は、大枠では九州（北部九州～中九州にかけて）内の影響下において成立したものと理解できる。

次にその具体的なルートについて考えたい。

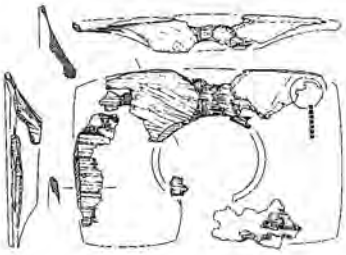
日田盆地における後期のC－3類、およびそれに関連する可能性のあるE類（枕形彫り込みを有する横穴墓・横穴式石室）の分布（それだけでなくすべての枕の分布もであるが）は、現時点では、三隈川を境に北と南で分けた場合、すべて北側でみられるという状況である（第64図）。後期のものは当古墳の石枕（C－3類）のほかは、横穴墓の玄室内に枕を彫り込むものである（E類）。その形状は、頭部を設置できる程度の方形の彫り込みを有するもの（第64図：小迫横穴墓群）や玄室の片方の側壁に沿って床面を一段高く彫り残しているもの（同図：北友田横穴墓群）などがある。当該期のこれら枕の分布は、他には先に示したとおり、肥後北部、および直方市や桂川町といった遠賀川の中上流域に主に分布している。日田盆地はこの2箇所の中間に位置していること。また筑後川上流域である日田盆地に、西側で隣接する筑後川中流域では、これらの枕が存在しないし、前段階では例えば甘木市で日田盆地ではみられないD類の枕を使用することなどを鑑みると、前述のどちらかからの影響下によってこれらの枕が成立したということは容易に想定できる。やや雑な話になるが、前時代の弥生時代を例にとっても、肥後における後期を代表する土器である黒髪式土器は日田盆地においてはほとんどみられないなど肥後からの影響が希薄な印象をもつのに対し、一方遠賀



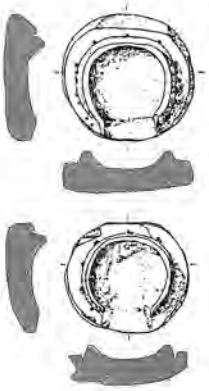
1．小迫横穴墓群
2．北友田横穴墓群
3．草場第2遺跡
4．羽野横穴墓群
5．尾漕2号墳

※G類は一部弥生終末も含む
※スケールは竪穴系埋葬施設が1／60
横穴墓が1／100

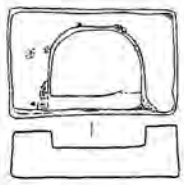
第64図　古墳時代における各地の枕（1）（日田盆地及び大分県内）



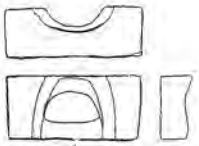
A類（権現山51号墳・兵庫県）



C－１類
（石神山２号墳
・千葉県）

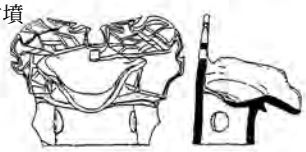


C－３類（塚坊主古墳
・熊本県）

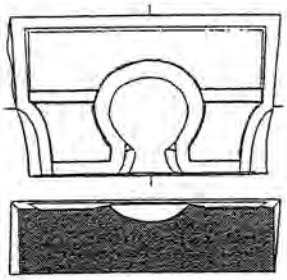


C－３類（伏岩里１号墳・韓国）

C－４類（竜田御坊山
３号墳・奈良県）

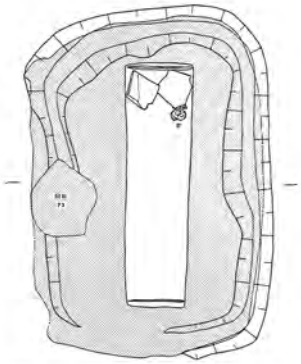


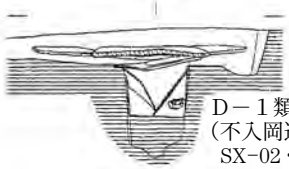
Ⅰ－１類（おじょか古墳・三重県）



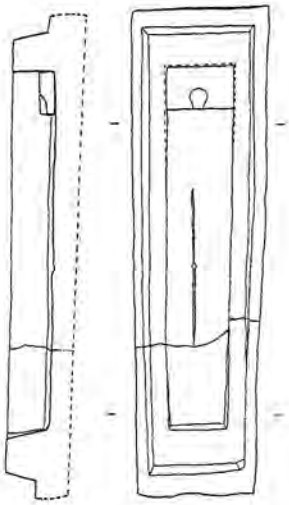
C－２類（新庄天神山古墳・岡山県）

B類（岩崎山４号墳・香川県）

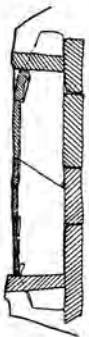




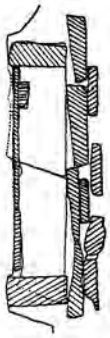
D－１類
（不入岡遺跡３区
SX-02・鳥取県）



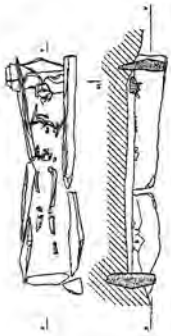
C－３類（向野田古墳・熊本県）



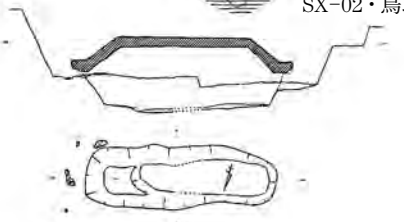
B類（深谷２号墳
・兵庫県）



C－３類（深谷１号墳
第２主体・兵庫県）

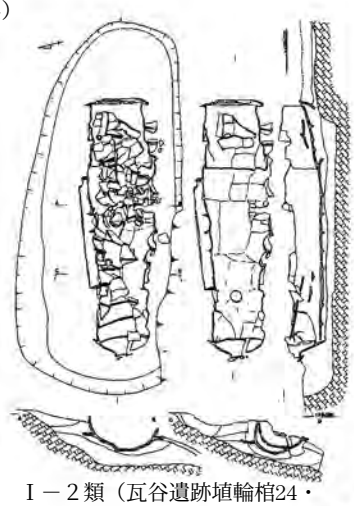


D類（晩田山３号墳
第２埋葬・鳥取県）

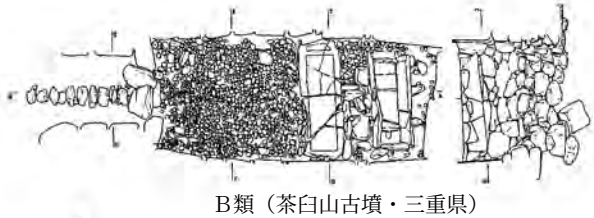


G類（西潤野古墳１号土壙・
熊本県）

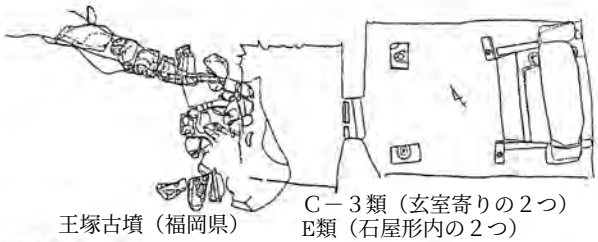
H類（長瀬高浜遺跡１号墳
第１主体・鳥取県）



Ⅰ－２類（瓦谷遺跡埴輪棺24・
京都府）

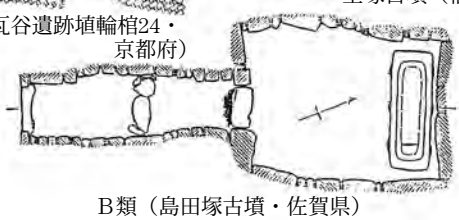


B類（茶臼山古墳・三重県）

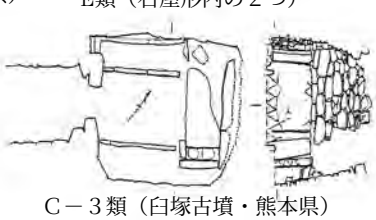


王塚古墳（福岡県）

C－３類（玄室寄りの２つ）
E類（石屋形内の２つ）



B類（島田塚古墳・佐賀県）



C－３類（臼塚古墳・熊本県）

※枕のみは1／15
竪穴系埋葬施設は 1／60
横穴式石室が 1／150

第65図　古墳時代における各地の枕（２）

川中上流域との関連は、立岩産の石庖丁の出土や吹上遺跡出土甕棺における螺旋状の多重突帯、遠賀川中上流域を経由したと想定される弥生前期末に主に周防灘沿岸～関門地域にかけて分布する頸部内面に突帯をもつ壺の出土など、枚挙に暇がない。よって筆者は後者つまり遠賀川の中上流域の影響下で日田盆地の枕（Ｃ－３・Ｅ類）は成立したものと考える(2)。現時点で日田盆地南部において枕が出土していないものこの証左と考えて良いと思われる。

最後に朝日天神山１号墳の枕における頭部を設置する箇所の形状について考えてみる。当古墳の当該場所の形状は、平面台形である。該当するＣ－３類内はいうに及ばず、Ｃ類内、Ｂ類にも該当する形はない。おもにこれらに形づくられるものは、半円・円形・頭部から肩部にかけての表現などである。当然、石以外の材質を使用するほかの枕の分類にも同様な形状はない。しかし、前述したＥ類のうち横穴墓に、方形の彫り込み枕を有するものがある。日田盆地でもこの形状がみられる。小迫横穴墓群などは、第64図をみてわかるとおり朝日天神山１号墳に近接する。よって地域内での頭部を設置する部分の形状のみ横穴墓より模倣した可能性も十分ありうると考える。

以上、やや大雑把に論を進めてきたが、まとめると、日田盆地の古墳時代後期の枕（Ｃ－３・Ｅ類）は、大きくは遠賀川中上流域からの影響で成立したものと考える。そのうち朝日天神山１号墳の石枕の場合は、頭部を設置する彫り込み部分が台形で、その形状は他では類をみないものである。しかし横穴墓の中には方形の彫り込みをもつ枕が存在し、日田盆地にも存在する。よって朝日天神山１号墳出土枕の平面台形部分の形状は、おそらく日田盆地内、当該横穴墓の枕の影響によって成立したものと考えられる。　（吉田和彦）

註１）沼沢氏の1980年の論考を読むと、『常総地域における石枕はすべて高縁をめぐらし、またほとんどが立花受孔をもつ。』とあることから、滑石系統で高縁をもち、立花受孔をもつものの形態に似ているものの、立花受孔をもたないものも「常総型」の範疇に加えているものと思われるが、本稿では立花受孔がないものに関してはＣ－２類とした。

註２）現時点ではＧ類（床面整形）も同様に考えている。

註３）朝鮮半島でも、第65図の様にＣ－３類の枕は見られる。当古墳は朝鮮半島との関連がその他の出土遺物から指摘されている。今回、朝鮮半島出土の石枕との比較検討はできなかったが、今後検討すべき方向性と考えている。

（参考文献）

安藤孝一　「古墳出土枕考」『考古学叢考』下巻　斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編　吉川弘文館刊行　1988年
千葉県立房総風土記の丘　『図録　日本の石枕』 1979年
沼沢豊　「東国の石枕」『古代探叢－滝口宏先生古希記念考古学論集－』滝口宏先生古希記念考古学論集編集委員会編　早稲田大学出版部　1980年

※図出典は割愛させていただきました。

４．伝1号墳出土遺物

須恵器

昭和初期の天満社建設の際に須恵器の坏蓋・坏身、高坏、長頸壺、提瓶などが出土している。ここでは、これら須恵器を器種毎にみていき、その特徴や年代などを考えていきたい。なお、文章中の番号は第52図の番号と一致する。なお、型式名は陶邑編年を使用する(1)。

坏蓋は外面天井部が水平になるものと丸く仕上げられるものの２つが見られる。１は口縁端部を外反させ、内側には明瞭に段がつく。口径は17.2cmとかなり大型である。また、天井部と口縁部の境の稜線は明瞭でない。こういった特徴から陶邑編年のＴＫ10段階に位置付けられよう。２については、天井部が高く、丸く仕上げられる点はＴＫ209の特徴を示しているものの、口縁端部には若干の稜が見られ、また、天井部と口縁部の境に凹線がわずかに見られる点など、古い特徴もみられることから、ＴＫ43段階のものと考えておきたい。３は口径が11.2cmと小型化しており、口縁端部が丸く仕上げられている点や全体に浅く、扁平気味になっている点などから、ＴＫ43段階と考えられる。

４の無蓋高坏は口縁部が直線的に外側に伸び、脚部が細長く絞られている点、また脚部には２段スカシが見られる。さらに脚端部をやや内傾させ、この変換点下部の近くには浅い凹線をめぐらせている点など、ＴＫ43段階のものと考えられる。５は比較的脚部が太く安定感がある点、長方形スカシを４方向に穿孔する点、さらに脚端部を緩やかに内傾させている点はＴＫ43のものと考えることができよう。

次に壺類をみていく。６は、脚付である点から少なくともＭＴ85段階以降のものと思われるが、さらに口縁部の立ち上がりや頸部の太さからみてもＭＴ85の範疇に入るものと考えられる。７は大きく外反する口縁部に、端部をわずかに内傾させている点、脚部には３方向の長方形スカシを先行している点などはＴＫ43段階の特徴を示しているといえる。８に関しても７と同様、外反する口縁部で、端部を内傾させている点、また頸部近くには刺突文を施している点など、やはりＴＫ43段階とものと考えられる。

９は脚部が太く、ラッパ状に開く、安定した形態である。また、長方形のスカシが３方向に穿孔している点や外に開いた端部を折り曲げてやや内傾させている点など、ＭＴ85段階の特徴とみることができる。10は脚の形態から直口壺、もしくは短頸壺になるものと思われる。この部位から時期を直接的に決定するのは難しいが、中津市に所在する上ノ原横穴墓群20号横穴墓玄室出土のものに同様の脚を持つ直口壺がある(2)。これと共伴する提瓶は、後述する13と同じ形態の把手を持ち、体部背面は11と同様に膨らみを持たないタイプである。こういった点から時期はＴＫ43～ＴＫ209段階にあたるとみられ、この脚も同様の時期のものと考えられる。

11～13の提瓶を見てみると、把手が付いているものとそうでないものが見られる。12、13は把手が付いているが、輪状になるタイプでなく、鉤型になっている。こうしたことから把手の退化が始まったと時期のものとみることができ、時期的には少なくともＴＫ43以降のものと考えられる。12は把手がまったく残ってなく、その全体的な形状を知ることはできないが、貼り付け部分の立ち上がり方から、比較的上方に伸びるものと考えられる。これに対し13は短く太いものとなっており、さらに胴部下方へ向かって垂れ下がるように貼り付けられている。こうしたことから、どちらといえば12より退化形態を示すものと見られる。一方、11は把手の痕跡もまったくなく、体部背面の膨

らみのほとんどないことから、より時期の下るものと考えられる。提瓶が存続する時期はほぼＴＫ209を下限とすることから、この時期のものと見て差し支えないであろう。以上のことから12・13がＴＫ43、11がＴＫ209段階のものとなる。

以上、伝１号墳出土須恵器について、個別にみてきた。２号墳を含めた本古墳群の築造年代については後節にゆずるが、ここでは須恵器のみで破壊された石室の構築時期についての所見を述べてみたい。この一群の須恵器は下表に示すとおり上限をＴＫ10の坏蓋、下限がＴＫ209と時期幅の中で捉えることができ、実年代では６世紀第２四半から６世紀末というところだろう。この中でも特にＴＫ43を中心とする時期、６世紀第３四半から第４四半のものが中心となる。また、１号墳の８トレンチからも須恵器の坏蓋・坏身を中心にまとまった出土があり、これらと時期はほぼ同じであるが、初葬・追葬の問題、前方部石室との関係などの検討を加えた上で後節において、年代についての考察を行なう。（若杉）

註１）田辺昭三　『須恵器大成』角川書店　1981年ほか

註２）村上久和他編　『上ノ原横穴墓群－一般国道10号線中津バイパス建設埋蔵文化財発掘調査報告書（２）』大分県教育委員会　1989年

表　伝１号墳出土須恵器の時期変遷

時期 / 器種	550			600
	TK10	MT85	TK43	TK209
坏蓋（１）	●			
坏蓋（２）			●	
坏身（３）			●	
高坏（４）			●	
高坏（５）			●	
壺　（６）		●		
壺　（７）			●	
壺　（８）			●	
壺　（９）		●		
壺　（10）			○	○
提瓶（11）				●
提瓶（12）			●	
提瓶（13）			●	

鉄器・馬具について

伝１号墳出土とされる剣、大刀、耳環、馬具等については、既にⅣ章で個々の説明を行ったので、ここでは関連遺物を含めながら各遺物について考察していきたい。

１の特徴は、鋒元に１孔が穿たれていることである。この関連遺物としては奈良県藤ノ木古墳出土[1]の大刀１（第66図２）・４・５が挙げられ、これらの鋒元の同位置には孔が穿たれている。さらに大刀１・５については孔の周りに連弧輪状文の象嵌が施されており、金銅製の三輪玉が付されていた捩り環頭の大刀である。ここで第66図１・２を比較すると、鋒元の形状は異なるが、同じ箇所に孔が穿たれ、茎部の長さ、刀身幅、厚さともほぼ同じ法量であることから、象嵌はないものの伝１号墳出土の大刀も同型式のものであると思われる。しかし、１号墳後円部側で水晶製の三輪玉が表採されていることから、捩じり環頭大刀であった可能性もある[2]。

伝１号墳で報告している鐘形の棘葉形杏葉（第66図３）は、鉄地金銅張の棘葉形のベースに、鉄地銀張の縁飾りを鋲で打ち留めた形状を呈しており、類例として４の新羅慶州皇吾里16号墳第１槨出土のものがあげられる。また、伝１号墳として第55図１・２も鉄地銀張の心葉形をベースに、鉄地銀張の飾縁を銀張鋲でとめる鏡板が対をなしてみられることから、３と第55図１・２はセット関係であった可能性が考えられる。類例としてあげた４は、ＴＫ43に[3]想定されている。

５は既に小田富士雄氏[4]により紹介され、その中で吹上横穴墓群が類例として報告されているが、今回新たに６の内畑古墳[5]、７の鬼塚古墳群２号墳[6]出土例を挙げたい。６・７とも貝製品の中央部に孔を穿ち、５弁の花紋様を呈する鉄地金銅張りの花形座に宝珠飾りの鉄芯を打ちこんでいる。ここで５を観ると、鉄芯の頭である宝珠飾りが欠損しているものの、鉄地金銅張りの５弁の花紋様を呈する花弁座で、６・７と同じ形態であることからほぼ同一規格による製作であると思われる。時期的には、６・７ともＴＫ43～209にかけてのものであると比定される。８については、花弁座を貝製品に着けないタイプで、９の鷹巣横穴墓群４号墓出土のものが類例として挙げられる。頂部に１段平坦面があり、装飾状の段を有さない鉢部に貝製品を嵌め込んでいることから、同形態であると考えられる。時期的には横穴墓の形態から６世紀末のものであると想定されているが、石障や装飾が施されている点から若干それよりも遡る可能性が高い。10は鞍金具の一部である磯金具で、類例として11の大塚１号墳２号石室出土[7]の鉄地金銅張のものが挙げられる。

以上から、伝１号墳の３・５・８・10についてもほぼＴＫ43におさまるものと考えられる。また、１号墳の被葬者像を考えると、大刀と鉄地金銅張・銀張の馬具がセットで出土している点、３は日本に類例がなく、朝鮮半島にあることから舶載品の可能性がある点などを考慮すると、大和王権の対朝鮮半島政策における重要なポストに位置していた人物であったと考えられる。　（玉川）

註１）山内紀嗣　「木製刀装具からみた大刀生産」『鉄器研究の方向性を探る』第９回鉄器文化研究集会　2003年

註２）関川尚功　「（１）大刀」『斑鳩藤ノ木古墳二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会　1998年

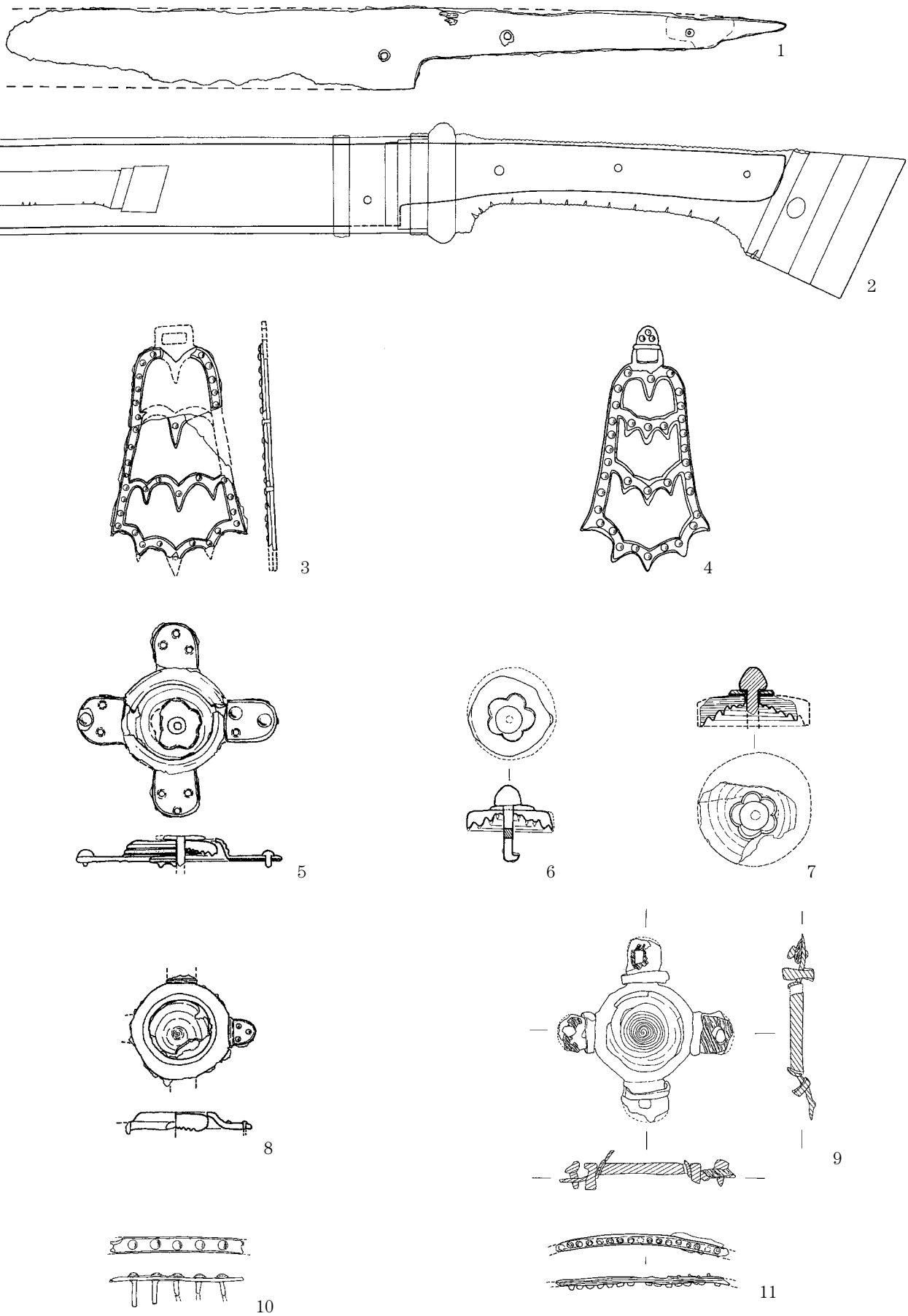
註３）桃崎裕介　「笊内37号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」『福島県埋蔵文化財センター白河館　研究紀要2001』　2001年

註４）小田富士雄　「古代の日田」『九州考古学研究　古墳時代篇』学生社　1979年

註５）福岡県久留米市に所在する、横穴式石室を主体部に持つ円墳である。時期はMT85～TK43に比定される。

註６）福岡県八女市に所在する横穴式石室を主体部にもつ古墳で、時期は６世紀後半と比定される。

註７）福岡県八女市に所在する１つの墳丘に２つの横穴式石室をもつ古墳で、時期はMT85～TK43に比定される。



1・3・5・8・10：伝１号墳　2：藤ノ木古墳　4：慶州皇吾里16号墳　6：内畑古墳
7：鬼塚古墳群２号墳　9：鷹巣横穴墓群４号墓　11：大塚１号墳

第66図　伝１号墳出土遺物と関連資料（1/3）

(3) 年代について

同古墳群に関する年代観は、真野和夫氏によって１号墳が６世紀中ごろ前後、２号墳は5世紀末から６世紀初頭に位置づけられていた(1)。その後、大分県前方後円墳研究会によって２号墳の墳丘から須恵器が採集され、それをもとに２号墳は１号墳よりも新しく６世紀後半から末の年代観(2)が示された。

これまで５次にわたる調査によってある程度年代を推定しうる資料が得られたので、それらをもとに年代観の検討をしておきたい。

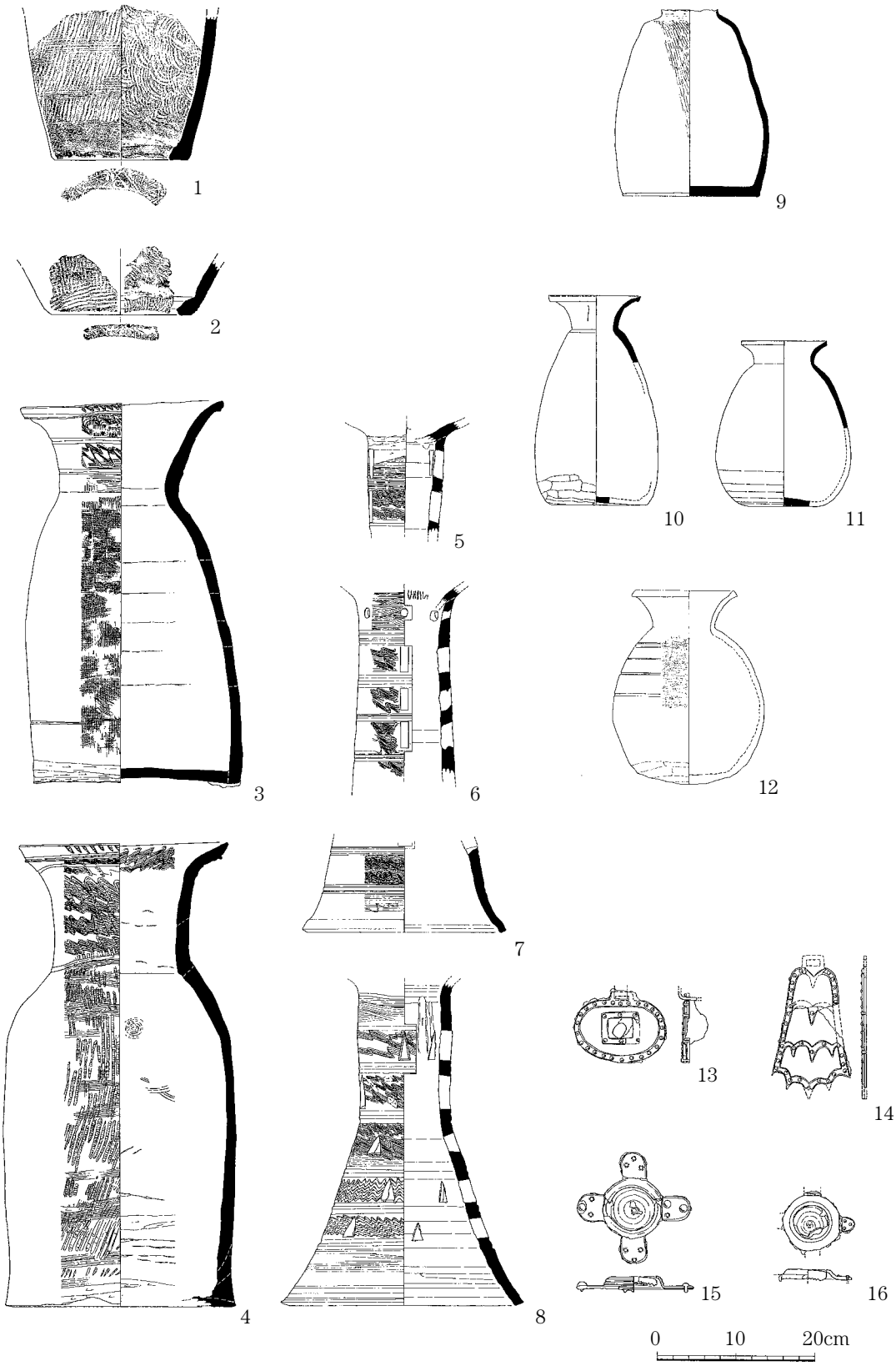
１号墳の８トレンチで墳丘盛土のやや外側に位置するところから坏蓋・坏身がまとまって出土した。第17図９～12がそれである。９は坏蓋で口縁端部に段を有し、天井部と口縁部との境には明瞭な沈線を１条、さらにこの沈線の下に全周しない沈線を施している。10～12は坏身で、10は受部の立ち上がり角度がまだ強くて長い。口縁端部には段を有さず丸く仕上げられている。11は立ち上がりの角度がまだ強く、そして長いが、10と比較したら立ち上がりはやや短くなっている。口縁端部には不明瞭ながらも段を有している。12は立ち上がり角度がまだ強く長いが、10に比べたらやや短くなっている。口縁端部には不明瞭ながら段を有する。外面底部付近にはヘラ記号の一部とみられる沈線が施される。これらの蓋坏は器形、端部の特徴、調整のあり方からＭＴ85からＴＫ43の時期に相当するとみられるが、主体はＴＫ43である。

伝１号墳出土の須恵器はＭＴ10からＴＫ209までみられるが中心となるのはＴＫ43である。出土資料及び神社建築時に出土した資料を総合して考えると、１号墳の築造時期は６世紀後半代、もう少し細分すれば、６世紀の第３四半期にあると見てよかろう。伝１号墳出土の鉄器や馬具(3)（第67図)、三輪玉などの年代観とも大きな違いはない。

一方、２号墳に関する資料は、９トレンチから出土した坏蓋がひとつの時期を決めるのに役立つであろう。第32図１はほぼ完形の坏蓋である。中央部が窪んだつまみを持ち、口縁端部には段を有している。外面全体に焼成時の熔着物が付着し、調整は判別できないような状態になっている。形態的特徴からＴＫ10に相当しよう。第36図１は14トレンチから出土した坏身である。受部の立ち上がりはやや内傾するが高く、端部には段を有している。時期はＴＫ10～ＭＴ85段階に比定されよう。第40図10はＢ区から出土した坏蓋である。外面には１条の沈線が巡り、口縁部付近には明瞭ではないが段の名残りが見られる。これもＴＫ10～ＭＴ85段階に比定できそうである。Ｃ区からは第42図１の坏身が出土している。口縁部には長さ6.1cmにわたって蓋の口縁部が熔着している。このことは坏と身が重ねて焼かれていることを示している。時期的には上記と同じＴＫ10～ＭＴ85段階であろう。

以上、２号墳の蓋坏をみてきたが、周溝から出土した資料から判断するとＴＫ10～ＭＴ85段階におさまるものである。６世紀第２四半期に相当しよう。２号墳は主体部の調査がなされていないので主体部の副葬須恵器については分からないが、６世紀前半代に築造の時期を想定しても差し支えなかろう。（下村）

註１）真野和夫　「古墳時代」『大分の歴史　第１巻　ふるさと誕生』大分合同新聞社　1976年
註２）前方後円墳研究会　「大分県の前方後円墳集成（１)」『おおいた考古』Ⅰ　大分県考古学会　1988年
註３）桃崎祐輔　「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』第12号　2001年



1・2：次郎太郎２号墳　3～8：朝日天神山２号墳　9：野原７号墳　10・11：赤井手古墳　12：剣塚３号墳　13～16：伝１号墳

第67図　関連遺物と朝日天神山古墳群出土遺物実測図（1/8）

Ⅵ　総括

これまで行なってきた５次にわたる調査の内容や成果については、前章までに述べたとおりである。ここではその成果について、簡単に記す。

まず、１号墳については、

１．墳長33.8m、総長54.3mの規模の古墳であることが判明した。

２．石室はすでに後円部に存在することが判っていたが、今回の調査で前方部にも安山岩扁平石を積んだ横穴式石室が存在することを確認した。

３．古墳の周囲に一重の周溝を巡らしている。が、場所によっては、墳丘の出入口的様相を示すかのように途中で途切れている所もある。

４．墳丘と周溝との間にテラスを有していることが判明した。

５．遺物には、後円部の石室の中に副葬されていたであろう、被葬者が勾金に三輪玉をつけた大刀を有していたことを物語る水晶製の三輪玉が発見されている。

６．古墳の年代は、これまで出土した遺物から６世紀後半頃に築造されたと考えられる。

次に、２号墳については、

７．墳丘の規模は約65m、周溝まで含めた総長は85.5mを測り、大分県下の後期前方後円墳では最も規模の大きいものである。

８．主体部については、今回の調査では墳丘にトレンチを入れなかったため明確にできなかったが、10トレンチで安山岩扁平石の石積みが確認され、前方部に第２石室の存在する可能性が高まった。

９．これまで考えられてきた墳丘の方向が180度逆転し、西側が前方部、東側が後円部であることが明らかとなった。

10．周溝は二重に巡る鍵形であることが判明し、周溝の東側（１号墳側）は外側周溝が途切れ、墳丘への出入口と想定される部分が明らかとなった。

11．内側周溝からは、大型平底壺や大型器台が発見されたほか、直口で両肩に環状の把手の付いた横瓶などが出土している。

12．大型平底壺については、埴輪と同様に墳丘に樹立されていたと推定され、１号墳にはみられず、２号墳だけに利用された可能性が高い。

13．古墳の年代は周溝から出土した須恵器から、6世紀前半代、525～550年頃に築かれたと考えられる。

こうした結果に、昭和３年に１号墳の主体部が破壊された時に発見された変形五獣鏡、馬具（心葉形鏡板・雲珠・杏葉・留金具・鞍金具・辻金具）、須恵器（坏身・坏蓋・高坏・台付壺・提瓶）などの出土遺物の検討結果を含めると、

14．朝日天神山古墳群は筑紫君磐井の乱後に成立したもので、県内ではこの時期をもって前方後円墳の築造は停止するが、大和との関係が深い北豊前は逆にこの時期から前方後円墳が急に増加し、乱後に大和を中心に支配体制の再編が行われ、これに連動して交通の要衝である日田の地にも大型前方後円墳が築かれたものと理解される。

15．こうしたことから、被葬者は日田盆地を支配するばかりでなく、三輪玉に象徴されるよう

に大和との深い関係にあったと想定される。

朝日天神山古墳は、古くから知られていた前方後円墳でありながら調査機会に恵まれず、また１号墳発見時に数多くの遺物が出土して古墳の重要性も早くから指摘されながらも今日まで保存措置が行なえずに経過してきた。今回の発掘調査は古墳発見以後、70年近い年月を経てようやく実現し、大きな成果を上げると同時に、大分県指定史跡として文化財保存を行なうことができた。これも関係者の皆さんのご指導やご協力があってのことであるが、ここまでに至る間、終始古墳の管理者として、またご助言をいただいてきました地元の秋吉虎夫氏に、この場をお借りして感謝を申し上げます。

最後に、今回の調査のうち、１次調査では２号墳の周溝が剣菱型に巡ると予想し、発表してきたが、その後の調査で鍵型に巡ることが判明した。この場を借りて、訂正を行い、お詫びします。

１次調査空中写真

５次調査空中写真

写真図版２

１号墳１トレンチ全景（西から）

１号墳１トレンチ遺構検出状況（西から）

１号墳１トレンチ列石および土層堆積状況（南から）

１号墳１トレンチ第２石室石組検出状況（西から）

写真図版４

１号墳２トレンチ全景（南西から）

１号墳２トレンチ墳丘土層堆積状況（南から）

１号墳２トレンチ周溝検出状況（南東から）

１号墳２トレンチ列石検出状況（西から）

写真図版６

１号墳３トレンチ近景（北から）

１号墳３トレンチ墳丘土層堆積状況（北から）

１号墳３トレンチ墳丘土層堆積状況（西から）

１号墳３トレンチ周溝土層堆積状況（東から）

写真図版８

１号墳４トレンチ全景（南から）

１号墳４トレンチ溝発掘状況（東から）

１号墳５トレンチ全景（南から）

１号墳５トレンチ遺物出土状況（南から）

写真図版10

１号墳６トレンチ全景（東から）

１号墳６トレンチ遺物出土状況（北から）

１号墳７トレンチ全景（南から）

１号墳７トレンチ墳丘土層堆積状況（南から）

写真図版12

１号墳７トレンチ墳丘基盤掘込状況（北から）

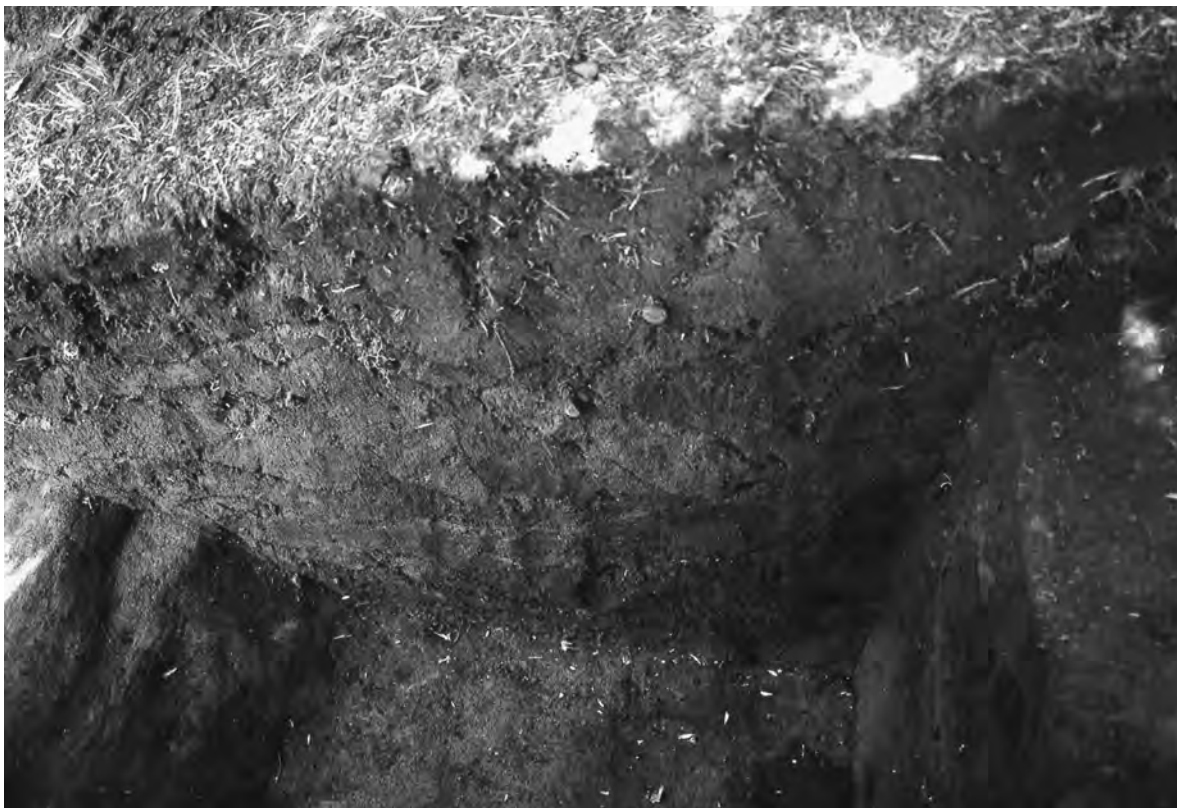
１号墳７トレンチ墳丘土層堆積状況（東から）

１号墳８トレンチ全景（南から）

１号墳８トレンチ遺物出土状況（南から）

写真図版14

１号墳９トレンチ全景（北西から）



１号墳９トレンチ墳丘土層堆積状況（南西から）

１号墳10トレンチ全景（北から）

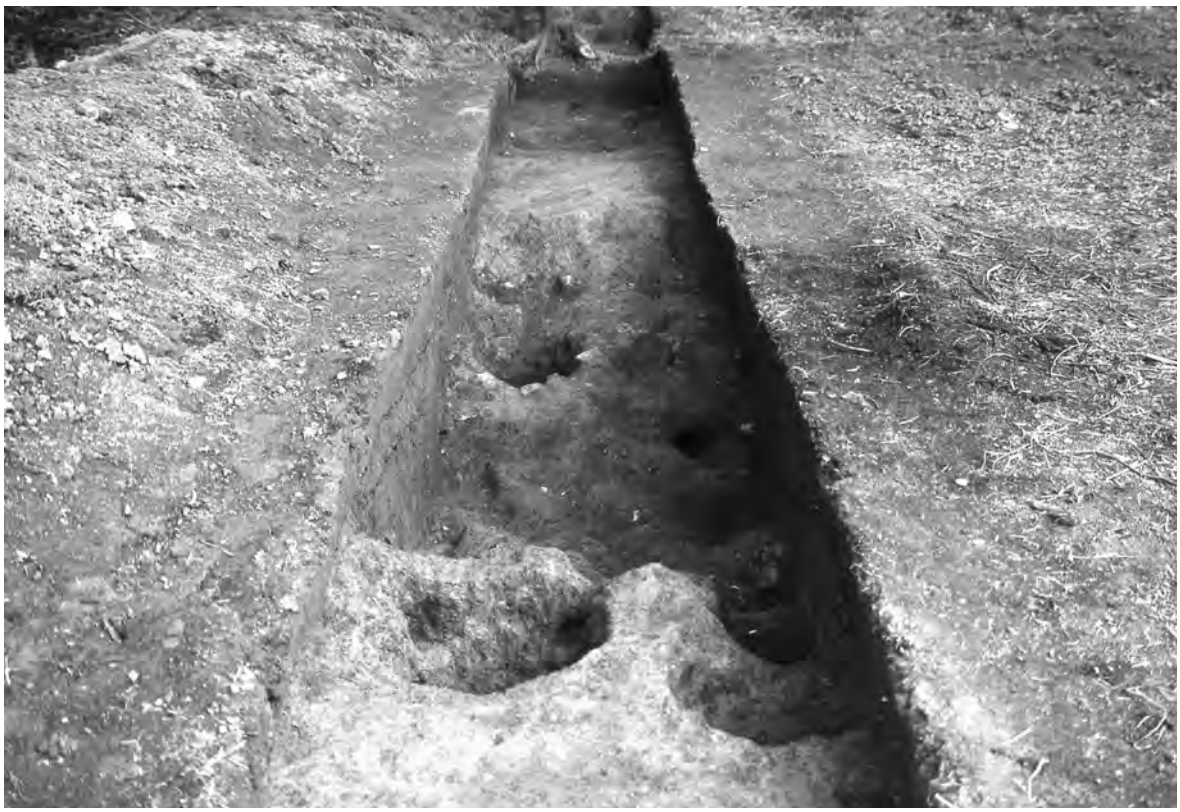
１号墳10トレンチ近景（北から）

写真図版16

１号墳10トレンチ墳丘土層堆積状況（北から）

１号墳10トレンチ周溝発掘状況（南東から）

１号墳11トレンチ全景（南西から）



１号墳11トレンチ周溝発掘状況（北東から）

写真図版18

１号墳12トレンチ全景（北から）

１号墳12トレンチ周溝発掘状況（北から）

１号墳13トレンチ全景（東から）

１号墳14トレンチ全景（西から）

写真図版20

１号墳14トレンチＡ全景（北西から）

１号墳14トレンチＡ周溝土層堆積状況（北東から）

１号墳15トレンチ全景（北西から）

１号墳15トレンチ土層堆積状況（北東から）

写真図版22

２号墳１トレンチ全景（東から）

２号墳１トレンチ内側周溝遺物出土状況（南から）

２号墳１トレンチ内側周溝発掘状況（南から）

２号墳１トレンチ外側周溝発掘状況（南から）

写真図版24

２号墳２トレンチ全景（東から）

２号墳２トレンチ外側周溝発掘状況（南から）

２号墳２トレンチ内側周溝発掘状況（南東から）

２号墳３トレンチ内側周溝発掘状況（南西から）

写真図版26

２号墳３トレンチ内側周溝土層堆積状況（北西から）

２号墳３トレンチ外側周溝土層堆積状況（北西から）

２号墳４トレンチ全景（南東から）

２号墳４トレンチ内側周溝発掘状況（西から）

写真図版28

２号墳５トレンチ全景（南から）

２号墳５トレンチ外側周溝土層堆積状況（西から）

２号墳５トレンチ内側周溝発掘状況（北西から）

２号墳５トレンチ内側周溝遺物出土状況（北から）

写真図版30

２号墳５トレンチ内側周溝遺物出土状況（西から）

２号墳５トレンチ内側周溝遺物出土状況（北から）

２号墳６トレンチ全景（北から）

２号墳６トレンチ外側周溝発掘状況（西から）

写真図版32

２号墳６トレンチ内側周溝発掘状況（北東から）

２号墳６トレンチ内側周溝遺物出土状況（西から）

２号墳７トレンチＡ内側周溝発掘状況（南から）

２号墳７トレンチＢ墳丘土層堆積状況（東から）

写真図版34

２号墳７トレンチＢ墳丘土層堆積状況（北から）

２号墳７トレンチＢ墳丘土層堆積状況（北から）

２号墳８トレンチ全景（西から）

２号墳８トレンチ外側周溝発掘状況（南から）

写真図版36

２号墳８トレンチ内側周溝土層堆積状況（南から）

２号墳９トレンチ内側周溝発掘状況（北から）

２号墳９トレンチ内側周溝土層堆積状況（東から）

２号墳９トレンチ遺物出土状況

写真図版38

２号墳10トレンチ全景（北から）

２号墳10トレンチ墳丘土層堆積状況（南から）

２号墳10トレンチ墳丘土層堆積状況（東から）

２号墳10トレンチ内側周溝遺物出土状況（南から）

写真図版40

２号墳11トレンチ全景（南西から）

２号墳12トレンチ全景及び土層堆積状況（北から）

２号墳13トレンチ全景（南東から）

２号墳13トレンチ周溝土層堆積状況（南西から）

写真図版42

２号墳14トレンチ全景（北から）

２号墳14トレンチ遺物出土状況（北東から）

２号墳15トレンチ全景（北から）

２号墳15トレンチ周溝土層堆積状況（西から）

写真図版44

２号墳16トレンチ全景（北から）

２号墳17トレンチ発掘状況（北から）

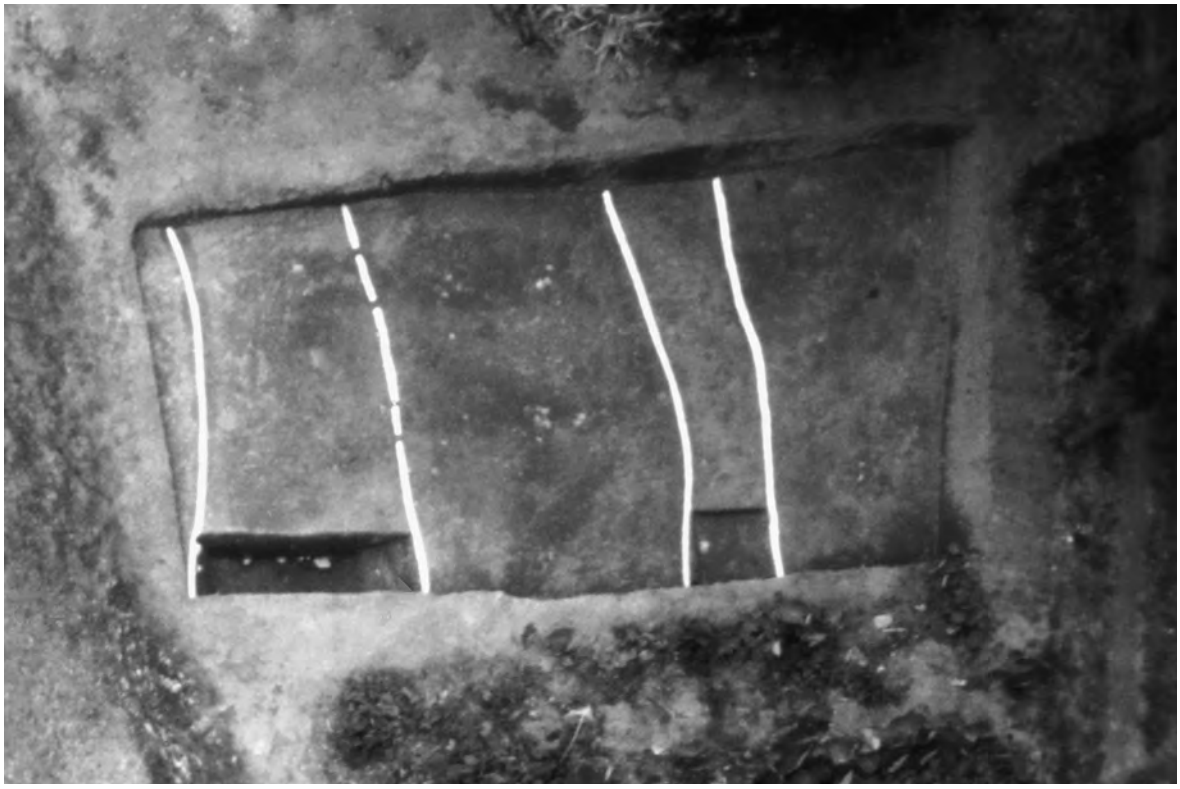
２号墳17トレンチ土層堆積状況（東から）

２号墳Ａ区全景（真上から）

写真図版46

２号墳Ａ区周溝土層堆積状況（北から）

２号墳Ａ区遺物出土状況（東から）



２号墳Ｂ区全景（真上から）

２号墳Ｂ区内側周溝土層堆積状況（北西から）

写真図版48

２号墳Ｃ区全景（真上から）

２号墳Ｃ区外側周溝検出状況（北から）

２号墳Ｃ区内側周溝土層堆積状況及び遺物出土状況（北から）

２号墳Ｃ区外側周溝土層堆積状況（北から）

写真図版50

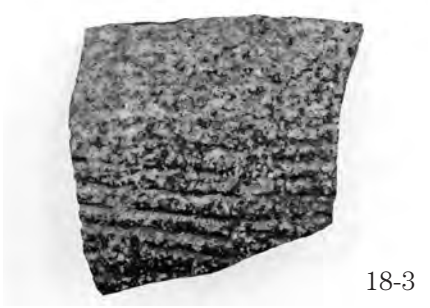
２号墳Ｄ区全景（北から）

２号墳Ｄ区周溝土層堆積状況（西から）

17

18-1

18-2


18-3

18-4

18-5

18-7

18-8

18-14

18-9

18-10

18-11

18-13

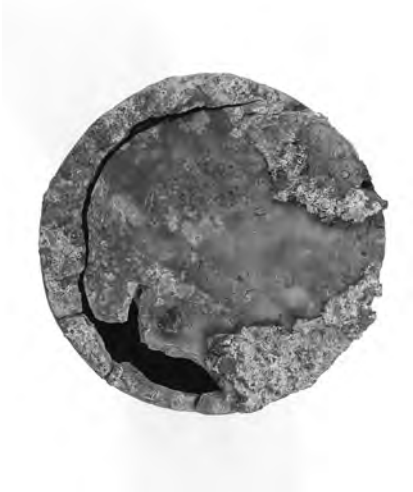
写真図版52

18-12正面

18-15

18-12底面

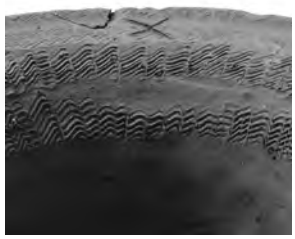
18-15



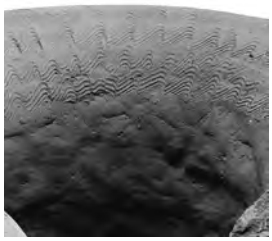
25-1

20-4

25-2



26-1



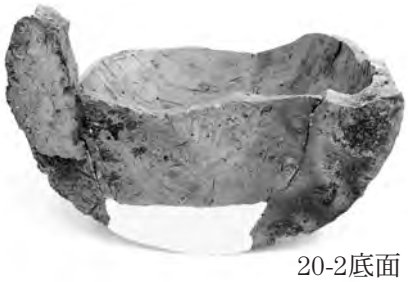
32-7

28-1

写真図版54

20-1

20-2



20-2底面

21-1

21-2

21-3

21-4

24-1

24-2

24-3

24-4

26-2

26-3

26-4

26-5

26-6

26-8

27-1

27-2

27-3

27-4

27-5

27-6

27-7

27-8

27-9

27-10

27-11

27-12

27-13

27-14

28-2

28-3

28-4

28-5

28-6

写真図版56

28-7

28-8

28-9

28-10

28-11

28-12

29

32-1

32-2

32-3

32-4

32-5

32-6

32-8

32-9表

32-9裏

32-10

32-11

36-1

36-2

36-3

36-4

36-5

36-6

36-7正面

36-7側面

40-3

40-4

40-5

40-6

40-7

40-11

40-12

40-13

40-14

40-15

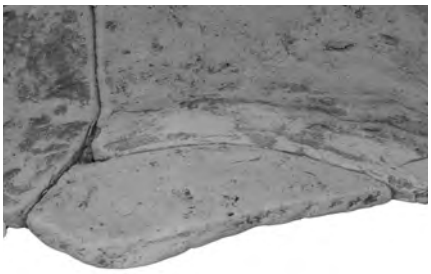
写真図版58

40-16

42-1

42-2

42-3表


42-3裏

44-1

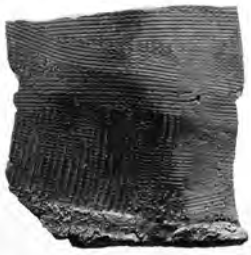
44-2

44-4

44-5

44-6

44-7


44-8

52-1

52-2

52-3

52-4

52-5

52-6

52-7

52-8

52-9

52-10

52-11

52-12

52-13

52-14

51

写真図版60

53

54-3・4

55-1

55-2

55-3

54-1・2

55-4

55-5・6

55-8

55-9

写真図版62

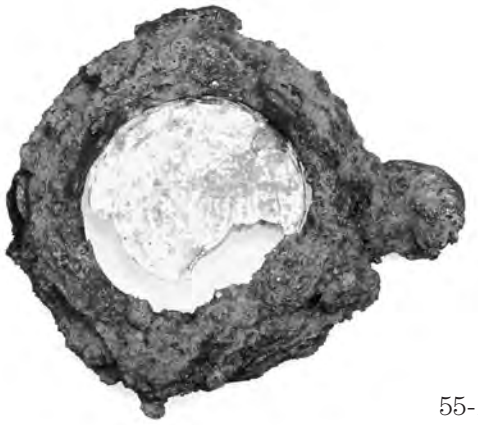
55-10

55-11

55-12

55-13

55-14



55-15

55-16

55-17

45-3

45-5

45-6

45-7

45-16

45-21

45-22

45-23

46-5

46-7

46-9

46-19

46-20

46-22

46-23

46-24

46-27

46-30

写真図版64

46-31

46-33

46-35

46-38

46-39

46-40

47-1

47-3

47-5

47-6

47-7

47-8

47-9

47-11

47-12

47-13

47-14

47-18

48-1

48-2

48-3

48-4

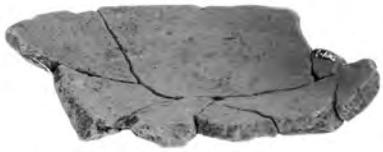
48-5

48-8

48-9

48-10

48-12


48-23

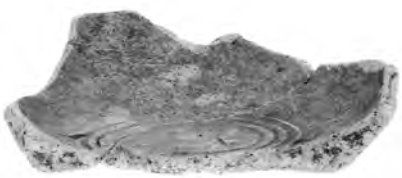
48-24

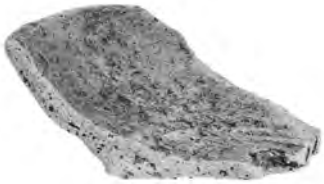
49-2

49-3

49-4

49-7


49-8

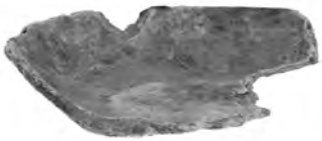

49-9

49-10

写真図版66

49-36

49-37



50-1

50-4

50-5

50-6

50-8

50-9

50-11

50-18

50-19

50-21

50-31

50-33

50-36

50-37

50-41

50-42

要 旨

오이타현 히타시 텐진야마(大分県日田市天神山)에 소재 하고 있는 아사히텐진야마(朝日天神山)고분군은 1928년 1호분의 굴식석실(横穴式石室)에서 変形五獣鏡, 鐵刀,鐵鏃,심엽형재갈멈치,말띠꾸미개,극엽형행엽-棘葉形杏葉-,안장가리개 장식등과 같은 금동제 마구류, 경질토기(須恵器),연질토기(土師器)등이 발견되어 주목을 받게 되었다.

히타시 교육위원회 에서는 이 고분군을 현지정으로 하기 위해 1997년 부터 2002년에 걸쳐 5회에 이르는 발굴조사를 실시 해 왔다. 조사결과, 1호분은 墳長33.8m 総長54.3m로 墳丘의 주위를 테라스와 周溝가 둘러싸고 있다는 것을 확인할 수 있었다. 출토된 경질토기 등으로 미루어 볼 때 이곳은 6세기 중반에서 후반기의 축조물로 판명되었다.

그리고, 2호분은 墳長65m, 周溝를 포함한 総長은 85.5m 로 측정되었고, 이중 열쇠형의 周溝를 지니고, 내측의 周溝로 부터는 일본에서는 이제껏 발견되지 않았던 대형평저호(須恵器平底壺)가 다수 출토되었다. 이것들은 대형기대(大型器台)나 하니와(埴輪)와 같이 분구위에 놓여져 있었던 것으로 추정되고있다. 2호분은 출토된 경질토기로 미루어 보아 6세기 전반대(제2사분기)에 축조 된 것으로 상정할 수 있다.

2호분에서 출토된 대형평저호는, 한국 전라남도지역의 나주 복암리 2호분, 함평 중랑 유적등에서 출토된 각각 有孔、無孔형 저부(底部)로 된 항아리형 토기와의 유사점이 지적된 바 있다.

하지만 형태적으로는 쿠마모토현 노하라 고분군(熊本県野原古墳群),후쿠오카현 아카이데 고분(福岡県赤井手古墳), 와키타야마 고분(脇田山古墳)등에서출토된 백제계로 보여지는 6세기 전반기의 短頸平底瓶에 흡사하다고도 볼 수 있다. 어느쪽 이라고 하더라도 일본국내의 대형평저호형 경질토기의 원류를 확인하는 것은 불가능하다. 또한 1호분에서 출토된 신라계의 극엽형행엽(棘葉形杏葉)도 일본국내에서는 유례를 볼 수 없는 것으로 한국과의 교류관계의 깊이를 짐작할 수 있게 한다.

한편1호분에서는 大刀에 장식되었다고 보여지는 수정으로 된 三輪玉(미와다마)이 발견되었다. 아사히텐진야마 고분군은 筑紫君磐井의 亂이후 성립된 것으로, 지배체제의 재현을 보이던 야마토(大和)정권을 중심으로 주위의 세력을 견제하기 위해 교통의 요지였던 히타(日田)에도 대형전방후원분이 축조된 것으로 이해할 수 있다. 그리고 이곳의 출토 유물을 미루어 보아 被葬者는 히타지역만의 지배자가 아닌 한반도와의 관련성을 가졌다고 짐작할 수 있다. 하지만 三輪玉으로 상징되는 것처럼 야마토와도 깊은 관계에 있었다고 상정할 수 있다.

(下村・朴 芝然)

報　告　書　抄　録

ふりがな	あさひてんじんやまこふんぐん
書名	朝日天神山古墳群
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	７／６０
編著者名	若杉竜太・土居和幸・下村智・玉川剛司
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-8077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
朝日天神山 古墳群	大分県日田市 大字小迫字天神山 1583-4ほか	44204-6	651027 651028	130°54′58″	33°20′35″	19970619 ～19970930 19990222 ～19990327 19990916 ～19990927 20000919 ～20000929 20020715 ～20020930	１次 200m² ２次 6,050m² （測量面積） ３次 80m² ４次 40m² ５次 637m²	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝日天神山 古墳群	墳墓	古墳	周溝	須恵器（大型平底壺・器台・高坏・提瓶・横瓶・坏蓋・坏身） 弥生土器（小児用甕棺・甕・壺） 土師質土器（皿・椀）	古墳時代後期の豊後最大級の前方後円墳

朝日天神山古墳群

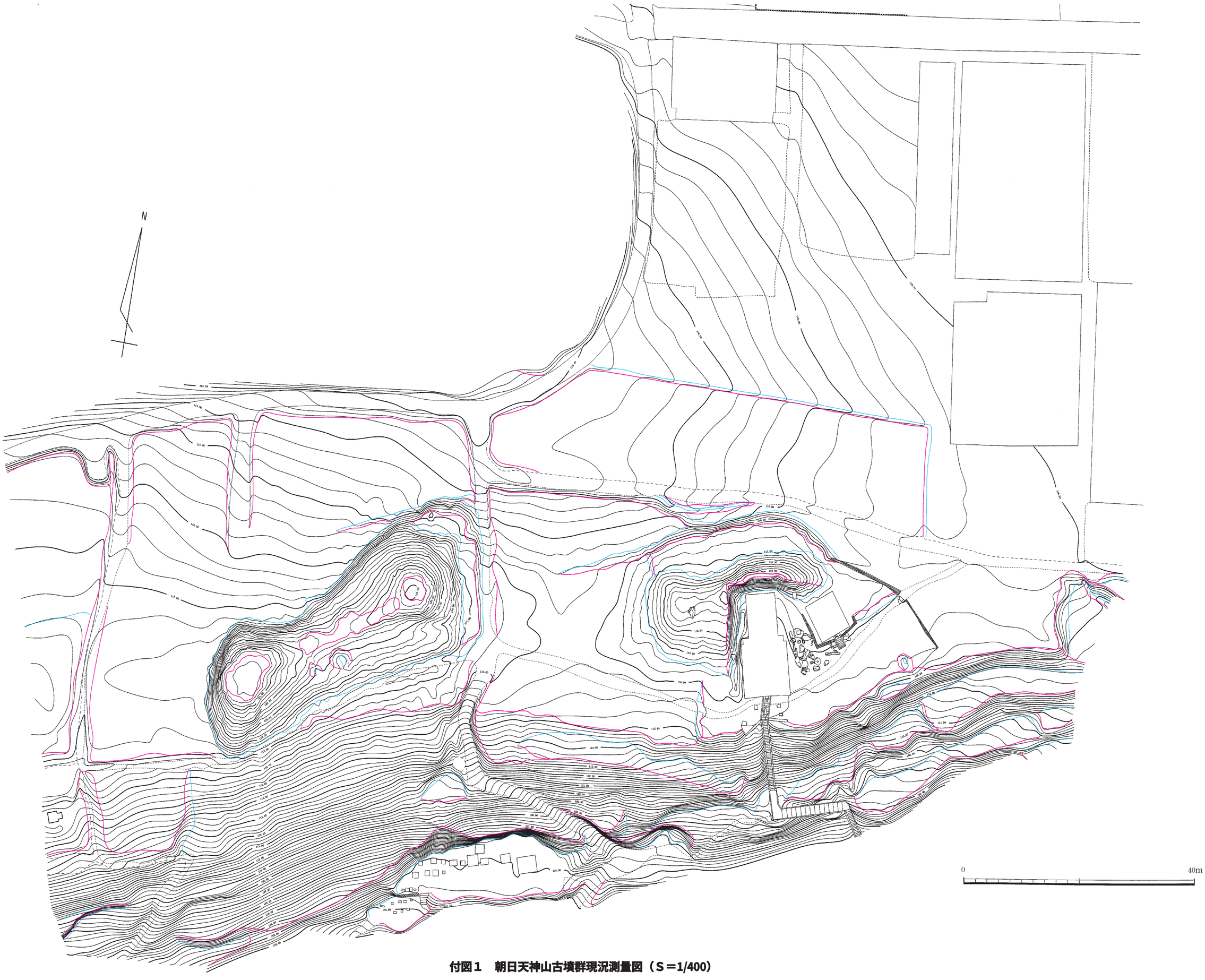
日田地区遺跡群発掘調査報告７
日田市埋蔵文化財調査報告書第60集

2005年３月31日

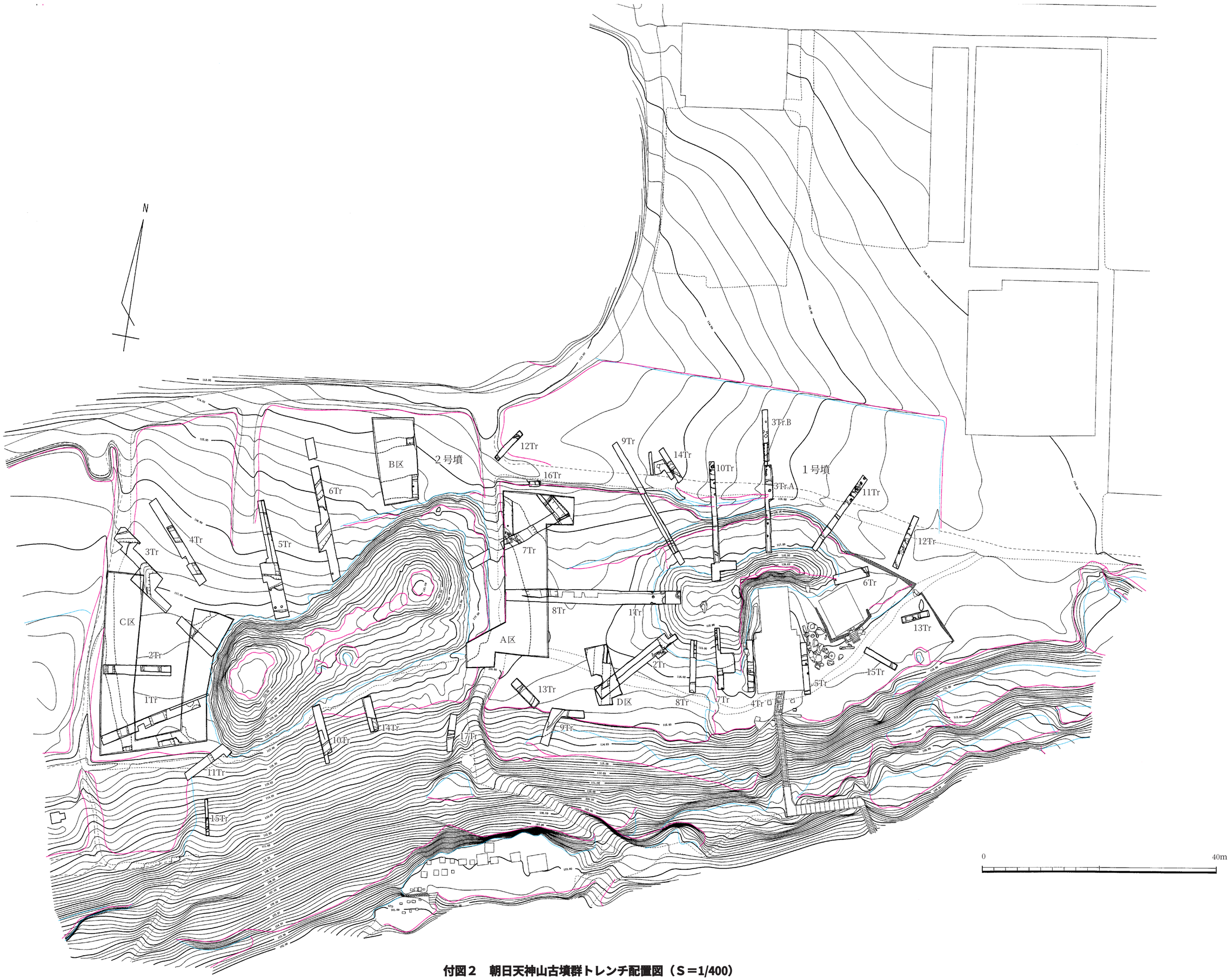
編 集　877-0077　大分県日田市南友田町516-1
日田市教育委員会文化課

発 行　877-8601　大分県日田市田島2-6-1
日田市教育委員会

印 刷　877-0076　大分県日田市亀川町848-1
森印刷有限会社



付図１　朝日天神山古墳群現況測量図（Ｓ＝1/400）



付図２　朝日天神山古墳群トレンチ配置図（Ｓ＝1/400）